

IS 〈インフィニット・ストラト
ス〉 ～織斑一夏は天才ゲームクリ
エーター～

proto

織斑一夏・・・その名をゲーム業界で知らない者はいない。織斑一夏は中学時代から次々と大ヒットゲームを生み出した天才ゲームクリエイターだった。知名度はブリュンヒルデである姉の織斑千冬と同等・・・いや、それ以上かもしれない。

そんな彼は藍越学園の受験に向かい、なぜかISを動かしてしまう。

この運命からは逃れられない。一方で、バグスターなる怪物の

動きが活発になりつつあった。

織斑一夏の学園生活はどうなるのだろうか。

目次

第1話 天才一夏の IS NEW GAME！	1
第2話 一夏の BUG CRASH DAY！	5
第3話 織斑千冬の DEAD or ALIVE	10
第4話 九条貴利矢の NEW GAME！	14
第5話 STARTする VR SIMULATION	20
第6話 End of シミュレーション	27
第7話 水色髪の Sisters	31
第8話 I'm a カメンライダー	35
第9話 ゲームオペレーション START！	40
第10話 STEALされた物	45
第11話 現れた NEW BUGSTER！	50

第12話	Returnするガシャット……………	55
第13話	誕生するNEWRIDERS!……………	59
第14話	STARTする高難易度手術……………	65
第15話	Dragon狩り!……………	71
第16話	Deleteされた存在……………	75
第17話	過去のSTORYが終わる……………	81
第18話	ここから始まる一夏のSCHOOL LIFE……………	85
第19話	SELECT of クラス代表候補……………	90
第20話	対IS戦 GAME START!……………	94
第21話	END of 一夏の戦い……………	100
番外	私の恋人は genius game creator……………	105
第22話	私の勝ち Decision……………	109
第23話	New Enemyは仮面ライダー!?!……………	115

第24話	黒いエグゼイドはVery Strong!.....	120
第25話	黒いライダーのDescriptionを。.....	124
第26話	オルコットのTreatment.....	128
第27話	バグスターwithゲーム.....	133
第28話	オルコットへのConsultationと手術のRes tart.....	137
第29話	Complete recoveryしたオルコット.....	144
第30話	帰ってきたSecond generation!.....	149
第31話	嵐に関する一夏のLooking back.....	153
第32話	Bathする2代目レーザー.....	161
第33話	Level 3の力.....	168
第34話	黒いエグゼイドのTrue character.....	175
第35話	一夏達のinterlude.....	181

第36話	音ゲーにBurn楯無……………	185
第37話	苦手をConquestするブレイブ……………	189
第38話	Level upしたブレイブ……………	193
番外編	簪とデート《New Hero・ANewLegend》……………	199
第39話	Level upするレーザー……………	207
第40話	闇に消えていくTruth……………	212
第41話	転校生はGold&Silver……………	218
第42話	Supportくれる彼女……………	223
第43話	VSハンターZバグスターsideレーザー&スナイプ……………	230
(前編)	……………	230
第44話	VSハンターZバグスターsideレーザー&スナイプ……………	234
(後編)	……………	234
第45話	VSハンターZバグスターsideエグゼイド&ブレイブ……………	238

第46話	Hunter Rider への変身！	242
第47話	Final Round グラファイト狩り	248
第48話	シャルルとの Dialogue	253
第49話	シャルロットとの contract	260
第50話	proto の負担	265
第51話	ぶつかる Fate	269
第52話	学年別トーナメント START!	275
第53話	VTS の週末	280
第54話	新たな敵は love enemy!	284
第55話	いざ France へ!	288
第56話	父親の True feeling	292
第57話	Ghost 登場!	297
仮面ライダー平成ジェネレーションズ		303

第58話	平成 Generation のライダー	303
第59話	変身できない Ghost	308
第60話	Dr・Pacman 襲来	312
第61話	New Virus 発生!	316
第62話	知り合い刑事は元 Rider	321
第63話	Life の大切さ。	326
第64話	Dr・Pacman の正体と目的	332
第65話	タケルとアカリの Time Limit	336
第66話	生身の Battle	340
第67話	VS パックマン	344
第68話	Release される パックマン	350
第69話	兄と姉の乱舞	354
第70話	2人の Strongest form	358

第71話	簪と鈴のCombination!	362
第72話	簪のDeath Sentence	366
第73話	財前のDNA組み替え	370
第74話	Wizardは敵なのか?	374
第75話	戦うReason	379
第76話	付いてきたSisters	384
第77話	last battleは肉弾戦から	388
第78話	ベルトさんや鎧武とのReunion	392
第79話	変身する平成五大Rider	396
第80話	ウィザードのShowtime	400
第81話	鎧武のStage!	405
第82話	ドライブのDrive battle	408
第83話	エグゼイドのAID	412

第84話	ゴーストがLose?	416
第85話	ウィザードのFinal	420
第86話	鎧武のSettlement	423
第87話	2人のNice Drive!	426
第88話	ゴーストとUnification	430
第89話	マイティbrothers	434
第90話	Closingとその先	437
番外編	If	442

新章開幕

番外編	ようこそARCSへpart1	447
番外編	〇〇〇の街へpart1	453
番外編	〇〇〇の街へpart2	457
第91話	臨海学校は波乱のPremontition	463

第92話 真夏の臨海学校 volleyball 大会！	467
第93話 夜の Love ロマンズ	471
第94話 箒の Dedicated	476
第95話 Emergency な出来事	480
第96話 betrayal のウサギ	485
第97話 千冬への Report	490
第98話 危険な zombie	494
第99話 恐怖と friend の離脱	498
番外編 Merry Christmas	502
第107話	506
番外編 ラブラブカップル in 北海道！	509
番外編 一夏と簪のデート in 北海道 part 2	516
第100話 未知と一夏と不死身のゾンビ	519

第101話	2人のExAid	524
第102話	レベルXX	527
第103話	一夏のSecret情報	531
第104話	完璧なPuzzle	535
第105話	Newライダーはレベル50!?	540
第106話	告げられしTruth!	544
第107話	一夏はGAMER?	552
第108話	Fantasyは唐突に。	556
第109話	Gamer妹最強説!	561
番外編	happy birthday to	566
第109話	動きだすPhantom	570
第110話	Policeと新作	574
第111話	Phantomの計画始動!	578

第112話	天才は敵にもPopular	582
番外編	インフルエンザはDangerous	587
第113話	DRIVEの活躍	592
第114話	MからNへ	596
番外編	Valentine's dayの幸せ。	601
第115話	娘のSickを治療せよ。	605
第116話	天災もSlackになる	610
第117話	未知数のAwakening	615
第118話	貴利矢からのHope	619
第119話	Hopeに纏る一夏。	623
第120話	無数のZombieを攻略せよ。	627
第121話	新たな力Reprogramming	630
番外編	イチャラブカップルのCamp	634

第122話	不滅のEnd	639
第123話	史上最悪のGameスタート	646
第124話	仮面ライダーChronicle始動	651
第125話	Chronicle対策会議	655
第126話	動き出したBugster	659
第127話	娘と協力Play	663
第128話	新たな敵その名はPoppy	667
第129話	クロニクルのTrue	671
番外編	訪れたLibrarycafe	675
第130話	Level50の対決	681
第131話	洗脳をReprogramming	685
第132話	hijackされた一夏	689
第133話	パレードのEvolution	694

第1話 天才一夏の IS NEW GAME!

さて、お久しぶりです。またIS×仮面ライダーとなってはしまいましたが、楽しんで頂けたら幸いです。

あの日、僕は助けられなかった。僕の大事な相棒を……。大切な親友を。

僕は今IS学園の何処かに連れてかれてます。藍越学園の受験に行ったはずなのに、なんでIS学園なんかにいるんだろう。そう考えていると、ドアから人が二人入って来た。一人は童顔の緑色の髪の毛の女性、もう一人は世界最強ブリュンヒルデである僕の姉「織斑千冬」だ。しかしなぜ、男の僕に女性が二人で……。千冬姉に関してはまだわかる。しかし、もう一人も女性なのは何故なのか。そもそも、なんで僕はここに居るのか。それを考えた途端に緑髪の女性が喋り出した。

「えーと、織斑一夏君ですね？」

1 「はい。僕は織斑一夏です。」

姉の方を向いたが無言で居るだけだ。姉に注意を向けた瞬間に、緑髪の女性の反応が変わった。

「はあ、あの織斑一夏君が目の前にいるなんて！中学生時代から数々の大ヒット作を次々と生み出した天才ゲームクリエイターの一夏君と話せているなんて。ああ、この教師になって「あの！」は、はい！なんででしょうか。」

「えっと、何故僕はこの場所に居るのでしょうか？」

「それは、私が答えよう。」

「織斑先生。では、お願いします。」

ん？織斑先生？何を言ってるんだろう？

「織斑一夏、貴方は世界で初めて、そして唯一ISを動かせる男性である事がわかった。そして、IS学園の入学手続きの為に来てもらったが、服装面で、警備員の方から変質者とみなされここにいる。」

とりあえず、三箇所程度突っ込ませろ。

「山田先生、少々織斑と話しがしたい。外していただいて構わんか？」

「は、はい！もちろんです！」

千冬姉がそう言うと、山田先生という人はこの部屋から退室してた。

「全く、私は一人でいいって言ったのに。」

ん？なんだか雰囲気が変わった。さっきまではビシィ!!としてた筈の千冬姉の雰囲気が一気にだらしない雰囲気へと変わったのを確かに感じた。

「はあゝ、いちかあゝ。お姉ちゃん寂しかったんだぞおゝ。」

これだ。この姉は僕と二人つきりになるとすぐにこうなる。

「2年半も連絡寄越さないで何してたんだよおゝ。」

そう、僕は2年半かけてある物を作っていた。それを開発する経緯を説明するには4年ほど前に遡る。

・・・4年前 中学1年の夏頃

夏休みの話だ。僕は夏休みの宿題を夏休み開始前日に全て終わらせ、夏休み開始と同時にパソコンのモニターに向かい合っていた。その頃開発していた10個のゲームを夏休み中に完成させるつもりだった。夏休み中盤に全てのゲームに重大なバグがある事が発覚した。そこで僕は知り合いの天才（まだこのころは天才だったのに

なあり)のラボで作業させて貰う事にした。その天才(災)こそが、ISを一人
開発し、今この世界を女尊男卑に染め上げた張本人「篠ノ之束」さん。その人のラ
ボだった。

はいどうもprotoです。

天才ゲームクリエイター一夏ですけど、クリエイトだけでなく、ゲーム自体も上
手いんです。でも、通常時の性格設定がありますので、え？作るだけじゃないの？
とか言わないでくださいね。お願いします。

それではいつ投稿できるかわかりませんが

SEE YOU NEXT STAGE!

第2話 一夏のBUGCRASH DAY！

今回は文書が詰めすぎで読みづらいかもしれません。

こんにちは、中1の一夏です。僕は今東さんのラボに来てます。僕が作っている10個のゲームに重大なバグが発生したので東さんのラボの高性能な機械でバグ処理をしています。

・・・バグ処理中しばらくお待ちください・・・

「よし！これであらかたバグ処理は終わった。」

根詰め過ぎても良くないし、休憩しておくかあ。」

僕はバグ処理をしていた部屋から出てラボのキッチンへと向かった。

僕は冷蔵庫の中に予め用意しておいたショートケーキを取り出した。するとだ、周りを見回すとキッチンがまあ汚い。(ラボ借りたついでに片付けておこう。) そう思うほどに汚かった。キッチンを一通り片付け終えテーブルにチョコレートケー

キを置き、フォークとナイフを何処からか取り出す。

「う〜ん。やっぱりケーキは美味い！そして、チョコレートに限る！」

と、特になんの捻りもない感想を一人で叫んだ後だった。まさか、あんな事になるなんて・・・。

バグ処理をしていた部屋に戻ると、大天災がモニター前で転がっていた。

「え、ちょ。た、束さん？」

僕はバグ処理をやっていたコンピュータのモニターを確認した。すると、10個全てのゲームの修正したはずのバグがDNAのように複雑に絡み合っていた。そして、ISの拡張領域パストロットに関するデータが混ざっているように見えた。

「う、うーん。あれ？ここどこお〜？」

「た、束さん!?良かった、無事だった。」

「あれ？いっくん。なるほど、お腹すいてフラフラしてたら、この部屋に入って来ちゃったんだ。・・・って、あれ？私ISのデータを手に持って・・・あ！いっくん、ごめん！いっくんのゲームのバグとISのデータが混ざっちゃった。」

僕がモニターに向き直ってから、すぐに変化が起きた。モニターに砂嵐のような

物が入り始めた。その現象を目撃してから、僕の意識は何者かに刈り取られた。

それから数十分後僕は目覚めたが、特に体に変化はなかった。それからバグを再度潰し始めた。それから、束さんの新たな技術で10個の“ガシャット”と呼ばれる新型ゲームソフトのプロトタイプが完成した。しかし、それは新たな戦いと女尊男卑の世の中を更に混沌に導くきっかけになっていた。

束さんが作った僕のゲームが入ったプロトガシャット。その10個全てにバグがあった。潰したはずのバグだ。全てのゲームのバグは複雑に絡み合い、やがて10体の怪物へと姿を変えた。しかし、その姿はコンピュータの中へと姿を消した。僕はこの事態を重く捉え、すぐに束さんと対策を立てた。その対策を実現するための発明の設計に1年半かかってしまい、急ピッチで作業を進めた。そのため、定期的に千冬姉と連絡を取っていたがパタリと連絡しなくなった。そして、ついに！2年半かけて作り上げたのが正規のガシャットとゲームドライバー、この2つだった。もちろんゲームドライバーの開発にはすぐに成功していた。開発開始して半年で原型を作り上げ、テストも行っていた。シミュレーション上は問題なかったが、やはり奴らのデータが不足していた為にシミュレーションは完璧ではなかったのだ。

実際、「バグスター」（バクから生まれたので、読みやすい感じのを考えこの名前に
なった）は数度出現した。その際にゲームドライバー装着者の負担が大きいくことを
確認し、より装着者の負担を軽減する為に開発を進め、完成したのが僕の高校受験
前日だったのだ。だから、千冬姉に2年半連絡できなかった。

・・・これが四年前から現在にかけて僕の身に起こっていた全てだ。

急ピッチで書き上げました。protoです。

えーと、前作と違い今作はかなりの亀更新になります。

御了承ください。高校生活にまだ全然慣れてないんです！

ってか、社長（ゲム）あっさり復活したな、おい！笑笑

さて、またいつ更新できるかわかりませんが

SEE YOU NEXT STAGE!

第3話 織斑千冬の DEAD or ALIVE

お待たせしてしまい申し訳ありません。

今回は千冬の過去。一夏がゲームドライバーを作り始めてから、モンドグロッソまでの話となります。

私は、ISの国際大会『モンドグロッソ』の第2回大会に出場する事になった。第1回にも出場し、総合優勝しているが、今回は相手国側も対策や作戦を練ってくるはずだ。そう簡単には優勝させてくれないだろう。そんな緊張気味の私の側には精神安定剤とも言える最愛の弟一夏が居なかった。

「い〜〜ちい〜〜かあ〜〜」。どこいったんだよお〜。お腹空いたよお〜。」

私は空腹だった。私は女だが家事が一切できない。一夏が全部やってくれる。故に！料理できないからご飯か食べられません！ん？女としての威厳？そんなもん、一夏の家事力みたら速攻で捨てれるぞ？やべえよ？女として負けた・・・っ

てガチで思っちゃうよ？ん、ん！ま、まあそういう事だ。私は一度一夏に連絡を取ろうと携帯を取り出した。そして、一夏に電話をかけようと思ったらメールが来ている事に気づいた。そのメールを開くと一夏からだった。

「ん？メール？しかも緊急って書いてあるな。」

『千冬姉』

少々面倒な事になりそうなので、束さんのラボに住み込んで作業します。ご飯はなんとかしてください。通帳のお金は月1万円までの使用でお願いします。使い過ぎると後々面倒なので。

一夏』

・・・え？帰ってこない？どゆこと？

現在織斑の家計は一夏の収入で賄われている。つまり、通帳の金は一夏の物と言うわけだ。私は使いにくいのだよ、弟が稼いだ金を使うなど。

こうして私はほぼほぼ通帳の金に手を付けず、水だけで生きていた。そして、モンドグロツソの一週間前、政府の役人どもが私の家に迎えに来た。

11 「織斑千冬殿、お迎えに・・・、え？」

私はゾンビのようになっていた。実際水しか飲んでいないのだ。地味にだが生死の境を彷徨ったぞ。

とりあえず、政府の役人どもに飯を食わせてもらい（まあ、脅したけど）、とりあえず生き延びた。こうして、私はモンドグロツソへと出場した。

私は順調に試合を勝ち進み、準決勝も苦もなく終わり、いよいよ決勝というところで事件が起きた。私を優勝させまいとどこかの国がうちの山田君を誘拐した。私は面倒な事になったと思ひ、すぐさま誘拐されていると言う場所へ向かった。

20分後、山田君は無事救出された。（ああ、誘拐されたのが一夏なら私に惚れ直しただろうに。ってか、一夏居なくて死にそう。）私はモンドグロツソの決勝を放棄したとされたが、対戦相手側の意向により決勝はなかった事になった。また、山田君の居場所の情報を掴んだドイツに恩返しするため、二年間ドイツ軍の教官をやる事となったのだった。

はい、protoです。

いやー、書き溜めてたら投稿するの忘れてました。

次も一夏の過去になります。

そして！あの方が登場します！

第4話 九条貴利矢のNEW GAME！

今回も過去編。タイトル通りあの人が出てきます。

どうも、一夏です。えーと、みなさん忘れてるかもしれませんが僕の本分は学生です。なので、いかにバグスター達がいるからと言って、学校を休んではいけないのです。学生って面倒な身分ですね。この作品のうp主もそう言ってました。しかし、中学生だから夏休みがあります。その夏休みを全部費やして、二台だけ試作品のゲームドライバーが完成しました。まずこの二台で性能テストをし、完成品を作らなければなりません。しかし、夏休みが明けてしまったので、学校に行かないといけません。本当に学生は面倒くさいです。

そんなわけで、僕は束さんのラボからゲームドライバーの性能テストも兼ねて決め技スロットホルダーのステージセレクトの実験を試してみました。結果は大成功。ジャスト校門前に着きました。ステージセレクトの実験データが取れたのでゲームマ

ドライバーを外しました。

ゲーマドドライバーを隠し、教室へと向かうと見慣れたクラスメイトが夏休み中の話をしていました。

「よう、一夏。夏休みは寝れ・・・てないな。」

今話しかけて来たのは、五反田弾。五反田食堂という店の息子です。下に妹が居ます。どうやら、僕が一睡もしていないことを悟ったようです。

「弾か、久しぶり。元気だったみたいだね。」

「それがさあ、じいちゃんが店の手伝いしろってうるさくって。全然遊べてねえよ。」

そんな世間話？をしていると、先生が入って来た。

「はい、みんな。席ついて。えー、このクラスに

転校生が来ました。九条君、入って自己紹介を。」

先生がそう言うのと、教室のドアが開いた。

「どもー。自分、九条貴利矢って言います。」

と、唐突に自己紹介を始めた九条君の格好は制服では無く、

赤い革ジャンにアロハシャツ。ジーンズと丸いサングラスだった。

「目立った特技とかは持ってないけど、

自分レースゲームなら負ける気ないんで。」

ん？レースゲーム？・・・爆走バイク。

「えー、彼は制服が用意できなかったみたいですので、用意できるまでこの格好で
過ごしてもらいます。」

彼に預けてみようかな。

・・・ゲームドライバーと爆走バイクのプロトガシヤットを。

僕は九条君にゲームドライバーを託すか決めるため、放課後九条君を呼び出し

た。と言うと聞こえが悪いが実際そうなので否定できない。

「どうも、織斑一夏です。」

「へえ、あの天才ゲームクリエイターの？自分が知ってる限りだと、確かゲームの腕も天才的って聞いたけど？」

「まあ、否定はしません。」

（その情報どこから流れたんだ？）

「おっし、決めた。一夏、自分あんたのこと “名人” って呼ぶわ。」

「え？・・・まあ、いいでしょう。とりあえず本題に入ります。」

僕はゲームドライバーと爆走バイクのプロトガシャットを取り出した。

「なあ名人。これ何？」

「これは僕と篠ノ之束が開発した、新しいゲーム。爆走バイクは、10個作ったうち唯一のレースゲーム。妨害しようが何しようが関係なしのバイクレースゲーム。ねえ九条君、君の腕は見たことないけど頼みがある。」

「へえ、会ったばかりの自分に頼み事ねえ。」

17 「そうだね。信用してもらえないかもしれない。だけど！今から言うことに嘘はな

い。・・・僕は10個のゲームを作った。そのゲーム全てに重大なバグが・・・。」

と、僕は全ての事情を九条君に話したのだった。

「それで、君のレースゲームの腕を借りたい。そう言う話だったんだよ。」

「へえ、面白そうじゃん。その話乗らせてもらおうかな。」

こうして、九条貴利矢は試作ゲームアドバイザーの使用者となった。

はい、protoです。

えーと、学校生活中にも作品書きたいんですけど、

朝のHR時に携帯回収、帰りのHR時に返却。

その後部活で書けない。そんな毎日です。

行き帰りで少しづつ書いている状態ですので、

物凄く亀更新になります。この作品を読んでくださっている

皆さまには申し訳ないのですが、ゆっくり待って

いただけたら幸いです。

それでは次回もこの過去編の続きです！

第5話 START する
VR SIMULATION

一週間ぶりくらいでしょうか。

投稿が遅くなってしまう申しわけない。

九条貴利矢を試作品のゲームドライバー使用者と見定めた次の日の放課後。

「はいはい、わたしがISを作った篠ノ之東さんだよ。ねえねえ、君がきー君？」

珍しい。東さんがここまで積極的に他人に話しかけるなんて。(ハーメルンでいろんなIS作品を読んでいる方ならお分かりだろうが、篠ノ之東は織斑一夏、織斑千冬、篠ノ之箒へ篠ノ之箒に関してはまだ後で) 以外の人間を判別できないのだ。) 「いやー、まさかいつくんが他の人にもゲームドライバーを渡すなんて予想できなかったからねえ。どんな子なのか知りたいんだよお。」

「彼の腕は知りませんが、クラスメイトの前で堂々と言えるほどのものだ、僕は

思いました。なので、彼ならドライバーとガシヤットを使いこなせる、そう感じています。」

「なるほどねえ。わかった！じゃあ、VRトレーニングシミュレーターといこうじゃないか」

VRトレーニングシミュレーターを簡単に説明すると、某S〇〇みたいな感じだ。

「それじゃあ、いっくん、きー君。これ付けて、そこに寝てねえ。」

「りよーかい。」

「え？僕もですか？」

「うんうん、いっくんの最新データも取っておきたいからねえ。あ、ガシヤットは好きなのでいいよ。」

そう言われイヤイヤではあったが、ゴーグルを着けて、ベットに寝た。

「それじゃあ、ゲームスタート！」

『ヴァーチャルオペレーションシステム

・
・
・
・
・
起動を確認

ユーザー認証・・・篠ノ之束・・・確認完了

プロトタドルクエステの挿入を確認・・・

プロト爆走バイクの挿入を確認・・・

確認完了・・・

ヴァーチャルオペレーションスタートします。』

へさてさてさーて。いっくん、きー君。これからバグスターウイルス通称「バグスター」が現れるよー。雑魚キャラだけどレベル2になつて倒してみてね。✓

束さんがそう言うのと5体ほどバグスター（の形をしたデータ）が出てきた。

「へえ、凄げえな。リアリティーハンパねえわ。」

「それじゃあ、変身しよう。まずはガシャットのボタンを押して、ゲームマドライバーの内側のスロットにガシャットを装填して、ゲームキャラセレクト画面でキャラをセレクトすれば変身出来るから。まずは、僕のを見せて。」

右手で持ったプロトタドルクエステガシャットを回転させ、顔の横辺りでボタンを押す。

『タドルクエステ！』

ゲームタイトルをコールして壮大なBGMが鳴る。

「これより、バグスター切除手術を開始する。」

「名人性格変わった？ってか切除手術ってなに？」

俺は貴利矢の質問に答えずに変身を開始する。

ゲームドライバーを装着し、プロトタドルクエストガシヤットを顔の左側まで持っていく。そして、ガシヤットを180°回転させ、ドライバーに挿入する！

「変身！」

『ガッシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アイムアカメンライダー！』

キャラクターセレクト画面が俺を中心に回転し、左側に来たブレイブのキャラクターアイコンを左手を横にしてセレクトする。そして、ゲームドライバーのレバーを解放するために左手でレバーを軽く弾き、右手で完全に解放する！

「術式レベル2^ッ」

『ガツチャーン！レベルアップ！タアドルメグル！タドルメグル！

タドルクエストォー！』

三頭身のレベル1仮面ライダーブレイブは八頭身の姿レベル2へと姿を変えた。

「俺に切れないものは無い。バグスター、お前達の存在は No t h a n k y o u
だ！」

「へえ、これが仮面ライダーねえ。」

「ほらほらあ、きー君も変身変身！」

「よっしゃ！ノリノリで行くぜえ！」

そう言つて貴利矢はゲーマドライバーを装着し、右手に持ったプロト爆走バイクガシヤットを正面に突き出してボタンを押した。

『爆走バイク！』

タイトルコール音が鳴ると彼は右足を軸に左回転をした。そして、左手を顔まで上げ、ガシヤットを持った右手はドライバー挿入口の真上だ。

「変身！」

『ガシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャ
ネーム？アイムアカメンライダー！』

キャラクターセレクト画面で真ん前に来たキャラのアイコンを回転蹴りでセレクト

トし、仮面ライダーレーザーレベル1へと変身する。そして、

「そんじや、ノリノリでえ二速！」

灰色の三頭身レーザーはドライバーのレバーを解放すると……

『ガッチャアーン！レベルアップ！バァ〜クソウ！』

独走！激走！暴走！バァークソォ〜バァーイク！』

レベルアップした貴利矢は……

……バイクになっていた。

はい、protoです。

やっぱり中学の時みたいにはいきませんね。

と、そんなわけでまた過去編。いやー、すみません。

早くIS学園にいきたいんですけどね。この過去編は大事になってくるので、もう少々お付き合いください。

第6話 End of シミュレーション

二日連続投稿！でも前話感想来なくてちょっと怖いです。

俺はVRトレーニングシミュレーターで貴利矢の実力を図るといふ東の意見に賛同し、仮面ライダーブレイブレベル2となった。そして、貴利矢もまた仮面ライダーレーザーへと変身しレベル2になった筈なのだが、バイクへと姿を変えた。

「ほう、レーザーレベル2はバイクか。東、この件について何か言う事はあるか？」

「あれ？そう設定してたのいっくんじゃなかったっけ？えーっと確か、移動用にバイクをだせるようにするのにつて。」

「あ！確か決め技時にバイクが出るようにはしたが、まさかこんなところにも反映されてるとは。」

「え？何？名人やらかしちゃってたの？」

「まあ、問題あるまい。とにかく乗ってみるか。」

「ま、これはこれでいいや。じゃあ名人！ノリノリで行くぜえ〜！」

俺はレーザーにまたがり、バイクをバグスターへと走らせ次々とバグスターを轢いていく。そして、最後の一体になった所でガシャットをレーザーの決め技スロットホルダーに挿入し、スイッチを押す。

『ガッシャット！キメワザ！』

ゲームでよくある必殺技チャージ音が鳴り、もう一度スイッチを押した。

『爆走！クリティカルストライク！』

貴利矢バイクの前輪に光エフェクトが集まり、最後のバグスターに突撃する。前輪が当たるとバグスターが爆発し、ゲームクリアとなった。

VRから現実へと戻ってきた僕たちを向かえたのは束さん……ってかここには僕ら3人しかないや。

「いやー、すごくいいデータが取れたよお〜。これで爆走バイクは正規品が作れそうだねえ〜。」

「やっつと、正規品が作れるんですね。」

「うんうん、それに武器も出来そうだよ。っていうか出来てるよ！」

「早！って東さんに常識なんか通じないか。」

「ではでは、こちらの箱に注目！」

「え？何々？何開けんの？」

その声を聞いて、今まで感動に浸っていた九条君も箱の方へと歩いて来た。

「それでは！オープンセサミ！」

「?？」

東さんの掛け声はよくわからなかったけど、その掛け声で箱の蓋が開いた。そしてそこにあったのはRPGに出てくるような・・・というより、僕が作ったタドルクエストの伝説の剣だった。

「この調子でどんどんでデータを集めて、ガシャットの正規品も武器もゲームマドライバーもバリバリ作っていこお!!」

「おーーーーー!!!」

こうして僕と貴利矢とデータ取りの日々は始まるのだった。

・ ・ ・ 一方その頃

「さて、そろそろ俺たちバグスターも動くとしますか。」

はい、protoです。今日からテストなのに、そんなに勉強してません。
ひい、嘘ですね。してなかったら親に殺されます（嘘）笑笑。

さて、もう後2、3話で過去編を終わりたいですね。

そして、エグゼイドを見てる方ならわかりますよね？

それでは、また。

SEE YOU NEXT STAGE

第7話 水色髪の Sisters

お久しぶりです。

データを取り続け一週間が経ちました。僕らは、ゲーマドライバーを二機正規品として完成させ、正規品のガシャットは『マイティアアクションX』『タドルクエスト』『爆走バイク』『シャカリキスポーツ』の4本だけ完成しました。武器に関しても同様です。『ガシャコンブレイカー』『ガシャコンソード』『ガシャコンバグヴァイザー』この3つだけです。こうなったのはバグスター対策の遅れを取り戻す為に色々行っていたからでした。

まず、『バグスターウイルス感染症』通称『ゲーム病』を発症した時に症状がわからないと困ります。その為『ゲームスコープ』を開発し、これで患者がどのウイルスにかかっているのか判別できるようになりました。で、それを更に『衛生省』に連絡して、国家権力でバグスター関連の事件の通報を直でスコープに来るように

したりしました。更に最もこの現代において、面倒なもの。それが天災篠ノ之束が開発したISです。これを後ろ盾？にしてる女性権利団体もなかなかなかなかなかなかにいゝ、面倒です。で、それに対応する為に会社を作る事になった。会社の名前は『幻夢コーポレーション』。一応ゲーム会社で社長は束さん（名義だけだけど）で、もちろんお金は僕の貯金からです。まあ、これで汚い大人から変な理屈で変な給料をもらわなくてすm・ん、ん！私情を挟み申し訳ない。そんな感じでデータを取ったり、3人で楽しく（だけど真剣に）開発を進めていた。だけど開発は、思った様に進まなかった。そしてようやくバンバンシューティングが完成を迎える頃だった。そんな日々も終りを告げる。バグスターが一斉に活動を開始したのだ。そのバグスター達の処理を開始。そこで事は起きた。

・・・そして現在

「い、一夏。その後一体どうなったんだ？バグスター活動開始直後に何が起きた？」

「ま、まあ落ち着いて千冬姉。」

そう言って僕は、窓を見て外を確認する。

「残念だけど、もう夕方だ。この話はまた今度にしよう。」

そう言って僕はIS学園から出ました

「しかし、一夏のやつ。なんで革ジャンにアロハシャツだったんだ？丸グラサンも以前までならそんな格好も趣味もなかったはずだが。まあ、一夏はかっこいいし似合ってたからいいけど。」

IS学園から出た僕を出迎えたのは水色髪の姉妹でした。

「お疲れ様、一夏くん。」

最初に話かけたのは更識か……ん、ん！楯無。彼女の名は、更識楯無さんです。

「一夏、お疲れ様。無事に手続きは終えたの？」

あとに話かけてきた方は、更識簪さん。

彼女たちと僕の関係は、彼女たち更識は、幻夢^うコーポ^ちレー^のシヨ^会ンのスポンサー^社です。まあ、それだけではないですがね。そして更識は、対暗部用暗部なので衛生省

からの紹介でスポンサーに付いていただきました。しかし、更識がスポンサーに付いてくれたのは、それだけでは、なかったのです。

はい、pr otoです。

えーと、開校記念日で書けたので投稿です。

今回で過去編終り・・・ではないです。

ちよくちよく過去編入ります。

それでは、またいつか分からない次回でお会いしましょう。

See You NEXT GAME!

第8話 I'm a カメンライダー

はい、お待たせしました。

暗部更識がスポンサーに入ったのは、更識姉妹の妹「更識簪」によるものだ。これを語るにはバグスターが動き始めた時期に遡る。

・・・バグスター活動開始直後

「いっくん！きー君！バグスターの活動開始が確認されたよ！場所は・・・だよ！」

「ついに動き出したか。」

「へえ、とうとう実戦かあ。んじゃ！ノリノリで行くしかないね！」

そう言って、九条君は黄色のガシヤット正規品の爆走バイクを取り出しゲーマドライバーを装着する。

『爆走バイク！』

「二速！」

ガシヤットをドライバ―に装填し、レバ―解放！

『ガツシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャ
ネーム？アィムアカメンライダー！ガツチャーン！レベルアップ！バークソウ
！独走！激走！暴走！爆走バイクウ〜！』

レーザーレベル2へとレベルアップしたレーザーに跨り、バグスターの反応が
あつた場所へ幻夢コーポレーションから出動する。

・・・5分後

目的地に到着し、感染者を確認しました。

あ、九条君変身解除してます。

「大丈夫ですか？」

そう言つて感染者に近づき、ゲームスコープで症状を確認すると、ソルティ（マ
イティアクションXの敵キャラ）に感染してると分かりました。するといきなり
後ろから肩を掴まれ、後ろに倒されました。前を確認すると、彼女の姉（でしよ

か？）が僕達の前に立ち塞がりました。

「あなたたち何者？ 簪ちゃんには近づかないで。」

そう言われ少し焦っていると、発症してしまった。

「不味い！ 九条君！ レベル1で分離させるよ！」

「りよ〜かい。それじゃ！ ノリノリで行きますか！」

『マイティアクションX！』

『爆走バイク！』

「ゲームならこの俺に任せとけ！」

「変身！」

『『ガッシュアット！ レッツゲーム！ メツチャゲーム！ ムツチャゲーム！ ワツチャ
ネーム？ アイムアカメンライダー!!』』

「よっしゃ！ 天才ゲームクリエイターにして、天才ゲーマーSの力見せてやるぜ
！」

と、決め台詞を言っている時に感染者の姉はISを展開してバグスターに向かっ
ている。

「おい！やめろ！ISの攻撃じゃバグスターには効かない!!」

「あー、ありや相当シスコンだな。名人、ああなったら堪忍袋なんてもう関係ないぜ。攻撃当たらないようにやるしかないっしょ。」

「くっそおー、じゃあ貴利矢！逃げ遅れた人の避難を優先してくれ。」

「りよ〜かあい！はい。みい〜なさぁーんこっちです。」

そう言って逃げ遅れた人たちを安全な場所へと移動させるレーザーを横目で確認し、丸々としたバグスターウイルスの塊『バグスターユニオン』攻撃する。このバグスターユニオンはレベル1でないと感染者を分離をさせられない。だから、この三頭身の状態で戦闘する。こっちが戦闘を開始する前に案の定ISのシールドエネルギーが切れた。俺は感染者の姉と思われる人物を安全な場所へと移動させる。

「俺のゲームは、今からスタートだ！」

そう言って俺はバグスターユニオンに向かって走った。

はい、protoです。

皆さんにお聞きしたい。

何時くらの投稿がいいですかね？

あと、毎度毎度不定期更新で申し訳ありません。

第9話 ゲームオペレーション START!

久々の連続投稿ですね

バグスターユニオンとの戦闘を開始した俺と貴利矢は分離まであと少しというところまでできていた。

「よっと！名人、そろそろ終わらせようぜ！」

「ああ！ええっと、よし！アレに決めた！」

そう言った俺の周りをセレクトパネルが回転しハンマーのアイコンをタッチする。

『ガシャコン！ブレイカー！』

俺は手にしたガシャコンブレイカーのハンマー部分を軽く叩き、チョコレートブロックを叩くとメダルのような物が出てくる。

「よっしゃ！エナジーアイテムゲット！」

『高速化！』

エナジーアイテムは、仮面ライダーの能力を一時的に向上させるアイテム、エナジーアイテムが入ってるオブジェクトはゲームによって変わるぜ！

高速移動でバグスターユニオンにガシャコンブレイカーの攻撃を叩き込み、バグスターと感染者を分離させることに成功した！

「貴利矢！油断するなよ。これだから本番だ！大変身！」

『ガッチャーン！レベルアップ！』

マイティジャンプ！マイティキック！

マイティマイティアクションX！』

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

「そんじゃ、俺もギア上げますかね。二速！」

『ガッチャーン！レベルアップ』

バァ〜クソウ！独走！激走！暴走！爆走バイクウ〜！』

「我輩を分離させるとは！しよっぱい真似を！」

と唐突に口を挟んできたのは青い体に黒い帽子とマント、

左手にはゴツそうなナツクルがあるゲームキャラ。

俺が作ったマイティアクションXのボスキャラ“ソルティ”!

その周りには雑魚バグスターが群がっている。

「ソルティ! お前を攻略する!」

「名人! 初っ端から飛ばすぜ!」

俺はレーザーのエンジンを吹かし、雑魚バグスター達を

蹴散らして行く。雑魚バグスター達のHPはそこまで高くなく、

レーザーのタイヤが3、4回当たればすぐに散る。

・・・5分後

「さて、残りはお前だけだ。ソルティ!」

「くう! 我輩の部下達を! しょっぱい奴め!」

「さて、名人! 自分ちよいと用事があるから先帰るわあ。」

「え? ちょ、レーザー?」

そう言うと、レーザーのゲームドライブのレバーが閉じ、ガシャットが排出された。

「そんなじゃ名人、あとよろしく！」

「ええ、まあ仕方ない！ソルティ！覚悟決めろよ！」

俺は手に持っていたガシャコンブレイカーのAボタンを押す。

『ジャ・キーン！』

するとハンマーだったブレイカーが剣へと変形した。

そして、ソルティのナックルを刀身で受け止め、鳩尾に蹴りを入れる！

ソルティの攻撃を捌き、ガシャコンブレイカーで一撃一撃を丁寧にならわす。

そして、Bボタンを3回押し、刀身にエネルギーをチャージして、

強攻撃を食らわせる！

「くっ！ここはしょっぱいが一時退却を・・・！」

「ッ！させるか！」

俺はゲーマードライバーからガシャットを取り出し、ガシャコンブレイカーにガシャットを装填、キメワザを放つ！

『ガッシューンガッシュット！キメワザ！

マイテイクリテイカルフィニーツッシュ！』

キメワザはソルティに直撃、爆散。

最後に感染者が完治してるかをゲームスコープで確認して、バグスターの切除は完了した。

・・・がこのあと予想外のことが起きた。

はい、魔法使いは何度も以来の連続投稿ですかね。

protoです。いやー、エグゼイド難しいなあ。

さて、実を言うと最近鉄血のオルフェンズ系の小説の読みすぎで何かオルフェンズで書きたくなっていて自分がいますが、この作品続けますのでご安心を。

第10話 STEALされた物

どうも、お久しぶりです。

テストとか試合とかでリアルが忙しく、

なおダンメモとかやって忙しかってです。

そして、「おかえりなさい、貴利矢さん！」

*現在は本編に関係ありません。

うーす。自分、九条貴利矢。さて、さっきまでバグスターとの戦闘をしてたんだが、嫌いな視線感じちゃってさあゝ、ちょっと視線を送ってた奴の事追跡してまあす。バグスターの事を大っぴらに話されちゃ困るからな（特に名人が）。ってなワケで今ポニーテのかわい子ちゃん追ってまあゝす。しかも巨ny・・・あーすまん、悪ノリが過ぎたわ。

えっと、だいたい15分位追跡したかな？辿り着いた場所は・・・

「幻夢コーポレーション？なんでこんなところに？」

彼女を追って中に入る。社員証を見せていない筈の彼女が何故入れているのかは謎だが、急いで追いかける。しかし、エレベーターで移動している為何階に止まるのか全くわからない。

「こうなったら最上階に行くしかない。」

自分は迷わず一番上の階にいることに賭けることに決めボタンを押す。最上階にあるのは名人の作業・ガシャット保管部屋と社長室、そしてシミュレーションルームのみだ。目的があるとしたら名人の作業部屋ぐらいだろう。

「おいおい、なんだよこれ。」

たった数分のはずだ。社長室は荒らされ、名人の作業部屋も半壊レベルで荒らされていた。しかも、刀？か何かで切り傷を付けられている。

「って、目的のブツは回収済みってわけ。」

自分が視線を向けた先にはゲーマドライバーとガシャットケースの保管庫が壊さ

れていた。ゲーマドライバーは予備に3機あるだけだ。そして、中を確認したところ、無くなっていたのは予備のゲーマドライバー1機とプロトマイティアクションXガシャットと正規版のシャカリキスポーツガシャットの2本。

「・・・さっきの娘はいねえか。とりあえず片付けとつか。しっかし、なんで金目の物には一切手エ付けなかったんだ？しかも、適合手術を受けずにドライバーもガシャットも使えないのに？そもそも、なんでピンポイントでゲーマドライバーとガシャットだけなんだ？」

そんな事を呟きながら、自分は片付けを始めた。

あ、因みにシミュレーションルームはロックが嚴重に掛かって無事だったぜ。「ふう〜、なんとか社長室だけでも片付いたな。刀の傷までは無理か。」

「戻りまし・・・た？あれ、九条君？用事で帰ったんじゃ？」
ちようど片付いたタイミングで戻ってきたな。

「お、名人。いや〜、日付間違えててさあ〜。で、戻ってきて今この部屋片付け終わったところ。」

「え？片付け？なんの話？」

「あゝ、自分戻ってきた時に怪しい女がここに入って来るの見つくてさあ、追ってきたらこのザマだ。」

と言い、まだ片付いていない名人の部屋を見せる。

「あゝ、警備もつと強化しないと。」

この時、名人は悟ったようだった。大切な物を盗まれている事に。

「この件で失ったものはゲームドライバー1機、プロトマイティのガシャットとシャカリキスポーツ。」

そう言って自分はその場を離れた。

はい、protoです。

更新が7月に入ってしまった申し訳ございません。

本来なら先月に二話程投稿しようと思っておりましたが、リアルの事情で投稿できませんでした。

色々言いたい事はありますが、

こんな亀更新のクソ作品でも面白いと言ってくださる方や、面白いと思ってなくても読んでくださってる皆様に感謝を。

第11話 現れた NEW BUGSTER!

テストもある程度帰ってきたのに、全然爆死してなくてネタにできなかった。

どうも、織斑一夏です。えーと、ゲーム病患者を助けたのですが、使っていないプロトバンバンシューティングのガシャット落とししました。そんな俯いた感じで幻夢コーポレーションに戻ると、会社の社長室と僕の作業部屋が荒らされていました。幸いにも社長室は片付けが済んでいました。片付けたのは用事があると言って先に帰ったはずの九条君。そして、色々察した僕はこう呟きました。

「ああ、警備もつと強化しないと。」

九条君も悟ってくれたのか、僕にこう告げた。

「この件で失ったものはゲームドライブバー1機、プロトマイティのガシャットとシャカリキスポーツのガシャットだ。」

案の定僕の聞きたい質問の答えだった。

そしてその後、さらに二つの出来事が起きた。

その一つは・・・、

「いっくんいっくん、見てこれ。」

「東さん？ な、なんですか？」

そう言って僕の手を引っ張り連れてきたのはシミュレーションルーム。

「ポッピー、いっくんに挨拶。」

「はい♪ 私はポッピーピポパポ。ドレミファビートのバグスターだよ♪ポッピーって呼んでね♪」

「えっと、ポッピー、よろしくお願いします。」

「もう♪敬語じゃなくていいよ♪」

「は、はあ。それではポッピー。あなたはどこから来たのですか？」

「うーん♪わかんない♪・・・というか、覚えてないんだあ〜♪」

「わかりました。それでは、コスチュームチェンジとか出来ますか？」

「やってみるよ♪コスチュームチェンジ〜♪」

そう言ってポップピーはクルクルと3回くらい回ると、ポップな服からフォーマルな服へと変わった。

「なるほど、ならこの姿の時の名前も決めなくてはなりませんね。うーん、まあ、仮の名前ですからね。とりあえず仮野明日那で。」

「名人？明日那はどこから出てきた？」

「・・・イメージ。ってか、九条君？どこか行ったんじゃ？」

いつの間にか先程社長室から出て行った九条君が居た、

「なるほど、コスチェンしたら堅物ぽいもんな。ん？気にすんな。」

「酷いなあ、そんなイメージに見える？」

コスチェンすると、セリフに♪が付かないようですね。ん？地文を読むな？無理
言わないでくださいよ。作者がそうさせてるんですから。オット、メタイメタイ。

・・・一方その頃

私、更識簪は公園のベンチで目が覚めた。何故、このような場所で寝ていたのかはわからないが、一つ目の前に落ちているものがある。黒いボディカラーのゲームカセットだろうか？ボディにはモノクロのゲームの絵がある。

「・・・BANGBANG・・・」

SHOOTING？これって開発中止になったゲーム、の筈。」

ゲームカセットをよく確認するとボタンが一つ、そして幻夢コーポレーションのマーク。

（なんだろう、ボタンを押してみた衝動に駆られる。でも、我慢して幻夢コーポレーションに持っていったら・・・。）

私は黒いゲームカセットを幻夢コーポレーションに持って行くことにした。

はい、proutoです。

ええっと、お知らせ程度ですが更新時間の変更をしようかと思っています。自分は基

本的に0:00に更新するように設定して居ましたが、皆さんはどれぐらいの時間がいいのかなと思います、活動報告にてアンケート取りたいと思います。

お手数ですが、アンケートに協力いただけたらと思います。

第12話 Returnするガシャット

なんとか今月中にあげれた。

はあ。あ、どうも、織斑一夏です。最初のため息で察していただけたでしょうか？はい、プロトバンバンシューティングが見つかっておりません。そんな時、社長室にある電話が鳴りました。

「はい、一夏です。」

『こちら受け付けです。社長、今こちらに青髪の少女いえ、日本代表候補生の更識簪様がお見えになっておりますが。』

「はい、応接室に通してください。（青髪？バグスターウイルスに感染していた方かな？一体何の用だろうか？）。」

そんな事を考えながら応接室に向かいドアを開ける。

「こんにちは、お待たせしました。幻夢コーポレーション代表取締役代理 開発責

任者の織斑一夏です。日本代表候補生の更識簪さんですね？」

「は、はい！日本代表候補生、更識簪です。アポも取らずに突然すみません。」

「いえいえ。ところで何故日本代表候補生ともあろうあなたがこのような場所に？」

「

「あ！ええっと、これを届けに、来ました。」

更識さんは、灰色の物体を僕に見せる。

「これは、プロトバンバンシューテングガシャット！何故これをあなたが？」

「あの！えっと、私がベンチで目を覚ました時に拾いました。」

「ああ、なんとお礼をしたら。何か僕に出来ることはありませんか？」

「いいんですか？・・・じゃ、じゃあ二つお願いがあります。」

「はい、僕に出来ることならなんなりと。」

と言って、彼女が出して来たのはサイン色紙だった。

「織斑一夏さん！あの織斑さんの大・大・大ファンなんです！サイン頂けません

か？」

「はい、いつもありがとうございます。それと、一夏でいいですよ。見た所歳は近

いでしようし。それにさん付けと敬語もいいですよ。」

「そ、それじゃあ、一夏。私も簪、でいい。」

僕はサイン色紙を受け取りサインを書く。彼女の顔を見ると漫画でいうペアとなる感じの明るさが彼女を輝かせていた。

「はい、どうぞ。それで、二つ目は？」

「あの、ゲームの制作現場を見たいです。」

「ええ、構いませんよ。ちょうど今開発中のゲームがあります。プロトタイプでよろしければプレイしますか？」

そう聞くと簪は顔をス〇ライドのCMの勢いが如く顔を縦に振った。

「では、こちらへ。」

そう言って応接室から出て、エレベーターで開発室へ移動・案内をし、作業風景の説明などして目的の試作ゲーム「ドラゴナイトハンターZ」のプレイ準備をする。

「えっと、一夏。このゲームは？」

「ドラゴナイトハンターZ。4人協力プレイのハンターゲームです。まだ試作段

階で難易度は通常でいうとハードレベルです。このゲームでいいですか？」

「う、うん。じゃあお願い。」

「では、GAME START！」

そうやって僕はSTARTボタンを押した。

はい、protoです。約二週間ぶりでしょうか。

えーと学祭やら学祭やらで投稿できず申し訳ない。

アンケートですが二件しか来てなかったの

今まで通り0:00頃に更新ということをお願いします。

投票頂いたラミアさんには申し訳ないです。

第13話 誕生する NEW RIDERS！

一昨日の朝一番でエグゼイド見て来ました。

そして、あるある晩餐会见忘れました。

ど、どうも。お、織斑一夏です。GAME START！そう部屋に鳴り響いてから、約25分が経過しています。理由は……

「くっ、流石に2人ではキツイ！」

試作品のゲーム『ドラゴナイトハンターZ』をプレイしているから！

「す、凄い！これが、ドラゴナイトハンターZの龍戦士！」

現在攻略中の龍戦士『グラフィイト』は、本来なら4人で戦ってようやく倒せるように設定してあるので、2人ではなかなか効率が上がらず戦況がよろしくない。困みにグラフィイトの攻略難易度は通常のゲームの難易度設定で言う所の……

ベリーハードと言ったところです。

「くっとう！ やっぱり倒せないですね。」

「で、でも！ さ、最後の方はHPが半分を切ってた。」

「そうですね。・・・おや？ 簪さん、時間の方は大丈夫ですか？」

そう言って僕は、壁掛け時計を指差す。時計を見ると5時を過ぎてる。

「え？・・・あ！もうこんな時間。早く帰らないと。」

「送っていきますよ。こんな時間に女性を1人で帰らせるわけにはいきませんかね。」

『pr r pr r r はい。明日那です。』

「明日那、車の準備を。」

『畏まりました、すぐに手配を。』

「すぐに車が手配されます。それまで少々お待ちください。」

3分後

「社長、お車の準備が整いました。」

「わかりました。では、簪さん。こちらへ。」

そう言って簪さんを車まで案内し、更識の屋敷まで乗せていく。

その間、約35分と言ったところだろうか。

特段何も話す事はなく屋敷についたが、何故か周りが騒がしかった。

「簪さん、屋敷で何かあったんですかね？」

「多分そうかと。『p r r r p r r r』ん？お姉ちゃん？もしもし？」

「簪ちゃん！今どこ？」

「どこって、屋敷の前だけど。」

『良かった。早く来てお父さんが、お父さんが！』

「お父さんが！早く行かなきゃ。」

「僕も付いて行って良いですか？何か嫌な予感がします。」

「はい、お願いします。」

そう言い、僕は屋敷内を全力で走った。

「お姉ちゃん！」「簪ちゃん！」

とある部屋に入ると簪さんのお父さんと思しき人が寝ていた。よく見ると全身にノイズが走っている。

「まさか!」

僕はゲームスコープを取り出し、症状を確認する。

「やっぱり・・・、ゲーム病。しかも、このタイミングで。」

「一夏、ゲーム病って私がかかった病気?」

「はい。それもウイルスがかなり厄介です。」

「なんのゲームなの?」

「・・・ドラゴナイトハンターZ。」

そう言った瞬間に簪さんは崩れ落ちた。

「簪さん、お願いがあります。あなたの力を貸してください。」

「え? 私の・・・力? それなら、お姉ちゃんのほうが。ロシアの国家代表だよ?」

「いえ、ISなんて使えても無意味です。」

あ、この発言はこの世の中に喧嘩を売ったも同然ですね、撤回撤回と。

「これはゲームの才能が無ければダメなんです。」

「・・・わかった。何をすればいい?」

「適合手術を行います。そして、一緒に戦ってください。仮面ライダーとして。」

「仮面・・・ライダー？」

「バグスターから人々を守る者の総称ですよ。」

「わかった！やる、やるよ！仮面ライダーになる！」

「よし、では「ちよつと待って！」え？」

声の下ほうを見るとお姉さんが立っていた。

「なんなの？いきなり家上がり込んで来て！もうこれ以上、うちの妹を巻き込まないで！どうせ、こう言うように洗脳なんかしたんでしょ！」

そう言いながら僕の顔を指差しながら僕に近づいてくるが、そこでさらに後ろから声上がる。

「お姉ちゃん！「へえ？」これは私が決めた事なの！私の意志で決めたの！」

「簪・・・ちゃん？」

「ひゃ？だからね、その人は悪くない。」

「一刻を争います。簪さん、急いで幻夢コーポレーションへ。」

「はい、それじゃあ待ってて、お父さん。」

「待った！なら、私もなる。仮面ライダーに！」

「わかりました。ではあなたも。」

こうして簪さんと更識さんは適合手術を受け仮面ライダーになった。

はい、今月最初の投稿です！

って、protoです。(名乗るの忘れてたZ。

エグゼイドの映画を見て来ました。

期待値が高すぎて、と言うより本編の質が高くて

映画にも期待し過ぎてました。って書いてますが

別に面白くない訳ではないです。普通に感動するレベルですので。

さて、今日から『風都探偵』の漫画が始まります。

楽しみにしています。

第14話 START する高難易度手術

いや、今月2話目を投稿できた。

ごめんなさい、戦闘シーンは次回になります。

はい、織斑一夏です。

現在幻夢コーポレーションで、束さんが急ピッチで適合手術を行なっております。その間にバグスターの対策を練ってますが、おそらく相手はドラゴナイトハンター乙の龍戦士『グラフィイト』。相手はかなりの強敵ですし、こちらの布石は僕と九条君以外はバグスター戦闘の初心者です。ですがレーザーはレベル2になると戦えませんし、レベル3用ガシャットはシャカリキスポーツしか出来てません。ぶつつけ本番で試して失敗は避けたい。

「やあ、流石の束さんでも2人同時の適合手術は疲れたあ。」

「お疲れ様です。その反応ですと2人共成功ですね？」

「うん、完璧デス！」

「それなら、グラフィイト切除手術といきましょう。」

僕はライダー達を連れて、再び更識の屋敷へ向かった。

「いやあ、なんかスゲー久しぶりな気がするの、自分だけ？」

「気のせいでは？それに久しぶりも何も毎日会ってるではありませんか。」

確かに2、3話くらい出てないがっつと、メタイメタイ。

「ええつと、それでは説明します。」

今回の戦闘のは、①敵がドラゴナイトハンターZの強敵であるグラフィイトである事。②グラフィイトのレベルはおそらく5である事。③今回の作戦ではバグスターとの戦闘経験があるのが2人。ゲームセンスがあるのが3人。(更識さんの実力は知りません。)④作戦は命大事にである事。以上です。」

「なあ名人、彼女達にはどのガシャット渡すんだ？」

九条君は彼女達を見ながらそう言う。

「簪さんには、バンバンシューティング。更識さんには申し訳ないけど、余ったタドルクエストを渡すつもりだよ。」

「なるほどな、それじゃあ名人。そろそろ敵さんがお見えになるぜ。(やっぱり、今回の作戦は不安というか不確定な要素が多すぎる。あのデータは名人のパソコンに直で送っとくべきだったかな。)」

「それじゃあ、グラフィイト切除手術を開始する。」

「了解！（りょくかあ〜い）。」

・・・織斑一夏の変身

さて、グラフィイトの攻略を開始しよう。まずはゲームマドライバーを装着。次にガシヤットを回転させてボタンを押す！

『マイティアクションX！』

風が吹き、俺の髪を揺らす！

「ヘッ！ゲームならこの俺に任せとけ！」

右手を左前に大きく突き出し力腕を大きく右側に回転させ、右手に持ったガシヤッ

トを半回転、左手に持ち替えて、左腕を大きく上に上げドライバーにガシヤットを装填！

『ガシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アイムアカメンライダー！』

「仮面ライダーエグゼイドレベル1に変身完了！」

・ ・ ・ 更識簪の変身

変身シークエンスは、まずはガシヤットのボタンを引き金を引くように押す！

『バンバンシューティング!!』

そして、ゲーマドライバーを装着。次にガシヤットを右手に持ち替えて、銃を回すようにガシヤットを左上に構える。最後にガシヤットをドライバーに装填！

「変身！」

『ガシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アイムアカメンライダー！』

「やった、仮面ライダースナイプレベル1に変身成功。これよりミッションを開始する！」

・ ・ ・ 更識刀奈の変身

えーと、確か変身方法は、ガシシャツを回転させてガシシャツのボタンを押す。
『タドルクエスト!』

次にゲーマドライバーを装着して、右手のガシシャツを顔の左側に構えて、ガシシャツを半回転させドライバーに装填!

『ガツシシャツ! レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャゲーム? アイムアカメンライダー!』

「仮面ライダーブレイドレベル1への変身完了。」

「さあ、ここから狩り開始だ!」

そう言っただけで俺達ライダーは現れた龍型バグスターユニオンに向かって走った。

ところで名人。どうして俺の変身シカントされてんの?

だって九条君、前にやったじゃん。

はい、protoです。

前に過去編終わりとか言っというてバリバリ過去編やってますが気にしないでくださいいね？

あと、前にまだ産まれてないはずのグラフィイトが出てきてしまっていたので、直してます。(第6話です。) 計画不足によるミスです。本当に申し訳ないです。

第15話 Dragon 狩り！

なんだかんだで3日目かな？

どうも、俺は織斑一夏。今バグスターユニオンと戦ってるんだがこれが中々厄介な敵で全然分離する気配がない。さて、どうしたものか。

「ダメ、ガシヤコンマグナムの攻撃が効かない。」

「くっ、こっちも剣の威力が足りない。」

「自分の方もダメだわ。」

上からスナイプ、ブレイブ、レーザーだが、ブレイブに至っては剣をレイピアみたいに使ってるからだな。だが、確かに攻撃が通ってない。こうなりやエナジーアイテム探したほうが良さそうだ。

「各自エナジーアイテムを探してくれ。アイテムはオブジェクトに入ってる時がある！」

その言葉をきっかけに各ライダーがブロックや宝箱、ドラム缶にトロフィーを壊しエナジーアイテムを探す。

「お、これは混乱か。こっちは挑発。この組み合わせなら。よし、やるか。」

俺はエナジーアイテム『挑発』を使いバグスターユニオンを挑発する。この挑発は誘導だ。本当の目的は……。

「よし、こっちに来い！」

俺はエナジーアイテム混乱を隠すように立ちバグスターユニオンがこちらに接近するのを待つ。ギリギリだ。ギリギリまで寄せ付けて……回避する！

『混乱』とエナジーアイテム発動音が鳴りバグスターユニオンが混乱状態に陥る。「よし、バグスターが混乱した！一気に叩くぞ！」

「「おう！」」

『マッスル化』 『高速化』 『巨大化』

左からレーザー、ブレイブ、スナイプだ……って巨大化？マズイ！俺は急い

で決め技スロットホルダーのボタンを押した。

『ステージセレクト！』

場所が更識の屋敷付近から、人影のない荒地へと変わった。そのままあの場所に居たら、目撃者が多数出て情報統制が難しくなる。ネットに画像貼られたりするの
も対処が面倒だからな。それは置いて、レーザーがタイヤを軸に攻撃力が上がった回転攻撃を、ブレイブが火炎を纏った高速突撃を、最後にスナイプが巨大な銃弾となりバグスターユニオンに突撃した。これでバグスターと感染者の分離が完了した筈だ。あとは、空から落ちてくる感染者を俺がチョコブロックを展開してキャッチすればいい。俺はチョコブロックを展開して感染者をキャッチし安全な場所まで運んだ。

「ふはは、俺はドラゴナイトハンターZの龍戦士『グラフィイト』！お前ら全員倒して俺は完全体になる！」

そう語るのは緑色の龍型の戦士。まだ不完全なのか全身に度々ノイズが入っている。持っている武器は龍の牙を模した双刃刀『グラフィイトファンダ』だ。あれも全て俺が生み出した武器だ。

「さあ、本当の戦いはこれからだ！」

「お父さんのゲーム病は私達で治す！」

「グラフィイト！お前は俺達（自分ら）が切除する。」
真の戦いの火蓋が切って落とされた。

はい、protoです。

メッセージ貰ってやる気満々漫☆画太郎（多分滑った）。

そんな訳で3日連投ですかね？

今回はバグスターを感染者から分離して終わりました。

多分明日は投稿・・・ちよつと考えさせてくださいね。

できたらします。

第16話 Deleteされた存在

今回は終盤が重苦しいとおもいます。

はい織斑一夏です！ たった今グラフィイトバグスターの分離に成功したところ
であります！ ん？ なんで軍曹みたいな喋り方？ …… ってか軍曹って誰だ？

そんな事は置いといて、ここからが勝負どころです。グラフィイトが感染者を完
全に取り込む前にグラフィイトを切除しなければなりません。状況説明終わり。

「レーザー以外レベルアップ！ レバー解放！」

「OK！！」

『『ガッチャアーン！ レベルアップ！』』』』

『マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクションX！』

『タドルメグル！ タドルメグル！ タドルクエストオ〜〜！！』

『ババンバン！ バンババン！ バンバンシューティング！』

三頭身のライダー3人が等身大のライダー3人に変わる。

「ちよ、名人！なんで自分だけレベルアップしないんだよ？」

「だってバイクになるよりマシだろ？」

「うっ。そ、そりゃそうだけど。」

「だから、まだ待っててくれ。」

「わかったよ。それじゃあ、さっさとグラフィット攻略して、全員生きて帰ろうぜ。」

「ああ！」「うん！」「もちろん！」

俺たちは武器を構えなおし、グラフィットと対峙した。今の天気は雨。この雨は俺たちにとって、戦いの後のオアシスか、それとも後悔と悲しみ、助けられなかった罪悪感などを混ぜ合わせた涙となるのか、それはまだ俺たちにはわからなかった。

グラフィットも武器を構え、俺たちは感覚を研ぎ澄まし、次の雨粒が落ちた瞬間に大地を蹴り、グラフィットに向かって走り出した。

「うおおおおお、おりゃ！」

俺はガシャコンブレイカー（ソードモード）でグラファイトファンングと鏢迫り合いに持ち込む。火花が散り、それを見入り後ろに気付かないグラファイトの背後から、ブレイブがガシャコンソードのBボタンを三回押し、炎を纏わせた強攻撃で斬る！しかし、グラファイトも即座に反応し、俺を蹴り飛ばしガシャコンソードをグラファイトファンングで受け止め、ブレイブの首根っこを掴み、スナイプの方に投げ飛ばし、グラファイトは更に斬撃を飛ばし、2人の変身が解除された。

「うわああ！」

その直後、グラファイトがグラファイトファンングに力を溜め始めた。

「マズイ！必殺技が来る！」

『高速化！』『鋼鉄化』のエナジーアイテムで2人の元へ駆け寄り、俺は自らの体を盾にした。

「喰らえ！激怒竜牙！オオラァ！」

赤い十字の剣撃が俺を襲う。

「うわああ！」

俺まで変身解除させられ、追い詰められた。

「お前たちは後々面倒臭さそうだ。ここで始末させてもらおう！ハァ！」

グラフィイトが俺達に向けてグラフィイトファンクを振り下ろす。俺はとっさに2人を庇い、目を瞑った。

（この2人さえ守れば、俺は・・・。）

俺は剣が振り下ろされるのを待っていたが、いつまでたっても剣撃が来る事はなく、目を開けグラフィイトの方を向くと、レーザーが体で剣を受け止めていた。

「レーザー、先ずは貴様からだ！フン！」

レーザーに押し付けられたグラフィイトファンクがレーザーの体を斬りつける。レーザーのライダーゲージが減って、とうとうゲージが無くなった。

『GAME OVER!』

レーザーの変身が解除され、フラフラになりながらも俺たちの前で立ち続ける九条君がいた。

「この・・・3人は、人類の・・・グハァ！希望なんだ。簡単にはやらせない！」

「[[貴利矢（くん）（九条君）!!!!]]」

「フッ、レーザーのその心意気に免じ、今回は見逃してやるか。それに俺は完全体

になれたようだ。」

そのセリフを残してグラフィアイトは消えた。

そして、九条君は倒れた。

「一夏あ、楽しかったぜ。お前と過ごした時間。短かったけど、サイコーの時間だった。お前なら、きつと運命を、変え、られる。だから・・・頼んだぜ。」

そう言って九条君は僕にゲームドライバーを渡し、消えてしまった。

「貴利矢 ああああああああ！」

俺たちに降り注ぐ雨は、後悔と悲しみ、助けられなかった罪悪感などを混ぜ合わせた涙となった。

仮面ライダーエグゼイド通りではないですが

貴利矢さんが退場してしまいました！（泣

4日投稿で、こんな重い話書きたくなかった。

でもやらないとこの後の話詰むので仕方なし！（泣

第17話 過去の STORY が終わる

昨日はリアル用の用事で投稿できず申し訳ない。

織斑一夏……です。今、九条君と更識さんのお父さんの葬式をうちの会社で行なったところです。遺体がないので普通に行うことができないので。

「更識さん、……簪さん。この度は本当に申し訳ありませんでした。こちらのミスであなた方のお父さんを助ける事が出来ず、あなた方2人に深い心の傷を作ってしまったいました。」

「……頭を上げてください。あなたは、私達やお父さんの為に頑張ってくれた。体を張って私や簪ちゃんを助けてくれた。それに、あの場で何も出来ずに終わった私にも責任があります。……だから決めました。私達更識は幻夢コーポレーションのスポンサーとなり、今後仮面ライダーとしてバグスターと戦う事に決めました。まあ、衛生省からの紹介と……。」

「私が言ったの。これからも一夏と戦いたいって。」

2人がまっすぐな瞳で僕を見る。

「ですが・・・、僕は大切な相棒さえ守れなかった。次またあの様な状況になった時守りきれるかどうかすら危うい。」

僕は弱音を吐いてしまった。でも、簪さんは

「だからこそ、私達も戦う。戦って、経験を積んで強くなる！ゲームと同じ。」

「・・・わかりました。更識さん、簪さん。よろしくお願いします。ではまずは紹介しないとイケない人が居ます。東さん、ポッピーこちらへ。」

「はい、私がISの開発者にして大・大・大天災の篠ノ之束さんだよ。」

「はぁーい♪私はポッピーポパポ。ドレミファビートのバグスターだよ。」
なんか似た感じだな、この2人。

「ポッピー、外での姿での自己紹介も。」

「了解♪コスチュームチェンジ♪」

ポッピーの派手な感じの服装から、スーツ姿へと変わった。

「あ、車の準備してた・・・。」

「私は仮野明日那。社長秘書として一夏さんにお世話になってます。」

「これで、紹介はすみましたね。それでは、僕は少々用事を済ませてきますので、一旦失礼します。」

そう言って僕は幻夢コーポレーションを後にした。

そして、向かった先は学校。自分のクラスの机に座って九条君との思い出を思い返していた。夏休み明けに転校してきて、そこから毎日ゲームして、データ取ってさ、・・・楽しかったよなあ。僕は俯いて泣きそうになった。でも、俯いた瞬間に机の中に何か入っているのに気づいた。

「これ・・・手紙？誰からだ？」

封筒に入っている手紙には僕の名前以外書いてない。開けて読んでみると、

『ういゝす。あ、これ自分からな。多分名人がこれ読んでるってことは俺の身に何かあったんだろいな。そこで、名人にはパンドラの箱みたいなのを渡すわあゝ。俺のパソコンと俺の机に入っているUSBメモリ。この二つを使えばすっごい力を手に入れられる。けど、力に溺れたら大変な事になる。だから、この敵は攻略不可能って時にだけ箱を、データを取り出してくれ。一夏、お前には運命を変える力

がある。それを信じろ。あと、九条君じゃなくて、貴利矢って呼んでくれたら嬉しかったぜ。」

僕は、一人称が自分っていう奴のことを1人しか知らない。九条k・・・貴利矢さん。ん？なんでさんかって？貴利矢君って呼びにくくて。あ、貴利矢さんの机のUSBメモリ回収しなきゃ。

この学校での話は誰にもしてない。

まあ、これにて更識がスポンサーについた話とその前後の話を終わります。

サブタイトルのセンス無さすぎって

自虐を始めたprotoです。

いやー、早くラブラブさせたい！

って願望があるので次あたりから学園に入学

できるように頑張りました！

第18話 ここから始まる一夏のSCHOOOLLIFE

再度入学手続きを行い（今回はフォーマルなスーツで行きました）、IS学園に入学しなきゃいけなくなりました。ってか、それくらい政府側そっちでやっておいてくれ、って感じですよ。まあ、自分で選択した事ですしね。ああ、それと1週間前から簪と付き合う事になりました。その話は、また後日。IS学園入学までもう時間がありませんが、送られてきた電話帳程厚い参考書は完璧に頭に入ってますので、後は簪とデートプランでも考えますかね。

・ ・ ・ そんな訳で数日後。

とうとうやって参りました。IS学園は、女子校（ISが女性にしか使えないのだから、必然的にそうなる）ですので、トラブルなど起きぬよう細心の注意を払って生活しなければなりませんね。さあ、いざ入学式へ。

入学式が程なく終わり、自分の教室へと向かいます。同じクラスに簪がいて助か

りました。ガチでホツとしましたよ。すると、緑の髪の巨ny・・・ん、ん！眼鏡

をかけた人、うちのクラスの副担任の山田先生が入ってきて、挨拶を始めました。

「はい、皆さんこんにちは。私はこのクラスの副担任の山田真耶です。これからよ

ろしくお願いしましゅ！」あ、噛んじゃった

僕は場の空気を何とかしないと、そう思い拍手をし、そう言った。

「山田先生、ありがとうございます。これからどうぞ、よろしく願います。」

「は、はい！よろしく願います。」

噛まなかったので、良かった。

「それでは順番に自己紹介をよろしく願います。」

程なくして僕の番が来ましたね。

「えー、皆さん初めまして。織斑一夏と申します。この度何故かISを動かせるという事がわかり、この学園に強制入学させられました。どうぞよろしく願います。」

拍手が鳴り響く。特に趣味やら何やら言ったわけでは無いが満足してもらえたようです。

そして、姉の織斑千冬が教室に現れ、教室中が盛り上がりましたが、すぐに静めて授業に入りました。

授業内容は分厚い参考書の中身の確認でしたので頭に全て叩き込んでおいて正解でした。

「それでは何かわからない事はありますか？特に織斑君は、大丈夫ですか？」
「はい、問題ありません。」

そうして授業は終わり、珍獣のような視線から解放されたいと思いつち上がりうとしたその時、

「ちょっと、よろしくて？」

「え？なんですか？」

「まあ！何そのお返事は？この私に話しかけられているというのに、イギリス代表候補生であるこの私がわざわざ話しかけたというのに。」

「はあ、それで？何かご用ですか？」

「いえ、どうせ男なんですからIS操縦なんて出来ないでしょうし、頭を下げるんでしたら、教えて差し上げますわよ？」

「あー、お気遣いどうも。でも、ごめんなさい。もう、相手いるから。」

「へえ、この私よりその人の方が優秀だと?」

「さあ、残念ながら僕にはわかりません。もういいですか?人を待たせてますので。これで。」

そう、話を切り上げて僕は簪とこ、恋人つなぎで幻夢コーポレーションに戻ろうとしたが、

「織斑一夏くうくん、はあはあ、良かった。まだ帰ってなくて。」

「山田先生?どうかなされましたか?」

「織斑君の寮の部屋が確保できましたので、今日からそちらへ行っていただきませう。」

「えーと、色々取りに行かないと行けないのですか?」

「それなら、私が用意しておいた。パソコンと着替え、携帯の充電器さえあれば十分だろ。」

「えっと、色々足りて無いので。本当に一回戻ります。あと、1人部屋ですか?」「いえ、急遽部屋替えをしたので。」

「そうですか。わかりました。門限までには帰りますので。これで、失礼します。『Pr r r p r r r』もしもし、急ぎでIS学園前に車を用意してくれ。」

取り敢えず必要なものを持ってIS学園に戻りました。

はい、p r o t o です。

今回の作品では織斑千冬の用意した荷物じゃ、

今後困るので一旦資料を取りに戻るといふ事をしました。

さて、同居人は誰か。次回も楽しみに

第19話 SELECT of クラス代表候補

どうも、織斑一夏です。

今、金髪の子に絡まれてます。昨日の上から目線な子です。事の発端は、織斑先生がクラス代表を決めると言ったことからでした。

「えー、授業の前にクラス代表を決める。クラス代表とは、クラス代表戦に出たり、クラス内の会議を取りしきつたりと、まあ色々ある。自薦、他薦は問わん。

誰か居ないか。」

「私は、織斑くんを推薦します。」

「私も推薦します」

「え？ 僕ですか織斑先生、どうせ拒否権なんか」

「あるわけない。」

「デスヨネー。では、僕は簪さんを推薦します。」

「え？ ちょ、一夏。なんで私？」

「僕自身が、太鼓判を押せるのは簪だけですからね。」

「うん、ありがと!!!」

「織斑と更識だけだな。ではこの2人で」

「納得いきませんわ!」

急に叫びだしたのは、昨日僕に絡んできたイギリス代表候補生だ。

話が長いので要約すると、日本は極東の島国なうえに、文化が後進的で、この場にいること自体が苦痛らしい。だが次の一言で僕と簪に喧嘩を売った

「それにこの国には、『ヲタク』とやらが沢山いて、特撮だのアニメだの低レベルな娯楽に身を置いて「おい、そこのお前」なんですの、急に?」

「お前今、特撮とアニメを低レベルと言ったな?」

「それが何か?」

「よーし、よく分かった。お前俺(私)の堪忍袋の尾が繋がってるうちに早く国に帰れ。さもないと、この教室が地獄と化すぞ。」

「フン!なんですよ。そんなアニメや特撮ごときでそんな熱くなって。」

「分かった。お前は自ら死を望んだわけだ。お望み通り地獄を楽しませてやる。」

そのセリフを言った瞬間頭に衝撃が走った。

「そこまでにしてやれ。オルコットが怯えて気絶寸前だ」

「よくも私に恥をかかせてくれましたわね。決闘ですわ！」

「え？ 断る」

「な、フン！ 恐れをなして受けられないと。」

「いや、めんどくさいし、無駄に体力使いたくないし。」

「いや、決闘・・・とまではいかんが模擬戦はしてもらおう。クラス代表の候補が複数の場合は模擬戦で決める予定だったな。」

「そうですか。じゃあ一番勝った人が代表を決めるということですか。」

「更識にオルコットは、それで構わんか？」

「はい、問題ありません。」

「私の勝利は揺るぎません。それに男はともかく、そちらの更識さんとやらは、代表候補生でもありませんし、実力はしれて・・・」

僕はガシヤコンブレイカーソードモードの切っ先を無意識的にオルコットに向けていた。

「それ以上、僕の彼女を悪く言うなら、もう容赦しませんよ。」

「はあ、織斑剣を下ろせ。そしてオルコット、お前は言い過ぎだ。」

クラスを静かにしてから模擬戦の日時を言って解散となりました。

「一夏、さっきはありがとう。」

「いえ、あなたは僕の大切な、か、彼女ですから。」

僕らは、僕らの寮の部屋に戻った。

はい、protoです。

えっとさらと最後に同居人を言いました。

そして、セッシーファンのみなさん。本当に申し訳ない。

あそこまで性悪にするつもり無かったんですけど、

一夏と簪を焚きつけるために致し方なく。

ご理解のほどよろしくお願いします。

第20話 対IS戦 GAME START!

ガトリングの数え方がわからなかったので、

知ってる方が居ましたら、教えてください（切実）

どうも、織斑一夏です。とうとうクラス代表を決める模擬戦の日がやって来ました。まあ、準備期間は、1週間と言ったところでしょうか。途中篠ノ之箒が部屋に突っ込んで来て「男女七歳にして同衾せず」など言い放ち織斑先生により部屋から強制退場したり、倉持が専用機作るの断ったり、3年の先輩が絡んで来たりと、色々ありました。が完成しましたよ！レベル3用ガシャットが（一本だけ）。対IS用にはもってこいのガシャットです。その名も『ジェットコンバット』ガシャット。モチーフはコンバットフライトゲームで、ガシャット本体カラーはオレンジ。これを使えば僕ら仮面ライダーも空を飛べます。ISが優位な状態は、これで解消されました。まあよほどピンチにならないければ使いませんがね。それではクラス代表決

定模擬戦開始と行きましょう。

現在地 IS学園第3アリーナ Aピット

「織斑、時間だ。ピットに出ろ。」

「はい。それでは簪。行ってきます。」

「一夏、いつてらっしゃい。」

僕は生身のままピットへと向かった。

「来ましたか。いいですよ、土下座で許して差し上げますわ。」

「ここに土下座にくる物好きな人間は、流石にいませんよ。僕らのが特殊なだけです。なんせゲームエリアを展開しなくてはなりませんからね。」

そう言って僕はガシャットを起動する。

『マイティアアクションX』

「一応代表候補生のお前と、イギリスに敬意を表して、前座は無しで行くぜ。大変

身！」

『ガツシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ マイティキック マイティマイティアクションX！』

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

「ま、まさか。全身装甲フルスキンですの!？」

「おっと、俺は仮面ライダーエグゼイド！さあ、ゲームスタートだ！」

チョコブロックを展開しつつ、オルコットに接近する。

「あら？その機体は飛べないのですわね。」

「だから、これはISとは違うんだよっと。」

『ガシヤコンブレイカー！ジャ・キーン』

チョコブロックで移動しながら、セシリアを翻弄し、見事頭上からの攻撃に成功した。

「くっ。でしたらブルー・ティアーズ！」

オルコットの機体から4つのビットが飛び出す。そして俺が展開したチョコブロックをビットの射線に入れて、俺が飛び移った瞬間にビットからレーザーが降

り注ぐ。いや、貴利矢さんじゃなくて。こうなったら突っ込むしかないっしょ。俺はオルコットのど正面に突っ込んだ。すると、スカートアーマーが駆動し砲門がこちらを向いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機

あつてよ！」

弾道型だと！俺にそれが直撃する。ライダーゲージが2割持ってかれた。残りのゲージは5割。迷ってる暇はなさそうだ。俺はオレンジ色のガシヤットを取り出し、ボタンを押して起動した。

『ジェットコンバット！ガツチョン！ガツシャット！』

「大・大・大変身」

俺は左を向き駆け出すようなポーズをとり

右腕三回回してドライバーのレバーを解放する。

『ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプマイティキックマイティマ
イティアクションX！アガツチャ！ジェット！ジェット！イン・ザ・スカイ
！ジェット！ジェット！ジェットコンバット』

「仮面ライダーエグゼイド コンバットアクションゲーマーレベル3！」

俺にコンバットゲーマーが装着され、顔に酸素マスクのような装飾、背中にはエンジンブラスターとガトリングコンバットを左右各1個ずつ装備してる。

「これで対等な条件だ。」

「今出したってことは、それを出して負けるとカッコつかないから、負けた時の言い訳にしようとしてんでしょうけど、無意味ですわよ。そんな見掛け倒しでは、私にはかないませんわ。」

「さて、ここから天才ゲーマーSの本領発揮だ！」

・・・後半へ続く

はい、protoです。

今回のサブタイトルに深い意味はございません。

えーと、皆さん聞きたい。オススメのアニソンを。

EGOISTさんや、LISAさんとか（他の方も聞きますがあえてこのお二方のみ）よく聞くんですが色んなアニソン聞きたいので、皆さんにオススメのアニソンを聴いて見たいと思います。是非コメント欄にて教えていただけたらと思います。

それではまた次回 See you NEXT STAGE

第21話 END of 一夏の戦い

コンバットアクションゲームレベル3になってからは、それは模擬戦ではなく蹂躪だった。俺は手始めにガトリングコンバットで今まで展開していたチョコブロックを全て破壊し、エナジーアイテムを出現させる。そこで出したエナジーアイテムは『回復』『混乱』『高速化』の3つだ。まずは回復を使ってライダーゲージを満タンにする。

「よっしゃ！ゲージ回復っと。」

「なるほど、そのメダルはそうやって使うのですわね。なら私も・・・あれ？反応しませんわね。」

オルコットがエナジーアイテムに触れながらそう言う。

「そりゃ、ライダーシステムにしか反応しないからな。そんなに使いたいんだっただら、使わせてやるよっと！」

俺は混乱のエナジーアイテムを掴んでオルコットに投げ飛ばした。

「敵に塩を送ったつもりなんでしょうけど残念でしたわね。これであなたの負けで

すわ！」

と、このセリフを的を外れな方向を向いて叫んでいるのだから滑稽だ。そしてアリーナのシールドにボカスカとライフフルでレーザーを連射し始めた。自分でやっている何だが、見兼ねた俺は早々にケリを付けることにした。

「さあ、これでフィニッシュだ！」

最後のエナジーアイテムを取り、ジェットコンバットガシャットを決め技スロットホルダーに装填。ホルダーにスイッチを押す！

『高速化！ガッシュンガッシュャット！キメワザ！』

もう一度ホルダースイッチを押す。

『ジェット！クリティカルストライク！』

俺はオルコットの頭上でガトリングを加減しながら撃った。だがしかし、

『会心の一発！』

ここで運が良いのか悪いのか、会心の一発となってしまった。

《シールドエネルギーエンプティ 勝者織斑一夏！》

そのアナウンスがかかるなか、オルコットのISが解除され落下する。高速化の

切れた俺では間に合わず、黒いガッシャットを取り出した。

『ジェットコンバット!』

プロトジェットコンバットガッシャット。起動した俺には多大な負荷がかかる。

「ううっ・プロトコンバットゲーマー。オルコットの救助を。」

プロトコンバットゲーマーのスピードは正規品のそれより高い。つまり救助が間に合うわけだ。俺はプロトコンバットゲーマーとオルコットを残してピットに戻った。

「ただいま、かんざ・・s」

そこで俺の意識は途絶えた。

・・・・・。ここは・・・どこだ？

「いっくうーん」

僕の事をいっくうと呼ぶのは束さんだけだ。

「束さん？ここは一体・・・。」

「IS学園の保健室。どうやら戦闘で疲弊した時にプロトガシヤットを使ったのが原因だね。」

「それで、簪は？」

「あー、金髪のISのダメージが酷くて明日になった。」

「そうですか。」

「それじゃあ、忍び込んだ束さんは撤退。」

そう言っつてすぐに居なくなつた。

「今度会社に戻つたらバグバイザーを持ってこよう・・・かな。」

バグバイザーを持って来る理由は、遠距離武器がないことに気がついたからだと思つて居たが、ただの不安だったかもしれないな。

どうも、protoです。

えーと、アニソンを教えてください

いう自分のリクエスト？に答えてくださった

方々ありがとうございます。

えーと、次は番外編を一回挟みたいと思います。

番外私の恋人は genius game creator

私は更識簪。織斑一夏の彼女。元日本代表候補生。今は幻夢コーポレーションのテストパイロット、という名目・建前で仮面ライダーとしてバグスターと戦っている。姉の更識刀奈、改め第18代目当主更識楯無はロシアの国家代表である為幻夢コーポレーションのテストパイロット（という肩書き）になれなかった。そんな私（仮面ライダースナイプは、世間的に言えばオタクだ。特撮・アニメは大好きだ、愛していると言っても良い（もちろん一夏の方が上だが）。勿論ゲームも大好きだ。特に一夏の作ったゲームは名作揃いだ後々不朽の名作と呼ばれるのは決定事項と言っても過言ではない。それに一夏のゲームをプレイした90%の人が織斑一夏のゲームは、控えめに言って神と答えた。その90%は東京都内でも、日本統計でも無い。世界だ、世界が彼のゲームを認めているのだ。そんな彼の彼女になれた経緯を全て話そう。

恋愛感情を抱いたのは、約3年前のグラフィアイト戦だった。あの戦いは大きな

傷跡を残す結果になったが、あの時一夏にグラフィイトからの一撃を守ってもらったことが決定打だった。それからほぼ毎日一緒に居た。互いに失った物が大きすぎた。私は父を、彼は大切な相棒を。2人一緒に居ることで自然とその穴を埋めようとして居たのかもしれない。そんな時だった。・・・私のヲタバレイベが発生した。IS学園入学の1週間前のことだった。織斑一夏のゲームはヲタクじゃ無くてもプレイする。ヲタクじゃ無くてもファンになる人がかなり多い。そして、私にはヲタクであることを隠してきた。でも、それが間違いだった。彼にヲタクがバレた、そう思い後ろめたいというか、何というか。まあ、バレてしまったのは仕方ないと思い、全力でカミングアウトした。しかし、彼はこう返した。

「知ってましたよ。」

「え？ どうして？ 頑張って隠してきたつもりだったのに。」

「だって僕もそうですからね。」

「え？ 一夏もヲタク？」

「ええ、我が国の娯楽は」

「世界」イイイ!!」

「あははは、それに好きな人の事は何となく目で追って……、あっ！」

「………い、一夏？今なんて？」

「バレてしまっっては仕方ありませんね。簪さん、僕はあなたが好きです。あなたに僕の心をクリアされてしまったようですね。」

「一夏、私も一夏が好き。あのグラフィイト戦で守られてから、だからわ、私と付き合ってください！」

あ、噛んだ。盛大に、大事な場面で噛んだ。

「……後悔しませんか？僕はあなたを守りきれないかもしれません。それでも構いませんか？」

「大丈夫、一夏が私を永遠に守ってくれるなら、私も一夏を永遠に守る！」

「わかりました。それでは、よろしくお願いします。」

こうして私と一夏はお付き合いを始めた。

どもども、今回は一夏と簪が付き合う経緯、

まあ、簪がヲタク隠しててバレて、一夏もそうで一夏が口滑らせて、両思いで恋人になって流れですね。それを簪視点でやる話でした。

あ、protoです。

今回はこんな感じでしたが次回は簪VSセシリアですね。それでは

SEE YOU NEXT STAGE

第22話 私の勝ちは Decision

Decision は決定という意味らしいです。

織斑一夏 VS セシリア・オルコット。この2人のクラス代表決定模擬戦が行われた次の日。更識簪 VS セシリア・オルコットと更識簪 VS 織斑一夏のカードが行われる。

どうも、前話に引き続き更識簪です。え？メタい事は言わなくていい？何を言ってるんですか？ワタシハカンペヨンドルダケデスヨ？

まあ、とにかく。そろそろオルコットさんとの模擬戦が始まります。準備しないと。

「簪、ガシャコンマグナムの調子はどうだい？」

「一夏。うん、問題ない。」

「ジェットコンバットは持った？」

「うん。まあ、使う事ないと思うけどね。」

「この模擬戦が終わったら・・いや、やめとこう。死亡フラグになる。」

「大丈夫、私の勝ちは決定事項だもの。」

「うん、じゃあいつてらっしゃい。」

そう言っで一夏は、私の頬にキスした。

「うん〓行ってくる。」

今、私の顔を真っ赤になっているだろうが、変身すれば顔は隠れる。そう考えア
リーナにでる。

「待たせたなあ！」

「ええ、というかその声、何処から出したんですの？」

どうやら、声が大塚○夫に聞こえたようだ。

『バンバンシューティング！』

ゲームエリアが広がり、ドラム缶が配置される。

「変身！」

『ガッシュャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャ
ネーム？アィムアカメンライダー！』

三頭身のレベル1スナイプに変身する。

「あなたは等身大になれないのですか？」

「テメエ如き、レベル1で充分だ。」

『バトルスタート！』

「さあ、踊りなさい！この私とブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「ミッション開始！」

『ガシヤコンマグナム！』

私はミッション開始と同時に自分の周りにセレクトパネルを表示させ、ガシヤコンマグナムを選択すると同時にハンドガンモードでの射撃を開始、面倒なので威嚇射撃で躲そうとしてる間に『ズ・キューン！』ガシヤコンマグナムのAボタンを押し、ライフルに変形させ、腰のミサイル型ビットを破壊する。

「くっ、代表候補生でも無いのに！」

「私は更識簪、又の名を仮面ライダースナイプ！元日本代表候補生にして、幻夢コーポレーションのテストパイロット！」

「・・・ブルー・ティアーズ！」

今更展開してももう遅い。私は飛行しているオルコットと同じ高さまでジャンプして、弾丸の姿となり体当たりする。まさか、体当たりだと思っていけないオルコットは回避できず直撃するも、こちらにも少々ダメージがあるようだ。

「フン、まあいい。冥土の土産に見せてやるよ。第3戦術！」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！バンバン！バンバン！バンバンシューティング！』

レベルアップした事で等身大となり右肩にマントが装備される。

「さっさと終わらせる。」

『ガツシュー〜ンガツシャット！キメワザ！バンバンクリティカルフィニッシュ！』

ライフルの銃口にエネルギーが充填され、強力な一撃を放つ！その一撃はオルコットに直撃しこの勝負『ブルー・ティアーズシールドエネルギーエンプティ勝者更識簪！』

「ミッションコンプリート！」

私はピットに戻った。

「一夏あ、疲れたあよお〜！」

戻った私は速攻で一夏に抱きついた。

「ええ、遊んでいたとはいえ見事な勝負でしたよ。」

「えへへ、バレてたか。流石一夏。」

「「ええい！一夏にくつつくな！」」

と、甘い雰囲気醸し出していた2人に割って入ろうとしてるのは織斑千冬とモップだ。失礼篠ノ之箒だ。っていうか、なんで彼女が居るの？

「ねえ、篠ノ之さん。なんで居るの？」

「私は一夏の幼馴染だ。」

「ふう〜ん。私は一夏の彼女ですけど？」

「な、なに？一夏？どういう事だ？」

「どういう事も何も、言った通り。簪は僕の彼女です。」

「ふ、ふざけるなあ！」

と木刀を何処から取り出して一夏に向かっていく篠ノ之さんを止めたのは……。

はい、多分今日で連続投稿しゅーりょーな気がしてる

protopoデス！出来たりますがね。

さてさてさーて、次回は誰が篠ノ之の木刀を一閃を止めるのかお楽しみに。

SEE YOU NEXT STAGE

第23話 New Enemyは仮面ライダー!?

新たな敵は仮面ライダーって事で

どうも、絶賛木刀で斬りかかられている織斑一夏です。ですが僕に木刀が届くことはありません。理由は木刀で斬りかかられるのを止めている人が居ます。更識楯無、簪のお姉さんです。

「一夏くんを傷付けられるのは色々困るのよ。」

と言って、扇子で木刀を止めています。扇子ってそんな硬いものでしたっけ？

「さて、篠ノ之さん。あなたは今、傷害未遂で訴えられてもおかしくない事をしました。」

と、木刀を止めたままカッコよく楯無さんは続けます。

「一夏あ！女に守られて悔しくないか！プライドは無いのか！」

「社長、ジェットコンバットのデータ分析が完了しました。やはり、マイティアク

シヨンXよりバンバンシューティングの方が適合率が高いです。」

「そうですね。使った感じは問題ないですが、適合率は簪の方が高い。予想通りです。明日那、お疲れ様です。通常業務……は終わっていきそうですね。」

「はい、本日の業務は終了しております。」

「なら、これから簪と模擬戦を行います。見学……していきますか？」

「はい！もちろんです。」

「そういうことですので、篠ノ之さんにはそこを開けて頂きたいのですが？」

「篠ノ之、観客席に戻れ。」

「はい。」

織斑先生の力添えを頂き、篠ノ之さんを止められました。明日那さんは学園長に話をつけてIDカードで出入り可能にして頂きました。

「そうだ、楯無さんもやりませんか。バトルロワイアルといきましょう。」

「うん、やるやる。」

「では、アリーナに向かいましょうか。」

アリーナには三人。圧倒的な強さでイギリス代表候補生を倒した2人と、学園最強の肩書きを持つ生徒会長。この三人のバトルロワイアルが行われようとした。た。

全員同時にゲーマドライバーを装着。そしてガシャットを取り出し、起動する！

『マイティアアクションX』

『タドルクエスト』

『バンバンシューティング！』

『「変身！」』

『『ガッシュアット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム？アィムアカメンライダー！』』

《全員、準備はよろしいですか？》

「はい！」「ええ！」

《バトルスタート！》

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

「これより、他ライダー切除手術を開始する！」

「ミッション開始！」

バトル開始直後だった。俺に通信が入ると同時に、バリアが破れ、アリーナ直上から黒い何かが降って来た。

《いっくん、いっくん！大変だよ！シャカリキスポーツガシャットが何者かに盗まれたよ!!》

「すみません。今それどころじゃないので。一旦切ります。」

「ねえ、あれって・・・黒いエグゼイド？」

現れた黒いエグゼイドのベルトを確認すると、プロトマイティアクションXが刺さっており、決め技スロットホルダーにはシャカリキスポーツガシャットが確認できる。さらに右手には・・・

「ガシャコンバグヴァイザー」

・・・新たな敵現る

なんだかんだで頭痛と戦いながら

投稿できたprotoです。

いやー、頭痛い。じゃなくて、ついに現れた

敵ライダーその名も黒いエグゼイド！

じゃなくて、後々ちゃんと名前が出てきますが、

しばらく黒いエグゼイドで。

それでは。

See You NEXT STAGE!

第24話 黒いエグゼイドは Very Strong!

俺だ、織斑一夏だ。マズイ、あの黒いエグゼイドはプロトガシヤットを使ってるから、体にかかる負担こそ大きいが俺たちより・・・強い。

黒いエグゼイドは周りを見渡す。そして、ガシヤコンバグヴァイザーからビームを撃ちだした。

「危ない！おい！危ないじゃないか！・・・反応なしか。お前、一体何者だ！」

「エグゼイド、残念ながら無駄のようね。これより他ライダー切除手術から黒いエグゼイド切除手術に変更し、手術を続行する！」

「ミッション変更。ミッションリスタート！」

全員が構えなおしたのと同時に、黒いエグゼイドはバグヴァイザーでチョコブロックや宝箱、ドラム缶を破壊し、一つのエナジーアイテムを見つけ、それに向かって駆け出す。

「マズイ！スナイプ、狙撃開始。ブレイブ、接近して動きを封じてくれ！俺は先にエナジーアイテムを取る！織斑先生、生徒たちの避難を！」

「了解！」「わかったわ！」「わかった。」

『ズ・キューン！』

スナイプがガシャコンマグナムをライフルモードに変更し、奴の頭を狙い撃つが、バグヴァイザーのビームで相殺される。その間にブレイブが接近し『カ・チーン！』ガシャコンソードのAボタンを押し炎モードから氷モードに変え、黒いエグゼイドを凍結させようとすると『ギュー・イーン！』バグヴァイザーのチェーンソーモードに弾き返され、それと同時にスナイプがライフルを撃つが、ブレイブが首根っこを掴まれ、盾にされる。しかし、ここまで時間が稼げればエナジーアイテムはこっちのもの。そう踏んで居たが甘くはなかった。『チュ・ドーン！』

とバグヴァイザーをビームガンモードに高速で切り替えエナジーアイテムに向かって飛んでいる俺に直撃させる。だが、後ろからブレイブが斬りかかる。これで決まったと思ったのも束の間、避けられ『ギュー・イーン！』バグヴァイザーのチェーンソーを直接当てられ黒いエグゼイドはバグヴァイザーのAボタンを押し、チェーンソーによる強攻撃をブレイブに浴びせる。するとブレイブのライダーゲージは3割ほどになってしまった。

「ゲームオーバーになるのはマズイ！」

『ガッチョ〜ンガッシュ〜ン。』

ブレイブは変身を解いて、ISを纏い退却した。すると、黒いエグゼイドはエナジーアイテム『透明化』でこの場から立ち去った。

「なんだったんだ一体。明日那、どうだった？」

「やはり、かつて盗まれたプロトマイティアクションXと先程篠ノ之博士から連絡が入って居た通り盗まれたシャカリキスポーツガシャットで間違いありませんでした。それと、篠ノ之博士に確認したところバグヴァイザーも盗まれて居たようです。」

「警備は何をやっていたんだ。それとも我が社に抜け道でもあるのか？」

「それはともかく、社長。まずは一旦会社へお戻りいただけませんか？」

「わかりました。それでは車と織斑先生に説明をお願いします。」

「畏まりました。」

とりあえず、会社へ戻る事になった。仮面ライダー全員で。

フルボトルを買ってエグゼイドが終わる事に寂しさを感じていたProtodです。

さて、なんだかんだで連続投稿してた事に気付きました。んー、戦闘描写は下手なんでしょう。きつとそうなんだろう！わかんないけど。

特にいう事も無いのでここで失礼します！

See You NEXT STAGE!

第25話 黒いライダーの Description を。

全身全霊の説明回です。

はい、織斑一夏です。えーと、現在幻夢コーポレーションに来ております。あれです、警備状況やらなにやら確認に来ております。盗まれた事を確認できたのはゲームドライブ、プロトマイティアクションXガシャット、シャカリキスポーツガシャット、ガシャコンバグヴァイザーの計4点。一体誰が盗んだのやら。はあ、先が思いやられる。第一、盗まれたもの全て最上階にある社長室で管理していた物だ。ここの警備は厳重にロックされている。セキュリティコード5のIDカードでなければ開かないし、セキュリティコード4のIDカードだと僕が直々に裏コードを打たなければ入らないし、そんな事するのは本当に信用している人だけだ。第一、セキュリティカードを盗めても、網膜認証と指紋認証、更には掌紋認証にパスワードを打たねば入れない。もちろん僕や束さん、ライダー達はIDカードスキャ

ンのみで入れる。さて、ここまで幻夢コーポレーション社長室のセキュリティについて説明して来ましたが疑問がある人がいたら質問どうぞ……って誰に言ってるんだ？とにかく、セキュリティは万全です！

でも、盗まれる。どうしてなんでしよう？まあ、警備態勢を強化しておきましょう。

「社長、準備完了しました。」

「わかりました、始めてください。」

「はい。先日現れた黒いエグゼイド、あの黒いエグゼイドの能力はプロトガシャットを使用してる分、性能は向こうの方が高いです。しかし、使用者の負担も大きく長時間戦闘は不可能と推測されます。ですが、黒いエグゼイドはシャカリキスポーツガシャットを保持しています。あれを使われると活動時間が少なくとも性能は圧倒的に向上します。」

「黒いエグゼイドは早めに対処しておきたいですね。なるべく情報を集めましょう。そして、プロトマイティアクションXとシャカリキスポーツを取り返します。しかし、レベル3になられたら太刀打ちできませんので、こちらも準備しておき

ます。レベル3用のガシャットを。」

「わかった、暗部の諜報員の力を使って、黒いエグゼイドの事を調べてみる。」

「私は、一夏。手伝える事ある？」

「簪、はい！もちろんです。まず簪にはシュミレーションで、ジェットコンバットのデータ取りをしてください。それを基にジェットコンバットガシャットを簪用に調整します。」

「いっくん、私は？」

「東さんはドラゴナイトハンターZ用のガシャットを製作してください。それでは各自活動を開始してください。」

そして、それぞれの活動が始まった。

はい、今日から学校protOです。

いやー、がつつり説明回で申し訳ない。

ただただ説明してましたね。次はもう少し面白味のある

話にする予定なので、ご勘弁くださいませ。
それでは。

第26話 オルコットの Treatment

うわああああん！エグゼイド終わっちゃったよお〜！

はい、織斑一夏です。えー、学園に戻って来て早々事件発生です。オルコットが倒れたそうです。・・・おそらくゲーム病でしょう。全く面倒な奴がかかりましたね。

オルフェン・・・ではなくオルコットは保健室に寝ていると聞き、とりあえず保健室前に来ました。

『『コンコン』織斑一夏と「更識楯無です。」入ってもよろしいでしょうか？』
そうすると出て来たのは保健室の先生ではなく織斑千冬だった。

「衛生省から話は聞いている、入れ。」

「失礼します。」

保健室に入るとベットに寝た状態のオルフェンが居た。様子

観察してみると時々体にノイズが走っている。念の為ゲームスコープを使って確かめてみた。

「間違いない、ゲーム病だ。」

「今回は何のゲーム？」

「楯無さんのゲーム。タドルクエスト。出てくるバグスターはおそらくアランブラだと思う。」

「なるほどね。それで、どうするの？」

「取り敢えずここで待機。簪が戻ってきたら3人で戻って来なかったら2人でやります。さて、オルコットさん、目が覚めていますね？でしたら、いつからこの症状なのかお答えいただけませんか？」

「…こないだの黒いやつが来た直後ですわ。」

「黒いエグゼイド、…まさかウイルスを散布していたのか!？」

「いえ、…一夏くん。とりあえず出て来てしまったバグスターを切除しましょ。」

「そうですね。簪は間に合わなかったみたいですので、我々だけで対処しましょ。」

『ステージセレクト!』

狭い保健室から広い噴水がある場所へと移動した。

『タドルクエスト!』

「これより、バグスター切除手術を開始する。」

『マイティアアクションX!』

「ゲームならこの俺に任せとけ!」

「変身!」

『『ガッシュャット! レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャ

ネーム? アイムアカメンライダー!』』

『患者の運命は俺が変える!!』
オルコット

「私に切れないものは無い。術式レベル^{ワン}1バグスターと患者を分離。」

出現したバグスターユニオンの形状は城の塔とファージ(ウイルス)を合わせたような見た目だ。

まずはブレイブが斬りかかるが、ガシャコンソードじゃない。RPG序盤の鉄の剣みたいだ。

「ブレイブ！ガシャコンソードはどうした？」

「東さんにお願いでして封印した！私がより剣技に磨きをかけるためには武器の性能に頼らない方が良いのよ。」

と言って、ブレイブは斬りに行こうとするも、バグスターユニオンが城壁を展開したり、矢で攻撃して来たりと、俺たちは中々効果的なダメージを与えられずにいた。

「ブレイブ！俺があいつを引き付ける。その間に渾身の一発をお見舞いしてやれ！」

俺はチョコブロックを壊し、エナジーアイテム『挑発』を手に入れバグスターユニオンを引き付けた。そして、ブレイブが腰を落とす（三頭身だから腰落としにくそうだなあ）、敵の注意が完全にブレイブから逸れた瞬間に背後から渾身の一撃を斬りつけ、オルコットとバグスターの分離に成功した。

はい、エグゼイドロスと筋肉痛（足がね）に襲われているprototです。まあ

エグゼイドは最後の最後までエグゼイドとして終わってくれました。それにVシネも全ライダーやりますからね、まだまだエグゼイド熱は冷めませよ！

さて、一切本作に関係ないこと書きましたが最後に、

10日間、待たせたな（CV大塚〇夫）

第27話 バグスター With ゲーム

大変長らくお待たせしました。

そして、待たせてしまったのにもかかわらず、短いです。

よう、一夏だ。俺たちはセシリア・オルコットに感染したバグスターウイルスを分離させた。というのが現状だ。そして、現れたバグスターを確認するとやはりタドルクエストのアランブラのバグスターだった。そして湧いて出て来た雑魚バグスター達。

「術式レベル2、分離したバグスターを切除。」

そう言ってブレイブがゲームドライバーのレバーに手を掛けた時だった。

『マイティアクションX!』

俺たちとは別の位置から、ゲームエリアが広がった。俺たちは周りを見渡し、ヤ

ツの存在を確認する。すると、アランブラバグスターからさほど離れていない位置にいた。黒いエグゼイドだ。レベル1の黒いエグゼイドはレバーに手をかけてレベルアップする。

『ガツチャア〜ン！ レベルアップ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マ〜イティ〜アクション！ X！』

レベルアップした黒いエグゼイドは余裕だと言わんばかりに、俺たちに背を向けていた。

「またお前か！ わたしの手術の邪魔をするな！」

黒いエグゼイドへ何を感じたのかレベルアップする事も忘れ（貧相な鉄の剣を装備しているのも忘れ）て、黒いエグゼイドに突っ込んで行った。

「お、おい！ 落ち着けブレイブ！」

ブレイブを落ち着けさせようとしたが、何故か激昂したままだ。俺は仕方なく、先にアランブラを倒そうとしたが・・・

『チュ・ドーン！』

黒いエグゼイドのバグヴァイザーのビーム攻撃で妨害される。そして、『ギユ・

「イーン!」とビームガンモードからチェインソーモードに切り替わる音声が聞こえてからわずか数秒の事だ。ブレイブは俺の方に飛ばされ、剣は折れていた。おそらくバグヴァイザーのチェインソーでブレイブの剣を折り、その流れで本体に攻撃したのだろう。

「しまった!アランブラに逃げられた!」

アランブラバグスターはすでに逃走した後だった。

「ポッp…明日那、簪の様子は?」

と、側に隠れていたポッピーピポポに声をかける。よく見たら仮野明日那の状態でたつたから言い直したけど。

「簪さんはまだ、多分満足してないんだと思います。」

「でも、データは取れてる。そうだな?」

『ガッチョーンガッシューン』

「はい、対IS用ガシヤットを作るには十分なデータは取れています。」

「わかりました。簪には休むように言ってきます。それと、セシリア・オルコットにゲーム病を発症した際の状況確認等お願いします。」

僕はすぐにこの場を離れ、幻夢コーポレーションへとバイクで向かった。

はい、protoです、

いやー、エグゼイドロスコワイワー。

凄いですね、全然アイデア纏まりませんでしたよ。

ははは、ビルドもつまらなくなりますが前作が神作だと

ダメだね。霞んで見える。

今日はカイザの日。なので投稿時間も09:13です。

ほんと中途半端ですね。

とりあえず次回もお楽しみに。

See You NEXT STAGE!

第28話 オルコットへのConsultationと手術のRestart

サブタイトルが長くてすみません。

Consultationの意味は診察です。

まあ、全然診察してないけど。

はぁーい♪ポッピーピポパポだよ♪……え？真面目モードで？わかったよ。「コスチュームチェンジ」飯野明日那です。さて、任された任務はバグスターウイルス感染症「ゲーム病」患者への問診と言ったところでしょうか。では、オルコットさんの身の安全を確保し、問診を終わらせますかね。

IS学園の保健室に場所を移しました。ここならセキュリティ面は大丈夫でしょう。オルコット^{患者}の意識が戻るのを待ちます。と、言いたいところでしたが、わりと

すぐに目が覚めたようです。

「セシリア・オルコットさんですね？」

「はい、わたくしがセシリア・オルコットで間違いないですわ。えっと、あなたは？」

「申し遅れました。私は仮野明日那。衛生省ゲーム病対策課幻夢コーポレーション支部所属。現在は織斑社長の秘書として働かせていただいています。」

「織斑社長？織斑先生の父親ですか？」

「いえ、織斑社長とは織斑一夏社長の事です。」

「え？まさか、あの幻夢コーポレーション社長がわたくしと同年、でしたの？」

「ええ、では本題に入らせていただきます。ここ最近、あなたにあの症状が現れるようになったのはいつごろからでしたか？」

「えっと、確か………織斑さんとのクラス代表決定戦直後あたりからですわ。」

「割と最近ですね。それでは、その辺りから何か変わったことはありませんでしたか？」

「代表決定戦で男に負け、本国から警告が来ましたわ。それで………。」

「それで？話されたくなければ大丈夫ですの。」

「いえ。それでわたくしが守って来たオルコット家の財産が危うい状態に陥りかけてまして、それで凄くストレスが溜まり、あの状態に。：あの！わたくしは一体どのような病気なのでしょうか？」

そう聞かれ、私は説明すべきか悩んだ。その結果がコレだ。

『もしもし、一夏です。明日那、どうかしましたか？』

そう、私は社長に頼ることにした。

「お疲れ様です。ゲーム病患者が、自分の病気がなんなのか知りたがっているのですが。いかが致しましょう。」

『本人に最終確認して、それから教えてあげてください。』

「わかりました。お手数おかけしてすみません。失礼します。」

と、言われたので最終確認をとり教えることにした。

「セシリア・オルコットさん。あなたの病気は、バグスターウイルス感染症と呼ばれるものです。」

「バグスターウイルス？ゲーム病？」

「簡潔に説明すると、進化したコンピュータウイルスに感染する病気です。要は、ゲーム病です。ですがご安心ください。オペをすればすぐに良くなります。今、手術の最中ですので。」

「え？今？」

そう、今まさに社長達は戦っていた。

はい、こんにちは。一夏です。

えーと、現在幻夢コーポレーションのエレベーターで社長室シミュレーションルームへと向かっております。意外とうちの会社のエレベーターって使う人少ないんですよ。健康志向なんでしょうか？まあ、お陰ですぐに着きました。急いで簪が居るシミュレーションルームに向かいます。シミュレーションルームのドアが開くとそこには簪が起き上がっていました。ちょうど区切りがついたみたいです。「一夏、ダメ。全然上手くないかない。」

「簪。な、なあ…。」

と言いかけた瞬間に緊急通報、楯無さんから連絡だ。アランブラが見つかったら

しい。

「緊急通報だ、行ってくる！ 簪、ゲームは…：やっぱり楽しまないと。」

「！……………そう、だね。うん！ 楽しんでやってみる！」

「うん、それじゃあいつてきます！」

「いつてらっしゃい。」

僕は再び走った。楯無さんからの連絡で場所はわかってる。と言うよりかはステージセレクトで移動済みらしいので、僕もドライバーを装着し、決め技スロットホルダーのスイッチを押す。

『ステージセレクト！』

と、場所が変わりアランブラと楯無さんが対峙していた。

「我輩は、オルコット家の財産を手に入れ、完全な存在となるのだ！」

「そうはさせない！ あなたを切除する！」

「僕も、お前を倒す！」

『マイティアアクションX！』

『タドルクエスト！』

「大」

「術式レベル2」

「変身！」

『ガッシャット！ガッチャアーン！レベルアップ！』

『マイティマイティアクションX！』

『タドルクエストォー！』

「これよりアランブラ切除手術を開始する！」

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

ここに再びアランブラの切除手術が始まった。

はい、どうもprotoです。

相変わらずの不定期更新ですみません。

えーと、皆さん台風は大丈夫でしたか？

台風直撃時は、うp主引きこもりましたよ。

まあ、とりあえず次回にはオルコット完治させたいです。

それではまたお会いしましょう。

See you Next game!

あ、今回から最後の、See you Next game! はエグゼイドに合わせます。

第29話 Complete recovery したオルコット

Complete recoveryは完治を意味するそうです。

「やあ、俺は仮面ライダーエグゼイド！天才ゲーマーSだ！ふん、つまり織斑一夏だ！さて、目の前の敵はアランブラとその取り巻きのザコバグスター。とっととノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

「ふふふ、我が魔法に敵うと思ったか！『シビレール！』」

アランブラが俺たちに向けて麻痺系の魔法を唱えてきた。悪の大魔法使いの筈なのに、もうちょい威力高目の魔法使おうぜ？まあ、軽く避ける。

「ぐっ、ならば行け！我が魔術軍団よ！」

と、今まで動かさなかったザコバグスターを動かし始めた。

「ふっ、私に切れない物はない！」

と、ザコバグスター相手に無双乱舞を決めようとしていた。だああがしかああし

！

「あ、剣折れてるんだった。」

「ブレイブウー！そこおー！剣刺さってるからあー！」

俺が指差す方には、地面に突き刺さっている錆びた剣。あれは俺が作ったイベントフラグだ。ブレイブが俺の指差す方を確認して走り出し、錆びた剣を引き抜く。すると、封印が解けたかのように真の姿『ガシャコンソード！』に戻る。そのままソードのBボタンを3回押し、炎の強攻撃でブレイブに群がろうとしていたザコバグスター共を一掃する。

「お、いいね！じゃ、俺も本気出しますか！」

『ガシャコンブレイカー！』

俺もガシャコンブレイカーを取り出し、ハンマーモードで次々とザコバグスター相手に無双乱舞を決める。次の敵に移ろうとしたら、もうアランブラしか残ってなかった。しかも、ブレイブが炎攻撃を繰り返しかかなり消耗して居るようだ。

「くっ、回復だ。『イエール！』」

「ならば凍結手術に切り替えるだけだ。」

ガシャコンソードのAボタンを押す。すると、

『コ・チーン!』と炎モードから氷モードへと切り替わる。ブレイブはソードを逆手に持ち替え、更にそこからBボタンを3回押し、ソードを地面に突き刺す。すると、アランブラが氷漬けになった。

「よし!このままゲームクリアだ!」

俺もガシャコンブレイカーにマイティアアクションXガシャットを装填する。

「手術を完了させるのは、私よ!」

ブレイブもタドルクエストガシャットをガシャコンソードに装填する。

『『キメワザ!』』

『マイティア!クリティカルフィニッシュ!』

俺は氷漬けになったままのアランブラに向けてハンマーの強力な一撃を食らわせた、その直後。

『タドル!クリティカルフィニッシュ!』

ブレイブがアランブラに強力な斬撃を飛ばしてきた。しかも、俺がアランブラの

真後ろに居るのにだ。俺は全力で90度まで腰を曲げた礼をして、斬撃を回避する事に成功した。そして、

『GAME CLEAR!』

と、ファンファーレが鳴り、10個のゲームパッケージが現れ、タドルクエストのパッケージ絵に『GAME CLEAR!』の文字が入った。

その頃明日那は・・・

オルコットさんのノイズが消えた。つと言うことは……………。私はゲームスコープを取り出し、ゲーム病の状態を確認する。すると、画面には何も出てこなかった。

「オルコットさん。ゲーム病、無事に完治しました。」

「本当ですか？ありがとうございます！」

「お礼でしたら私ではなく彼らに……………仮面ライダーに言ってください。」

「仮面ライダー……………？」

「ええ、人類をバグスターウイルスの脅威から守る戦士。仮面ライダーです。」

さらにその頃IS学園では。

「ここがIS学園ね。って、広いわね。総合受付ってどこよ！」
ツインテールの少女が学園内を彷徨っていた。

はい、prottoです。

最近なんですけど仮面ライダーファイズを見始めました。

まあ、ハーメルンで読んでる小説の影響ですけど。

で、本編全く関係ないんですが、FGOやってる皆さん

(読者の皆様の中に1人でも居ればいいな)。星4

サーヴァントは何をもらうか決めてますか？

うP主は槍トリアオルタさんに決めました。

うん、では次回『帰ってきたSecond generation!』

See You Next Game!

因みにSecond generationは2代目って意味です。

第30話帰ってきたSecond generation!

今回は戦闘はありません。

ただ帰ってくるだけです。

こんにちは、織斑一夏です。オルコットさんが完治した次の日、一年の間でとある噂が流れて居ました。が、僕には時間がありませんので関係ないですね。まあ、自分の蒔いた種ですからね。それに、幻夢コーポレーションの開発責任者としての仕事もありますからね。新作ゲームの企画・開発。それに簪の集めたジェットコンバットのデータ統計やガシャットの調性。更に、レベル3用のガシャット開発。結構忙しいんですよ？まあ、そんな訳で教室でパソコンとにらめっこしてます。出来る仕事から潰さないと！

そんな訳でしばらく教室で作業して居ると、

「その情報、古いよ！」

と、うちのクラスの扉を『パンツ!』と開ける1人の少女が居た。なんの情報
が古いのか知らないが静かにして欲しいものですね。

「ちよ、一夏!なんか反応しなさいよ!」

「ん? 2代目!? どうしてここに? 中国に帰ったはずでは?」

と、僕は横目で扉を開けるのしか見て居なかつた為誰が開けたのかを確認してま
せんでした。が、まさか2代目が帰ってきて居るとは。考えても居ませんでした
よ。横目で簪の方を確認すると、少々ジト目でこちらを見えますね。はあ、ジト目
も可愛い!!!

「実は、明日那さんから連絡もらつてね。奴等の行動が活発化してきたからつて。
それで、代表候補生としてのコネでIS学園に入学つて形で日本に戻つてきたのよ。」
「なるほど、そういう事ですか。……………わかりました。」

では2代目……ふうりんいん 風鈴音さん。とりあえず教室に戻つた方がよろしいかと。」

「え? ……………フツ、なんてね」

風が上から叩きつけられるはずの出席簿を片手で止めて居た。もちろん、叩きつ
けているのは織斑先生だ。

「早く教室に戻れ。SHRが始まる。」

なんでわざわざ英語で読んだんだろ？普通に朝の会とか朝礼とか、シヨートホームルームとかでいいと思うんですけど？なんでエスエイチアールって言ったんだろ？本当に意味がわからない。

「普通に朝の会とか、朝礼とかでいいんじゃないですかね？」

と、僕が思ってたことをそのまま織斑先生に言った風鈴音でした。

そして、お昼の時間。

今日の昼に食堂にと風が言ったので滅多にこないですが食堂に来てます。普段はお昼は簪の手料理なもので、困みに今日は寝坊しました。寝顔に見惚れてたら起すの忘れちゃって。そんな訳で簪と一緒に食堂に行くと入り口でお盆を持ちながら仁王立ちして居る風が待ち構えて居ました。

「待ってたわよ！一夏！」

「全く、2代目。少々落ち着いてください。後、ラーメン伸びますよ。はあ、来てから頼めば良かったじゃないですか。」

「そ、そんなのあたしの勝手でしょ。それより、早く買って来なさい。席取っとく

から。」

「わかった。じゃあ簪行こっか？」

「うん、何があるんだろう？」

と、簪の分と自分の食券を買い、初めて学食を食べる事になるのでした。

はい、今回の内容薄っぺらくね？

って感じの話になってしまっただけじゃない。

F G Oで槍トリアオルタさんを貰ったp r o t oです。

さて、これ書いてて思うのがいつまで一巻の話やるのかな？って考えが浮かんで来ましたね。それはさておき、今回は回想回になります。

お楽しみに。

See You Next Game!

第31話 凰に関する一夏の Looking back

Looking back は振り返りという意味だと思って使ってます。

どうも、一夏です。えーと、今自室に楯無さんと凰を呼びました。それでは、話をしましょうか。

「結局、放課後にしたのね。」

「ええ、聞かれたらマズイこともあるので。」

と、pcのキーボードを叩きながら答えます。使える時間は全て仕事。それは話をしている時でも一緒です。

「それでは、渡さないといけない物がありますが、ポッピーが来るのを待ちましようか。」

凰に渡す物は幻夢コーポレーションで嚴重に管理されてる。と、言っても電子ロックと物理ロックを5個ほどつけて居るだけだが。

「しかし、かつてゲーム病患者だったあなたが、仮面ライダーになりたいと言って来た日には。少々びっくりしましたね。しかも、あの事件の後に。」

あれは二年前、中二の頃に転向して来た風は言葉の壁のせいカイジメにあっていて。とある日、偶々通りかかった僕と貴利矢さんは、このような行動に出た。

「へえ、あんた面白そうな事してんな。」

と、いきなり現れた僕らに風をイジメていた奴らは驚き、主犯格と思われる男子が叫んだ。

「だ、誰だ!?俺たちに何の用だ!?!」

「ん?いやあ、自分ら暇しててさ。この辺ぶらぶらしてたらあんたら見かけたから声かけてみただけ。で、自分もやっていい?」

貴利矢さんのこのセリフで風はかなり絶望した表情になった。

「お、おう!いっぱいやってくれ!」

と、調子に乗ってる主犯格だが、貴利矢さんの顔を見るとニヤツとして居る。

「じゃ、遠慮なくっ!」

鳳の目の前に行っただと思っただら、主犯格の鳩尾目掛けて飛び蹴りをすると、油断していたのかクリティカルで鳩尾に入ったようだ。

「な、何すんだよ！一緒にやるんじゃないのかよ！」

「ん？あんたら、なんか勘違いしてないか？」

「は？お前何言ってる……。」

「自分は、少なくとも無抵抗の女子相手に暴力を振るう気は無いし、そこまで落ちぶれちゃいねえ。それに、こんな多数で1人をヤルなんて、人間のクズがやる事だ。」

貴利矢さんはこのセリフを言ってる最中にグラスを外し、アロハシャツの襟と襟の間にかける。貴利矢さんは怒って居るのだ。目が物語っている。

「ちっ！覚えてやがれ！」

と、下っ端どもを連れて主犯格は逃げた。と、同時に貴利矢さんはすぐに鳳に話しかけた。

「嬢ちゃん、大丈夫か？」

「……………」（コソ）」

「そうか、そりゃよかった。また何かされたら自分らに言いな、何とかしてやる。」

「…………… (ツギ)」

「あ、自分九条貴利矢。こっちは名人・・・織斑一夏だ。」

「どうも、幻夢コーポレーション代表取締役代理兼開発責任者の織斑一夏です。」
と、僕が名乗ると凄く驚いた様子だったので、今でも覚えている。

「ヒト・・・ア、ア、ア、ア。」

「気にすんな、自分らは正しいと思う事をしただけさ。なあ？名人？」

「まあ、僕はほとんど何もしてなかったけどね。」

こうして、僕と風は邂逅した。そして、この日知る事になる。仮面ライダーの存在を。

風をイジメの犯人達から助けた30分後。ゲームスコップから緊急通報が鳴る。

『爆走バイク！ガッシャット！ガッチャーン！レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク〜！』

僕はレーザーバイクに乗り、現場に急行する。さて、皆々様。疑問に思いませんか？何故免許を取れるはずのない僕がバイクに乗っても警察に捕まらないのか？

その答えは・・・知りたい方は是非感想欄で質問を！・・・って、何を言ってるんだ？疲れているのだろうか？まあ、いい。こんな変な考えをしているとすぐに現場に着いた。そこに居たのは凰鈴音だった。体にノイズが走り、すぐさまバグスターユニオンが姿を現わす。レーザーはすぐにドライバーのレバーを閉じ、レベル1に戻る。

『マイティアクションX！』

「ゲームならこの俺に任せとけ！変身！」

『ガッシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アームアカメンライダー！』

バグスターユニオンの形態からいっておそらくまたソルティだろう。2人ですぐさまボコリ、貴利矢は変身解除して凰を受け止め、安全地帯に運ぶ。俺は、

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！マイティマイティアクションX！ガシャコンブレイカー！ジャ・キーン！』

レベルアップ後、ガシャコンブレイカーをソードモードで展開して、ソルティのナックル攻撃を全て避け、同時発生したザコバグスターもついでに斬っていく。コ

ンボで言ったらフルコンだな。ソルティ相手は正直慣れたので、早々にケリをつける事にした。

『ガツシューンガツシャット！キメワザ！マイティクリティカルフィニッシュ！』

ソルティのど正面でガシャコンブレイカーをXを描くように振る。これでゲームクリア！

『GAME CLEAR！』

と、ファンファーレと共に10個のゲームパッケージ絵が現れマイティアアクションXにGAME CLEARの文字が現れた。そして、風は俺たちの事を見て居た。こうした経緯で風は仮面ライダーを、俺たちの事を知ったのだった。

そして、見るからに風は貴利矢さんに惚ノセられてれいるようだった。

最後に風が貴利矢さんに会ったのは、貴利矢さんが・・・GAME OVERになる2日ほど前だったろうか、こう言って貴利矢さんに告白していたのを覚えている。

「料理が上達したらさ、毎日私が作ったロコモコ・・・食べてくれる？」

それが告白だと気が付き、貴利矢さんの返答は

「今自分は危険な事に首を突っ込んでる。それが終わるまで、自分の事待っててくれねえか？」

「・・・うん！待ってる。いっぱい料理作って、腕を上げて待ってるから！」

だか、この後すぐにグラフィイト戦があり、もう2度と会えない人となってしまう。僕らを庇い死んだという経緯を凰は知っているが、何故か凰は僕を恨んでないという。理由を聞くと、

「貴利矢がさ、〃自分で選んだ道だ。死んでも文句は言えない。だからもし自分が死んでも、名人達を恨まないでくれ。まあ死ぬ気なんて無いけどな〃」って言ったからさ。あんた達を恨んだりはしなわ。」

と、言ってくれた。

はい、protoです。

後書きで特に話す内容が見つかりません。

どうしましょ。と、とりあえず頑張ります。
それでは See You Next Game !

第32話 Bathする2代目レーザー

はい、織斑一夏です。現在IS学園の学生寮の自室にて、ポッピーが来るのを待っています。彼女には持って来てもらわないといけない物がありますからね。

数分後、部屋のドアを数回ノックする。

「社長、明日那です。例の物お持ちしました。」

ドアは開いているので、問題は無い。

「カギは開いています。」

「失礼します。」

と、言っただアを開けているのは、アタッシュケースを片手に持った明日那。

「ポッピー、とりあえず元の姿に。」

「は〜い♪コスチュームチェンジ〜♪」

凰はポッピーがバグスターである事を知らない。が、察してくれた様だ。

「へえ〜、善玉バグスターってとこね。あたしは凰鈴音。よろしくね。」

「私はポッピーピポパポ♪ドレミファビートのバグスターで社長の秘書やってるん

だ〜♪♪鈴ちゃん、これからよろしくね♪」

「自己紹介も済んだところで、ポッピー。アレを。」

そう言った僕の目の前に、ポッピーはアタッシュケースを置き、蓋を開ける。そこにはゲームドライバーが一台入っている。そして僕が持っている爆走バイクのガシヤットを置き、凰の目の前に置く。

「これは、貴利矢さんのドライバーとガシヤットです。もし、あなたが貴利矢さんの意思を継ぎたいと思うなら、適合手術を施しましょう。」

「もちろん！貴利矢の仇はあたしが討つ！」
「わかりました。では束さん、適合手術を。」

そう言って、束さんは適合手術を始めた。簡易型のラボで。束さんも慣れたものですね。20分かからなくなって来ました。本来徐々に入れて抗体を作る手術の筈なんですがね。まあ、大丈夫なんでしょう。

「さあ、これでああなたは正式に2代目仮面ライダーレーザーになりました。凰鈴音さん、これから命がけの戦いが始まります。覚悟はよろしいですか？」

「もちろん！貴利矢の意思を継いで、バグスターウイルスの正体を暴いてやるん

だから！」

そう意気込んだ時だった。ゲームスコープが緊急通報が鳴り、バグスターウィルス出現を知らせる。

感染者の顔には見覚えがあった。一組の副担任山田真耶先生。バグスターユニオンが姿を現わす。今回はトゲが付いたタイヤの様な形のバグスターユニオンだ。おそらく爆走バイクのバグスターだろう。

「『変身！』」

『『ガッシュャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アームアカメンライダー！』』

レベル1エグゼイド、ブレイブ、スナイプ、そしてレーザーが踏み揃う。

「とっとと、分離させる。切除手術開始！」

「もちろん！ミッション開始！」

「ノリノリでいっくよ〜！」

「ゲームならこの俺に任せとけ！」

ブレイブは初っ端からガッシュャコンソールドを氷モードにして、ユニオンの移動を制

限する。そこに弾丸態となったスナイプの連続体当たりがクリティカルヒットし『GREAT!』の文字が表示され、苦戦する事なく分離に成功する。分離した時に出て来たモータスバグスターの周りにはザコバグスターは出現せずにバイクが出てくる。『ステージセレクト!』でレース場へと場所を変える。

「ここは俺とレーザーでやるよ!」

「任せたわよ、エグゼイド。」

「頑張つて、一夏。」

「ほら、行くよ!」

『『ガッチャ〜ン! レベルアップ!』』

『爆走! 独走! 激走! 暴走! 爆走バイク〜!』

『マイティジャンプ! マイティキック! マイティマイティアクションX!』

『ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!』

「乗りなさい、名人!」

レーザーレベル2のエンジンを吹かす。

「オレ様のバイクテクに、勝てると思うなよ!」

発進までのカウントダウンが始まる。3、2、1と徐々に数字が減り、0になった瞬間に両者・・・両車発進した。このレースは一周で勝負が決まるのだが、少々相手側に有利な状態になってしまった。が、しかしだ。もちろん、すぐに追いつく為に最善の努力はする。

『ガシャコンブレイカー！』

ハンマーモードで周りのオブジェクトを破壊し、エナジーアイテムを探す。ここに来て入手したエナジーアイテムはジャンプ強化、そして混乱だ。もちろん混乱を自分に使う様なバカな真似はしない。混乱のエナジーアイテムを持ち、モータスバグスターに投げつける。見事にエナジーアイテムが効果を發揮して逆走を始める。「ウイニングランを決めるのは！」

「俺たちだ！」

ガシャコンブレイカーのAボタンを押し、

『ジャ・キーン！』

ソードモードにしてから、レーザーのドライバーに挿さっている爆走バイクガシャットをブレイカーのスロットに装填する。

『キメワザ！爆走！クリティカルフィニッシュ！』

見事にモータスバグスターに直撃する。

『会心の一発う！』

で、モータスバグスターを倒しゴールテープを切る。すると、ファンファーレが鳴り、出てきた10個のパッケージ絵の爆走バイクに『GAME CLEAR!』の文字が入る。

が、モータスが消えずに近くにレーザーレベル1が居た。

「よっしゃ！貴重なサンプルゲットォ〜。」

そう呟いた瞬間だった。ビームが発射されモータスは消滅した。ビームが発射された方を見ると、黒いエグゼイドが居た。

はい、レーシングゲームを小説でやるのを困難に感じた
protoです。

えっと、皆様のアイデア募集を頂戴したいです。

アギト以降のサブライダーガシャットの案を募集したいです。
詳しいことは活動報告で説明します。
それでは、

See You Next Game!

第33話 Level 3 の力

「おい！パラド！俺たちはいつまでこんな事をしている！」

「おちつけグラフィイト。プレイヤーも全員集まった。次のテストプレイを開始する。」

「いや、ダメだ！もう我慢できない。俺もゲムムと戦ってくる。」

「ライダー達はもうすぐお前のレベルに到達する。それまでは我慢しろ。．．．
さあ、一夏。」

「ようこそレベル3の世界に。」

織斑一夏だ。現在目の前に居るのは、黒いエグゼイドレベル3。さらにその横には俺が戦闘訓練の為に作ったコラボスバグスター。ここには一体しかないが、おそらく作った三体全て無くなってるだろう。そして、黒いエグゼイドの手には、『ドレミアファビート』ガシャット、そして『ギリギリチャンバラ』ガシャットが握

られていた。束さんの事だ。送ってすぐにガシヤットにデータを入れてくれたのだろう。だが、何故それを黒いエグゼイドが持っているのだ？

《いっくん！いっくん！》

と、唐突に通信が入る。束さんの様だ。

「束さん、なんですか？」

《さっき完成したばかりのガシヤットを、無人輸送機でいっくんの元に送ろうとしたんだけど、途中で何者かに襲われたみたいでさ。近くにあったりしない？》

俺のゲーマドライバーにはGPSが仕込んである。盗難対策もあるが、実際位置情報なんかも知れる。戦闘中に戦闘に没頭して場所がわからなくなる様なことが無きにしても非ずだからな。

「ええ、ありますよ。目の前に・・・ね。」

そう言って黒いエグゼイドの方を見ると、ガシヤコンバグヴァイザーから何かを撃ち出した。

「束さん？・・・ジャミングか。」

ジャミング攻撃をした黒いエグゼイドは、コラボスバグスターの頭に赤いガシヤッ

ト『ゲキトツロボッツ』を挿す。すると、全身が一瞬ドット絵になり、黒いシンプリな体の右腕と胸、左肩に赤い機械のパーツが纏わさる。

「コラボスバグスターのレベル3か。」

コラボスはこちらを敵と認識した様だ。こちらに向かってロケットパンチを飛ばしてくると、間髪入れずにこちらに体当たりをする。更にそこに黒いエグゼイドがガシャコンバグヴァイザーのチェンソーモードで斬りかってくる。俺は耐えきれず吹き飛ばされる。そして、今がチャンスと言わんばかりに……

『シャカリキスポーツ！ガツシャット！ガツチョンガツチャン！レベルアップ！マイティ〜アクションX！アガツチャ！シャカリキ！シャカリキ！シャットバット！シャカつとリキつとシャカリキスポーツ！』

レベル3へとレベルアップしてしまった。だが、レベル差がある敵をいかに攻略するかがゲームの醍醐味だ。

「やってやろうじゃねえか！」

『ガシャコンブレイカー！』

俺は黒いエグゼイドの攻撃を避けつつ、なんとかコラボスに攻撃しようとするが

当たらない。が、チョコブロックには確実に当てていた。敵とのレベル差をひっくり返すのにエナジーアイテムは必要不可欠だ。そして、遂に……………

「よっしゃ、エナジーアイテムゲット！」

『反射！』

しかも、タイミング良く黒いエグゼイドがスポーツゲーマーのタイヤを投げた。俺はエナジーアイテム『反射』の効果で黒いエグゼイドの攻撃は当たらない。代わりに反射の効果で黒いエグゼイド、ついでにコラボスにタイヤが跳ね返り、ダメージがいく。

「よし、これでフィニッシュだ。」

『ガッシャット！キメワザ！』

ガシャットをキメワザスロットホルダーに装填し、スイッチを一回押す。腰を落として重心を低くする。自分のタイミングでもう一回スイッチを押す！

『マイティ！クリティカルストライク！』

キックは見事コラボスの鳩尾（バグスターに鳩尾という概念があるのかどうかは別として）に直撃した。

『会心の一発う!!』

コラボスが爆散し、俺の手元にゲキトツロボッツが戻ってくる。

『GAME CLEAR!』

10個のパッケージ絵のゲキトツロボッツのパッケージ絵にGAME CLEARの文字が入り、ファンファーレが鳴り響く。

『ゲキトツロボッツ、回収!』

俺は手元に戻って来たゲキトツロボッツガシャットのボタンを押す。

『ゲキトツロボッツ!ガツチョン!ガツシャット!』

二つ目のスロットにゲキトツロボッツを挿す。「大・大・大変身!」

大きく右腕を三回回してから、ドライバーのレバーを解放する。

『ガツチャーン!レベルアップ!マイティジャンプ!マイティキック!マイティマイティアクションX!』

ゲーム画面から出て来たロボッツゲーマーが口を開き俺を頭から飲み込むように纏わさる。その様子はポップーがついつい、

「食べた!?!」

と、言ってしまう程のものらしい。

『アガチャ！ブツ飛ばせ！突撃！ゲキトツパンチ！ゲキトツロボツツ！』

両肩と胸に追加装甲が、左腕にはロボットの腕のような強化パーツが、顔にはヒーロー感溢れるパーツが追加された。

「ノーコンティニューでクリアして、お前の正体を暴いてやるぜ！」

すると、音声が変換されてるのか、ノイズがかかったような声で黒いエグゼイドは言った。

「いいだろう、一騎打ちだ。」

「ちよっと待った！」

と、いきなり声が上がった。

はい、寝落ちして投稿しそびれたproroです。

それに加え活動報告も作くるの忘れてました。

申し訳ありません。明日までには準備します。

次回、黒いエグゼイドの正体が明らかに。

そして、最後に声を上げた者は・・・

See You Next Game!

第34話 黒いエグゼイドの True character

True character で正体になるのかな？

織斑一夏だ。主が我が儘なお願いをしたみたいで申し訳ないが、とりあえず現状初見さんがいるのだが、誰だあの男？

「ふっ、俺が誰かわかってないみたいだな。仕方がない。培養！」

と、言いあの男はガシャコンバグヴァイザーを取り出し、左手で A ボタンを押す。すると、待機音？が鳴り男は見たことのないグリップを右手に持っていた。そのグリップの突起部分にバグヴァイザーをはめ込む。すると、

『インフエクション！レッツゲーム！デットゲーム！バットゲーム！ワッチャネーム？ザバグスター！』

そこに現れた緑の龍人の名を俺と楯無、そして簪は一斉に叫んだ。

「「「グラフィイト!!」」」

「あれが、グラフィアイト。貴利矢の仇！」

そう言って2代目はグラフィアイトに突っ込んでいく……Level1でだ。協力狩猟ゲームのバグスター相手に無謀だ。

「ふっ、Level1でこの俺に挑もうとは。だがその度胸に免じ、相手をしてやる。」

レーザーは無謀に突っ込み、グラフィアイトの拳が顔面に直撃し、変身が解除された。

「やはり、Level1ではその程度か。さあ、来い。ブレイブ！スナイプ！」

「私たちをご所望みたいよ？ 簪ちゃん。」

「望むところだ。ミッション開始！」

その頃戦闘エリア付近に一つの影。

「ハハハ、心が躍るな。」

スナイプとブレイブがグラフィアイトとの戦闘を開始しようとした時だった。双方の間に一筋の光が撃ち込まれる。黒いエグゼイドだ。奴は再びノイズの入った声でこう言い放った。

「グラフィイト、すぐに帰れ！」

「チッ、わかった。スナイプ、ブレイブ。レベルを上げてこい。」

そう言ってグラフィイトは消えた。

その頃戦闘エリア付近の影は

「はあ、なんだよ。白けることすんなって。」

「フッ、来いエグゼイド。今度こそ一騎打ちだ。」

再びノイズのかかった声で言う黒いエグゼイド。その言葉で戦闘が開始された。俺は左腕のアームで、殴り、殴り、また殴り。タイヤの攻撃を避け、また殴る。向こうも拳で攻撃してくるが全て受け止められる。Levelが同じになると俺の方が有利なようだ。

「これでフィニッシュだ。」

右手で抜いたガシヤットを左腕のアームに挟め、キメワザスロットホルダーに装填し、そのままポットアームでスイッチを押す。

『キメワザ！』

「お前の正体、これでわかる！」

もう一度スイッチを押す！

『ゲキトツ！クリティカルストライク！』

左腕のアームがロケットパンチが飛んでいく。そのまま黒いエグゼイドにあたり、黒いエグゼイドを壁に押し付ける。その間俺はエナジー回収していた。この二つが手に入った。

『高速化！』『伸縮化！』

そのまま高速化の速度で、黒いエグゼイドを押し付けているアームに伸縮化で伸びた腕でロボットアームに腕を突っ込む。

『PERFECT！』

と音声が流れ、砂埃が舞う。確実に捉えた筈の黒いエグゼイドはこの場から消えていた。

その頃黒いエグゼイドは

「はあはあ。」

『ガッチョ〜ンガッシュ〜ン』

プロトマイティアクションXをドライバーから抜く。

「お疲れ様。仮面ライダー、ゲンム。」

篠ノ之束。」

「しかしどうした？ゲンム、エグゼイドを恐れているのか？」

「恐ろしいのは、私自身の才能だよ。」

はいどうも、昨日のアルトリアピックアップで見事に青セイバーこと、アルトリアペンドラゴン（星5）を引き当てたProtoです。

さて、黒いエグゼイド、仮面ライダーゲンムの正体は

なんと！一夏たちの協力者にして大天災の篠ノ之束さんでした。

第35話 一夏達の i n t e r l u d e

i n t e r l u d e は幕間という意味だそうです。

どうも、織斑一夏です。先日レベル3のガシャットを黒いエグゼイドに奪われ、なんとかゲキトツロボツツガシャットを取り返したものの、残念ながら奴の正体を暴くことかできませんでした。あと一歩だったんですがね。それはそうと、まだこちら側にはLevel3のガシャットが二つしかない状態です。なるべく早く回収してしまわねば。

「さて、今月はクラス対抗戦がある。えっと・・・うちのクラスの代表が実は、まだ決まっていんだ。黒い奴が乱入したからな。」

「それなら、もうジャンケンで良いんじゃないですか?」

と、女子生徒が言うてしまう。

「それもそうだな。それでは、織斑と更識、それからオルコット。」

「わたくしは・・・辞退させていただきますわ。」

「「え？拒否権なんてないんだよ？」」

（おふたりとも、視線が怖いですわ。）

「はあく。とりあえずジャンケンしてくれ。」

「はあ、仕方ありません。オルコットさん、自分はパーを出します。簪も……………ね？」

「うん、わかった。」

「「それでは、最初はグー！ジャンケンポン！」」

一夏【チヨキ】簪【チヨキ】セシリア【グー】

「それでは、うちのクラスの代表はセシリア・オルコットとする。異論は無いなあっても認めないがな。では、授業を始める。」

実に横暴だと思う。が、それで良いんです。オルコットの顔を見ると、青ざめていましたけどね。

午前の授業が終わり、屋上でいつも通りライダーズでお昼を食べていました。静かに……………そう、乱入者が現れるまでは。

「ちょっと、織斑さん！それに更識さんも！」

「これはこれは、オルコットさんではありませんか。どうかしましたか？」

「あなた達がわたくしを嵌めたせいで、クラス代表になってしまったので文句を言いに！」

と、文句を言いに来たオルコットに簪は……

「だって、自薦するくらいクラス代表になりたかったんでしょ？」

「うっ。そ、それはその〜。」

「それに、私達は忙しくて……特に一夏は、新作発表しなきゃいけないから時間が無いの。」

「そう言うわけで。自薦するほどクラス代表をやりたかったであろう、オルコットさんに譲った訳です。」

「ですが！わたくしに勝ったのはそちらですよ？なら、貴方達がやるのが筋じゃなくて？」

「条件は勝った方が代表を決めるのですから、別に勝った方がなるとかではありませんよ。」

と、僕は諭すかのように言うのでした。

偶にはこの様な普通の日常がある。そう、偶にだ。この昼休みの後すぐに、僕らは戦場へと……ゲームエリアという手術室でオペをする事になる。コラボスからガシャットを切除する手術を。

はい、今回は短め。prototです。

現在平成一期サブライダーガシャットの

音声のアイデアを活動報告欄にて募集中です。

もちろん自分でも考えておりますが、いまいち

と言う感じですので、何卒よろしくお願いします。

第36話音ゲーにBurn楯無

burnは、燃えると、いう意味らしい

はい、織斑一夏です。

現在こちら側が所持しているガシャットを確認させて頂きます。まずプロトガシャットが『プロトタドルクエスト』『プロトバンバンシューティング』『プロト爆走バイク』『プロトゲキトツロボッツ』『プロトドレミファビート』『プロトジェットコンバット』『プロトギリギリチャンバラ』『プロトシヤカリキスポーツ』『プロトドラゴナイトハンターZ』『プロト系が計9本。正規品は『マイティアクションX』『タドルクエスト』『バンバンシューティング』『爆走バイク』『ゲキトツロボッツ』『ジェットコンバット』の計6本。合わせて15本だ。一方黒いエグゼイドが所持するガシャットは『プロトマイティアクションX』『シヤカリキスポーツ』に加え、『ドレミファビート』に『ギリギリチャンバラ』と、計4本だ。しかし、僕た

ちはプロトガシャットが使えない。負担が大き過ぎるのが原因だ。更には全員がレベル3の力を手にしなければグラフィイトには勝てないだろう。いや、更に上でなければ勝てないかもしれない。とにかく、一刻も早くガシャットを取り戻さねば！というか、誰だ？バグヴァイザーにあんな（バグスターに変身する）機能を付けたのは。

『いっくん、いっくん。コラボス出現だよ。場所はそっちに送ったから。』

「わかりました。簪、楯無さん、凰。コラボスが出現しました。急ぎましょう。」
僕達は急いでコラボスの元へ向かった。

現場にいたコラボスは一体。頭にはドレミファビートが刺さっていた。

「はやく、取り戻さない」と

「[[[変身！]]]」

『マイティアクションX』『タドルクエスト』

『バンバンシューティング』『爆走バイク』

『[[[ガツシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツ

チャネーム？アィムアカメンライダー！]]]]』

「Let's party time！」

すると、変身した俺たちに向かって、コラボスの背中のスピーカーから4列の音符が出てくる。すると、ポッピーピポパポが、

「リズムに合わせて、踊って！」

まあ、作者の俺は知ってたがな。

「ノーコンティニューで踊りきってやるぜ！」

「ミッション開始！」

「ノリノリでいくわ！」

俺たち3人は出てきた音符とリズムに合わせて、ステップを踏んだり、ターンをしたり、ダンスを踊っていた。が、ブレイブだけはうまくリズムが取れずにいた。終始音符とリズムを外しまくり、俺たち3人は『PERFECT！』判定だったが、ブレイブは『MISS！』判定でダメージを食らうはめになってしまった。

「くっ、何が何でも。あいつのガシャットは私が使いこなす！」

音ゲーが上手いかずに、ムキになった楯無であった。

変な時間に申し訳ない、protoです。

いやー、今日も0:00にあげる予定が頭痛くなって

投稿できず、尚且つテスト勉強で投稿できず、でも毎日投稿にはしたのでこの時間になりました。

次回は楯無さんが音ゲーをマスター？

そして、最初に意味のわからないガチャット確認をして申し訳ありませんでした。

第37話 苦手を Conquest するブレイブ

ここは大型ショッピングモール「レゾナンス」のゲームセンター。今ここはかつて無いほど人で溢れかえっている。その理由は二つ。かの有名な天才ゲームクリエイターの織斑一夏がその場にいれば、情報は瞬く間に拡散され人集りができる。ゲームファンにとっては至高の存在であるからだ。そして、もう一つの理由はこれだろう。きよ ny……美少女が音ゲーをやっている。その美しさのあまり、更に情報が拡散され、現状ゲームセンターには入ることができない。またゲームセンター前の道路を塞いでいるのでかなり迷惑行為だ。もうそろそろ警察が動きそうだ。それによく見ると周りの連中は織斑一夏に尊敬の眼差しを向けて目を輝かせているか、エ○親父のようにスケ○な眼差しで美少女を見ているかの二択だ。前者は完全に織斑一夏のゲームの虜になっている連中だ。見ていて悪い物ではない。しかし、後者は別だ。公共の場において、よくもまあ少女にそんな眼差しを向けられるものだな。それはそうと少しずつ上手くなって来てますね、本人自覚なさそうですが。あれ？これ難易度 VERY HARDか？と、一夏は思っていた。

皆さん、こんにちは。更識楯無です。私は大抵のことは出来るつもりでした。けど、リズムに乗るのは苦手だった。だからこれを機にその苦手を潰そうとした。けど、やはり上手くはいかなかった。だからこそ、練習あるのみなんだけどね。

「楯無さん、楯無さん。」

と、唐突に声を掛けられる。一夏君だとわかるまでに数秒要した。

「どうしたの一夏君。何かあった？」

「それ難易度VERY HARDですよ？」

「え？………本当だ。VERY HARDになってる。」

「一度難易度をNORMALに変更して見てください。」

「う、うん。わかった。」

難易度を変更すると、さっきまでやっていた事が嘘のように簡単に出来るようになった。

「これなら、ドレミファビートをクリアできる。コラボスと戦える。」

「ええ、行きましょう。コラボスを倒しに。」

そう言って、私達は再びコラボスとの戦闘に向かうのだった。

コラボスの現在地を確認し、すぐに向かうと、なんかリズムに乗ってた。そして再び、

『Let's party time!』

と言い、まだ変身してないのに攻撃してきた。

「術式レベル2」

と、今回は1人でやらせてくれとお願いしたので1人で変身よ。

『ガツシャット! ガツチャーン! レベルアップ! タドルクエストォ!』

「私は、音ゲーを完璧にマスターした!」

と、私は完璧に流れてくる音符通りのステップを踏み、『PERFECT!』を出した。

「ハハハ、苦手を即座に克服するとは、やるな、ブレイブ!」

そこに現れたのは……………

今回は楯無さんの苦手克服回でした。

はい、pr o t o です。名乗りが逆なのは気にしない気にしない。

さてさてさて、アニメ『ソードアート・オンライン』の

三期が決定！オーバーロードも二期と中々楽しみなラインナップが

増えゆく中、夏期アニメをほとんどみれずじまい。唯一頑張って

見続けたのはナイツ&マジックのみ。学校よ、僕のアニメライフを返してくれ

(切実

次回、まあ 0 : 00 にはあげられるようにしますが、とうとうブレイブもレベルアップ？

第38話 Level up したブレイブ

こんにちは、織斑一夏です。

ええと、うp主が毎日投稿を続けたいと、この話をあまり間隔を空けずに投稿してます。前話を読んでない方がいらっしやいましたら、1話戻っていただけただけから幸いです。なんで、こんなメタいこと言ってるんだろう。

僕らは全く手を出さず、見事にコラボスのリズムに乗れた楯無さんの前に立ちただかる次の壁は、再び僕らの前に現れたグラフィイト。

「培養！」

ガシヤコンバグヴァイザーを取り出し、Aボタンで待機状態にし、グリップにはめるグラフィイト。

『インフェクション！レッツゲーム！デッドゲーム！バッドゲーム！ワッチャネーム？ザバグスター！』

「五年前の借りを返す！」

「さあ、来い！」

「楯無さん！ガシヤットを回収して！」

聞く耳を持っていないのか、だけど、それでも！僕らは彼女に賭けることしか出来ない。何故なら………

コラボス戦前

「コラボスは私1人でやらせて欲しいの。だから、みんなのガシヤット。ここに置いて行って欲しい。」

「「え？」」

「この位、1人で乗り越えなくっちゃ。」
と言われたら、置いてくしかあるまい。

『ガシヤコンソード！』

ブレイブはガシヤコンソードを取り出し、グラフィイトに斬りかかる。楯無さんはISでは、槍を使っている。剣と感覚は違う筈なのに、彼女はまるで昔から扱っていた物の様に、今では自由自在に剣を振っている。が、やはりドラゴナイトハンターZの戦士だ。完璧に相手に対応している。流石僕だ。………なんか、申し訳

ありません。

「激怒竜牙！」

地面を叩くと、グラファイトの右手に赤黒いオーラが見え始める。

しかし、それに反応出来ないブレイブではない。ソードのAボタンを押し、

『コ・チーン！』

逆手に持ち替えて、範囲攻撃の要領で宝箱を開ける。すると、高速化のエナジーアイテムを取り出し、グラファイトの激怒竜牙の斬撃を避けつつ、斬りかかり技をキャンセルさせて、流れで下に来たグラファイトファンクを高速化で、グラファイトの足元を滑る様に避ける。そのまま、氷の道を作り、ガシャットをガシャコンソードに装填する。

『ガツシュ〜ンガツシャット！キメワザ！タドル！クリティカルフィニッシュ！』

コラボス目掛けて必殺技を繰り出す。コラボスは氷漬けになり、そのまま斬撃が見事にヒットし、ガシャットが上空を舞う。そして、上空でパッケージ絵が現れてファンファーレとともに『G A W E C L E A R！』となり、ブレイブの手元にガ

ブレイブは再びAボタンを押す。

『カ・チーン』

そして、ドレミファビートのガシヤットをガシヤコンソードに装填！

『ガツシューーンガツシャット！キメワザ！ドレミファ！クリティカルフィニッシュュ！』

グラフィイトもそれに合わせて突っ込んでくる。が、それもリズムに合わせて防御し、リズムに合わせて攻撃をする事で真価を発揮する！

お陰で当たり判定は『PERFECT！』だった。

「くっ、仮面ライダーブレイブ！貴様はこの手で必ず潰す！」

そう言って消えて行った。

「ゲムム、これで向こうにレベル3のガシヤットが3本だ。あと一つで、次の段階に進むなあ。」

「そうだねえ、パラド。でも、ドラゴナイトハンターZは、どうなるかな。」

「データが取れないんだっけ？」

「うん、並みの人間じゃあ耐えられない。かと言って私だとウイルスが効かないし。」

「まあ、その辺はアイツの選定次第って感じだな。」

本日よりテスト開始の proto です。

全くこれだからテストは嫌いなんだ。

とりあえず、残るレベル3用のは一本です。

そろそろ彼らも動き出す頃合いですかね。

番外編 簪とデート 《New Hero・ANewLegend》

テスト前なのにこんな事やって良いのかな？

はい、どうもこんにちは。織斑一夏です。

えー、本日は唐突ながら簪とデートにきております。現在地は文京区小日向5丁目。簪が喫茶店をご所望したので現在地は、当たり前ですが喫茶店ですね。この店を知った経緯は、喫茶店通の社員から聞きました。オリエンタルな味と香りが楽しめる洋食屋兼喫茶店……らしい。『ポレポレ』というお店だ。そしてこの店は、カレーが美味しいらしい。

「こんにちは。」

と、喫茶店のドアを開ける

「いらっしゃいます。お好きな席へどうぞ。」

少々早めにきたためか、少し空いているようだ。そして、店員さんは若い男の人だ。

「お客さん、この辺じゃ見ない顔ですけど、どちらから？」

「えーと、幻夢コーポレーションって知ってますか？」

「ええ、あの大手ゲーム会社の。あそこのゲームはすごく面白くて、俺旅人なのに、旅に出ること忘れてやり込んだ事があったんですよ。」

「それに、IS学園は？」

「もちろん。世界から独立した島に作られたIS操縦者の育成をする学校ですよ。まあ、個人的にはそんなに良い印象を受けないんですけどね。あ、それでご注文は？」

「えっと、このポレポレカレーで。簪もこれで良い？」

「うん、一夏と同じで……同じのが良い。」

「じゃあ、ポレポレカレー二つ。」

「かしこまりました。」

「お待たせしました。ポレポレカレーです。」

待つ事数分、目の前に置かれたカレーの匂いは僕らの胃を刺激し、とてつもない空腹感に襲われた。

「い、いただきます。」

まず一口、口の中に入ったカレーの旨味が、とろけ出すように味を伝える。僕らがこの料理に対する評価はたった一言、たった一言のシンプルな言葉だった。

「うまい！」

そこから僕らは枷が外れたかのように、カレーを口一杯に頬張った。皿からカレーが無くなる頃には既に満足感で溢れていた。

「「ごちそうさまでした。」

「一夏、美味しかったね。」

「うん。うちの会社の食堂で働いて欲しいくらいだよ。」

「ああ！ 思い出したあ！」

と、若い店員さんが声を上げる。

「もしかして君、天才ゲームクリエイターの織斑一夏さん？ まさか、高校生だっ

たなんて。」

「どうやら、僕が織斑一夏であると感じた様だ。でも、みんな何故か年齢知らないんだな。そんなことを考えつつ、サインを求められて色紙に書く。そして、帰りに際に事件は起きた。」

「ありがとうございます。」

「と、若い店員さんの声を背に受けて、店を出ようとした時。すぐ近くで悲鳴が聞こえた。駆けつけると、怪物が人を襲っていた。」

「何、あの化け物。バグスターじゃない。」

「とりあえず助けよう。」

『マイティアクションX』

『バンバンシューティング』

『『ガッシャット！ガッチャーン！レベルアップ！』』

『マイティマイティアクションX！』

『バンバン！シューティング！』

「ミッション開始！」

「ゲームスタートだ！」

と、怪物に向かってスナイプがマグナムを放つが、IS戦闘用に威力を抑えていた為、効果が薄い。ガシャット自体の出力を落として居る為なおさらだ。拳で殴っても結局は無意味だった。仮面ライダーとしての戦闘能力をIS戦闘用に落としたままで苦戦するとは。そんな時だった、あの若い店員さんが出てきて、腰の辺りに両手手をかざす。すると、それに反応してベルトが出現する。左斜め上に突き出した右手を、右側に広げながら、ベルトの真ん中ら辺にあった左手を左脇腹の方へ引いていく。

「変身！」

最後に右手と左手で、ベルトの横のボタンを押すと、クワガタのような戦士に変身した。

「おい、大丈夫か？」

クワガタのような戦士はこちらに来て、そう聞いて来た。

「あんたは、一体？」

「俺はクウガ、仮面ライダークウガ。2000の技を持つ男だ。」

「仮面ライダー!? だったら!」

俺は赤いボディに持ち手が黄色いガシヤットを取り出した。

「これのボタンを押してくれ!」

「? わかった。」

ボタンを押すと、何かが吸い込まれるような感じで、ガシヤットの端子が光る。

「スナイプ! 時間稼ぎ頼む!」

「了解。」

俺は即座にPCを取り出し、その場で高速作業に移行した。ガシヤットに吸い込まれたデータをもとに、ゲームを作る。ベースがあるのならすぐに作れるからな。そして完成した。平成一号の『冒険野郎! クウガ』ガシヤットだ!

「スナイプ、スイッチ行くぞ!」

『冒険野郎クウガ! ガツチョコ〜ンガツシュ〜ンガツシヤット! ガツチャ〜ン! レベルアップ! マイティジャンプ! マイティフォーム! 冒険野郎〜クウガ!』

俺はレジェンドゲーム『仮面ライダーエグゼイドクウガゲームレベル2』

になった。

「よっしゃ！ノーコンティニューで速攻クリアだぜ！」ステージセレクトで、安全な場所へと移動する。俺とクウガは息を合わせながら、例えるならエ○アのユニゾン攻撃のように、怪物に攻撃を浴びせていた。俺が殴った後は、クウガが殴り、クウガが殴った後は、俺が蹴りを食らわせたりと、初めて会ったとは思えないほどのコンビネーションを発揮した。そして、

「これでフィニッシュだ！」

『ガッシュンガッシュャット！キメワザ！』

キメワザスロットホルダーにクウガのガッシュャットを装填しボタンを押す。するとクウガも右足にエネルギーを貯める。そして、同時に走り出す。俺はホルダーのボタンをもう一度押す！

『冒険野郎！クリティカルストライク！』

「おりゃあおあああ！」

俺とクウガは空中で一回転し、俺は左をクウガは右足で怪物を蹴る。見事撃破に成功した。

もちろん、そのまま気付かれないように学園に帰った。正体は、なるべくバレないようにね。

はい、唐突にデートさせるプロトです。

前作に比べるとそんなに、いちちゃついで

ないはず。そんなにイチャイチャさせないようにしました。

今回はですけどね。さて、今回のようにレジェンドライダーの

街へデートしに行かせたりします。が、サブライダーガシャットは

音声がありませんので、現在活動報告欄にて音声アイデアを募集

しておりますので、是非皆様のお力をお借りできればと思います。

それと、基本的にレジェンドライダーが出るときはそのライダーのキャッチコピーを使いますので。

それではまた次回。

第39話 Level up するレーザー

ある意味じゃタイトル詐欺。

はい、レベル3用ガシャットは未回収は、残り一本となりました。織斑一夏です。残りのギリギリチャンバラはレーザー用なんですよね。あ、一般販売しているギリギリチャンバラはお客様に楽しみやすいように作っておりますのでご安心ください。

はい、皆さんこんにちわ。あたしは凰鈴音。鈴でいいわ。実は悩みがあるのよね。……あたしだけよ。レベル2でバイクになるって。まあ、貴利矢もそうだったから良いんだけどね。それでも、バイクじゃ戦えない。レベル1なら、確かに人型だけどそれだとレベルが足りない。だから、あたしもレベル3になればきつと、もっとみんなの力になれる。そう思っているのよ。だけど、肝心のコラボスの

出現情報も無く、レベル3には到達出来てない。

「はあ、あたしいつまでバイクなんだろう。」

そんなことをボヤいていると、緊急通報が鳴る。

「コラボスかな！急がなきゃ！」

あたしは急いで現場に向かった。その途中……、現場付近に一人。見覚えのある人物が居る。

「変身。」

その人物こそが、黒いエグゼイドの正体だと言うことを、あたしは知った。しかし、今は緊急通報だ。この事を頭の片隅に置いて、再び急いだ。

現場に着くとコラボスが刀を差して居る。見た目は和風テイストの様だ。

「嵐！さっさとガシャットを回収しよう！」

「OK。あのゲームは、確か……………」

「一撃が命取りになるチャンバラゲーム。あいつは高速で刀を振ってくるから。」

「なら、私が囷をやるわ。」

「あれ？ 簪は？」

「ん？ 体調不良って聞いたけど？ 一夏君は？」

「えっとその、色々やりすぎました。」

と、どこから出てきたのか更識会長が居た。

「……………それじゃあ、行くわよ！」

と、何故かあたしが号令をかけた。

「術式レベル2！」

「ノリノリで行くぜえ〜！ 二速！」

「(大) 変身！」

『『ガッシャット！ レッツゲーム！ メッチャゲーム！ ムッチャゲーム！ ワッチャ
ネーム？ アイム アカメンライダー！ ガッチャ〜ン！ レベルアップ！』』

『マイティマイティアクション X！』

『タドルクエストォ〜！』

『爆走バイクウ〜！』

『ガシャコンソード！』

「やあああああ！」

まずはブレイブが斬りかかる、が最初の一撃以外回避され続ける。その間にあたしにエグゼイドがまたがり、エンジンを吹かす。

「あいつの刀の振りより早く、射程に入るよ！」

「ああ、ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

と、コラボスと交戦して居たブレイブに黒いエグゼイドの妨害が入る。

「レーザー、行くぞ！」

と、あたしを走らせ一気に間合いを詰める。そして、すぐに刀を折り、実質的に勝ったことになる？ま、とりあえず勝負を決めますか。

『ガシヤコンブレイカー！ガッシュンガッシュャット！キメワザ！爆走！クリティカルフィニッシュ!!』

すでに刀の折れたコラボスに、バイクあたしを走らせて高速で切っていく。すると、コラボスは爆散し、エグゼイドの手元にギリギリチャンバラガシヤットが来る。ファンファーレがなり、展開されたパッケージ絵に『GAME CLEAR!』の文字が入る。そして、まだブレイブは黒いエグゼイドと戦っている。

「よっしゃー！エグゼイド、あたしのドライバーにそのガシャット入れて！」

「お、おう。」

『ギリギリチャンバラ！ガッチョ〜ンガッシャット！』

「3速！」

これで、あたしもレベル3の世界に入れた。

はい、prototです！

今回はギリギリチャンバラを、取り返す所で終わりました。

次回、チャンバラバイクゲーマーが活躍すると、思います。

あと、色々やりすぎた。って何？って思ってる皆様に朗報。

次回それも明らかになります、

第40話 闇に消えていく Truth

よう、織斑一夏だ。最後のレベル3用ガシャットであるギリギリチャンバラの回収に成功したぜ。で、まだ戦いが終わってないんだよな。黒いエグゼイド！今日こそその仮面の裏にある顔を拝ませてもらおうぜ！今回もノーコンティニューでクリアしてやるぜ！

「3速！」

レーザーのドライバーに、ギリギリチャンバラを二つ目のスロットに挿してレーバーを開く。

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク〜！アガツチャ！ギリ・ギリ・ギリ・ギリ・ギリ・チャンバラア〜！』

すると、バイクが直立し変形。チャンバラゲーマーが纏わさり人型になる。

「ふう〜、ようやく人型になれたわ。」

「おお！レーザーが侍？侍だよね？」

「さあ、黒いエグゼイド。あんたの正体、ここで見せてもらおうわ！ ISを開発した大天災……………」

“篠ノ之束”！

「「え？」」

「あたし見ちゃったのよ。あいつが変身する所。」

その場に衝撃が走る。俺たちの協力者にして、あの束が黒いエグゼイド？ いや、それはおかしい。だって……………」

「レーザー、それは無い。俺は前に、黒いエグゼイドの前で束と話している。」

そうだ。俺は前に黒いエグゼイドの目の前で、束と通信を行い、会話をしている。「あらかた、あらかじめ音声を仕込んでたんでしょ。さあ、化けの皮を剥がすよ！」

『ガシャコンスパロー！』

鎌と弓が合わさったような武器が現れる。

「でも、まだ信じられてないだろうから、そこで見てなさいよ。」

すると、レーザーはスパローのAボタンを押し、弓モードから鎌モードへと変形させた。

『ス・パーン!』

すると、黒いエグゼイドも、

『シャカリキスポーツ! ガッチョ〜ン ガツシャット! ガッチャ〜ン! レベルアップ! マイティジャンプ! マイティキック! マイティ〜アクシヨ〜ン X! アガッチャ! シャカリキ! シャカリキ! バットバット! シャカツとリツキツと! シャカリキスポーツ。』

黒いエグゼイドもレベル3になる。

「それじゃ、行くわよ!」

右の鎌を肩に乗せ、黒いエグゼイドに向けて走り出す。無論、黒いエグゼイドも直線で突進してきたレーザーに蹴りを喰らわせようとするも、レーザーは軽く避けていく。そして、自らの射程に黒いエグゼイドが入ると、すぐさま鎌を振り下ろす。しかし、相手も猛者だ。単調な攻撃は読まれる。

「ほら、こっちなさいよ。」

と、レーザーが挑発。戦闘場所が階段に変わる。手すり越しに鎌を振る。さらには、手すりを飛び越えて攻撃するなど、地形をうまく活かして戦っている。レ-

ザーは階段を登りきり、広めの広場にでると、Bボタンを押す。和風な効果音が鳴ると、高低差を利用して、上から黒いエグゼイドを切りつける。が、位置が逆転し、黒いエグゼイドがタイヤを投げつけてくる。すると、レーザーは鎌から弓に戻した。

『ズ・ドーン！』

迫り来るタイヤにエネルギーの矢を放ち、黒いエグゼイドにタイヤを送り返した。さらにBボタンを押し、チャージ攻撃として、エネルギーの矢を黒いエグゼイドに向けて放ちまくる。黒いエグゼイドが猛攻に耐えられず怯むと、ガシャットを抜き、スパローに挿す。

『ガツシューンガツシャット！キメワザ！ギリギリクリティカルフィニッシュ！』

エネルギーの矢が大量に空中に浮き、レーザーが回し蹴りをすると、一斉に黒いエグゼイドに命中する。そして、当たった黒いエグゼイドは

爆発によるダメージも受けた事だろう。爆発による煙が晴れる。そこには、

「楽しませて貰ったよ。また遊ぼうぜ。」

見知らぬ男が立っていた。

「運命ってのは、パズルみたいなものだ。一つピースを入れ替えてやれば、本来そこにあるはずの真実も、見えなくなる。永遠に闇の中だ。」

「ああ、これでレーザーはライダー達から浮くだろう。ありがとう、パラド。」

「礼には及ばないさ。これも、究極のゲーム完成のため。」

「で、一夏君。一体簪ちゃんと何をしたのかな？」

楯無さんの前で正座させられてる僕。そう、色々ヤツた発言のせいだ。

「えっと、……うちの新作ゲームのデバックを、バイトとしてやって貰ってました。僕と一緒に。」

「はあ。ま、そんな事だろうと思ってたわ。」

結局二人とも、ゲームを楽しんでました。

はい、色々なゲームのデバックをやっていた簪。

proto………デス！

さて、そろそろ学園生活させないと。

第41話 転校生は Gold & Silver

久々の学園生活ですね。

と、言っても今回は短いですが。

俺の力があれば、ライダーを全員叩き潰せるだけの力が。俺は力を欲した。全てを凌駕する力を。そして、手に入れた。大きな力を秘めた試作品を。俺は手に入れた。全てを凌駕する力を。

無事にクラス対抗戦が一組の勝利に終わり、学園に多少は平和が戻ったと思った矢先のことだった。

《いっくん、いっくん！まずいよ！プロトガシャットが盗まれた！しかも！よりによってプロトドラゴナイトハンターZ！これからデータ移植に入ろうと思っ
てたのにいっ！》

プロトドラゴナイトハンターZが盗まれた。

(しかし、本当に束さんが黒いエグゼイドだったのか？でも、確かに中身は、見知らぬ青年だった。風が嘘を付いてるとも言い切れない。)

《いっくん？聞いている？》

「ええ、聞いてますよ。犯人も大方検討がついてます。というか、あれだけ強固なセキュリティを突破できるのは奴しか考え付きませんし。犯人はグラフィイトで決まりでしょう。しかし、何故ガシャットを盗んだんですかね？」

《わたしには、わからないよお。》

「とにかく、被害が出る前に奴から、ガシャットを回収しないと。それより束さん。ドラゴナイトハンター乙ガシャット本体は出来てるんですよね？」

《え？もちろん。しっかり仕上げてるよ。》

「でしたら、最悪の事態を考えてこちらでガシャットを持っておきます。」

《わかったよ。今からそっちに行くね。》

「え？束さん。今は、不味いです。これからHRなので。」

《じゃあ、今日の放課後にするね。》

「それでは、お願いします。」

朝のHR。ん？そもそも教室描写が久しぶりだった？気にしない気にしない。この時間は僕にとって、憂鬱です。まずPCが開けない。僕にとっては全く仕事のできない時間。それに寝れない。睡眠不足気味の時には眠くなってしまうですが、出席簿アタックをくらいそうになるので、起きなくていいけません。が、今日はそれが良い方に向いてくれました。なんせ、耳栓を用意できましたから。

「今日は転校生を紹介します。しかも2名。ではシャルルさん、自己紹介を。」と、山田先生が振る。

「それでは。シャルル・デュノアです。フランスから、ここに同じ境遇の方が居ると聞いたので来ました。どうぞ、よろしく願います。」

と、恋愛ゲームで例えるなら、BL選択肢が増える所だが、残念ながらそうはいかない。幻夢コーポレーションの代表取締役代理として、色んな人達と接し、時にぶつかり合い、時に支え合って生きてきた。それ故に身につけたのが人間観察能力だ。その人の仕草や表情。また男女どちらかなのかなどの能力を身につけて居る僕に対して、あの程度の変装は意味がない。彼、シャルル・デュノアは、彼ではなく彼女となる。つまるところ女性である。が、証拠もなく言っても仕方ないので黙っ

ておきましょう。

「では次、ラウラさんお願いします。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

それ以上、何も言うことはないと言わんばかりに、彼女は口を閉ざしたままだ。

「あの、以上ですか？」

「以上だ。」

恐らくはドイツの軍人だろう。立ち姿が敬礼の時の立ち方と酷似して居る。まあ、普通の人は踵かかとつけてなんて立たないよね？って話です。自己紹介が終了したと思ったらボーデヴィツヒさんが近づいて来た。

「お前が教官の弟か？」

「教官とは、織斑千冬先生の事ですか？」

「ああ、そうだ。お前は教官の弟かと聞いて居るのだ。」

「だとしたら、確かに僕は織斑先生の弟となります。」

すると、ボーデヴィツヒさんは、僕に向かい平手打ちをしようとするが残念ながら当たらない。

「はあ、あの山田先生。織斑先生は一体どちらにいらっしやるのでしょうか？」

「それが、連絡がつかなくって。」

「そうですか。」

何か、嫌な予感を感じざるを得なかった。

はい、protoです。

この作品は学園モノなのに、学園での出来事が

薄くなってきたております。なるべく学園生活を殺さないように

心がけますので、これからもよろしくお願いします。

第42話 Support くれる彼女

Support は支えてと考えてください。

こんにちは、織斑一夏です。

朝からHRに顔を出していない姉を少々心配しております。それに関して嫌な予感もしていますし。すると、授業中にも関わらず緊急通報が鳴った。

《いっくん！ちーちゃんがバグスターウイルスに感染してる。幻夢コーポレーションに運んでるから、急いで！他のライダーも！》

「山田先生、少々姉がピンチな様ですので、更識簪も授業を抜けます。よろしいですか？」

「はい、緊急時の対応は、既に衛生省から聞いてます。急いで行ってください。」
「ありがとうございます。」

僕らは急いで支度をし、楯無さん達と合流した。

《外にロケット飛ばしてあるから、使って！》

「わかりました。それじゃ、行きます！」

簡単な操作で設定してある場所に行ける仕様のロケットに乗り込み、即座に発射する。

すると、3分も経たずに幻夢コーポレーションの屋上に着いていた。そして、すぐにシミュレーションルームに直行する。

「東さん！千冬姉の容態は？」

「不味いよいっくん。これ多分ドラゴナイトハンターZのウイルスだ。」

千冬姉をスキャンすると、炎のマークが出ている。これは間違いなくドラゴナイトハンターZだ。でも、どうして？そんな兆候は無かった。

「うう、一夏か？そこにいるか？」

「千冬姉、一体何があったの？」

「変な男に、背後から何かを突き付けられて、気付いたらここに居た。」

「グラフィイトだ。あいつ、まさか同族を増やそうと？でも、どうして？」

「多分、ちーちゃんからなら、強いバグスターが生まれるって考えたんだよ。」

「早く分離させないと！取り返しをつかない事になる。でも……………」

脳裏に蘇るのは、あの時。自分の恋人の父親の命を救えず、親友を…………大切な相棒を失ってしまったあの時の記憶。それを思い出すと、体の震えが止まらない。ゲーマーSで居る時には感じなかった。僕だから感じる恐怖。だけど、

「一夏、大丈夫だよ。今の私たちなら。」

と、言ってくれる人がいる。優しく抱きしめてくれる人が。僕より大きなものを失い、それでも戦おうと、なにより僕を支えてくれようとしてる彼女が。

「ごめんね、簪。…………いや、ありがとう。」

「いいんだよ。一夏は、色々と背負い過ぎるから。私も一緒に背負うよ。」

「大好きだよ。…………簪、君を心の底から愛して…います…」

「私も、一夏の事を、一夏の全てを愛してます…」

「はい、一夏くうくん。イチチャイチャするのもいいけど、早くしないと不味いんじゃない？」

「そうですね。取り乱してすみませんでした。それでは、現時刻を持って、バグスター切除手術を開始します。全ライダー変身準備。」

「うん!」「もちろん!」

「私に切れないものはない!」

全員の士気を上げ直した。すると、バグスターがいつもと違う。ウィルスの塊の様な状態だ。

「あ、いっくん!これ持ってって!」

「これは、ドラゴナイトハンターZ。見事な仕上がりです。いつもありがとうございます。ごぞいます。」

と、感謝を述べ礼をするとガシヤットをホルダーに挿し、各々自分のガシヤットを、取り出す。

『マイティアアクションX!』

『タドルクエスト!』

『バンバンシューティング!』

『爆走バイク!』

「」「変身!」「」

『』『ガシヤット!レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワッ

チャネーム？アイムアカメンライダー！』』』』

変身するとウイルスの塊が変形し、ドラゴンの姿を取る。それを見た千冬姉は薄くなり始めてしまった。

「待ってる千冬姉。すぐ助けるから！」

『ステージセレクト！』

溪谷ステージに出ると、竜の姿が見つからない。

「あれ？居ない。どこに行ったんだ？」

と、いきなり川の下から現れた。

「やっぱり、あれはドラゴナイトハンターZに登場する敵！最大4人プレイでモンスターを狩る狩猟ゲームだ。」

と、改めて解説する。なんか解説しないといけない気がして。

「その通りだ。流石は製作者。自らが開発したゲームの内容は覚えている様だな。」

と、後ろの茂みからグラフィイト（人間態）が姿を現わす。

「やっぱり、どうして千冬姉を狙った！」

すると、奴はこう答えた。

「俺の目的は、バグスターの仲間を増やし、バグスターの軍団を築き上げる事だ！
新たな我が力を思い知るがいい。」

そう言って奴は、盗んだプロトドラゴナイトハンターZを取り出し、ボタンを
押す。

『ドラゴナイトハンターZ！』

「培養！」

そう言って奴は、自分の体にプロトガシヤットを挿した。すると、今まで緑色
だった体が黒くなって“ダークグラフィット”と化していた。

幻夢コーポレーション社長室では……………

「計画通りだよ。グラフィットはプロトガシヤットを奪い、暴れてくれてる。」

「相変わらず恐ろしい女だな、束は。」

と、天パの青年は言う。

「あの力でグラフィットに暴走されちゃ、ライダー達も命懸けだ。」

「あとは、いっくん達がゲームの実戦データさえ取ってくれば、第1段階の目

的は完了だよ。」

と、不敵に笑う東が居た。

はい proto です。

今回は軽くイチャイチャさせましたがいかがだったでしょうか？

そして、そろそろ10個全てのゲームがクリアされます。

そしたら、学園生活が進みますので。あ、もちろん、

臨海学校編もしっかりやっていきます。そして！ネタバレでは

ありませんが、臨海学校編が作品の転換点といえますか、

まあ、とにかく楽しみにお待ちください。

第43話 VS ハンターZバグスター side レーザー&スナイプ
(前編)

グラフィイトが自らにプロトガシヤットを挿した瞬間に俺たちは二手に分かれた。俺とブレイブで幼竜を、スナイプとレーザーでダークグラフィイトを相手にする事を一瞬のうちにアイコンタクトで全員が把握した。

『ギリギリチャンバラ!』

『ジェットコンバット!』

『『ガッチョ〜ンガッチャ〜ン! レベルアップ!』』

『爆走バイク〜! アガチャ! ギリ・ギリ・チャンバラ〜!』

『バンバンシューティング! アガチャ! ジェットコンバット!』

ダークグラフィイトを相手にするライダーはレベル3に変身する。

「なるほど、一人は陸から、もう一人は空からか。いい作戦だな。俺が飛べなければの話だな。」

「!？」

グラフィイトは、とある物を取り出した。

「それは、あたしの甲龍！」

「フン！ 貴様のISをコピーさせて貰った。エグゼイド！ 覚えているか？ 俺たちバグスターは、ISのデータとお前のバグが合わさって、生まれた事を！」

そうだ、バグスターはISのデータが混ざってる。でも、なぜグラフィイトはそれを知っている？

「培養着装！」

コピーされた甲龍に、黒い色のモザイクがかかる。そして、ダークグラフィイトも一緒に包み込む。すると、そこには黒い甲龍を装着したダークグラフィイトが居た。

「フツ、このISとやらはSEによって動くらしいが、こちらはバグスターウイルスの影響で無制限に動けるようだ。さあ、存分に戦おうじゃないか！」

「あれがあたしの甲龍と同じなら、衝撃砲に気を付けて！ 見えないからかなり厄介よ！」

「了解、ミッション再開！」

グラフィイトはISの飛行能力で、空中に居るスナイプへと接近する。そして、IS武器サイズに変化したグラフィイトファンクをスナイプに向けて振るう。接近戦装備が無いスナイプは、攻撃を受け切れず、地面に落とされる。だが、大振りの攻撃だったので、隙が生まれていた。もちろん、その隙を逃すようなレーザーでは無い。

『ガシャコンスパロー！』

スパローの弓モードのBボタンを押す。チャージ攻撃で、エネルギーの矢を空中に向けて放つ。

「くっ、やるなレーザー。」

矢はしっかりと当たって居るがグラフィイトにはダメージが入っていない様子だ。

「そうか！ISの絶対防御があいつの事を守って居るのか！」

「しかも、グラフィイトの言ってる事が本当なら、SEは減らないから永遠と守られてることになるね。」

「ISを破壊するしか無いわ！」

「でも、どうやって？」

「……………エナジーアイテムと、一夏の作ったガシャットに賭けるしかないわ。」

レーザーの言う事はごもつともだ。エナジーアイテムで攻撃を強化して、決めで破壊するしか、方法は残されていたなかった。

「まあ、そうなるけど。アイテムは何を狙うの？」

「狙うアイテムは……………」

寝落ちして、こんな時間。pr otoです。

いやー、今回は前編と後編を分けさせて貰います。

その方が先の展開を楽しみに待っていただけか。

後編は0..00にはあげられるようにします。

第44話 VS ハンターZバグスター side レーザー&スナイプ
(後編)

「狙うアイテムは、巨大化とマッスル化よ。」

「え？巨大化とマッスル化？」

「あたしはね。スナイプは挑発と反射を。」

「私が囷、ってわけね。いいわ、やってやろうじゃないの。ミッション再開！」
鈴の作戦は、私を囷としレーザーが巨大化し更にマッスル化の一撃で仕留めるつもりだ。

私達はグラフィットに攻撃するように見せて、片っ端からチョコブロックや宝箱、ドラム缶にトロフィーなどエナジーアイテムが出る物を破壊し続けた。正直エナジーアイテムは運だ。だからこれは賭けなのだ。一か八かの勝負、奇跡が起こるか、現実を見せられ叩きつけられるか。ゲーマーとして、ライダーとして、父親の仇を前にして、負ける訳にはいかない！

だが、グラフィアイトも負けてはいなかった。ISを使った初戦闘の筈なのに、ISを手足のように扱っている。最初はグラフィアイトファンクと使いなれた武器だけだったが、次第に慣れてきたのか、それともバグスターウイルスにはISの情報が大量に入って居るのか、あるいはどちらもか。ウイルスを使って作ったのか搭載されていない重火器を取り出し、発砲してくる。が、対IS戦闘ではこちらに少々部があるようだ。途中一夏とお姉ちゃんの方へ行ったが、挑発の効果でこっちに戻ってきた。その間も、絶える事なくエナジーアイテムを出し続けた。

そして、結果出てきた八つのエナジーアイテムは、『マッスル化!』『高速化』『反射射!』『停止!』『挑発!』『混乱!』『巨大化!』『分身!』だった。

「よし、賭けには勝った! あとは勝負に勝つのみ!」

そう言って私は、作戦通り挑発と反射を取り、

グラフィアイトを引きつける。グラフィアイトは完全に私に向かってくる。そして、狙い通り私は背中で見えないようにしていたエナジーアイテムをグラフィアイトに使わせる事が出来た。

『混乱!』

はい、protoです。

なんか歯切れ悪いな、とか思ってる方。

これ以上進めるとネタバレ二ナールって事で

申し訳ない。次回はエグゼイドとブレイブ

サイドの話となります。

それから、本作1話のアクセス数？が

前作1話のアクセス数？を上回りました。

読んでくださった皆様。ありがとうございます。

第45話 VS ハンターZバグスター sideエグゼイド&ブレイブ

スナイプとレーザーがダークグラファイトと戦っているのと同時進行で、エグゼイドとブレイブがハンターZバグスターと戦っていた。

空を飛んでいる竜には、地面にいる俺達の攻撃は効きにくい。というか、二人共近接戦闘型なんだよな。でも、やらなきゃいけないんだ！俺はチョコブロックを大量に出現させ、空中での足場を整える。だが、それが仇となった。大量に展開したチョコブロックの約半分を幼竜が食べてしまった。

「ね、ねえエグゼイド。あの竜大きくなってない？それもかなり。」

「ああ、チョコ食べて大きくなってる。」

「レベルアップしても、いい？」

と、流星に提案したくなったようだ。

「千冬姉を取り込んでるわけじゃないから、レベルアップしちまうか！大変身！」

「よっし！術式レベル2！」

『『ガッチャーン！レベルアップ！』』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！』

『タドルメグル！タドルメグル！タドルクエスト〜！』

『ガシャコンブレイカー！』

『ガシャコンソード！』

先程まで展開していた残りのチョコブロックを使い、俺は上空に上がりブレイカーのBボタンを三回押し、竜を叩き落とす！落ちたところで、ブレイブがソードを氷モードにし、竜を氷漬けにする。ブレイブが、ソードにガシャットを挿したところで、グラフィイトがブレイブに近づき、ファングでソードを弾いてしまった。

しかし、すぐにこちらに来たスナイプにより、すぐに体制を立て直せた。が、

「ブレイブ、剣借りるぜ！」

「え？ちょ、エグゼイド!!」

俺は、ブレイブが落としたガシャコンソードを借り、ブレイカーにもガシャットを挿す。その間に竜が氷の拘束を解いてしまった。

「これで、ゲームクリアだ！」

『キメワザ！マイティ！タドル！クリティカルフィニッシュ!!』

氷モードのソードで道を作り、そのまま再び空中にて竜を拘束する。氷で滑る勢いを利用し、ガシャコンブレイカーのソードモードとガシャコンソードで交互に斬撃を繰り返す、クロススラッシュの様な感じで必殺技を放つ。

『GAME CLEAR!』の音声とともに10個のゲームのパッケージパネルが浮かび、ドラゴナイトハンターZにクリアの文字が入る。そして、竜が倒された場所には何かのパーツの様なものがあつた。

「あとは、あれを回収できれば!」

俺はドラゴナイトハンターZガシャットを何かのパーツの様なものに向けた。すると、それらはデータと化して、ガシャットに吸い込まれていく。そして、何も描かれていなかったパッケージ絵にドラゴンの絵が入る。

ガシャットが完成するのと同じくらいに、向こうの戦闘もひと段落した、と言うのはおかしいが、したみたいだった。

はい、protoです!

次回グラフィイト編決着！

そして、ラウラ編とシャルル編を終えれば、すぐさま臨海学校編へとむかいます。

それでは、次回お会いしましょう。

あ、それと。活動報告欄にてサブライダーガシヤットのアイデアを募集しております。是非とも皆様のお力をお借りしたいです。

第46話 Hunter Rider への変身!

DMMから新作ISゲーが出るみたいですね、
あ、そうそう今日モンスターの電撃文庫コラボの
詳細が明らかになるそうです。

よう！俺は仮面ライダーエグゼイド！俺の目の前には、千冬姉にバグスターウィルスを感染させた張本人グラフィアイトがいる。正直我慢の限界だった。

「グラフィアイト！お前は絶対許さない！」

俺はドラゴナイトハンターZガシャットのボタンを押した。すると、ドラゴン型のゲーマー、ハンターゲーマーが出てきた。

『ドラゴナイトハンターZ！ガッチョ〜ンガツシャット！』

俺はガシャットをドライバーに挿す。

「それは俺のゲーム。4人用のハンターゲームだぞ？いくら天才ゲーマーと呼ば

れるお前でも、一人では制御できんはずだ。」

「うるさい！そんなこと知ってるし、俺ならどんなゲームでもクリアできる！」
右腕を5回回してレバーを解放する。

「大・大・大・大・大変身！」

『ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！アガツチャ！ド・ド・ドラゴ！ナ・ナ・ナ・ナ・ナイト！ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター！Z！』

俺の体の各部にハンターゲームのアーマーが装着される。右腕にはブレード、左腕にはガンが装着され、顔の前でハンターゲームが口を開けている。装着が完了し、動こうとした時全身にスパークが走り、制御が出来なくなった。

「やはりな、いくら製作者とは言えどハンターゲームは制御できんようだな。しかし、さすがレベル5だ。俺にダメージを与えるとはな。」

暴走するとはいえ、俺の攻撃はレベル5だけあってかなり効いてるようだ。しかし、それも終わりだ。俺はゲームの負荷に耐えられず、変身が解除される。

「うう、どうして！俺は……大切な相棒を奪った奴に、家族を巻き込み危険な目

に合わせた奴に！どうして……勝てないんだ。」

「フツ、哀れだなエグゼイド。」

すると、スナイプが近づいてくる。きっとボロクソ言われるに違いない。

「一夏。私言ったよね？一緒に背負うって。だからね、一夏。思い出して、このゲームはみんなで、ここに居る全員でプレイしなきゃ。」

「そうだよ、一夏君。」

「さあ、立ち上がりなさいよ一夏。」

「「ノーコンティニューで運命を変えるんでしょ？」」

「ああ、そう……だったな。」

俺は忘れていた、天才ゲーマーと呼ばれ天才ゲームクリエイターと呼ばれ続けたが、結局はみんなに支えられてやっていたんだ、という事を。

「さあ、みんな行こう！」

『ドラゴナイトハンターZ！』

俺は再び、ガシャットを起動させる。そして、そこから二つガシャットが出現し、各ライダーの手に渡る。俺が再びボタンを押すと、

『ファング！』

ブレイブが押すと、

『ブレード！』

スナイプが押すと、

『ガン！』

最後、レーザーが押すと、

『クロー！』

「さあ、狩りを始めようか！ 狩猟目標は、グラフィイト！」

『『『ガツシャット！』』』』

「大・大・大・大・大・大変身！」

「術式レベル5！」

「第五戦術！」

「5速！」

『ガツチャーン！ レベルアップ！』

『マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクションX！』

『タドルメグル! タドルメグル! タドルクエスト!』

『ババンバン! バンバンバン! バンバンシューティング!』

『爆走! 独走! 激走! 暴走! 爆走バイク!』

『『『アガツチャ! ド・ド・ドラゴ! ナ・ナ・ナ・ナ! ナイト! ドラ・ドラ・ドラゴ
ナイトハンター!』』』』

『エグゼイド!』 『ブレイブ!』 『スナイプ!』 『レーザー!』

俺たちは、パーツが別れたハンターゲーマーを装着した。俺は顔と胸部のみ、ブレイブは右肩と右脛すねに追加装甲が。右腕にはブレードが装備されている。スナイプは左腕にはガンが装着されている事を除けば、逆に追加装甲があるだけだ。レーザーは、ブレイブとスナイプ

の両方のアーマーを装備している。

「さあ、ノーコンティニューでグラフィアイトを狩るぜ!」

「私に狩れないものはない!」

「ミッ狩ション開始!」

「ノリノリで狩るわよ!」

ここに、4ハンターライダーが誕生した！

次の話でグラフィイト編は終わるはずです！

どうも、protoです。

ええと、まずグラフィイト編が長くなっており、

飽きたー！つまんねー！まじ長いー！とか

思ってる方もいらっしやると思いますが、

想像したくない。とりあえず次回でグラフィイト編は終わります。

そしたら、シャルやラウラ達の話をやり、平成ジェネレーション編

に入り、それが終わり次第臨海学校編になります。あ、

でもその前に一回番外編を挟む予定です。

長々とお付き合いいただき恐縮です。

第47話 Final Round グラファイト狩り

グラファイト編終了

俺たちは、レベル5に変身した。が、グラファイトには、何故か余裕があった。

「フッ！来い！纏めて相手をしてやる！」

「お前の犠牲になった人達の無念は俺が晴らす！」

「お父さんの仇は私が斬る（撃つ）！」

「貴利矢の仇は私が討つ！」

全員が同時にそう叫んだ。

「………、協力しながら対戦プレイだな（ね）！」

「お前ら、矛盾してるぞ！」

と、グラファイトからの確なツッコミをされる。が、気にしない気にしない。

「とにかく！狩り開始！」

俺たちは、入り乱れるように攻撃を始めた。ブレイブが斬りに行くと思わせかけて、スナイプが狙撃したり、俺が接近して攻撃しようとして見せたら、正面をガードしたから、後ろからレーザーがクロー攻撃と貴利矢直伝の回し蹴りを食らわせたり、俺が出てきたと思わせて、上からブレイブが出てきて、ブレイブが攻撃するそぶりを見せた次の瞬間にさらに後ろからスナイプが現れグラファイトを撃つなど、連携ブレイブで戦っていた。そして、俺はグラファイトとの間に3人が居るなか、グラファイトに向けて火炎球を放つ！大慌てで避けて、グラファイトに当たった。が、流石に危なかったようだ。

「ちよ、エグゼイド。今の危ないじゃない！」

「そうよ！あたしに当たってたらどうするつもりだったのよ！」

「今のは一夏が、悪い。」

「ごめん、ごめんって。」

と、こんなやりとりをしていると、後ろから

「ドドドド黒龍剣！」

と、大きなエネルギーのカッター？を放ってきた。が、全員での同時防御で、無

傷だった。

「何!？」

かなり驚いている。そろそろ幕引きだ。

「フィニッシュを、決めるのは俺だ!」

「グラファイトは、私が切除する!」

「私の必殺技でミッションコンプリートする!」

「ノリノリで行っちゃうわ!」

『『『ガッシュャット!キメワザ!ドラゴナイト!クリティカルストライク!!』』』

全員が同時にキメワザ!を放つ!

「うおおお!ドドド黒龍剣!」

先程とは違う技。常に連撃を放つ技で俺たちのキメワザを相殺しているが、クローとブレードの斬撃や、ガンのエネルギー弾、そして俺の火炎球も連続で放っている。そして遂に、グラファイトの防御が崩れキメワザが当たって行く。

耐えきれずグラファイトは爆散した。

「これで、罪滅ぼしできた……かな。」

「うん、きっと貴利矢もお父さんも。」

「そうだよ、一夏君。」

「やっと、決着をつけられた。」

「さあ、帰ろう。IS学園に。」

僕は、IS学園へと帰った。

戦闘直後グラフィイトが散った場所で、

「ご苦労さん、グラフィイト。」

と、感情のない労いが送られて居たのを、僕達は気づきもしなかった。

幻夢コーポレーション

「ふふ、これで10個。全てのゲームの実戦データが集まったよ。」

「いよいよ次の段階だな束。」

「うん。でも、まずはこのガシヤットを完成させないとね。」

その手には無地の白いガシヤットが握られて居た。

はい、ようやくグラファイト編が終了し
シャル・ラウラ編に突入出来そうな本作
作者 p r o t o です。

次回から IS 学園でのお話になります。
それでは！

第48話 シャルルとの Dialogue

Dialogue は対話となっているはずです。

はい、なんか久しぶりに名乗る気がします。織斑一夏です。えー、千冬姉のゲーム病も治り、グラフィートを倒し、プロトドラゴナイトハンターZガシャットを回収し、一件落着と言ったところでしょいかね。まあ、この後にまた事件が起こるなんて思ってもいませんでした。

僕は教室で新作ゲーム3本を同時に制作して居た。ジャンルはパズル『パーフェクトパズル』と、格闘『ノックアウトファイター』、恋愛『ときめきクライシス』です。まあ、前二つは束さんがやりたいと言って依頼してきたものですが。恋愛ゲームのときめきクライシスは、一般販売用のゲームです。僕はPCに向かいときめきクライシス優先で制作を進めていたところに、誰か話しかけてきました。

「あの、織斑一夏君……だよな？」

「はい、そうですが。あなたは確か、……………シャルル・デュノアさん…フランスの代表候補生でしたね。」

僕は、嘘をついた。彼…いや、彼女は間違いなく性別を偽り入学してきたんだろう。その事を感じながら、あくまで同じ男子として、接する事を選んでしまいました。

「うん、僕のこと覚えてくれてたんだね。」

「はい、これらが作り終わり次第、話しかけようと思っていました。そちらから来ていただいたおかげで、手間が省きました。」

「僕に話？」

「ええ。まあ、周りに聞かれると、少々厄介ですので、放課後僕の部屋までお越しただけませんか？」

「????????…わかったよ。放課後だね？」

と、言って自分の席に戻って行った。

と、言うつぶやきと共に、一夏に視線を送っている事に一夏は気付かなかった。その視線に憎しみと嫉妬が込められているのも。

放課後

教室を出ようした僕に

「織斑さん、わたくしの模擬戦のお相手をして頂けませんか？」

「一夏！私と剣道場に来い！」

と、いきなり言ってきた2名は、オルコットさんと篠ノ之さんだった。

「すみません、先約がありました。オルコットさん、また次の機会に是非お願いします。」

「そうですか。わかりました。また来ますわ。」

と、言っておルコットさんは去って行った、

「一夏！なぜ無視する！」

「無視も何も、まだオルコットさんとは話していませんが。」

「ええい！こっちに来い！その腐った性根を叩き直してやる！」

僕の性格、そんなに腐ってるのかな？

「ごめんね。織斑君は僕と約束してるんだ。」

と、先約のシャルルが間に入る。

「そうか。邪魔したな。」

「すみません。助かりました。」

「じゃ、とりあえず部屋に案内してよ。」

「わかりました。」

僕は寮の部屋へシャルルを案内した。

部屋に着くと、準備を終わらせていた簪、楯無さん、2代目が居た。

「お邪魔します。一組に転校してきたシャルル・デュノアです。」

「いらっしやい。じゃあ、そこに掛けてね。」

「あ、はい。失礼します。」

ベッド等が無くなり、スッキリとした部屋にうちの会社の応接室にも置いてあるのと同じソファとテーブルがあった。

「えっと、紅茶で良かった？」

「はい、ありがとうございます。」

シャルルは紅茶を飲んで、ホツとした表情を浮かべる。因みに僕はシャルルと対面した状態で座っている。

「緊張は取れましたか？シャルロット・デュノアさん。」

「……………誰ですか？シャルロット・デュノアって。」

「隠さなくても大丈夫です。事情は全て把握しています。」

僕は鞆から、とある書類を取り出し、シャルロットに見せる。シャルロットは、一瞬険しい表情を浮かべたが、すぐに冷静になった。

「ッ！そうか、初めからバレていたんだね。でも一体、いつから。」

「最初から。デュノアさんが転校してきた初日に違和感を感じました。まあ、これも幻夢コーポレーションCEOとして、色んな人に会っていたからわかったただけなんですけどね。」

「凄いね、完璧に騙せていたと思っていたのに。」

「いえ、少なくともクラスの女子達は騙せていたみたいですよ。さて、あなたはなぜ男装をして入学を？」

よく訳して話すと、母親がデュノア社長の愛人（でも、本当に愛していたのはこっち）で、母親が他界してしまい、デュノア社に呼ばれて、社長の正妻に命令されて、僕らのデータを取りに、スパイとして入学したとのこと。

「あなたはどうしますか？」

「んー、よくて監獄行きだね。まあ、生きてるだけいいと思っ t……。」

「あなたは、シャルロット・デュノアはどうしたいんですか？あなたの意思を聞かせてほしい。」

「僕は、僕は！……。」

寝落ち再びな、protoです。

サブタイトルを考えながら寝てしまいました。

さて、今回はシャルル編終了と同時に

ラウラ編スタートですかね。

それではまた次回。

第49話 シャルロットとの contract

こんにちはこんばんはおはようございます。毎日朝早く起きている織斑一夏です。ええと、現状シャルル・デュノアさん改め、シャルロット・デュノアさんへの質問を行っています。

「僕は、僕は！」

自由に生きたい！この世界で生きていたい。誰にも縛られる事なく、自由に大空で飛ばたい！たしかにスパイとしてこの場に居る。いや、居たけど！僕は望んだわけじゃない！」

「わかりました。では、契約しましょう。」

「ふえ？契約？」

「我々幻夢コーポレーション全勢力を以て、あなたを解放します。契約内容は、我が社のデバックと新作ゲームの審査等。」

「啞然として居たが、すぐに答えが出たようだ。」

「……………よろしくお願ひします。」

「こちらこそ。それでは、楯無さん。暗部の情報力をお借りしたいのですが。」

「OK、暗部の情報収集力見せてあげるわ。」

「では、ジョーカー切札に期待しましょう。こちらは、なるべく穏便に事を済ませる努力をしましょう。簪、サポートを。」

「わかった。」

「2代目には、念のためデュノアさんの警護を。報酬は、まだ開発途中の爆捜トレジャーのデバックでよろしいですか？」

「よっし！あれ一回やってみたかったんだ。」

「おそらく、この会話も盗聴されてると思います。おそらく……。」

僕は制服の襟の部分を見ると、明らかに変な膨らみがあった。僕はそっと、それを潰す。

「学園外に一步でも出ればすぐさま襲撃に遭うでしょう。なるべく早く、デュノア社をどうにかします。」

「あの！織斑くん。デュノア社の経営はかなり危ないんだ。それにイグニッションプランからも外されてる。だから……一思いに潰してもらえないかな？」

僕は軽く笑みを浮かべ、

「優秀な人材は、こちらで雇っても構いませんか？」

「うん。もちろん！」

「それでは、各自活動を開始しましょう。」

「「「はい！」」」

僕らは今度の週末の外出許可をもらう為、千冬姉が居るはずの職員室に向かって居た。すると、アリーナの方から大きな音が聞こえた。

「何かあったみたいだ。行ってみよう。」

僕らは走った。何やら嫌な予感がしたからだ。

アリーナに着くと、ボロボロのセシリアが居た。目の前に居るのは……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。」

「織斑一夏！私と戦え！」

と、肩にある銃口をこちらに向けてくる。

「仕方ありません、ちょっと行ってきます。」

僕はアリーナ内部に移動した。

「はあ、実に無駄な時間を使う。」

『マイティアクション X！ゲキトツロボツツ！』

ガツシャット！ガツチャーン！レベルアップ！マイティマイティアクション X

！アガツチャ！ゲキトツロボツツ！』

俺は初っ端からレベル3で相手をする事にした。

皆さん、protoです。

質問ですが、この作品面白いですか？

個人的には面白いと感じてもらえるように頑張ってるつもりです。

まあ、もっとこうしてみれば

とか、ああ、こんな感じにしておけばとか、

色々あります。が、読者の皆様の声が1番わかりやすい

この作品の評価ですからね。

まあ、頑張っ
て書いてい
きます！

第50話 protoの負担

アリーナではドイツ軍のシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラ・ボーデヴィツヒと日本が世界に誇るゲーム会社のCEO兼開発責任者で、バグスターウィルス根絶のため、仮面ライダーエグゼイドとして戦う織斑一夏が仮面ライダーエグゼイドレベル3となり相対して居た。

「おい！なんでオルコットにあんな事した！」

「フッ、愚問だな。弱い者は死に、強い者が生き残る。この世の理じゃないか。」

「それは自然界のだ！俺たちは、決して一人では生きていけない！」

「強者が弱者を叩き潰す！それが力だ。」

「それは違う！お前はドイツで千冬姉から何を学んだんだよ！」

「話しても無駄なようだな。こちらから行くぞ！」

すると、レールカノンを放ってきた。俺は真っ向から打ち消そうと左腕のロケットアームで弾の中心一点を狙って殴り相殺した。砂煙が舞い向こうが見えないがこちらも軽いノックバックがあった。すぐに体制を整える。が、向こうから高速で移

動してきたボーデヴィツヒはプラズマを帯びた手刀で攻撃してきた。とっさにロケットアームで防ぐ。

「チッ、早く終わらせる！」

『ガッシュアーム！キメワザ！ゲキトツ！クリティカルストライク！』

ロケットアームでロケットパンチを繰り出す。が、見えない壁でもあるのかボーデヴィツヒの手で止められた。

「なんだ、その程度か？」

「そこまで言うなら、天才ゲーマーSの本領見せてやるよ。」

俺はピットに居るレーザーに向かって、

「レーザー！あのガッシュアーム貸してくれ！」

と、言った。

「ええ？負担がヤバイのはわかってるじゃん！それでもやるの？」

「ああ、意地でもこいつに勝つ。」

「わかったわよ！どうなっても知らないからね！」

そう言ってレーザーは黒いガッシュアームを投げる。

「サンキュ！さあて、ここからが本番だ！」

『爆走バイク！ガツチョンガツシユンガツシャット！ガツチャン！レベルアップ！マイティマイティアクションX！アガツチャ！爆走！独走！激走！暴走！ばあくそうおくバァイク！』

「仮面ライダーエグゼイド バイクアクションゲーマーレベル0！」

エグゼイドの髪がピンクから黄色に変わり、レーザーレベル1が持っているタイヤ型の武器を持つ。ボディ周辺もレーザーっぽさが増している。

「さあ、ノリノリでクリアしてやるぜ！」

「面白い、さあ楽しもうじゃないか！」

「全然面白くねえよ！」

俺は高速で移動する。そこには黄色の残像が残り、その速さを物語っていた。一瞬のうちにボーデヴィツヒの後ろに回り込み、高速の連撃をたたき込む。これに俺がセリフをつけるなら、

オラオラオラオラオラオラオラオラ！だな。

しかし、それにも限界がある。俺はプロトガシャットの負荷に耐えきれず、思わ

ず膝を着いてしまった。

「ふっ、これで私の勝ちだあ！」

プラズマ手刀が振り下ろされる瞬間、一人の乱入者によって、手刀は止められた。俺は上を向いて誰か確認する。そこにいたのは……………

さらなる寝落ちしてしまったprotoです。

辛かった、データ消えてたから1から書き直し。

泣きたかった。さて、あと二話かな？でシャルル・ラウラ

編は終わるはずですよ。多分！それでは、また次回！

第51話 ぶつかる Fate

因縁で検索したら fate って出てきました。

あ、本日12時よりモンスター電撃文庫25周年コラボ
開催します。楽しみ

俺は手刀が振り下ろされる瞬間を待ったが、振り下ろされるはずの手刀がこない。不思議に思い顔を上げると、そこには生身でIS用の刀を使い、手刀を受け止めている姉の姿があった。

「ボーデヴィツヒ、お前は人を殺したいのか？人の命を救っている一夏を！」

あ、これ教師モードじゃねえ。姉モードだわ。

「きよ、教官！何故その男を守るのです？」

「愚問だな。一夏は私にとって唯一の肉親だからだ！」

ここまでのセリフはかっこよく、姉としての威厳があった。が、その後の言葉が

全て台無しにした。

「そして、一夏が居ないと死んでしまう！一夏と一緒にいないとダメなんだあ
!!」

な？崩れただろ？見てみる、ボーデヴィツヒのあの顔。鳩が豆鉄砲を食ったよ
うな顔してるぜ。そりゃ、あれだけ妄信的に信じてた教官のイメージが崩れたらそ
うなるか。

「とにかく、この戦いは今度の学年別トーナメントで決着を付ける。それまで一切
の私闘を禁止する！いいな？」

「わかりました。き、教官がそうおっしゃるなら。」

「わかったよ……(ぐぐぐ)。」

「「一夏あああ！」」

俺の意識はその声が聞こえてすぐに失った。

ただ楯無さんと 2 代目の声じゃない誰かの声が聞こえたのはわかった。

僕の眼が覚めると、目の前に居たのは簪と楯無さん、2 代目に千冬姉だった。

「あれ？勘違いだったかな？確か簀と千冬姉以外に声が聞こえたような。」

すると、楯無さんが、

「ああ、篠ノ之さんよ。私も中に入れてくださいって言ってきたけど、何するかわかったもんじゃないから入室お断りしたの。」

確かに、篠ノ之さんなら、「この軟弱者！鍛えてないから倒れるんだ！その体から鍛え直す！」とか言いそうだなと思っていた。

「まったく、プロトガシヤットを使うから。っていうか、なんで鈴ちゃんがプロトガシヤット持ってたの？」

「束さんが言ってたんですよ。2代目が間違っただけで正規品じゃなくてプロトガシヤットを持ってたって。」

「あはは。いやー、幻夢コーポレーションに行った時に急いで間違えちゃった。」
「では、これを。今度は間違えないでくださいね。」

僕は正規品の爆走バイクを渡した。今朝机に置いてあったのをすっかり忘れてました。束さん自分で渡せばいいのに。

その頃束は

(レーザーには顔見られたからなあ。下手に接触しないほうがいい。) と思っていた。

人が起きる時「ううん！」みたいな声を出す人が多いのではないだろうか。まあ、隣から聞こえたんだけど。隣にはボーデヴィツヒにボコボコにされていたオルコットさんがいた。

「大丈夫ですか？オルコットさん。」

「ふえ？お、織斑さん。何故このような場所に？」

「少々、無茶をしましてね。」

そんな話を話していると、保健室のドアが力強く開け放たれる。

「「「織斑君！これ！ー！ー！」」」

女子がたくさん入って来て紙を見せる。内容は学年別トーナメントをタッグでやるとの事だ。

「「「私と組んでください!!」」」

「あ、えっと。すみません。僕はシャルルと組もうかと(女ってバレると少々厄介だし)。」

すると、「男同士なら絵になるし。」とか「まあ、それなら他の女子と組まれるより。」など、おかしい彼女持ちのはずなのに、っていうか皆さん知ってるはずなのに。

結局簪に許してもらい、シャルロットと組むことになりました。そして、トーナメントが発表され、衝撃が走った。

「初戦からラウラ・ボーデヴィツヒですか。」

「良いのか、悪いのかだね。しかもタッグを組んでいるのは篠ノ之さんと来たよ。」
一方でラウラは、

「ふっ、叩きのめす。そして教官に元に戻ってもらわなければ。篠ノ之、足は引く張らないでくれ。」

「こっちのセリフだ。」

因縁の対決、今ここに。

常日頃読んでくださってる皆さんお疲れ様です。

本作者の p r o t o です。

えー、昨日の分も寝落ちしてしまい大変申し訳ございません。

疲れを溜め込まない方がやはり良いですね。

まあ、う p 主の個人的な話は置いて、

次回ラウラ編は e n d で、その次でシャルル編完全攻略ですかね。

それでは、また次回

第52話 学年別トーナメント START!

はい、どうも一夏です。えー、皆さんにご報告があります。実は学年別トーナメントに出るライダー僕だけらしいんですよ。ちょっと寂しい……え？寂しい。そっか、僕は寂しいって感じれるんだ。あ、言いたかった事は2代目から爆走バイクガシャットを借りられたので、ボーデヴィツヒ対策は万全って事です。

学年別トーナメント当日。

俺はアリーナにてこの前とほとんど変わらない状況にある。唯一違うのはペアが居るか居ないかだ。こちらにはシャルロットが、向こうには篠ノ之が居る。

「シャルル、ボーデヴィツヒは俺がやる。篠ノ之程度なら、遊んでられるだろ？」

「う、うん。わかったよ。」

「それなら、シャルル。いや、シャルロット。この戦いに勝って、お前の運命は俺が変える。」

「うん！お願いだよ！」
究極の救済者

「ん？何か言ったか？」

「ううん！な、何も！」

俺はボーデヴィツヒの方へ向き直る。

「ボーデヴィツヒ、お前は俺が攻略する。」

「男のお前では、私には勝てない！」

「ノーコンティニューで、お前に力の真の使い方を教えてクリアしてやる。」

「かかってこい！この世の中強者が絶対だ！」

試合否、死合開始の合図が鳴る。

こちらの敗北条件は変身が解除したら負けだ。IS用に設定したから出来る事だな。

《ガシャコンブレイカー！》

俺は右手にガシャコンブレイカーソードモード、左手にはロケットアームを装備し、徹底的な連撃を繰り返す。が、向こうはこちらが飛べないのをいい事に飛行を開始し、レールカノンを放ってくる。だが、俺もバカではない。俺は自分の目の前にチョコブロックを展開する。展開したブロックはレールカノンの弾に当たって砕けるが、エナジーアイテムを出現させた。

『ジャンプ強化!』

強化跳躍でボーデヴィツヒと同じ高さまで飛び、キメワザスロットホルダーにゲキトツロボツツガシャットを装填。そのままボタンを2回押す。

『ゲキトツ!クリティカルストライク!』

ロケットアームを発射する。が、やはりAICで止められる。

「フン、所詮男か。学習しないな。」

ボーデヴィツヒはAICを發動したまま、地に足を付ける。それを待つて居た!

『ガツシャット!キメワザ!爆走!クリティカルストライク!』

目の無いレーザーを召喚し、ロケットアームに集中しているボーデヴィツヒを轢く。

「な、嵌めたな!」

「嵌る方が悪いんだよ!」

俺の予想的中、AIC発動には止めるものに集中してなくてはならない。ロケットアームに集中して居たボーデヴィツヒに、アームが無くなりバイクに乗れる俺はバイクで轢くという発想に至った。高速化のエネルギーアイテムを取れなかった時の

策だ。そして、そのままロケットチームにも当たった。俺はシャルロットの方を確認する。篠ノ之相手に遊んでるが、こちらの状況を確認して居たのもうすぐ終わらせ……あ、終わったわ。

「くっ、あの男に負ける訳には！」

（あなたは、力を求めますか？）

ああ！あの男を、叩きのめす力が欲しい！

《Valkyrie Trace System……complete! Schwarzer Regen Awaykening!》

ボーデヴィツヒが暫く沈黙している。

すると、シユバルツェア・レーゲンが突如ドロドロに溶けて、とある姿を見せる。

「あれは……千冬姉。って事はまさか。」

アリーナ管制室で、同じ事を思っている人がいた。二人は同時に叫ぶ

「禁止されてる筈のVTS！」
息ぴったりの姉弟だった。

ツイッターでは言っていました、
体調崩してました。明日0..00には
しっかり更新します。

第 53 話 V T S の週末

V T S (ヴァルキリー・トレース・システム) は、過去のモンド・グロッソの入賞者の動きを模倣するシステム。ここだけ聞けば素晴らしいシステムだが、実際は違う。パイロットに過大な負担がかかる。プロトガシヤット負担なんて比じゃない。束さんが「不細工なシロモノ」とか言っていたのを思い出した。国際 IS 委員会やらなにやらは何してんのかね。禁止したはず、とか思っただけで無責任に放置してんではよ？ 全く、ちゃんとして欲しいものだ。

「さて、V T S が発動しているからには。早々にパイロットの救助をせんと。」
俺は攻撃を避けつつ、対抗策を練っていた。すると、ある事に気付く。

(俺、爆走バイク持ったままじゃん。)

そう、思い付いた対抗策としてライダー全員で救助する方法を思いついたが、2代目のガシヤット借りてたの忘れてた。すると、【ドッゴオオオオオオオン！】という落下音が聞こえた。砂埃が舞うがシルエツトが見える。すると、2代目をお姫様抱っこしているレベル 3 ブレイブと、一人ゆったりと落下しているスナイプ

レベル3が居た。

「ねえ簪ちゃん。お姉ちゃんと鈴ちゃん持ってくるとか無かったの？」

「火力制御が、難しいの。」

「とりあえず、エグゼイド。あたしのガシャット返してもらってもいい？」

「ああ、元々うちの会社の物だがな。」

俺は2代目に向かって爆走バイクガシャットを投げる。某メダルライダーの様に空中でキャッチして、そのままボタンを押し、左手にあらかじめ持っていたギリチャンバラと一緒にドライバーに挿し、レベル3レーザーとなる。

「さてと。エグゼイド、あれどうすんの？」

「早く分離させないと、最悪パイロットの命は無い？」

「ねえ、一夏。レベル1なら分離させられるんじゃない？」

「流石簪、その手があったか。」

レベル1の分離パルスを流し込み、パイロットとISを分離すればいい。一応束さんに確認を…

《もすもすひねもす、いっくん。そのやり方で大丈夫だよ。》

連絡する前に向こうからしてくれたわ。

『『『ガッチョーン』』』』

俺たち全員がレベル 1 に戻る。現役時代の千冬姉の動きとはいえ、レベル 1 の俊敏性をなめたらいかん！俺たちは千冬姉のコピーを翻弄した。しかし、この分離は時間との勝負だ。早くしないとパイロットが死んでしまう。が、分離パルスの流れがいいのか、ボーデヴィツヒが見え始めた。

『ガッチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション X！』

レベル 2 になり、ボーデヴィツヒを引っ張り出す。すると、千冬姉もどきの動きが完璧なまでに停止した。

体調が良くないので、中途半端でごめんなさい。

ほんとごめんなさい。

皆さんもインフルエンザ等にはお気をつけて。

第54話 新たな敵は love enemy!

まあ、恋敵てきな意味です。

皆さん、そろそろインフルエンザ等が流行る時期となつてまいりました。我が幻夢コーポレーションでは『手洗い』『うがい』『アルコール消毒』を推奨しております。皆さん、体調管理に気を付けて楽しくゲームをプレイしましょう。織斑一夏でした(ノ。ノ)。

見事レベル1の機能でボーデヴィツヒの分離を成功し、VTSを発動してしまつたシュヴァルツェア・レーゲンの停止に成功した。が、やはりパイロットへの負担は酷く、すぐに医務室へと運ばれた。シュヴァルツェア・レーゲンは一時凍結された。ドイツのVTSをシュヴァルツェア・レーゲンに搭載させた研究機関は束さんが潰れました。各国に情報をばら撒いてからやりましたね。そうすれば、向こうが悪い！って、諸外国は言ってくれますからね。我々への被害はゼロ。むしろドイ

ツ以外の国から感謝されましたね。

V T S 事件から 2 日後

僕は医務室に来ていた。片手には花束を、鞆の中にある物を持って。

僕は軽くドアをノックする。

「織斑一夏です。ボーデヴィツヒさん、いま大丈夫ですか？」

「ああ、入って来ても大丈夫だ。」

「それでは、失礼します。」

僕はドアを開ける。そこには簪がいた。

「簪、来てたんですね。」

「一夏こそ、どうしたの？」

「僕はボーデヴィツヒさんに、答えを聞きに。」

すると、事情を知らない簪と質問された筈のボーデヴィツヒさんは、

「「答え？」」

と、なった。

「力の真の使い方ですよ。」

「ああ、それか。実はな、あの時お前たちが救ってくれた時になんだか不思議な感覚になった。織斑一夏、あなたの心が聞こえたような気がした。」

「力の意味は、真の使い方は、愛する人や大切な物を守る為に使うの。そうすれば力の底が見えてくる筈です。」

「私に、試験官から生まれた、人工的に作られた。そんな私に守るべきものなんて……無い。」

「どんな生まれ方をしたのかは、関係ありません！ただ、この世に生まれた命として、愛する者（物）を見つければいい。」

「……ならお前が、私の守る者になってくれないか。」

「え？それはどういう……。」

ベットから体を起こし、僕に近づいてくるボーデヴィッヒさんの顔。唇が重なりあう瞬間だった。鬼神と化した簪がそこに居た。

「ボーデヴィッヒさん、一夏は渡さない！」

「ならば、全力で奪ってみせよう。」

ここに二人が争ってしまふ原因を作ってしまったのだった。が、僕はこう思っ
居た。

(なるほど、こういう展開もありだな。ときめきクライシスのDLコンテンツとし
て使おう。)

と。

はい、38・7もあつたうP主です。

ごめんなさい、後書きを書く気力が残ってないので、
また次回、お会いできたらお会いしましょう。

第55話 いざ France へ!

こんにちは、好きな人はこれを読んでる皆さんと、簪の織斑一夏です。現在医師免許取ろうとして勉強してます。あ、もちろんIS学園での勉強を疎かにはしてませんし、幻夢コーポレーションの仕事もしてます。ただ、好きな人が旅先で体を悪くしたらすぐに対処できる場合と、できない場合があります。後者の場合が発生した時、すぐさま対処出来るようにする為、医師免許取ろうとしてます。まあ、何故こんなことを話しているかと言うと、現在地フランスなんですよ。で、今日かと言いますと、土曜日なんですよ。思い出しました? そう、デュノア社の件で今飛行機移動してます。全く、なんで千冬姉まで付いてくるんですかね? いや、楯無さんはわかるんですよ。え? 先にパーティーメンバー紹介してくれて? わかりました。では、まず僕(織斑一夏)と更識簪、更識楯無、シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノア。シャルロットの護衛として2代目(凰鈴音) まあ、ここまでは普通です。そして、織斑千冬と山田真耶先生まで。仕事はどうしたんですか? と伺いたくなりますよ。で、なんで医師免許の話してたかって言いますと、飛行

機で勉強してたんですよ。そしたら簪に聞かれて、正直に話して簪がデレました。こちらは鼻血出そうでしたよ。ってか出ましたね。すると、まあ千冬姉が出てきましたよ。凄くお酒臭かったです。で、山田先生に絡み過ぎて酷かったので制裁（物理）したかったんですけどね。飛行機でやると迷惑ですから、トンで済ませました。

その後、無事にフランスに着きました。

「ここが、フランスですか。」

空港に着いてすぐに入国審査を受ける。すると、入国審査官に色紙を渡される。

「P u i s - j e a v o i r u n s i g n e ? (サイン、貰ってもいいですか?)」

「ok」

「M e r c i (ありがとうございます)」

「V o u s t e s l e s b i e n v e n u s (どういたしまして)」

「すごいね、一夏。フランス語ペラペラじゃん。」

「流石、私の一夏。♪」

「簪に誇らしくしてもらえて、僕も彼氏として鼻が高いよ。(ヤ)」

そう言って、僕は簪の頬にキスをした。

「(ギョッ) ……(///) い、一夏あ。」

と、抱きついてくる簪が可愛いです!

「しばらくゴタついてたからね。今はこれだけで勘弁してね♡」

「うん、えへへ。我慢するう〜♡」

と、僕らがイチャイチャ(自覚はありますよ)し始めると、千冬姉が。

「一夏あ〜! 私もお〜。」

「千冬姉、恥と外聞を知ろうね。」

「い、一夏。酷い、いつからお姉ちゃんにそこまで辛辣な言葉を言えるようになったんだよお〜。」

恥ずかしいので、置いてくことにしました。

目的地はデュノア社。移動は車。幻夢コーポレーションで用意した特別車両で移動します。

十数分で目的地に到着しました。ここからが本当の戦いですけどね。

こんにちは、インフルではなかったですが
体調崩してましたpr otoです。

いやー、連続投稿一ヶ月続けたかったな。

まあ、体調崩した自分が悪いんですけどね。

さて、物語はフランスへ。ここで番外編の内容を組み込みます。

そして、平成ジェネレーションズが始動する。

それでは、次回お楽しみに。

第56話 父親の True feeling

はい、更識簪にぞっこんで、引退したら彼女の為だけにゲーム作ろうかなとか思ってたりする織斑一夏です。現在地はフランスのデュノア社の応接室。そこで待たされてます。因みに簪と先生方以外は黒服に変装してます。

数分してようやく、社長が出てきた。

「いやはや、お待たせしたね。私か社長のハサン・デュノアだ。」

正直に言おう、おそらくこの場にいるこちら陣営はこう思った。

(((((うわあ、縁起悪い))))))

「失礼ですが、随分と日本風な名前ですね。」

「ん？ああ、両親がFat○の呪腕先生が好きだね。日本のアニメは素晴らしいよ。」

「なるほど、それで日本語もお上手なんですね。」

「両親の影響が大きいよ。」

「そろそろ本題に入らせてもらいます。」

「!?……………ま、貴重な土日に来るくらいなものな。なんだね。」

「実は我が幻夢コーポレーションは、今度新作ゲームを出すのですが、フランスは中々接点がなく少々伸び悩んでいる、という報告を受けていますね。」

「それが、我が社に關係あるのか?」

「いえ、ただ業務提携しませんか?というお誘いだったので。」

「あ、ああ。す、すまないな。なにか勘違いしていたようだ。」

「で、条件なんですがね。そちらには、売り上げの45%でどうでしょうか?」

と、ハサン社長の前に一枚の紙を置く。

「も、もちろんだとも。是非お願いしたい。」

と、すぐさま紙にサインをしようとした。

「はあ、後々言われても面倒ですからね……。」

僕は一度紙を引き戻した。

「ど、どうして?そちらから申し出た契約ではありませんか?」

「いえ、気が変わったとかではありません。ただ、こちらが45%渡すだけではあ

「まりに不平等でしょ？」

「そ、それはそうだが……」

「ですから、そちらも対価を払う必要がありますよね？」

「……なにを払えばいい。」

「僕が望むのはたった一つ。シャルロット・デュノアさんの身柄です。」

「……わかった。彼女自身それを望んでいるなら、何よりそれで彼女が解放されるなら。シャルロットをよろしくお願いします。」

「だそうですよ。シャルロットさん。」

この言葉でシャルロットさんは変装を解いた。「……………お父さん。」

「シャルロット、何故ここに？」

「知りたかったんだ。お父さんの本当の気持ち。良かった、ありがとう。」

「シャルロット、幸せにな。」

「はい！」

こうして、無事にデュノア社との業務提携を契約して戻れた……………

………空港までは。

空港に着き、すぐに帰りの飛行機を幻夢コーポレーションで手配する。が、ここで問題が発生した。

「待ちなさい！」

誰かに呼び止められるが、あえて知らん顔で入場ゲートまで歩みを止めない。

「へえ、無視するんだ。ならこうよ！」

シャルロットが振り返る。すると、顔が青くなっていく。

「お義母さん、何をする気。」

「何って、こうするのよ！」

シャルロットのお義母さんは、手に持っていた眼玉？のボタンを押し、怪物へと姿を変えた。

はい、番外編ならもうらここで済ませばいいやん！

って考えてた p r o t o です。次回、察しのいい方なら
もうお分かりですよね？

さて、ここらで失礼しますね。

また次回お会いしましょう。

第57話 Ghost 登場！

体に疲労が溜まると寝落ちするらしいです、

突如として目の前に現れた青い怪物。姿を変えたお義母さんを見て驚きを隠せないシャルロットを他所に、僕たちはゲーマドライブを装着する。

「一夏君、あれ見たことある？」

「いえ、自分の記憶にはないです。とりあえず、山田先生と千冬姉は近くの人たちを避難させてください。」

「わかった。一夏のために人肌脱ごう！」

「わ、わかりました！」

と、言って走って行った。

「一夏、相手の力は未知数。最初からハンターで行った方がいいかも。」

「そうしましょう。」

僕はマイティアアクションXとドラゴナイトハンターZを取りだす。各々がガシャットを取り出すのを確認してドラゴナイトハンターZのボタンを押し、仮想ガシャットを出現させる。

『ファング!』『ブレード!』『ガン!』『クロー!』

「大・大・大・大」「術式レベル5!」「第五戦術!」「5速!」

「[[[大) 変身!]]」

『[[[[ガッシャット!ガッチャッソン! レベルアップ!]]]]』

『マイティマイティアアクションX!』

『タドルクエストォ!』

『バンバンシューティングウ!』

『爆走バイクウ!』

『[[[[アガッチャ!ド・ド・ドラゴ!ナ・ナ・ナ・ナ・ナ!イト!ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター!]]]]』

『エグゼイド!』『ブレイブ!』『スナイプ!』『レーザー!』

「[[[[4人協力プレイでクリアしてやるぜ(わ)(ミッションコンプリートだ)(切

除する)！」「」

俺たちが踏み揃ったところで、目の様な模様が浮かび上がる。

『アーイバッチリミナー！バッチリミナー！カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ！ゴースト！』

「き、貴様は一体!?」

「俺は、仮面ライダーゴースト。」

そう言って浮遊を始め、怪物を翻弄する。

「ノリ遅れた！あたし達も行こ！」

「ああ！」「うん！」「ええ！」

俺たちは怪物に向かって走り出し、ゴーストの邪魔にならない様計算しながら連携を取っていたが、意外と向こうが合わせてくれているみたいだ。それに、怪物の戦闘経験が少ないのか、すぐに体力が切れたようだ。

「これで終わりだ！」

『『『ガッシュット！キメワザ！ドラゴナイト！クリティカルストライク！』』』

『大開眼！オレ！オメガドライブ！』

ゴーストも必殺技を放つようだ。

俺たちはいつも通り必殺技を放ち、追いつきをかけるようにゴーストの蹴りが炸裂する。

デュノア婦人から目玉の様な物が出て、それを回収したゴーストはすぐさま消えた。

「また、すぐに会いそうだな。」

と、謎めいた言葉を残して…。

その後、無事日本へと帰れた。ほぼ日帰りと変わらない仕事だったなあ。

はい、寝落ち魔人の p r o t o です。

マジで休み時間に書きたい。

さて、シャルロット編が終わりました。

終わりましたもんね？では、次回平成ジェネレーション編

G
A
M
E
S
T
A
R
T
で
す
!

仮面ライダー平成ジェネレーションズ

第58話平成 Generation のライダー

もうそろそろ臨海学校も近くなって来た時期です。最近ゲームはスマホゲームが主流となって来た現代で、未だゲーム機の人気を保っているのが我が幻夢コーポレーションのゲームです。が、やはり手軽に遊べる方がいいのかやはりスマホ片手にゲームというのをよく見てしまう織斑一夏です。さて、何故スマホゲームの話を始めたかというと、最近巷で人気のパズルゲーム『はてさてパズル』の製作者が僕と同じ高校生らしいんですね。まあ、僕が中学時代から作ってたせいで天才とは言われてないみたいですが。それがクラスで人気で僕ちよつと落ち込んでます。まあ、簪がプレイしてないのが唯一の救いです。

その頃幻夢コーポレーションでは……

白衣を着た4人組の男女が侵入していた。1人のガタイのいい男が天井に向かって

てその鉄の弾を放つ。その光景に社員達はパニックに陥る。なんとか止めようとする警備員達や社員を塵の如く払い、4人は進む。その4人は社長室否、篠ノ之東の元へ向かっていた。その目的は……。

侵入者達は束を取り囲む。

「少し見ないうちに、有名人になったな。束。」

3人のうち、2人から銃を向けられる。

「四年ぶりくらいかしら、大天災。」

首元に剣を置かれて、束は怯んだ。そして、後ろで銃を構えている男から

「そのバグヴァイザーとプロトガシャットを寄越しなさい。」

机に置きっ放しにしていたバグヴァイザーとプロトガシャットを要求される。

そして、入り口からヘルメットをかぶり、全身にノイズのかかった男が入ってくる。

「お前は！現世に蘇ってはいけない存在！」

「蘇る運命だったんだよ。私の研究を成し遂げるためにね。」

幻夢コーポレーションの外を警察が囲む。機動隊がガードに入り、銃を構えてい

る者もいる。しかし、ガタイのいい男が黒いガシヤットを取り出し、ボタンを押す。

『ゲキトツロボッツ！』

それを体に挿し、怪物の素体にロボットの鎧が付く。その怪物は地面に一撃だけ叩き込む。すると、その振動で警官達は全滅した。

はてさてパズルがブームとなった教室を眺めていると、緊急通報が鳴る。僕と簪は立ち上がるとすぐに現場に向かう。…楯無さんは生徒会の仕事をしてなかったの
で来れないそうです。僕のせいでもあるので今度手伝おう。2代目は寝てました。
置いて来ます。

現場はIS学園内だった。その場には、大量の小さなパックマンが生徒達を襲う
光景を、1ゲームファンとしては悲しい光景を見てしまった。とにかくなんとか
するべく、ドライバーを取り出す。すると、もう1人走ってこちらへ来る人物が
いて、ここに着くとすぐに腰にドライバーが現れる。そして、お互いがお互いのド
ライバーを見ると、

「そのドライバー！」

と、揃って驚く結果になった。その間にもバックマンはこちらに気づき襲ってくる。連続して来るため、俺たちは変身すら出来ずにいた。すると、突然バックマン達の様子が変わり、ゴーストに狙いを定める。

「う、うわあああ！」

「タケル！タケル！しっかりして！」

と、ゴースト／＼タケルに付いてきた女性。

この間に俺と簪は変身する。

「大変身！」

「第貳戦術変身！」

『マイティアクションX！』

『バンバンシューティング！』

『『ガッシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アイムアカメンライダー！ガッチャーン！レベルアップ！』』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！』

『ババンバン！バンババン！バンバンシューティング！』

『ガシャコンブレイカー！』

『ガシャコンマグナム！』

俺らは武器を出し、パックマンを攻撃する。が、あまり効いていないようだ。

「ねえ、私達の攻撃あまり効いてないけど。」

「そうだな。でも、どうすればいい。」

そんな風に見ていると、1人の少女が倒れた。

はい、仮面ライダー平成ジェネレーションズ Dr.パックマン対エグゼイド&ゴーストwithレジェンドライダー編でございます。

これが終わり次第、この作品の転換点？に入る予定です。

お楽しみに。

第 59 話 変身できない Ghost

俺たちは倒れた少女を保護しようとした。が、その時だった。

「その女は我々のものです。」

と、言う男と刀を持った女が現れた。男は右手を上げると、その手には黒いガシャットを持っていた。

「それは！プロトガシャット！どうしてお前が！」

『ドラゴナイトハンター Z！』

男はボタンを押し、それを体に挿す。すると、バグスター素体が現れ、竜を模したアーマーが生成される。

「なんなのあいつら。」

と、タケルに付いて来た女性が言う。

「ウイルスが実体化したゲームの敵キャラです。」

と、いつの間居たのやらポッピーもとい明日那が説明する。

「要は、悪党と言う事ですな。」

いつの間にかもう1人増えてたな。あれはお坊さん……かな？そのやりとりの間にタケルがこの前見た目玉を取り出しボタンを押そうとするが、何やら押せないようだ。腰のドライバーも消えている。

「変身できない!? どうして!」

ゴーストに変身できないようだ。

「とりあえず、彼女を連れて安全な所へ!」

「わかった! 皆さんもこちらに。」

「スナイプも向こうについて行って!」

「わかった。ミッションチェンジ。」

俺はそう指示すると、バグスターに向けて走り出す。なるべく攻撃を喰らわないように、空中からの攻撃を心掛け、ガシャコンブレイカーでの攻撃をする。が、攻撃を片手で止められる。そして、凄まじいノックバックがあり後ろに下がる。体制を立て直し、ガシャコンブレイカーのAボタンを押し、ハンマーモードからソードモードへと変形させる。雨が降って居たのか、足場が滑る為、これを利用し滑って近づき、下から攻撃する。そのまま流れで斬りつけるも、頑丈な肉体に止められ、

モロに攻撃を受けてしまった。

その頃 IS 学園では

学園内に悲鳴が広がる。外のパックマンが教室に流れ込んでいた。だが、すぐさま避難を行い被害は最小限にとどめられた。が、パックマンはまだ学園内にいるため、動けない。しかし、そう我らが生徒会長が残っていた。

生徒会室に連絡が入る。

「もしもし、こちら生徒会長更識楯無です。」

『更識か？ ちょうどいい。現在避難区画の外にパックマンがいる。どうにかしてくれ。IS も使用してくれて構わない。』

「え、ちょ！ 織斑先生!? 切られた。」

「お嬢様、いかがなさいますか？」

「やるに決まってるでしょ。それより、校内に水出せる？」

「緊急事態です。仕方ありません。お嬢様のことです。大方アレをやるおつもりなのでしょう。」

「流石虚ちゃん。私のことならなんでもお見通しね。」

「準備に取り掛かりますよ。」

「早くしないとね。」

『タドルクエスト！』

「術式レベル2、変身！」

『ガッシャット！ガッチャーン！レベルアップ！タドルメグル！タドルメグル！タドルクエストオ〜！』

ブレイブレベル2になった楯無はさらにIS『ミステリアス・レイディ』を纏うのだった。

なんか後半めちゃくちゃじゃん

思った方いらっしゃいますでしょうか？

protoです。

仮面ライダーシティーウォーズが始まりましたね。

結構楽しんでます。とくに建物のクオリティが高くていいです！

第 60 話 Dr・Pac man 襲来

スナイプは変身を解除。タケルと共に学園の安全な所へ移動していた。が、刀使いの女がその場に現れてしまった。

「あなた達の、目的は何？」

「邪魔よ、どきな。」

「日本語通じます……か！」

簪は刀使いに向けて走りだす。本来肉弾戦は不得意であるはずの簪は、この場はどうか逃げきるために最大限の努力をするつもりだった。が、そこに乱入者が現れる。皆彼女を忘れてないか？そう！今のこの場に現れたのは誰もが知ってるあの。風鈴音！鈴は簪と刀使いの間に入り簪を止める。

「簪、ここはあたしがやるわ！」

「わ、わかった。よろしく！」

簪はタケルに付いてきたや少女を連れて、「逃げるんだよお」をする。すると、束から通信が入る。

《あ、スナイプ？今から表示させるマップに、幻夢コーポレーションの機材とおんなじ物を増設しといたから。そっちに行つてね。》

「はい、わかりました。」

簪が表示されているマップの通り行くと、確かに全く同じ物があつた。

その頃鳳鈴音は

刀使いは鞘に収まっていたその刃を抜く。その鋭い刃を風に向ける。風はいつも通り、蹴りを繰り返すが、柔軟な動きで避けられる。更に、生身に刀を振るわれるし、その動きは刀までもが柔軟な動きをする。故に戦いづらい。それでも、なんとか蹴りを喰らわせようとチャンス伺い、背中を見せるといふ隙を見つけたので蹴るために踏み込むと、バレエで見るような動きで片足を後ろに上げ、吹き飛ばされる。

その頃一夏は

ドラルバグスターの攻撃に耐えきれず、押しに押されていた。そして、風と同じ場所に殴り飛ばされ変身が解除される。そして、一夏やタケルの前に黄色くて顔が描いてあるヘルメットを被った男が現れる。その男の右手にはバグヴァイザーが装

着されており、ディスプレイにはパックマンが映し出されていた。

「ウイルスをばら撒いたのは、あなた達か！」

すると、ヘルメットの男は声に加工が入った声で名乗った。

「我が名は、Dr・パックマン。」

「どうしてこんな事をするんだ！」

と、叫んだのはタケル君だった。

「人類への復讐、とでも言っておこうか。」

そう言って Dr・パックマンとその仲間、僕らに背を向け、消えていった。

一方その頃楯無は

「それではお嬢様、発射いたします。」

「うん、ドンときなさい！」

「カウント。5、4、3、2、1、発射！」

虚ちゃんがボタンを押す。すると大量の水が出てくる。ミステリアス・レイディのアクアナノマシンを使い、水でパックマンを一纏めにして行く。そして、そのま

マガシャコンソードを取り出し、パックマンを水ごと凍らせるのだった。

内容スッカスカですね。ごめんなさい proto です。

シティーウォーズが楽しすぎるんじゃない。

この平成ジェネレーションズ編の見立ては8話ぐらいで蹴りをつけたいなと思ってます。

第61話 New Virus 発生！

うん、これ多分10話以上いきますね。

どうも、織斑一夏です。東さんが（勝手に）増設した設備を使って倒れた少女の容態を確認しています。すると、ポッピー（明日那が患者について説明を始めた。

「患者は、清宮左蓮ちゃん。IS学園の一年生。」

「僕と同じクラスの子じゃないですね。」

「調べた所この娘、はてさてパズルってゲームの開発者みたい。」

「この娘が、凄いですね。」

「一夏の方が凄いもん。（ブー）」

と、頬を膨らませる簪は至高。

「あはは、ありがとう簪。」

スキャンが終わると、出てきた文字は……

「no data?……症状が計測できない。まさか！新種のウイルス！」

「でも、タケルさんも感染してるはず。あの、タケルさん。熱とか症状無いですか？」

と、簪が尋ねる。

「俺は平気です。なんともありません。」

「痩せ我慢は体に毒ですよ。」

と、お坊さんが言う。すると、隣の女性がタケル君のおでこに手を当てる。

「熱は………無いみたいだけど。」

「アカリ、俺は大丈夫だよ。」

アカリというのか。よし覚えた。

隣接しているブルーフィングルームにて、モニターを使い衛生省の方と連絡していた。

「私日向ひなた恭太郎きょうたろうが衛生省いや、日本政府を代表して、非常事態宣言を発令させていただく。とまあ、久しぶりだね、織斑一夏君。」

「ご無沙汰しております、日向審議官。」

「大天空寺のゴーストハンターのみなさんもよろしくお願いします。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

「さて、一夏君。今回の件についてわかっていることは、あるかな。」

「とりあえず、パックマンが何者かに操られウイルスにされていること、犯人は Dr・パックマンと名乗っていること。我が社の物が盗まれ、また職員への被害も物凄
い事になっている。と、言った所でしょうか。」

「うむ。ではパックマンウイルスについて、治療法の検討はついているのかい？」
「ええ。おそらくバグヴァイザーのウイルス本体を叩けばウイルスは除去されるか
と。」

「でも、私達の攻撃は全然効かなかった。」

「その辺りの事は、どうなんだね？」

「それに関しても、解決してません。パックマンの天敵が、ゴーストって呼ばれてる
んです。」

「え？それって俺が変身できなくなったのと同関係が！」

「はい、パックマンはパワーアップキーを食べた時だけ、ゴーストを食べれるんです。」

「つまり、高熱の症状が出なかった代わりに、パックマンにゴーストの能力を食べられたっていう事です。」

と、簪が言ってくれる。

「だから、俺は変身できなかったのか。」

「現在、タケル君の眼魂を借りて、分析してます。完了次第東さんが完成させてくれる筈です。」

「わかった。では、また。」

と、ここで通信は切れた。

「それじゃあ、俺たちは情報収集に行ってきます。」

「タケル君、変身できないんだから無茶しないでね？」

「はい！わかってます。」

そう言ってタケル君は何処かへ行った。

今日12時にはがっこうぐらし！カイザも

更新する予定です。お楽しみに。

第62話 知り合い刑事は元 Rider

今回はタケルサイドの話になります。

やあ、こんにちは。俺は天空寺タケル。18歳の誕生日に眼魔に殺されて、仮面ライダーゴーストとなって15個の眼魔を集めて生き返った。でも、パツクマンにゴーストの力を食べられてしまった。だけど！下を向いてなんて居られない！今は俺に出来ることをするだけだ。

ってなわけで、今警察署に来てます。警察署内はかなり忙しい感じが漂っていて、人の往来が絶えない。俺たち3人は座って待っていると、若い1人の刑事さんが目の前に大量の資料を持ってくる。

「よかった。無事に生き返ることが出来て。」

資料を置いて右手を差し出して、握手する。

「泊さん！ご無沙汰しています。」

この人は泊進とまりしんのすけノ介さん。以前とある事件で知り合った刑事さんだ。

「すみません、お忙しい時に。」

「ああ、大丈夫だよ。早速これを見て欲しい。」

と、一番上のファイルを開き、顔を見た2人の他にもう1人の男のデータを見せてくれる。

「昨日、警官隊を全滅させた奴らだ。全員、ネクストゲノム研究所って所に勤めていた。遺伝子医療の研究員達だ。」

「……遺伝子医療？」

と、アカリが聞くと泊さんは頷く。すると、逆側に居る御成（＊お坊さんだよ）が核心的な事を聞く。

「Dr・パックマンの正体は？」

「おそらくこの男だ。」

と、泊さんはページを1枚めくる。そして、説明してくれる。

「財前美智彦ざいぜん みちひこ、60歳。遺伝子医療の権威で、研究所の所長を務めていたドクターだ。ただ、ここで問題なのが……。」

と、ここで泊さんは一息置いた。

「こいつらは全員、6年前に死亡した事になってる。」

「「え？」」

俺たち3人は口を揃えて驚いた。

「施設も封鎖されて、端末の情報も全て削除されてた。唯一復元できた映像がある。」

とパソコンを出し、映像を出す。

「それがこれだ。」

と、パソコンの画面をこちらに向ける。

そこには、資料の4人と見られる人たちが、何やら手術服を着て台の前に、オレンジ色の粒子が放出？され苦しんでいた。その後彼らは、

「消えた。」

と、補足説明をするかの様に泊さんが

「この研究所にはヤバイ噂があつてな、クローンだの突然変異生物だの、怪しい研究をしていたらしい。」

「いかにもマッドドクターって感じね。」

そろそろ迷惑になると思い帰ろうとすると、泊さんが玄関まで送ってくれた。

「何故、消滅した奴らが今になって現れたのかは、わからないが。奴らの潜伏先は警察で突き止める。」

すると、突如アカリの携帯が鳴る。

「奴らが現れたって。」

「本当か？…行こう。」

それを俺は止める。何故なら……

「これ以上は危険です。泊さんはライダーに変身できないんですから。」

そう、この人は俺と同じ仮面ライダーだった。今はもう、変身できないけど。

「それを言うのならタケル殿だって…。」

「しー！相手が相手なんでは俺たちとは俺たちが。行こう。」

と言って俺たちは駆け出す。

その影で、

「俺も変身さえできれば。」

と、進ノ介は呟くのだった。

進行が遅いですね。protoです。

頑張りますので、皆様どうぞよろしくお願いします。

第 63 話 L i f e の大切さ。

まだまだ続くよジェネレーションズ！

これは清宮 左蓮の検査が終わってから、ブリーフィングまでの間の出来事になる。

織斑千冬は部屋の外にある小窓から中の様子を見ていた。

「織斑先生？ 一体どうしたんですか？」

「いや。何故犯人は我が校の生徒、しかも彼女だけを狙ったのか気になってな。」

「え？ 清宮さんだけを？」

「ああ、IS を動かせる者が欲しいのであれば、別に誰でも良かったはずだからな。」

「なるほど、確かにそうですね。」

そこで、会話は終わった。

僕らが清宮さんを看病していると、彼女が目を覚ました。

「体調はどう？ 清宮さん。」

「ねえ、ここはどこ？」

「IS学園の特殊医務室だよ。」

僕は咄嗟に思いついた名前を述べた。

「清宮さんは感染症にかかってしまったんだ。」

それを聞いた清宮さんはすぐにベットから降り

「もう平気なんで、戻ります。」

と言いついていこうとするが、すぐにバランスを崩し、楯無さんが支える。

「あれ、楯無さん？ いつからここに？」

「今しがた着いたのよ。それよりも、無理しちゃダメよ。安静にしないとね。」

「ねえ？ 君を襲おうとした白衣の連中が誰だか知ってる？」

と、タケル君が尋ねるも、

「全然。」

タケル君は素っ気なく返された。

「でも、明らかに君のことを狙ってた！何か理由が……。」

アカリさんが追い打ちをかける様に言うも、

「知らないって言ってるでしょ！」

そう叫ぶと今度は御成さんが反応する。

「まあ、最近の若者は。それが目上の人を取る態度ですか！」

「ま、まあまあ。」

と、何故か僕がなだめる。

「君、あのはてさてパズルの開発者なんだって？そんな若いのにスゴいなあ。」

「何言ってるの？それ皮肉？天才ゲームクリエイターの織斑一夏さん！」

しまったあ。最近有名だから褒めようとして失敗してしまった。

「あ、いや。クラスでかなり話題になってるところか、ほとんどみんなプレイしてるからさ。」

「なら、わかるでしょ？どれだけ人気を保つのが大変か。忙しいのでこれで。」

「待って！体を壊したら仕事どころじゃなくなるよ。これは同じ立場の人間とし

て言えることでもある。」

「そうだよ。何をやるにも、命あってこそなんだから。」

すると、ドアが開く。

「生徒が望んでいないんだ、解放してやれ。」

「千冬姉、どうして？」

「生徒には生徒の事情がある。(許してくれ、一夏。ここは先生としての威厳を保つ為なんだ)。まあ、条件付きではあるがな。」

「織斑先生、その条件は？」

「監視付き、というよりは護衛になるがな。」

「わかりました。その条件飲みますよ。」

と言って楯無さんが監視についた。

僕はその後IS学園の屋上に居た。そこに来たのはタケル君だった。

「大変ですね。ドクターライダーっていうのも。どんな患者のわがままにも対応しなければならぬなんて。」

「それが僕の罪滅ぼしだから。」

「これをフランスで拾った時は、一夏君が僕と同じ高校生だなんて思いもしなかったな。」

「タケル君の方こそ、一度死んで仮面ライダーになったなんて、医学を学んでいる者としては信じられないよ。」

「だからこそ、わかるんです。こうして生きていることのありがたみが。」

「尊敬するよ。僕と同じ年代なのに、そんな風に思えるなんて。」

「一夏君は、医療の勉強をして、ライダーとして人を助けて、ゲームを作って人を笑顔にすることができるとしてスゴイです。」

「まだ、医療の方はまだまだ勉強中だけだね。」

「それじゃあ、俺はアポ取りに行くのでこれで。」

「うん、じゃあまた後で。」

こうしてパックマン襲撃事件の 1 日の幕が降りた。

その頃 IS 学園近郊にある寂れた建物では、

「あとは彼女が発症するのを待つだけです。」

「いよいよ計画が実る。」

すると、Dr・パックマンが口を開く。

「ゲノムグラフの進捗状況は？」

パソコンに向かっていたガタイのいい男が答えた。

「間も無く完成だ。」

モニターには、DNAの二重螺旋構造に何か手を加えたような画像が映し出されていた。

なる早で臨海学校に行かなきゃと

思っているプロトです。

でも、あえて焦らすのもいいかもしれないですね、

今日はハロウィンですね。どうしようハロウィン編とか

書いてあげなくていいかな？

第 64 話 Dr・Pacman の正体と目的

次の日。タケル君は警察署に行っていた時の僕らの行動は清宮 左蓮の監視……という名の護衛です。現在の監視は千冬姉と明日那モードのポッピーですね。因みに千冬姉は明日那の正体がバグスターであるとは知りません。

「交代の時間か。じゃあ頑張れよ。」

と、言われた。ここで簪と僕とで監視を代わる。かれこれ 5 時間ほど外でゲームを作っていたようですが、気を失ってしまいました。清宮さんをひとまず日陰のベンチへ寝かせ、眼を覚ますのを待つ事にしました。

数分すると清宮さんは目を覚ました。

「はあ、ダサいわね。」

「一夏が言ってたよ。体を壊したら元も子もないって。」

「ほっといてよ。どうせ、死ぬ時は死ぬのよ。」

「そうかもしれないけど！だからこそ、必死に生きようとするんじゃないのかい？それに、ゲーム病にかかっているんだ。それは僕に責任がある。君を治すのが僕

の務めだ。」

「私には要らないって言ってるのよ！」

「彼女の言う通り、貴様らは不要だ。」

全身にノイズがかかった男が現れる。

「Dr・パックマン！何故ここに！」

「まずい！こっちへ！」

僕は急いで清宮さんの腕を引きDr・パックマンから逃げ、アカリさんに連絡を入
れる。

建物の中に逃げ込むと、前から刀使いの女と長身のドラゴナイトハンターの男
が現れ、逃げ道を塞ぐ。

「あなた達、一体何なんですか。」

「どうして清宮さんを狙うんだ？」

すると、清宮さんを指差し、

「パックマンウイルスはその女を見つけ出すための駒にすぎない。目の前の物を全

て食べ尽くすパックマンの習性を利用し、ウイルス検知プログラムを仕込んだ。」

「ウイルス?……まさか!」

清宮さんが苦しみ始め、急にふらつく。

「彼女はバグスターウイルスの保菌者。我が計画のカギを握る女だ!」

清宮さんの体からバグスターウイルスの塊が現れ始める。

「やっぱり、新種のウイルス!」

清宮さんの体からバグスターウイルスが放出される。完全に発症してしまった。

ウイルスは段々と体を形成し、新たなバグスターを生み出した。清宮さんの体は透け、ノイズが走る。

「バグスターに体に乗っ取られた。」

と、簪が言う。そのタイミングでタケル君達が合流する。

「Dr・パックマン! お前の正体は分かっているぞ! 財前美智彦! 6年前に消滅したはずのお前が何故ここにいるんだ?」

と、タケル君がDr・パックマンの正体を叫ぶ。

「「え?」」と、僕らは驚かざる終えなかった。すると、Dr・パックマンは、

「そう、私は財前美智彦。4年前の計画を再びこの手で成し遂げる為に、バグスターとして蘇ったのさ。」

と、自ら正体と目的を明かしヘルメットを脱いだ。

頑張って進行させてます。もちろん臨海学校編の

予想図も考えておりますので。

今日から11月です。皆さん、FGOウエハースは

買いましたか？私は10個買ってSRギルガメッシュが

当たりました。本命のアルトリアさんと、ジャンヌ（オルタも）

欲しいのでコンプするまで買おうと思ってます。

第65話 タケルとアカリの Time Limit

61話からの話数のズレを修正しました。

「4年前、我々は革新的なゲノムプロジェクトを進めていた。」

と、語り出すのは財前美智彦だ。

「バグスターウイルスに感染した人間から、新たな生命体バグスターを生み出す手術だ。だがその時事故が起き、我々はウイルスに感染した。人間としての生命を終え、ゲームの世界の住人となったのだ。今度こそ我々の計画を実現させる為にね。」

「4年前の計画が何かは知りませんし、突き止めようとも思いません。……だけども！その為にバックマンを利用して、何の罪もない大勢の人達を、清宮さんを犠牲にするなんて……医学を学ぶ者として、ゲームを作る側として、何より！あなたを人として許せない。」

「我が計画を邪魔する者には死のオペを施す！」

「さあ、パズルの時間だ。」

と、唐突に（おそらくはてさてパズルのバグスターである）ハテナバグスターが、その手に持つ杖を天高く上げ、ブロックを落とし攻撃してくる。

「危ない！」

簪に攻撃が当たるとの身を呈して阻止した。

「簪！怪我はない？どこか打ったりしてない？メガネは無事？ええっと、それからそれから。」

「一夏、落ち着いて。私は平気、一夏が守ってくれたから。」

「そう、良かった。」

周りを確認すると、御成さん無事、タケル君もなんとか、アカリさんを確認しようとした時、2人の男性が入ってくるのが目に付いた。その2人から目を離し、すぐさまアカリさんを探す。すると、アカリさんの上にはパズルのブロックを出現させる空間が現れていて、尚且つアカリさん本人は動けそうにない。それに僕らの距離じゃ、高速化を使っても間に合わない！そんな時だった。

「アカリ！危ない！」

タケル君がアカリさんの上に覆い被さるようにして守る。なんとか間に合ったが、無慈悲にもブロックは爆発してしまった。爆発による煙が晴れ、そこには2人が居た。が、アカリさんは目を開けて居ない。

「アカリ……アカリ！ そんな……死なないで！」

「……タケル？」

「アカリ？……ふう、よかった。」

そこに駆け寄る御成さんと2人の男。すると、タケル君とアカリさんの体が透け始める。この症状は……。

「タケル……体が……」

再びアカリさんは気を失ってしまった。

「アカリ！……そんな、俺たち死んだのか？」

「違う！ バグスターウイルスに感染したんだ！」

「24時間以内に、この俺を倒さなければ2人とも消滅する。」

すると、ハテナバグスターが言った。タイムリミットは24時間、となってしまうのだった。

だいたい中間くらいに来ました。

もうしばらくお付き合いください。

第66話 生身の Battle

今回は謎に三人称視点です。

ハテナバグスターの発言に怒りを露わにした2人の男がいた。1人は天空寺タケルの兄貴分である深海マコト。そして、眼魔界の王子？であるアランだ。

「よくも、タケルとアカリを！」

「お前達は許さない！」

すると、後ろから刀使い武田上葉は、「無駄よ！」と言い、後ろから2人に迫り、刀を振るう。

一方、ドラルバグスターに変身していた長身の男竜崎一成は狙いを一夏に絞り、攻撃を開始した。隣にいた簪を押し逃し少しでも攻撃しようとするが、普段生身での戦闘をしない一夏は、即座にボロボロになっていた。

戦闘経験豊富なマコトとアランも、実剣持ち相手では少々部が悪いようで、避け

ながらも隙を伺うが、攻撃に踏み込めずにいた。そして、マコトが刀を突き出した腕を掴み拘束。後ろからアランが首を絞めようとするも、マコトが蹴りで弾かれ、その柔軟な体を生かさされアランも蹴られる。が、刀を落とす事には成功した。そこを好機と見たか攻撃に移った2人だが、生身でもかなりの実力を持つ上葉に圧倒された。

タケルは覚悟を再度決める。

「御成、アカリを頼む。」

「はい。」

「病院に案内します。」

「お願いします。」

ポッピー「明日那は御成と一緒にアカリを病院まで運ぶ。すると、マコトとアランはタケルに

「お前はあいつを倒せ！」

「アカリと、お前自身を必ず救うんだ！」

タケルは頷くとハテナバグスターに殴りかかるが、やはり効いていないようだ。

一夏は完璧にボコられていた。それはもう、うん。例えようがないくらいボコボコにだ。竜崎に首を絞められていると清宮さんは、

「あなた、ドクターでしょ？早く助けてよ！」

すると、財前は一夏を絶望させるかのように言った。「お前には誰も救えない」と。そして、目の前でバグヴァイザーに清宮さんは閉じ込められるのだった。そして竜崎に吹き飛ばされ、倒れていた。

4人が満身創痍で倒れている。竜崎は一夏にトドメを刺そうと近づいてくるが、横から入ってきた者に回し蹴りをされ、間合いを取る。さらにそこに2人が歩いてくる。そう、簪に楯無さん、それに回し蹴りをした2代目だ。

「お姉ちゃん達、連れて来たよ。」

簪が呼んできてくれたようだ。一夏の目の前に来た楯無さんはポケットからあるものを取り出す。

「はいこれ、束さんからの預かりもの。」

それは、ゴーストの眼魂を分析して作ったガシャット。『カイガンゴースト』ガ

シャツだった。

さて、もう少しダァ。もう少しデェ、

このジェネレーションズ編は完結ダァ！

って言いたい。けど言えないみたいですね。

第 67 話 VS パックマン

簪、楯無、2代目が倒れている僕の目の前に並ぶ。そして、その前には上葉と竜崎が立ちはだかる。

「そちらがその気なら……こちらも。」

竜崎はプロトドラゴナイトハンターZガシャットを取り出す。

「お置きよ。」

すると、上葉もプロトギリギリチャンバラガシャットを取り出した。

「あなた達の相手は、私よ。」

と、楯無さんがカッコよく決めるが…

「どけえ！そいつは俺が倒す！」

マコトさんが楯無さんと2代目の間に割って入ってきた。

「無理しないでよ。そんな体で。」

2代目が心配したのかそう言うと、アランさんは、

「私は戦える。」

そう宣言した。すると、簪はゲーマー魂に火でも着いてしまったのか、

「あなたたち、ただ者じゃなさそう。」

その様子を見ていた上葉と竜崎は互いに顔を見合わせ分散した。上葉を追いかけに行ったのはマコトさんと楯無さんだ。一方、竜崎を追いかけたのは残ったアランと簪、2代目だった。

タケル君は、ハテナバグスターに生身で挑み続けていた。が、軽々と吹き飛ばされていた。

「お前を倒して、アカリを救う！」

僕はタケル君に近づき、フラついた体を支える。その間にハテナバグスターの横に来た財前は、

「ゴーストの力無き今、貴様らではパックマンに勝てまい。己の無力さを思い知るがいい。」

と、言いバグヴァイザーから大量のパックマンを放出し、巨大なパックマンを呼び出す。そして、財前とハテナバグスターは去ろうとする。

「待て！」

タケル君はそれを追いかけてようする。が、パックマンの姿が変わり、最初は見慣れた姿だったが、たちまち目が釣り上がり、口に牙が生えたかのような感じになる。

「逃げよう！」

と、僕はタケル君の腕を引き逃げようとする。パックマンは落ちている瓦礫をくらいながら僕らを追いかけてくる。途中お互い転んだものの、互いのフォローでなんとか外まで逃げ切ることができた。だがしかし、パックマンは勢いよく飛び出し、建物に衝突しそうになりそのまま建物を食べてしまった。タケル君は変身ができない状態にもかかわらず、パックマンに向かっていこうとする。

「危険だ！君は変身できないんだ！そんな体で戦ったら君まで！」

と言い、僕はタケル君を引き止める。だけど、タケル君はその腕を振りほどき、「変身できるとか出来ないとか、関係ない！死ぬのは……怖い。でも、それより怖いのは目の前のアカリの命が消えること！俺は戦う。俺は、俺を信じる！」

確かな意思を持ち、戦うことを決意した。大切な人を守るために。その気持ちが届いたのか、幻夢コーポレーションで解析し預かっていたはずの、ゴーストの眼魂

がタケル君に向かってくる。それをキャッチすると、タケル君は腰にゴーストドライバーを出現させる。意思の力でゴーストの力を蘇らせたんだ。

「力が復活した。」

タケル君は眼魂のボタンを押し、ドライバーに装填する。

『アーイ！ バッチリミナー！ バッチリミナー！ バッチリミナー！』

「変身！」

『ガイガン！ オレ！ レッゴー！ 覚悟！ ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

ドライバーのレバーを操作してゴーストに変身する。パックマンに向かって行くタケル君を見て、僕の頭の中では色々な人の言葉が蘇る。

そして、僕は……

「うわあああああ！」

と、大きな咆哮をあげゲーマードライバーを装着する。そして、束さんからの届け物のガシヤットのボタンを押し起動させる。

『カイガンゴースト！』

「やってやるよ！ ゴーストの力で！ 変身！」

ゴーストのガシチャットをドライバに装填。

『ガツシチャット！レッツライド！メツチャライド！ムツチャライド！ワツチャライド？アイムアレジェンドライダー！』

ゴーストの浮遊能力が使えるようになり、空中から幽霊のように攻撃を繰り返す。

戦闘開始からしばらく経って、俺らは押され始めていた。

「パックマン、目を覚ますんだ！」

しかし、パックマンが正気を取り戻す事はない。

「必ずクリアする！エグゼイドの力で！」

と、フランスで拾ったという俺モチーフの眼魂を取り出した。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

カイガン！平成ライダー！新たな個性！これが平成！』

ゴーストがエグゼイド魂に変身したので俺もレベルアップする。

『ガツチャーン！レベルアップ！命燃やす！覚悟決める！俺がゴースト！』

ここに2人の仮面ライダーが踏み揃う！

ええっと、昨日投稿したよね？

って、感覚に襲われたp r o t oです。

さて、妹さえいればいいが面白い

って話が出来ただけ。小説買おうか悩んだりします。

そんなことより、エグゼイドの映画時間的にはこれで

40分位の内容が、終わったことになるはずです。

もうちっとお付き合いください！

第 68 話 Release されるパックマン

俺はエグゼイドゴーストゲームレベル 2 に、ゴーストはエグゼイド魂に変身し、俺はガシヤコンブレイカーを取り出し、ゴーストはガンガンセイバーを持ち構える。

「よっしゃあ！行くぜ！」

俺とゴーストはパックマンに向かって走り出す。浮遊能力を駆使してパックマンの口から大量に放出されるパックマンを避けながら、攻撃を仕掛ける。見事ヒットするが、俺たちが空中で並んだ瞬間にパックマンに食べられてしまった。

パックマンに食べられると、そこには迷路？が広がっていた。周りを見渡すと後ろから巨大パックマンが俺たちを食べようと襲いかかる。またもゴーストの浮遊能力に助けられ、俺たちは急いでパックマンから距離を取ろうとする。壁まで来ると左右に道が分かれている。パックマンが凄い勢いで近づいてくる為、俺たちが空中に逃げると、パックマンは壁にぶつかる。パックマンにぶつかられた壁は壊れ、

破片が飛んで行く。こちらに向き合い直したパックマンに向かって、攻撃を仕掛けようと上から接近するも、パックマンの体から光線が放出され中々近づけない。それでも、パックマンが放出した光線の隙間を通り、ゴーストが横から斬る。その後、俺が上に向かって下段斬りを繰り返して、流れでそのままパックマンの後ろへ回り着地する。そして、パックマンにスタンが付与されたのか、パックマンの動きが止まった。が、すぐにこちらを向く。

「少しだけ辛抱だ、パックマン。」

「行こう！」

俺は頷き、ドライバーからゴーストガシヤットを抜き、端子から埃を取るよう息を吹きかける。そして、キメワザスロットホルダーに装填しスイッチを押す。

『ガシヤット！キメワザ！』

ゴーストも手で目の形を作ると、ドライバーのレバーを二回操作する。

『ダイカイガン！ヘイセイライダー！オメガドライブ！』

俺もホルダースイッチをもう一度押す！

『カイガン！クリティカルストライク！』

ゴーストの後ろに目の紋様が現れ左足にエネルギーが送られる。俺は右足に、エネルギーをチャージする。だが、技に入る前にパックマンが口から光線を放ち、俺たちは一旦避けるために空中へ。そのまま光線を避け続け、合流してダブルライダーキックを繰り出す。

「うおおおおおおお！」

『会心の一発！』

「はあああ！」

俺たちはパックマンを貫通した。

『GAME CLEAR!』

俺たちは外に出ることができた。そして、パックマンの笑顔を取り戻し、解放することが出来たのだった。俺たちは変身を解除する。これでパックマンウイルスに感染していた人たちは治ったことでしょう。

しかし、

「アカリを……助け……ないと。」

タケル君が倒れてしまった。

無事にバックマンの笑顔を取り戻した織斑一夏くんでした。

さて、次回は二手に分かれたマコト・楯無組の
分かれてからのお話です。

第 69 話 兄と姉の乱舞

間違えて学園生活部カイザに投稿しそうになった。

これは一夏とタケルがパックマンを倒す前の話である。

私は更識楯無。今は刀使いを追ってるわ、よくわからない男性と共に。すると、地下駐車場？みたいなどころに出て、刀使いの女はプロトギリギリチャンバラガシャットのボタンを押し、ゲームエリアを展開した。大量のチャンバラバグスターが発生し、刀使いまでの道がバグスターで溢れる。大量に発生したバグスターのせいで変身ができない。私はバグスターの攻撃を避けつつ、心臓マッサージの要領で心臓に衝撃を与え、バグスターを倒す。一方で男性の方は、喧嘩の要領で殴り倒していた。

（こう言う行動は野蛮とかしらすか？まあ、一夏君がやらないからそう感じて

るだけで、他の男子高校生は喧嘩に明け暮れてたりするのかしら？)

何故か私はそんな風に思っていた。

私は淡々と振り降ろされる剣を避けては、心臓に衝撃を与え、バグスターの腕を掴み護身術の要領で地面に叩きつける。これでも国家代表なんだから！そうこうしていると、刀使いは自分の膝に直接プロトガシヤットを挿して、ギリルバグスターへと変身する。その様子を見ていた男性が腰にベルトを出現させ、眼魂(だったかしら?)を取り出し横のボタンを押すと、そのまま手を離した。すると、開いていたドライバーにすっぽりと入り、ドライバーの蓋を閉めると、真ん中の穴からパーカー?が出てきてバグスターを一掃してした。

『アーイ！バッチリミロー！バッチリミロー！バッチリミロー！』

体の重心を右側に置いたポーズを取っている。上半身のポーズを例えるなら、昔パパから聞いた仮面ライダー2号という戦士のポーズに

そっくりだった。パパは昔仮面ライダー2号を見た事があつたらしく、実演してくれた。その話は置いて、男性はそのポーズから体を真っ直ぐに戻すと同時に、ドライバーのレバーを二回動かす。

『カイガン！スペクター！レディゴー！カクゴー！ドキドキゴースト！』

すると、体が何かの素体みたいな感じになり、パーカー？を着るとパーカー？から顔面が出てきて、変身が完了したのだろうか？ギリルバグスターに向かって走って行く。

「ちよっと！無茶しないで！」

『タドルクエスト！』

「変身！」

『ガッシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム？アイムアカメンライダー！』

「術式レベル2！」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！タドルメグル！タドルメグル！タドルクエストォ〜！』

私は変身しながらギリルバグスターに接近してガシャコンソードで斬りかかる。

「これより、バグスター及び、プロトガシャット切除手術を開始する。」

青き兄と姉がここに揃う。

ええと、あれ！旦那が何を言っているのかわからない件！

あれ、面白いですよね。将来あんな夫婦になりたいです。

さて、初っ端から全く本編に関係ない事を話した

protoです。進行が遅くてすみません。

第70話 2人の Strongest form

strongest form は最強フォームです。

まあ、スペクターもブレイブももっと強くなるんですがね。

私はあのバグスターは連携しないと勝てないという事を察し、彼に質問することにした。

「ねえ、あなた名前は？」

「俺は、仮面ライダースペクター。」

「ok、スペクターね。あのバグスターは使ってるガシャットがかなり強力なの。それに、本人の身体能力の高さを考えるとまともな一騎討ちじゃ勝ち目が薄い。」

「わかった、援護する。」

と、言うところからかまた眼魂を取り出し、ボタンを押して手を離し、またピツタリとベルトに入れ再び蓋を閉めると、パーカーが現れ少々残っていたバグスター

を殲滅した。スペクターはレバーを引き、

『アーイ！バッチリミロー！バッチリミロー！』

バッチリミロー！』

そしてレバーを押し込む。

『カイガン！ノブナガ！私の生き様！桶狭間！』

パーカーを着るとフェイス部分が変わった。パーカーによって変わるのだろうか？と、手の形をした銃？を手に持ったスペクターは銃撃を開始する。だが、ギリルバグスターの刀によって全て弾かれる。まるで石○○エ門みたいだ。キリ○とも言えるか。まあ、2つとも簪ちゃんの受け売りなだけだね。ガシャコンソードを構えて、前線に出る。ソードは炎モードにして斬りかかる。が、ギリルバグスターはエリア移動を開始した。2対1でこの狭い場所では不利と感じたんだろうか。場所が広くなり、バグスター状態でも生身の柔軟さを出され厄介になった。斬撃を飛ばし始めたので、私はすかさずAボタンを押す。

『コ・チーン！』

氷モードにした後すぐに、Bボタンを3回押した。強攻撃で斬撃を凍らせる。

そしてスペクターは武器にある目の模様をドライバーの目にかざす。

『ダイカイガン！ノブナガ！オメガスパーク！』

大量の分身銃が現れ、その分身の銃から出る弾は本物だったようだ。だか、やはりある程度は回避されたようだ。

「一気に決めるぞ！」

「ええ！」

『ドレミファビート！』

彼は何やら異様な雰囲気的眼魂を取り出し、ボタンを押して目を光らせ、それをドライバーに入れ蓋を閉じレバーを引く。私はレバーを閉じ、ガシヤットを挿入する。

「術式レベル3！」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！タドルクエストォ〜！アガチャ！ド・ド・ドレミファ！ソ・ラ・シ・ド！OK ドレミファビートォ〜！』

彼は私と同時にレバーを戻した。

『ゲンカイガン！ディープスペクター！ゲットゴー！覚悟！ギ・ザ・ギ・ザ！』

ゴースト!』

仮面ライダーディープスペクター、仮面ライダーブレイブレベル3 2人の最強フォームがここに揃う。

はい、寝落ちマンprotoです。

誰か助けてください。つてくらい

眠気が襲って来ます。

つてか、10話とか言っておきながら、

長々とやってしまい申し訳ないです。

投稿設定をミスしておりました。

第71話 簪と鈴の Combination!

寝落ちしない方法が知りたいです。

(寝る前までに書けば済む話ですね。)

ディープスペクターになったスペクターと、レベル3 ビートクエストゲーマーになった私達にギリルバグスターは「いつまでもしつこい！」と叫び、こちらに向かって走ってくる。ある程度向こうが間合いに入ってくると、刀で水平斬りを繰り返す。が、リズムを取りながらしつかりと対処する。そして、ギリルバグスターの意識が私に集中したところでディープスペクターが必殺技を放つ為レバー操作をした。

『ゲンカイダイカイガン！ディープスペクター！ギガオメガドライブ！』

ディープスペクターの必殺技は私の頭上スレスレで発動され、ギリルバグスターに当たる。その間を逃すまいと、ガシャットをキメワザスロットホルダーに挿入

し、ボタンを二回押す！

『ガッシュャット！キメワザ！ドレミファ！クリティカルストライク！』

だけど、向こうも中々の手練れで体制を整えられ、強攻撃の斬撃で相殺される。爆風が私たちを包む。煙が晴れると、お互いに変身が解除しきさっていた。相手もかなりのダメージを食らっているのか即座に撤退した。

「一先ず、安全確保ね。」

その瞬間だった後ろでバタッ！と倒れる音が聞こえ振り返ると、スペクターが倒れていた。

一方でアランと簪、鈴はというと……

私は更識簪。仮面ライダースナイプ、私たちが使う中で一度は開発中止に陥ったゲームのガッシュャットを使って戦っている。あ、一夏の彼女です。これ重要ね。カンペ読んだけど復習になった？

でね、今は長身の男を追って開けた場所に出た。男はプロトガッシュャットを取り出しボタンを押すと、多数のバグスターを出現させる。私は変身せずにガッシュャコンマ

グナムを取り出し、離れた位置から狙い撃つ。生身でガシャコンマグナムを使えるように訓練はした。私はあんまり運動できないから、生身でも援護出来るようにしないと。それに、一夏も気を使ってくれて、某メダルを撃つ銃の反動みたいながない。エネルギー弾を撃つタイプだからね。その一方で鈴はバリバリ格闘戦を行なっている。ただやっぱり1対1の状態だから、援護しないとイケない。でも、近接戦闘は不向きな私と遠距離攻撃ができない鈴のベストマッチで完璧なコンビネーションを発揮する！まあ、私たちゲーマーコンビはヘイト管理（ゲームで敵のターゲットを自身に集中させたり、別の誰かが意図的にターゲットになるようにすることなど）もしっかりしてるので大丈夫。鈴に敵が集まりすぎた時は私が撃ちまくりターゲットを私に絞らせて、鈴が私に近い敵から、私が中々遠距離の敵をやる。一方である男の人は1人で突っ走ってる。そして痺れを切らしたのか長身の男はプロトドラゴナイトハンターZガシャットを体に挿し、ドラルバグスターとなるのだった。

こんにちは、最近寝落ちが多いprotodです。

睡魔って強いですね。

さて、次回で巨大パックマンとの戦いの間の話が終わるので
中間地点を過ぎます。

第72話 簪の Death Sentenced

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

マジでごめんなさい。寝落ちしました。

ドラルバグスターに変身した男の名前は竜崎一成という名前であることが束さんから告げられた。何やらタケルさん達が掴んでくれた情報らしい。それが、ドラルバグスターに変身される前に告げられたが、一夏を傷つけるような奴に抱く感情は怒りや恨み、一夏を傷つけた奴への贈り物は1つ……死だよ？私は奴が出現させたバグスターと戦っている時には出さなかった殺気を、ドラルバグスターと向き合った時にはしっかりと出した。それは、私からの死を警告するメッセージ……：否死刑宣告だった。

ドラルバグスターに竜崎が変身するとすぐに眼魂とやらを男は取り出した。それを腕の機械に入れて、何やら操作すると変身した。

『standby loading テンガン！ ネクロム！ メガウルオウド！ クラッシュ・ザ・インベーター！』

「ちょっと落ち着きなさいよ、ノリが良すぎよ。」

と、隣で鈴が叫ぶ。私たちもゲーマードライバーを取り出し、装着する。ガシャットを取り出し、走りながら変身する。

『ガッシャット！ レベルアップ！ ババンバン！ バンバン！ バンバンシューティング！』

『ガッシャット！ レッツゲーム！ メッチャゲーム！ ムッチャゲーム！ ワッチャゲーム？ アイムアカメンライダー！』

私はレベル2に、鈴はレベル1で変身を終わる。私は……ネクロム？ いいのか、が頭を下げた瞬間にガシャコンマグナムでドラルを撃つ。そして、既に接近していたレーザーがタイヤで攻撃を開始した。あのタイヤ重くないのかな？ ドラルがレーザーに攻撃しようとするのをしっかりと私がカバーする。正確に言えばドラルが殴られながら、ドラルを撃ち抜くみたい。まあ、溜め攻撃を繰り返そうと手にエネルギーをチャージしてるところを狙い撃つ感じ。

「スナイプ！早めに決めるよ！3速！」

「りよーかい、第三戦術！」

『ギリギリチャンバラ！』

『ジェットコンバット！』

『ガッシャット！ガッチャ〜ン！レベルアップ！』

『爆走バイクウ〜！アガチャ！ギリ・ギリ・チャンバラア〜！』

『バンバンシューティング！アガチャ！ジェットコンバア〜ット！』

ネクロム？を見ると見た目が変わっていた。

「よっしゃ！いくわよ〜！」

と、意気込んだ瞬間にチャージ攻撃が入り、ネクロム？の姿が元に戻る。すると、即座に腕の物のボタンを押す。

『デストロイダイテンガン！ネクロム！』

レーザーもガシャコンスパローにギリギリチャンバラガシャットを挿す。

『ガッシャット！キメワザ！ギリギリ！クリティカルフィニッシュ！』

「ほら、くらいなさい！」

ネクロム？は腕からエネルギー弾を、レーザーは大量の光の矢を放つ。ドラルが怯んだ隙を逃さず、私もガシヤットをキメワザスロットホルダーに装填し、即座にボタンを二回押す。

「これで、ミッションコンプリート。」

『ガシヤット！キメワザ！ジェットクリティカルストライク！』

空中から大量の弾丸を浴びせる。煙が晴れると変身が解除されており、ドラルは撤退した。

あ、あのお兄さん？が倒れました。

寝落ちしない方法が知りたいPROTOです。

皆さま、寝落ちしない方法が知りたいです。

知ってる方いらっしゃいましたら、また自分はどうしてる

などありましたら、ぜひ教えていただきたいです。

第73話 財前のDNA組み替え

また寝落ちまた寝落ちまた寝落ち。

本当に申し訳ありませんでしたあああああああ！

巨大パックマンを召喚した財前とハテナバグスターは、自らの拠点に戻っていた。拠点ではパソコンに向かい合いキーを叩くガタイのいい男くるせ来瀬そうじ莊司が居た。

「よし、完成だ。」

来瀬は完成したDNA構造を投影する。

「この図面通りに、遺伝子を組み替えろ。」

と、ハテナバグスターに命令する。

「どうなっても知らんぞ。」

すると、杖を高く突き上げたハテナバグスターが財前の遺伝子を組み替え始めた。財前の体に莫大な負荷がかかり、苦しみ始めた。

その頃、IS学園では…

アカリを連れてきた御成とポッピーが目にした光景は、たくさん居たはずの感染者が一気に治ったというものだった。それを見てポッピーは

「ありがとう、パツクマン。」

と、呟きアカリを特殊医務室へと運ぶのだった。

しばらくすると、簪や楯無に手傷を負わされ撤退して来た竜崎と上葉が入って来た。

「やはり、あいつらもただじゃ終わらない…か。」

そして、そのタイミングを待って居たかのように財前が苦しまなくなった。

「問題ない、目的の力は手に入った。」

財前は満足気に笑みを浮かべていた。

そして、その拠点に一人、左手の中指に大きな指輪をはめた人物が近づいていた。

その夜、IS学園特殊医務室には二人の男が寝ていた。応急処置を施したのは一夏で、疲れ切ったのか今は簪の膝枕で寝ていた。なんとも羨まsh……………
sh……………sh……………

「え！けしからん。そこに鈴が現れよう簪に尋ねた。」

「ねえ、一夏ってさ。どんな適合手術受けたのかな？」

「え？私たちと同じじゃないの？」

「だって、昔の一夏はあんな風に性格変わらなかった気がするのよ。もしかしたら、適合手術を繰り返してあなるようになったのかなって。」

「そう？まあ、鈴は私より先に一夏と関わったみたいだからかな？私の知ってる一夏はどんな時でも全力を尽くしてゲームに向き合う、ゲーム病にかかった人達への償いを、その人達の笑顔を取り戻す、同じ高校生とは思えない一面が多いから。その中でも私を好きでいてくれるのはすごく嬉しいんだ♡」

と、寝ている一夏の頭を顔を赤くしながら撫で始めた。その光景を見て鈴は、ポケットにあらかじめ入れていたのだろうブラックコーヒーを飲み始めるのだった。

次の日の朝、財前の拠点の前には警官隊が列を成して、警戒態勢を取っていた。そこに竜崎が上葉へ報告を入れる。

「警官隊が来ました。」

「今行く。」

「私一人で十分ですよ。」

すると、通信を切り警官隊に近づいて行くのだった。

本当に申し訳ありませんでした。

再び寝落ちするという事をしてしまいました。

名前 Mr・寝落ちにでも変えようか（絶対に嫌でござる。）

第74話 Wizard は敵なのか？

寝落ちしなかった。よかった。

財前の拠点に居る警官隊の指揮を取って居るのは泊進ノ介だった。進ノ介は出てきた竜崎に投降勧告を始めるのだった。

「これが最後の警告だ。速やかに投稿……投降しろ！」

それに対する竜崎の回答はこうだった。プロトガシヤットを見せるように持ち上げる。

「今、大事な実験中でしてね。ここを通すわけにはいかないんですよ。」

竜崎がドラルになろうとしたその時だった。

『プリーズ』

突如魔法陣が現れ、警官隊を消してしまふ。その様子を見ていた竜崎は驚愕せざ

るを得なかった。すると、背後から声が聞こえた。

「邪魔者は俺が消してやった。」

「誰だか知りませんが、余計な真似を。」

その男は笑みを浮かべるのだった。

研究所内では、財前がバグヴァイザーに捕らえた清宮左蓮にこう告げるのだった。

「君は究極生命体になるのだ。この私と同じようにね。」

財前はその身を変化させ、究極生命体『ゲノムス』へと姿を変えた。その姿を見た左蓮の反応は、もちろん拒絶だ。しかし、財前はその意思を無視し、彼女にゲノムスの遺伝子情報を与え体に変化するのを待つのがあった。そこに、竜崎ともう一人、謎の男が現れる。最初に反応したのは上葉だった。

「誰、その男？」

すると、男は自己紹介を始めた。

「操真晴人、魔法使いさ。あんたたちの計画に希望を感じてね。仲間に入れてく

れ。」

返答を行なったのは竜崎だった。

「素姓もわからないあなたを、仲間にするわけがないでしょう。」

「おいおい、ここを嗅ぎつけた警官隊を消してやったんだ。見張りなら、こんなやつより役に立つぜ。」

「聞き捨てならないですね。」

二人は睨み合う。

「面白い。」

と、財前が操真晴人を仲間に加えるのだった。

IS学園特殊医務室

この特殊医務室に1羽の鳥？が舞い込む。その鳥は足場を見つけると姿を変えて黒電話のような形になった。そして、電話のコールを音が響き、この部屋に寝ていた天空寺タケルを起こしたのだった。目覚めたタケルは電話を取った。

「もしもし、天空寺です。」

『タケル？泊だ。奴らの潜伏先がわかった。場所は……。』

「はい、ありがとうございます。失礼します。」

タケルは普段の服装に着替えて部屋を後にした。

大天空寺のメンバーはアカリの元へ来ていた。

「アカリさん。」

最初に口を開いたのは深海マコトの妹のカノンだ。それを皮切りに修行僧のシブヤとナリタが言葉を発する。

「どうしてこんな事に。」

「ようやく平和に暮らせると思ってたのに。」

弱音を吐いた二人に対し、御成は

「ほらほら、暗い顔しない。まだ治らないと決まったわけじゃないんですから。」

その言葉に3人の顔に希望が戻った。

そして、その部屋にタケルが訪れる。

はい、新たな人物が出て来ました。

僕の前作を読んでくださった方ならお分かりですよ？

あ、中身は一夏君じゃないです。

第75話 戦う Reason

タケルはアカリが寝ている部屋を目指す。その歩き方はおぼつかなく、満身創痍だと一目でわかるレベルだ。なんとか部屋にたどり着く。

「アカリ！」

「ダメだよ！ 安静にしてなきゃ。」

と、タケルを止めるのはポッピーポパポだった。

「俺とアカリに残された時間は？」

この問いに対し、ポッピーの解はモニターを指差す。

「……あと、8時間。」

どこかへ行くこうとするタケルを止めたのは、御成だった。

「タケル殿、一体どこへ？」

「泊さんから連絡があった。奴らの潜伏先がわかったって。」

「でも、その体なんだよ？ しかも1人じゃ！」

「俺には時間がないんです！ それに、たとえば俺1人でも……。俺たちのためにマコ

ト兄ちゃんとアランは戦ってくれた。その2人の為にも、俺は戦わないといけな
いんだ！」

そう言って、タケルは部屋から出て駆け抜ける。タケルはアカリを救うべく、人々
の未来を守る為に、戦いの場へと足を向けるのだった。

僕は一体どうすればいい。もう手遅れかもしれない。僕の責任だ……。

(どうした？諦めるのか？ノーコンティニューで患者を治して笑顔にするんだろ
？)

こんな声が聞こえた。幻聴か、はたまた自分自身の芯の部分からの声か。どちら
かかはわからないし、どちらでもないかもしれない。それに、彼女の笑顔がフラッ
シユバツクした。

「そうだ、清宮さんの運命を決めるのは、まだ……早い！」

僕には戦わねばならない理由がある。生み出してしまったバグスターの被害を食
い止め、愛する人を、その人が好きな物を守らねばならない。決意を固め僕は駆け
出した。IS学園に停めてあるバイクを取り、タケル君の元へ。

「全く、世話がやけるといふか。ゲームと簪以外はちょっと抜けてるな。一夏は。」
そう、一夏に激励したのは、パラドだった。

「タケル君!!」

タケルが振り返ると異形のバイクに乗った一夏が居た。

「僕も、君と一緒に行くよ。清宮さんを救わないと。」

「先生。うん、一緒に行こう!」

腕相撲式握手を交わし、バイクへ跨る。

「あ、ところで先生って何?」

「お医者さんみたいだから?」

「何故疑問形?」

と、まあこんな一幕もあった。

レーザーからガシャットを借り、目のないレーザーをタケル君のバイクの後ろにつけ走らせる。廃墟のような研究所の前でバイクを停め、金網の柵へと近づく。す

ると、

「待ってたぜ。さあ、来いよ。」

僕は付いて行こうとするタケル君の腕を掴む。

「待って、罨かもしれない。」

「まさか。お前達を案内する為に、見張り役になってやってたんだぜ？」

「あなたは一体？」

僕が当然の質問をぶつける。それに対し男は、

「仮面ライダーウィザード。お前達の希望だ。」

その頃警察署では……

「もしもし？霧子か？悪いけど今日は帰りが遅くなりそうだから。」

泊さんは笑みを漏らす。

「だから自分の心配だけしてろって。もう、霧子1人の体じゃないんだから。な
？」

さらに深い笑みを浮かべる。

「じゃあ、行ってくる。」

電話を切ると、ネクタイを締め直しエンジンをトップギアにし、その顔には決意が感じられる。そして、歩みを進めるのだった。仮面ライダードライブとして。

ラストバトルは近い。

さあ、刮目せよ！

と、偉そうなことは言いません。

ただ、次回もよろしくお願いします！

それでは、作者は学園カイザを書くので失礼！

第76話 付いてきた Sisters

まあ、IS要素のための筆休め回ですね。

僕は財前の研究所に入ろうとした時だった。

「一夏あ！ちよつと待てえ！」

声だけで誰か判別できたので、出来るなら振り返らずに進んで行きたい。……タケル君とウィザードさんの顔を見ると振り向かざるを得ない。

「はあ、千冬姉。いや、織斑先生。この非常事態にあなたがこんなところに来たら不味いはずですよ。少なくとも今回の一件、僕は轡木さんには報告しますが。このことに関して……」

「なら一夏はどうなんだ？」

「僕は既に衛生省から報告済みです。それに篠ノ之さん。何故あなたはこんなところ……？」

「それは、お前が出て行くのを見てだな。」

幼馴染としてしっかりかん……！見守らねばなるまいと思つて。」

「はあ、仕方ありませんね。簪、お二人を学園まで連行してくれませんか？」

と、茂みに隠れていた簪が顔を出す。簪は頬を膨らませている。怒っているのだろうが、可愛いすぎて怖くない。KMT（簪たん、マジ天使）だわあ。

「何も言わずに行つたのは謝ります。」

僕は、簪に近づき耳元で囁く、

「後で、なんでも言うこと1つだけ聞くおぢや。」

「わかつた。なんでもって言ったからね？」

「わかつてるよ。それと、最悪の場合やるなら式式にしてね？ライダーシステムにいちゃもんつけられちゃうから♡」

「うん♡一夏の作品を貶めるような事はしないよ♡」

タケル君が密かに二本用意していたブラックコーヒーを、ウィザードさんに渡すのだった。

「まあ、念の為こっちでも手を打ちますか。」

僕は携帯を取り出し、ある人に連絡を取る。

『prrr、prrrはい、こちら轡木です。』

「あ、いつも姉共々お世話になってます、織斑です。」

『織斑社長でしたか。これはどうも。それで、どのような用件で？』

「織斑千冬及び、篠ノ之箒さんなのですが、かくかくしかじかでして、織斑教諭に關しては……学園の復旧費用にの60%分引いて、復旧費用として使ってあげてください。そうした方が校舎や生徒の為、それに織斑教諭自身の為にもなりますし、給料も浮かべられることでしょう。」

『わかりました。ありがたく使わせていただきます。』

「のこり40%の内、30%は我が社で出しましょう。それと、篠ノ之箒さんに関しては、反省文を……400字詰め原稿用紙42枚で。お願いします。」

「待って一夏あ！なんで電〇〇賞の短編小説並みの反省文を書かねばならんのだ！それに！その女はどうなる！」

「メタいこと言わないでください。それに簪はうちの所属ですからね。そして僕の彼女ですから。」

「クッ！千冬さん……織斑先生も何かおっしやって……？……ヒイ！」

篠ノ之さんが後ろを向くと、千冬姉は死んだ魚のような目をしていた。

「オルコットさん、シャルロットさん、それにボーデヴィツヒさんも。一緒に戻ってくださいね。」

「「は、はい！」」

こうして、簪に連れられて、千冬姉と篠ノ之さんはトボトボと、残り3人もサッ！と帰って行った。

……………ネタがありマシエーン。

これにて失礼

第77話 last battle は肉弾戦から

「さあ、行きましようか。」

バカな行動をした千冬姉と箒etc…を、IS学園に返し、タケル君やウィザードさんの方を向き直した。

「こっちだ、付いてきてくれ。」

ウィザードさんが中に入って行く。それに続いて僕らも中へと進む。奥まで進むと、財前以下4名が居た。

「財前！清宮さんを返してもらおうぞ。」

「元々君のでもなからう。」

そのあとに声を発したのは竜崎だった。

「騙した……、という訳ですか。」

「あ、ちょっとした魔法さ。サプラーイズ。」

と、いたずらっ子のような投げキス？をやる。今度簪にやってみようかな？どんな反応するんだろう。ちなみに竜崎の反応は……舌打ちです。すると、ハテナバ

グスターが大量のバグスターを出現させたので僕らは広い場所へと移動する。

僕は大量のバグスターを素手で殴ったりして、とりあえず逃げる。みんな、逃げるが勝ちだよ？だが、刀使いの上葉に捕まりその軟体な動きの餌食になる。刀は使っていないが生身の状態の格闘戦でもかなりの腕を誇る。大ぶりのパンチを繰り返すも軽く避ける。そんな彼女相手にインドアゲームクリエイターの僕はボコボコにされるのだった。

ウィザードは、細い道に大量のバグスターを誘い込んだのかそこで一網打尽にしている。魅せる蹴りのような美しくも強い蹴りを繰り返して、バグスターを倒す。そこに竜崎が現れる。竜崎が首でバグスターを下がらせる。タイマン、それも足と足とのぶつかり合い。最初は竜崎が押していたが、機転を利かせた動きでウィザードも反撃を行う。基本的な攻撃スタイルが蹴り攻撃のウィザードは慣れた動きをしていた。

ゴーストは、素手での攻撃でかなりのバグスターを捌いていた。すると、後ろからの奇襲に気がつかずにいたタケルを守ったのは泊さんだった。

「と、泊さん！」

「たとえ変身出来なくても、俺は仮面ライダードライブだ！いくぞ！」

泊さんは拳銃を所持している。おそらく弾は、ロイミュードと戦っていた当時の特殊弾丸なのだろうか、バグスターにもダメージが入っている。だが、バグスターに拳銃を弾かれる。素手で戦闘をするが、そこに来瀬が現れる。

「警官隊を全滅させたのはお前か！」

と、勇猛果敢に攻めようとするが流星は現役プロレスラー……*ヤッ、フッ、フッ、*

体格がいいだけではなく、関節なんかも使ってくる。関節を振りほどき、体勢を立て直すと殴りかかるが、屈強な胸筋に阻まれる。そして片手で泊さんを持ち上げ数回机に叩きつける。そして、吹き飛ばした。

泊さんを中心に他3人も集まる。来瀬がとどめを刺そうと近づこうとした時だった。

『ヤッ！ オレンジアームズ！ 花道！ オンステージ！』

上から戦国武者？が降ってくるのだった。

どんなに努力しても、原作一夏ほどの喧嘩強さはありません。これで喧嘩強かったら最強になっちゃいますよ一夏君。

さて、次回からいよいよクライマックス！

第78話 ベルトさんや鎧武との Reunion

ごめんなさい。今回戦闘ないです

僕等と竜崎達の前に鎧武者のような物？それとも人？一番最初に声をあげ、その名を叫んだのはウィザードさんだった。

「鎧武！」

「ガйм？」

「そう！俺は仮面ライダー鎧武。よろしくな。因みに、種族的には元人間のオーバード、まあ神様って感じだけだな。」

「僕の考えてることわかるんですか？」

「ん。まあ、顔に書いてあったしな。それと、ほれ。」

ドライブさんに近づくと、何やら機械を渡していた。

「これって……。」

『やあ、進ノ介。We meet again。』

「ベルトさん？どうしてここに？」

僕はこう反応せざるを得なかった。

「ベルトが喋った!？」

すると、ベルトのディスプレイが変わり表情？怒ったのがわかるようになった。

「ムウ、初対面の相手に呼び捨てはどうかと思うけどねぇ。」

「まあまあ、いつものことだろ。この人…って言っているのかわからないけど、本名がクリム・スタインベルトって言うんだ。」

「それは失礼しました。お初にお目にかかります。僕は織斑一夏、仮面ライダーエグゼイドです。幻夢コーポレーションと言う会社でCEO兼開発主任を務めております。以後お見知り置きを。」

と、しっかり礼をする。一社の社長たる者礼儀はわきまえないと。

「幻夢コーポレーションって、確か4年程前にできたゲーム会社の？」

「そうです。いやあく刑事さん達にも知られているとは。」

「俺も君のゲームをプレイするために度々こっちに戻って来てたんだよなあ。」

「話が逸れてしまいましたね、申し訳ありません。」

「ああ、そうだったな。で、ベルトさんなんで？」

『眠っていたところを鎧武に叩き起こされてね。全くアンビリーバブルだ。まさか、ドライブピットの地下深くまで来るとは。』

「流石、神様ってすげーな。」

『進ノ介、エンジンの調子はどうだい？』

「ああ、トップギアだ。……久々にひとつ走りつきあえよ。」

『OK』

「どうやらみんな、思いはひとつみたいだな。」

僕は、来瀬達の方へと向き直った。すると来瀬が

「やつら、全員仮面ライダーか！」

そのセリフをねえらっていたのか財前がハテナバグスターと共に現れる。そして僕に見せつけるがごとく、バグヴァイザーの画面の中で異形となりつつある清宮さんを見せて来る。

「財前！彼女をどうする気だ？」

「私と同じ、究極生命体へと進化させるのさ。」

「前座はいい、さっさと倒して清宮さんを救う！」

すると、来瀬達がプロトガシャットを取り出し、体へと挿していく。そこには、ロボルバグスター、ドラルバグスター、そしてギリルバグスターが立ち並ぶ。そして財前も異形へと姿を変えるのだった。

うん、役者は揃った！

次回から怒涛のクライマックス！

なお、次回あたりから本編のネタバレが含まれてしまいます。

でも、これが正しい。何故なら原典エグゼイドも映画で先行で知ることができたからです。

第 79 話 変身する平成五大 Rider

寝落ちしてすみませんでしたあああああ。

向こうの準備が整ったみたいなので、こちらも変身を開始する。

「さあ、人類の希望を返してもらおうか。」

右手をベルトにかざすと、ベルトが本来の姿に戻る。そして、左手に赤い宝石が埋まった指輪をはめる。

『ドライブバーオンプリーズ！シャバドゥビタツチヘンシーン！シャバドゥビタツチヘンシーン！』

「市民の平和を脅かす奴は、俺が許さない。」

ドライブドライブバーを巻き付け、エンジンキーであるアドバンスドイグニッションを回し、ベルト内のコア・ドライブア・Dを高速回転させ、変身待機状態にし、シフトスピードの後部を回す。

「アカリの命を未来に繋ぐ！」

ドライバーを出現させ、オレゴーストアイコンを取り出し、ボタンを押す。ゴーストドライバーにセットし、目の形を手で作り、構えを取る。

僕は普段通りガシャットを取り出し、ボタンを押す。

『マイティアクションX!』

「清宮さんの運命は……俺が変える！」

「[[[変身!]]]」

ウィザードは左の手をベルトにかざす

『フレイルムプリーズ! ヒー! ヒー! ヒー! ヒー! ヒー!』

魔法陣を通り、変身した。

刑事さんは、ブレスレットのレバーを動かす。

『ドライブ! タア! イプスピード!』

パーツが装着され、体の左側から右下にかけてタイヤが装着される。

『カイガン! オレ! レッツゴー! 覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

『ガッシャット! ガッチャーン! レベルアップ! マイティジャンプ! マイティ

キック！マイティマイティアクション X！」

「さあ、ショータイムだ！」

「ここからは、俺たちのステージだ！」

「行くぞベルトさん。」

『OK！start our engine！』

「命、燃やすぜ！」

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

ここに、ライダー5人が集結した。

各々決め台詞を言ったところで、ハテナバグスターがドラル、ギリル、ロボルとウィザード、鎧武、ドライブをどこかに飛ばした。

その頃、特殊医務室では

アカリが目を覚ます。そして、タケルが庇ってくれた時のことをフラッシュバックさせる。

「行かなきゃ。ねえ、ポップピー。私をタケルのところへ連れて行って。」

ポップピーは無言で、アカリの肩を支えて着替えさせた。特殊医務室を出るとそこ

にはマコトとアランが居た。2人とアイコンタクトを取り、全員でタケルの元へと向かうのだった。

よお、俺は仮面ライダーウィザード。えーと、まあ最後の希望だ。うん。あー、主が寝落ちしたみたいだ、すまん。って、なんでこんなこと言ってんだ？まあ、今は戦いに集中しようか。

バグスターの格好がなぜか、修行僧みたいだが気にしない気にしない。

え？尺の都合上で次から？え？メタい？

……次回もショータイムだ。

まあ、最後ネタみたいになりました。

寝落ちしたら、手元にBluetoothキーボードがありました、protoです。

本当、誰か寝落ちしない方法を教えて欲しいです。

まあ、寝落ちする前に書き上げれば？って言われそうですが。

第80話 ウィザードの Show time

ウィザードのopを聴きながら読んでいただけると
きつときつと、よく感じると思います。

さあ、今日こそショータイムだ！え？日跨いでない？それ作中でだろ？え？
メタい？織斑一夏の干渉？何言ってるんだ？更識……楯無？うーん、なんか頭に
引っかかっている。

まあ、いい。とにかく敵を倒す。

無数とも言えるバグスターがいる。あのバグスター、俺らを移動させる時に増や
したか？全く、とにかく行くぞ。

俺はフレイムスタイル……というのは関係ないが最初から上空からの蹴りをかま
す。3体くらいか？まあ必殺技って訳じゃないから構わないけど。もちろん、バ

グスター達は俺に群がるように接近してくる。上から振られる剣は、敵の腕ごと止め、一本背負いの要領で投げ飛ばす。その瞬間に右から来た敵には肘打ちをして、近くの木箱まで吹き飛ばす。そして、なんかジェットストリームの劣化版みたいな動きのやつらが来たので、先頭を転ばせる。すると、後ろのやつらもドミノ倒しのようで倒れたので、俺は上からのジャンプ回転踵落としを一番上のやつに叩き込む。その後数人で囲んで来ようとしたが逆立ちからの回転蹴りで蹴散らす。中距離から接近して来た相手にはスライディングからの下からの上蹴りで対応する。

「魔法の力、見せてやるよ。」

左手の指輪を変えベルトの手の向きを左から右に、そしてもう一度左に変え、左手をかざす。

『ウォータープリーズ！スイ〜スイ〜スイ〜』

ウォーターに変身した俺が次に繰り出すは、この魔法だ。さあご堪能あれ！俺はベルトの手の向きを左から右に変える。右手の指輪を変えかざす。

『ルパッチマジックタッチゴー！リキッドプリーズ！』

中隊くらいの数のバグスターに液体でまとわりついて、一気に圧迫して倒す。そ

のままの流れで液体から戻る時に近くにいたバグスターをついでに蹴り飛ばす。

「さて、続いてはこれだ！」

左手の指輪を緑色の物へと変え、かざす。

『ハリケーンプリーズ！フー！フー！フー！フー！フー！フー！フー！フー！』

風を纏いながら飛行し、飛行に使っている風をも使い敵を吹き飛ばす。

「さあ、四元素の最後の 1 つ。その身で感じる！」

茶色？の指輪をはめて、ベルトへとかざす。

『ランドプリーズ！ドッドッ、ド・ド・ド・ドンドンッ、ドッドドン！』

ハリケーンスタイルで上空にいたので、その落下を利用し、ランドスタイルのパワーある攻撃をさらに強くする。

「あれ？なんかまた増えてない？」

よく見るとバグスターが増えていた。

「はあ、しょーがないか。」

『フレームプリーズ』

「それじゃ、バイクショーと行きますか。」

右手の指輪を変える。それをかざす。

『コネクトプリーズ！』

魔法陣からマシンウィンガーを取り出し跨るとエンジンを吹かす。増えたバグスターを轢く。バイクに当たったバグスターはきりもみ回転をしながら吹き飛ぶ。俺が前輪を軸に回転したり、大きな円を描きながら走行して、だんだん小さくしていくような走りをしてバグスターを蹴散らす。しかし、それでも減らない。

「こうなったら、一か八かの賭けだな。」

俺は本来使えない筈の指輪を右手にはめ、ベルトの手を右手向きにしてかざした。

『ドラゴライズプリーズ』

「お、使えちゃった。じゃあ、ドラゴンショーの開幕と行こうか。ドラゴン！俺に従え！」

変形したバイクでウィザードラゴン操る。ウィザードラゴンは炎を吐いたり、バグスターを食べたりする。しかし満足したのか、魔法陣へと帰って行ってしまった。そして、真打ドラルバグスターは登場する。

さあて、次は鎧武！

次からは鎧武のステージだあ！

第81話 鎧武の Stage！

よう！俺は鎧武！仮面ライダー鎧武だ！えーと、これからバグ……なんとかを倒せばいいんだよな？まあ、やる事をやるだけだ。

「ここからは俺のステージだあ！」

俺は右手にオレンジアームズの専用武器である大橙丸^{だいたいまる}、左手に無双セイバーを構えて、敵をギッタバツタ斬りふせる。2体同時に来たので、両方を防ぎ弾き返す。大橙丸と無双セイバーをくつつけて薙刀モードへと移行させさらに斬る！

……あれ？なんか敵増えてね？まあ、それならそれで……おっ、あった。俺は桜の意匠があるロックビークル『サクラハリケーン』を取り出し、展開する。

「おら、よっと！ここからは、コイツとのショーステージだ！」

サクラハリケーンを走らせつつ、無双セイバーで敵を斬る。バグなんとかは轢かれたくないのか道を開けようとするが、纏まり過ぎて避けきれずサクラハリケーンの餌食になる。途中でドリフトをしてバグなんとかを吹き飛ばす。

「よっしゃあ！次はこれだ！」

パインの形のロックシードを取り出し、ドライバーにセットして切る！

『パイン！ヒンギ』　！パインアームズ！粉砕デストロイ！』

空にチャック？が出現し、大型パインのパインが落ちてそれが俺に刺さり、割れることでアームズチェンジする。今はパインアームズだ！俺はパイナップル型の鎖鉄球『パインアイアン』を振り回して、範囲攻撃を繰り返す。これ、振り回しておけば集団戦ではかなり有利なんだぜ？そして、俺はいちこのロックシードを取り出して、ドライバーにセットして切る！

『イチゴ！ヒンギ』　！イチゴアームズ！シュシュっと！スパーク！』

イチゴクナイを上空に大量に投げる。すると、ある程度の距離のバグなんかを倒せた。

「お次はでかいぜえ！」

スイカのロックシードを取り出し、セット&カット！

『スイカアームズ！大玉ビックバン！ヨロイモード！』

大きな大きなスイカのヨロイを着て、俺はその巨体に合わせたスイカ薙刀を振るう。たちまちバグなんかは撤退しようとする。が、後ろからギリルバグスターが

第82話 ドライブの Drive battle

ドライブ、サブライズフューチャー

………神………

はあははは

黎斗「私が神だあ！」

月「いや、僕が新世界の神だあ。」

セイエイ「いや、俺がガンダムだ。」

黎・月「いや誰だよ。」

俺は、いや俺たちは！仮面ライダードライブ！

「ひとつ走りつき合えよ！」

『進ノ介、久々の運転だ。』

「ああ、でも最初からフルスロットルでいく！」

『ハハハ。相変わらずだねえ、君は。Ok Start our engine!』

ドライブはバグスターの大群へと突っ込んでいく。基本攻撃は殴るだ。かつてロイミュードと戦っていた当時は武器など無く、素手（変身はしてるが）で戦っていた。生身の攻撃力が衰えている事を感じた彼は、使えるはずの武器を使わず殴りながら、一本背負いやら護身術やらを訓練するのに丁度良いと感じた。しかし、多勢に無勢とでも言うべきなのか、彼の処理速度が落ちたのか、やつらの集合スピードが速くなったのかはわからないが段々と攻撃が当たり始める。そして波のように押し寄せて来るバグスターに飲み込まれそうになった時だった。彼の耳には独特な雰囲気のカラクション？を鳴らしながらその赤いボディがバグスターに突っ込む。『全く、君は相変わらず意地っ張りだ。さあ、早く乗りたまえ。ドライブングテクニックは、落ちてないだろねえ?』

「ああ、もちろんだ。」

大量のバグスターをトライドロンの体当たりや、ドリフトによる攻撃で大群の数を減らす。

そして、一度トライドロンから降りる。ドライブがトライドロンから降りると、

ハンドルの付いた剣『ハンドル剣（進ノ介命名）』がトライドロロンから飛んで来る。そのハンドルを右に三回切る。

『ターン！ターン！Uターン！』

一度全力で前進して、途中で思いっきりUターンして斬る。更にハンドルを切り、ハンドルの真ん中クラクションが鳴るところを押す。

『ドリフトカイトーン！』

ドライブがその場で回転して敵を斬りふせる。

次にシフトカー『マックスフレア』を取り出し、シフトブレスにセットする。

『タイヤコウカン！マックスフレア！』

炎を纏った拳でバグスターを熱で除菌する。

次のシフトカーは黒くてゴツイ。

『ドライブ！タイプワイルド！』

黒いボディに、右肩にタイヤが付く。その肩タイヤでバグスターをタックルし吹き飛ばす。

『ドライブ！タイプテクニク！』

緑のシフトカーで、精密行動？を得意とする。そしてトライドロンからは『ドア銃（これまた進ノ介命名）』が飛んでくる。そして、正確無比な射撃でバグスターを確実に仕留めていく。

そして、タイプスピードに戻る。シフトブレスにセットさせているシフトスピードを、アドバンスドライブニッションを操作してから、3回レバーのように上げ、スピードを上げシフトアップする。

『スピードスピード！』

高速で多数のバグスターを一気に攻撃して、残頭数を一気に減らすのだった。

前書きでネタを使ってしまった。

第 83 話 エグゼイドの A I D

ドライブ達レジェンドライダーがそれぞれ飛ばされてから、残った二組はゲノム VS エグゼイド、ハテナバグスター VS ゴーストという風に戦っていた。

俺は……運命を変える。その為に……作ったんだ。ヒト 1 人救えなくて……仮面ライダーを名乗れるか！あの……苦渋を飲まされたグラフィイト戦……愛する者の大切な家族さえ救えなかったあの時とは違うんだ！今は命を賭してでも守らねばならない物が、人が居る！

「左蓮の運命は俺が変わえる。俺が！俺たちが仮面ライダーである限り！」

俺はガシャコンブレイカーを持ち、ゲノムスに向かい走り出す。攻撃を避けるのと同時にこちらの攻撃を叩き込むにはジャンプ攻撃というのはとても良い選択肢だと俺は思った。実際、空中に逃げてそこから蹴れるし、重力も影響して威力も上がる。でも、踏ん張りがきかない分、防御力が落ちてしまうため、一概にいいとも言えない戦法なのだ。まあ、それは置いて、俺はゲノムスに向かい直して走り出

した。すると、向こうも飛びながらの蹴りを繰り返して回避しきれず吹き飛ばされる。体勢を立て直し、向かっていこうとするが、ゲノムスがラリアットをしようとしてくる。それを止め、腕を固定しそのままゲキトツロボッツガシャットのボタンを押し、ゲノムスを弾き飛ばすと同時にバク宙で距離を取る。

「大・大・大変身！」

『ガッシャット！レベルアップ！マイティマイティアクション X！アガチャ！ゲキトツロボッツ！』

レベル3になった事でゲノムスを圧倒する。ロケットアームでゲノムスを吹き飛ばそうとするが、中々飛ばない。俺は上にあったチョコブロックを破壊し、エナジーアイテムが来る事を望んだ。結果はエナジーアイテム獲得！

「よっし！エナジーアイテムゲット！」

『発光！』

体から眩い光が放たれ、ゲノムスの目が眩む。

今のうちにガシャットをホルダーに装填し、即座に必殺技へと移行する。

『キメワザ！ゲキトツ！クリティカルストライク！』

ロケットアームが何度もゲノムスに激突する。が、効果は薄いようだ。そして、ゲノムスは

「さあて、死のオペを完了させよう！」

と言い、その全身からパツクマンと同じように光線を放つ。多数の光線が、多方向へと放射され回避できず、俺はモロ直撃を受けてしまった俺は変身解除された。

それでも、諦めまいと立ち上がる。

「何故、ヒト 1 人のためにそこまでする？ 所詮、貴様を必要ないと言った赤の他人だろう？」

「そうだとしても！ 生み出してしまった物に、生みの親が責任を取るのは当然だ！ それに、彼女の笑顔を取り戻す。ゲームに関わる全てのことをやっている時の笑顔を！」

すると、ゲノムスのバグヴァイザーから、清宮左蓮が出てくる。

「ありがとう、やっぱりあなたは他の人とは違うのね。お願い！ 私を助けてください！」

「安心して、何があろうと必ず救い出すから！」

「ええい！小賢しい真似を！」

ゲノムスは強引に清宮さんを閉じ込め直した。

.....

第84話 ゴーストが Lose?

今回の話のゴースト変身音は、pixivから引用しております。

エグゼイドがゲノムスと戦っているのと同時にゴーストもハテナバグスターと戦っていた。

オレ魂のゴーストは、お世辞にもバグスターと渡り合っているとは言えない状態だった。自らの間合いを取れず、ハテナバグスターの杖でいいように扱われているように見える。ゴーストは杖で柱に叩きつけられ、そのまま逆方向のスクラップの山にまで吹き飛ばされる。だが、ゴーストとて歴戦の勇士、吹き飛ばされると同時に眼魂を変える。

『カイガン！ムサシ！決闘！ズバツと！超剣豪！』

赤い両手が刀のパーカー『ムサシ魂』へと、ゴーストチェンジをし、ガンガンセ

イバーのパーツを外し二刀流で挑む。タケルが一番最初に手に入れた眼魂。タケルの憧れの偉人であり、オレの次に一緒に戦っていた。そんなムサシ魂でも、歯が立たずに杖で柱を貫通する勢いで吹き飛ばされてしまった。しかし、タケルもすぐに戦法を変える。黄色の眼魂を取り出しチェンジする。

『カイガン！ エジソン！ エレキ！ ヒラメキ！ 発明王！』

ガンガンセイバーをガンモードに変え、ドライバーとアイコンコンタクトさせ、必殺技を放つ。

『ダイカイガン！ エジソン！ オメガシュート！』

かなりの電圧と伺える程の電気をチャージし、電気の弾丸を放つ。が、これもあまり効果がない。

ゴーストは『闘魂ブースト眼魂』を使う。

闘魂カイガン！ ブースト！ 俺がブースト！ 奮い立つゴースト！ ゴー！ ファイ！ ゴー！ ファイ！ ゴー！ ファイ！ ゴー！ ファイ！』

体が赤く変化し、マスクの目の部分も燃えているような意匠がある。ゴーストはサンングラスツッシャーで斬りかかるが、簡単に受け止められ距離を取られる。体勢を

整えようとするも、相手の遠距離攻撃を食らってしまい変身が解除してしまう。すると、タケルは別のドライバーを取り出し装着する。

「行こうみんな！」

『グレイトフル！ガッチリミナー！コッチニキナー！ゼンカイガン！ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー！ダ〜イヘンゲ〜』
 ゴーストは、グレイトフル魂へと変身する。

『レッツゴー！全員集合！メガ！オメガフォーメーション！』

アイコンドドライバーGというドライバーを使用して変身するこのフォームは、15の英雄の力が1つになっている。この必殺技は、15の英雄の力を最大まで使用した必殺技である。だが、ハテナバグスターは杖でパズルブロックを出し、必殺技もろともゴーストの変身を解いた。しかし、彼とてまだ自らの最大の力を使っているわけではない。最後に出したのは∞の装飾がある眼魂『ムゲン眼魂』。これはタケルの無限の可能性から生まれた物だ。

『ムゲンシンカー！〜！バッチリミナー←・バッチリミナー→・チョーカイガン！ムゲン！KEEP・ON・GOING！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・

ゴ・ゴ！ゴッドゴースト！』

ガンガンセイバーを弓モードにし、アイコンタクトをさせる。

『イノチダイカイガン！タノシーストライク！』

ムゲン眼魂のマークのエネルギーが射出される。

「しぶとい奴め。」

ゴースト最強フォームの渾身の一撃も、パズルブロックの大量放射の前に、ゴーストごと破れたのであった。

次回、レジェンドライダー達の戦いに決着がつきます。

第85話 ウィザードの F i n a l e

希望の魔法使いは全ての雑魚を蹴散らした。次に出てくるのは、今回彼にとってのラスボスだろう。自らと同じ竜の力を宿したバグスター『ドラルバグスター』。だがしかし、仮面ライダーウィザードは、幾多の強敵との戦いを越えてきた伝説のライダー。時に、操られた大切な人と戦い見事に救ってみせた。人々の絶望を希望へと変えてきた。この力は、指輪の魔法使いが絶望の涙を宝石に変えてきた彼だけの奇跡。これもその一つ。

『フレイムドラゴン！ボー！ボー！ボーボーボー！』

ローブは赤く染まり、マスクにはウィザードラゴンの装飾がある。現実の世界でウィザードラゴンの力を使用する為のスタイルだ。このスタイルの主な戦い方は二刀流（二丁拳銃）だ。コピーウィザードリングでウィザースードガンを二つにし、ガンモードでドラルを撃つ。そして、ソードモードへと変え、ドラルバグスターを斬る。それはさながら、ダンスのような攻撃だった。ソードダンサーとも呼ぶべきかと思わせる程だ。その攻撃はプロトガシャットの中でも上位のドラゴナイトハ

ンター乙を使っているドラルバグスターをかなり押ししている。そして、次に取り出した物はドラゴンスタイルの力を最大限発揮する為のものだ。

『ドラゴタイムセットアップ スタートファイナルタイムオールドラゴン!』

ドラゴタイムマーを使い胴にドラゴンヘッド、手にはドラゴンクロウ、背中にはドラゴンウイング、尾にはドラゴンテイルが付く。ウィザードは飛行し、テイルですれ違いざまに攻撃する。そして、上空から滑空してドラルにクロー攻撃を食らわせる。最後にドラゴンヘッドから炎攻撃をし、オールドラゴンを解く。そして、ダイヤモンドのように輝く指輪を取り出す。

「俺が最後の希望だ!」

『インフィニティ!プリィズ!!ヒースイフドー!ボーズバビュードゴーン!』
淡い水色のような白銀の魔法使い。これこそ彼の最強魔法であり、最強の姿である。これは、彼の強い想いから生まれたオリジナルの魔法。これは、いかなる者が攻撃しようとも絶対に砕けない確かな思いが形になった物だった。

「さあ、これでフィナーレだ。」

このスタイルの固有武器『アックスカリバー』を装備し、アックスモードでハン

ド部分にタッチする。

『ハイタッチ！シャイニングストライク！』

巨大化したアックスカリバーでドラルバグスターに、巨大な斧を振り下ろし爆散させた。

『Game clear』とエフェクトが発生し、ウィザードは勝利した。

第86話 鎧武の Settlement

投稿設定が狂ってました

フルーツ武者……仮面ライダー鎧武は、その身に禁断の果実である黄金の果実を取り込み、神となったライダー。そんな彼は今ジンバーレモンアームズとなり、ソニックアローで戦っていた。弓での遠中距離で間を詰めさせないように戦う。しかし、ジリ貧だと思ったのか彼はオレンジではない、ドライバーの左側にあるロックシード『レモンエナジーロックシード』から、『チェリーエナジーロックシード』に変える。

カッティングブレードを降ろし、オレンジロックシードをさらに切る。オレンジアームズの鎧となるオレンジの被り鎧と、新たにチャックもといクラックから現れたチェリーエナジーアームズの被り鎧が……………

『ミックス！ジンバーチェリー！』

オレンジとチェリーで合体し、陣羽織のような鎧が装着される。ジンバーチェリーアームズで右手に無双セイバーを、左手にソニックアローを構え、高速移動しながらギリルバグスターを圧倒する。だが向こうと諦めずに立ち上がる。武将^{鎧武}VS侍^{ギリル}と言っても過言ではないだろう。高速移動で斬りかかるが徐々に見切られ始めた鎧武は、それを察し次のアームズへと変える。それをさせまいと、渾身の斬撃を飛ばし妨害を試みる。だが、それより早くクラックからフルーツアームズが降りて来て、鎧武に当たる軌道だった斬撃を全て弾いた。

『カチドキアームズ！ いざ出陣！ エイエイオー！』

外務は背中にあるカチドキ旗を抜き、カチドキアームズカラーのオーラをギリルに向けて、飛ばす。そして、火縄大橙DJ銃を取り出す。威力を高く設定し、ギリルに向けて放つ。ギリルバグスターは回避に失敗し、直撃を受けてしまう。一時戦略的撤退をしようとするも、鎧武はさらなるロックシードを取り出す。そのロックシードは形状がすでに他のと違い、ボタンを押すと鍵となる。鍵にするとクラックから15のフルーツアームズが現れ、ベルトにカチドキの左から差し込む。そして鍵を回すと

『極アームズ！大・大・大・大・大將軍！』

白銀のアーマーに包まれた仮面ライダー鎧武極アームズ。極ロックシードを二回ひねり、無双セイバーと火縄大橙DJ銃を呼び出し合体する。

火縄大橙DJ銃にオレンジロックシードを取り付ける。

「これで終わりだ！」

必殺技を繰り出す。ギリルバグスターは受け切ろうとするが神の一撃は重く、耐えることができず、Game Overとなった。

これにて、仮面ライダー鎧武の戦いは鎧武の勝利で幕を閉じた。

第 87 話 2 人の Nice Drive!

仮面ライダードライブ。彼は既婚者である。

「ちょ！そんな事どうでもいいだろ！」

と、本人から言われたのでやめるとして（というか地の文に干渉しないでください泊さん）、彼は正体を隠しながら戦っていたが、とある事件で正体を明かして戦った。その彼は……否、彼らはシフトデットヒートを使いロボバグスターと戦っている。このタイプは暴走する危険性があるが、今の彼らなら問題ないだろう。しばらく互角のぶつかり合いが続く。そこで彼らの次のタイプチェンジが始まる。

「次はこれだ。」

『ドライブ！タイプフォーミュラー！』

レーシングカーをモチーフとしたこのタイプフォーミュラは、超高速での移動が可能である。このスピードを生かしてロボに高速で突撃する。シフトアップしなくてもかなりのスピードが出るこのフォームは訓練していないとまともに使えない。アドバンスドライブニッション、シフトブレスのボタンとシフトフォーミュラレ

バーの順に操作する。

『ヒツサーツ！フウ〜ルスロットオ〜ル！フォーミュラ！』

ドライブはロボルに向かってフォーミュラドロップ（いわゆるライダーキック）を、それを相殺しようとするロボルも全力で右のマシンアームで殴る。

『向こうのパワーもなかなかのようだ！』

「ベルトさん、弱音吐いてる場合か？またあれをやるから、もうひとつ走りつき合えよ。」

『OK 君を信じよう。』

ドライブは蹴りの体勢のまま、シフトブレスのレバーを操作し、シフトアップする。これは変身者にかかりの負荷を掛けてしまう。かつて、とある仮面ライダーとの戦いで使ったつきりだ。結果、ロボルを吹き飛ばすことに成功した。そして、トレーラー砲を準備する。トレーラー砲にシフトスピードとシフトワールドを入れ、上部の穴にシフトフォーミュラを差し込む。

『ヒツサーツ！フォーミュラ砲！』

見事に隙を突いた砲撃で、かなりロボルにダメージを与えられた。

「ぬう、こうなったら。リミッター解除！」

ロボルの出力が一気に跳ね上がる。アームを地面に叩きつけ、衝撃波ががドライブを襲う。しかし、高速移動できるフォーミュラにとってその程度を避けるのは容易だった。だががしかし！避けた瞬間に衝撃波が放射状に放たれドライブに当たり、停まっていたトライドロン付近まで吹き飛ばされる。

『進ノ介！……よかった。無事のようだね。』

「ああ、問題ない！」

ドライブは新たにシフトカー『シフトトライドロン』を取り出し、サイドのボタンを押す。

『ファイア！オールエンジン！ドライブ！タイプトライドロオン！』

後ろにあったトライドロンが、アーマーへと変化していく。そこにシフトカー達が集結し仮面ライダードライブタイプトライドロンへと変身する。

「俺はもう、二度と止まらない。」

『ヒツサーツ！フルスロットオール！トライドロン！』

必殺の蹴りがロボルを襲う。今まで機械生命体を相手にしてきたドライブには、

分が悪かったのだろう。ロボルは爆散し、そのパーツを空に散らせた。

そして、2人はあらかじめ打ち合わせをしていたかのように、

『Nice Drive!』

と言ったのでした。

第88話 ゴーストとUnification

Unificationは、天下統一らしいです。

仮面ライダーゴースト、一度死んでライダーとなり蘇ることに成功した彼の残り時間は刻一刻と迫っていた。感染したバグスターウイルスにより消滅する時間まで1時間あるかないかだろう。しかし、彼は戦い続ける。彼がこの世から消えるということは、彼の大切な人も同時にこの世から消えるという事だ。だが、彼の現状は酷い事に自らの無限の可能性をも打ち倒されたというひじょくに不味い状態なのである。

ムゲン魂を变身解除まで追い込まれたタケルには、もう為す術が無いところまで来ていた。でも、彼は諦めていなかった。

「アカリを……この世界を守ってみせる！たとえ、この命を燃やし尽くすのだと

しても！」

ハテナバグスターはタケルにとどめを刺そうとその右手から光線？を放つ。ハテナバグスターの攻撃がタケルへと向かうが、彼は避けようとしなない。否もう避けられないのだ、それ程までに彼の体力は消耗しきっていた。敵の攻撃はもうすぐそこまで近づいてきている。そんな時だった。一つの眼魂がタケルに近づき、タケルを取り込む。

タケルが目を開けるとそこにいたのは、

「……………信長さん。」

「タケル、お前の心意気たしかに感じた。だが、命を投げ出すようなことを言うのはお前らしく無いな。だが、かつて天下統一を願ったもの同士。祖国を守りたいという志は同じ。我々もお供しよう。お前を必ず生きて帰すためにも。」

どこからか、絵に描いたような2人の武将が現れる。そして、信長もそのような形になっていく。そして3人は混ざりあっていく。

現実世界に戻ってきたタケルは浮いている眼魂へ向けて即座に手を出す。が、ハ

テナバグスターによる攻撃で彼の姿は捉えられなくなってしまった。

「タケル君！」

ゲノムスに襲われながらも、その名を叫ぶ一夏。

「他人の心配をしてる場合か？」

と、的確にツツコミを入れたのはゲノムスだった。

爆発による煙が晴れ始める。煙が薄れていきだんだんシルエットが見え始める。

『カイガン！ 信長！ 秀吉！ 家康！ 果たすのはいつ？ 天下統一！』

煙が完璧に晴れるとそこには、新たな力を宿した『仮面ライダーゴーストテンカトウイツ魂』が立っていた。ガンガンセイバーを薙刀モードにしている彼は戦国武将のようだった。

「信長さん、秀吉さん、家康さん。皆さんの力、お借りします！」

速攻でゴーストドライバーのレバーを操作する。

『ダイカイガン！ 信長！ 秀吉！ 家康！ オメガドライブ！』

薙刀でハテナバグスターを斬りまくる。その光景は、神様のそれよりも少々雑っぽく見えてしまうが、3人の偉人の力を秘めているためその程度でも問題はない。

さらに、ゴーストはガンガンハンドとガンガンキャッチャーを取り出す。

『ダイカイガン！信長！秀吉！家康！オメガストライク！』

二丁拳銃による乱れ打ちを始める。この攻撃からゴーストの逆転劇が始まる。

さあ、次回盛大な本編ネタバレがあります。

第89話 マイティ brothers

戦闘シーンがほとんどないです。

本編ネタバレ注意。

ゴーストに好機が訪れた一方で、織斑一夏の状況は変化していなかった。ゲノムスに地面に叩きつけられた状態だ。すると、ゲノムスが一夏のポケットの中に手を入れマイティアクションXガシャットを取り出す。すると、それをドライバーに入れる。そして、自ら所持していたプロトマイティアクションXを起動させ、ゲイマドライバーの空きスロットに入れる。すると、大量のバグスターウィルスが一夏へと流れる。そこへゴーストが近づき、ゲノムスに触れる。すると、ゴーストにあるビジョンが流れ込む。泊さんに見せてもらった映像と酷似している。おそらく消える直前の記憶だろう。そして、衝撃的なものが見える。それは、ベットに寝ていた人物。その人は………織斑一夏。

「まさか、四年前お前が実験していたのは！」

「そう、彼こそがバグスターウィルスの世界初の感染者！彼から新たな生命体バグスターを生み出そうとしていたのだ！」

一夏の顔に幾何学模様が浮かび上がり、右はオレンジ、左は青緑に発光していた。そして、マイティアクションXとプロトマイティアクションXのガシャットが融合する。すると、二つのスロットを使うガシャット出来上がる。一夏は、そのガシャットを起動し、ドライバーに装填する。

「変身」

『マイティブラザーズ^{ダブルエックス}！ダブルガシャット！ガツチャーン！ダブルアツプ！俺がお前で！お前が俺で！ヤーンー！』
！マイティマイティブラザーズ！
！ダブルエックス！』

エグゼイドが真つ二つに割れ、空中に散布されていたバグスターウィルスが二つに分かれたエグゼイドに集まっていく。すると、左右非対称なライダーが生まれる。片方はオレンジ色で左肩にレベル1フェイス？の半分が、もう片方は青緑色でレベル1フェイス？の逆側半分が右肩についている。また、髪型も左右非対称

になっている。また胸部の操作ボタンも変わっており、キーパッドのようになっている。

「ノーコンティニューでクリアしてやる。」

ゲノムスに向かって2人同時に走り出す。すると、ゲノムスが即座に攻撃を仕掛けてくるが、全く効いていないどころか無傷で走り続け同時にゲノムスを殴る。

「これじゃあ、攻略しがない。」

「敗者確定だ。もう終わらせよう。」

『ガッチョーンキメワザ！ガッチャーン！マイティ！ダブル！クリティカルストライク！』

2人の足に同時にエネルギーがチャージされていく。そして、2人同時に駆け出しダブルライダーキックを放つ。ゲノムスはそれを受け切ろうとしたが耐えられず、その野心を廃工場に散らすのだった。

第90話 Closingとその先

ジェネレーションズ編完結です！

Closingは閉幕という意味です。

エグゼイドが真っ二つに割れていた頃、ゴーストはサンダラスラッシュシャーとデュープスラッシュシャーで鎧武と同じような戦い方でハテナバグスターは手も足も出ない状態だった。

「これで決める！」

『ダイカイガン！ノブナガ！ヒデヨシ！イエヤス！オメガドライブ！』

ゴーストが持つ二刀に三武将の思いが、願いの力が宿る。

「命、燃やすぜ！」

二刀を空中でクロスさせ、クロス斬りを喰らわせた後、そのまま足で蹴り飛ばし最後はサンダラスラッシュシャーで一刀両断する。ハテナバグスターはその謎とともに

連鎖のへと消えた。

『Game Clear!』

その頃タケル達の元へ駆けつけようとしていたアカリやポッピー達にも一つの出来事が起きていた。アカリのゲーム病が治ったのだ。そして、タケルも……。

そして、エグゼイドも2人から1人へと戻り、清宮さんも元に戻る。

「……あれ？俺は何してたんだ？」

「覚えてないの？清美さんを救ったんだ！」

全てを終わらせた2人の元に戻ってきたレジェンドライダー3人。

「皆さん、ありがとうございます。」

「俺たちは仮面ライダーだ。」

と仮面ライダードライブこと泊進ノ介さん。

「ああ、その心は一つ。また何かあれば。」

と仮面ライダーウィザードこと操真晴人さん。

「また、一緒に戦おう！」

最後に、仮面ライダー鎧武で神さままであらせられる葛葉紘汰さん^{かずらばこうた}。

5人で拳を合わせ、ライダーとしての絆を確認した。

全てが終わわり、清宮さんを連れてポッピー達の元へ向かう。满身創痕にしか見えないボロボロの格好で戻ると、頬に雫を流した簪に飛びつかれた。かわいい、何この生き物天使？それとも悪魔？ポッピーに清宮さんを預ける。タケル君もアカリさん達と再会し、嬉しそうだ。

「よかった、アカリが無事で。」

「タケルもな。」「信じていたぞ。」

マコトとアランも、タケルを労った。すると、

満面の笑みを浮かべ、アカリへと近づこうとしていたタケル君は、次の瞬間意識を手放した。

僕は急いでタケル君へと駆け寄り、心臓が動いているか確認する。だが、脈が確認できなかった。

「ポッピー、救急車！」

「う、うん。」

ポッピーに救急車を呼ばせ、タケル君の顎を上げ気道を確保し、すぐさま心臓マッサージにかかる。彼を助けられ無ければこの先ずっと後悔するという、一夏の思いだった。途中御成に妨害を受けたが、何度も続けて心肺蘇生をする。

そして、やっと目を覚ました。

「タケル君、これが見える？」

「い：ち？」

「よかった、無事みたいだ。」

「ありがとう、大事にするよ。助けてもらったこの命。」

「うん、でもとりあえず検査入院した方が良さそうだから。そのつもりでね？」

僕がそう言うと、周りは笑い始めた。

それからマコトさんアランさんカノンさんは眼魔界とやらに戻っていった。タケル君も無事退院した。そして、僕らも日常へと戻っていく。

はい、こんばんは？こんにちは？PROTOです。

ここまでジェネレーションズ編を読んできたありがとうございます。10話で終わりますとかいう先を見据えない事を書いて、結論一ヶ月かかりました。30話近い話にお付き合いいただき感謝しかありません。次回は番外編を2話入れて臨海学校へと入らせていただきます。

番外編 If

これは、倒したバグスターがゲノムスに変化するというオリジナル展開を考えてたんですが、ボツにした案です。

これは、もしもの話。

3人のライダーは戸惑っていた。今しがた倒したはずのバグスターが復活しているのだ。正確に言えばギリル、ロボル、ドラルの三体が各々の目の前にいるのだ。そして、その三体ともゲノムスへと変わっていった。

side ドライブ

「な、ベルトさん！俺たちは今、確実に奴を倒したはずだ！」

『そのはずだ！なのに何故？』

「考えていても仕方がない。とにかくまた倒すしかない。」

『ok！カモン！シフトネクストスペシャル！』

ベルトさんがそう言うのと、何やら近未来的なシフトカーが進ノ介の手に収まる。

「これは……英志^{エイジ}の……。」

『タイムロードは一度しか使えないらしいからねえ。私と一緒に地下深くで眠っていたのさ。』

「なるほどな。英志ひとつ走りつき合えよ。」

と、未来で生きていると思っているエイジに向けて言う。その顔には笑みが浮かんでいた。

「変身！」

『ドライブ！タイプスペシャル！』

仮面ライダーードライブタイプスピードと未来のダークドライブ……否、タイプネクストドライブが合わさり、仮面ライダーードライブタイプスペシャルへと変身する。そこへ、ネクストライドロンが走ってくる。

『ヒッターツ！フルスロットル！スペシャル！』

暴走気味のゲノムスを拳で上空に吹き飛ばす。吹き飛んだゲノムスを囲う様にネクストライドロンが周囲を周り、天空スピードドロップを食らわせ、再びあの世に送り返した。

一方ウィザードは、

「何度蘇ろうと、倒してやるよ。」

かつて戦った不死身の戦士^{フアントム}『フェニックス』を彼は思い出していた。結果は太陽へと蹴り飛ばした為、死と再生を永遠と繰り返しているのだろう。まあ、そんな事より今は目の前の敵だ。

『ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！チョーいいね！フィニッシュストライク！サイコー！』

ウィザードが、インフィニティストイルに黄金のオールドドラゴン『インフィニティゴールドドラゴン』になる。そして、右足にウィザードドラゴンの力を集め、背中の翼を羽ばたかせ鳩尾にキックを入れる。今度こそ完璧にショーの幕は降りた。

鎧武は……

近くにあったヘルヘイムの果実を手取る。すると、新たなロックシードが形成されていく。

「これは、エグゼイドのロックシードか！それじゃあ、早速ゲーム開始だぜ！」

『エグゼイド！ロックオン！エグゼイドアームズ！ゲームードクターズ！』

巨大なエグゼイドの顔が鎧になる。

「よっしゃ！このアームズで終わらせるぜ！」

『エグゼイドスパークング！』

鎧武の足にゲームエフェクト的なオーラが集まる。

「セイツ、ハニー！」

蹴りはゲノムスへと命中し、その命を散らせた。

新章開幕

番外編 ようこそ ARCS へ part 1

事の発端は彼女が呟いた言葉だ。

「はぁ。最近、退屈だなぁ。」

そう、この言葉は聞きたくなかった。退屈しない様に、〃お客様にいつまでも愛されるコンテンツ提供を〃をモットーとしている僕としては。そう、あの言葉を言ったのは更識簪。僕の彼女だ。この言葉を聞いた日から約二週間、学校で僕の事を見た人は誰もいない。

二週間目にして、開発室から不気味な笑い声が聞こえた。

「ヴェアハハハハハハ！やったぞ！遂にやった！僕は神ダァ！」
チーンとなるように眠りについた。その後ポップピーが気づき、IS学園へと運んだ。

二週間後1年1組には目の下のクマが凄いことになっている織斑一夏の姿があった。

「ちょっと、一夏君！どうしたの？そんなにゲンナリして。」

「あ、楯無さん。こんばんは。」

「はい、こんばんは。って！時間感覚まで狂ってるじゃないの！それに、簪ちゃんご立腹なんだよ？」

一夏が顔を上げると、ほおを目一杯膨らませた簪が居た。あ、ダメだ。怖くない、むしろかわいい。そうだ、渡さないと。

「か、簪……コレ………を。」

必死に手を伸ばし、二つのカードを差し出す。

「幻夢……コーポ……レーシヨンの……地上17階にある……がんば……って（ンッ
ッ！。）」

「あ、一夏。」

『Game Over』という音声 flowed 流れた気がした。実際一夏は灰みたいになりかけている。

その日、簪は土曜に行こうと思い、土曜日分の外出届を出した。

土曜日の朝一。簪はすでに身支度が済んでいる。今日は1人で行く、一夏は起こさない方が良さそう……というより、起きる気配がない。そんなわけで、部屋を静かに出た。

幻夢コーポレーション自体はさほど遠くない。モノレールに乗って、幻夢コーポレーション前のバス停で降りるだけだ。しかし、そのバスを降りたところ……。

「ねえ君、何処から来たの？ 連れとか居ない？ それなら、俺たちと遊ぼうぜ。」
と、まあ典型的なガラの悪い男達4人に絡まれ、腕を掴まれる。そして、路地裏の方へと強引に引っ張ろうとする。

「いや！ 離して！」

もう、路地裏寸前。簪は絶体絶命の状況。でも！ ヒーローは遅れてやってくるものだ。

「あの、すみません。その娘は自分の連れです。その汚い手を離していただけませんか？」

出た時まで寝て居た織斑一夏その人だった。

「はあ？ 離すわけねえだろ！」

大きく振りかぶったパンチを避けようともしない一夏は、ポケットからあるものを取り出す。一夏はそれのボタンを押した。

『マイティアアクション X』

ゲームエリアこそ展開されてないがゲーマーモードの彼は、簪を引っ張って居た相手の手首の関節を地味に決めて居た。

「フン、俺の彼女に手エ出そうなんぞ……。」

手首を持ったまま吹き飛ばし、右手で二を表すハンドサインを作り、前に突き出す。

「2万年早いぜ！」

それを見て激昂したチンピラどもは、

「アニキイ！ やっちまいましたようぜ！」

「アニキイイ！ 俺にやらせてくれえ！」

「アアニキイ！ 俺がやってやるよお！」

「うるせえ！ 俺が片付ける！」

やる気満々漫☆画太郎だったが、一夏たちは…

「か、簪！ごめん、僕と一緒に行かなかったからこんなことに。どこか怪我してない？」

「ううん、一夏のおかげで無傷で済んだんだもん。……か、かっこよかったよ。一夏、大好き♡」

「ありがとう≡それじゃ、中入ろうか。」

「おいてめえら！知らん顔してんじゃねえ！」

激昂した彼らに対する対応は、こうだ。

「おまわりさん、こっちです!!」

「!!!?!」

それに過激なまでの反応を見せた際に、一夏たちは本社ビルへと入った。

その後、警備員さん経由で彼らは警察のお世話になりました。

そして、一夏と簪は17階に来て居た。簪は小型に開発された小さめのヘッドセット？を、装着している。

「ようこそ、オーグメンティッドリアリティクラフトシューティングゲーム（AR

CSG)『You alone gun』のステージへ。」

「一夏、コレ……。」

簪の目に映るもの、それは……。

僕は毎日投稿していた……読者諸君はそう思っていただろう……僕がなぜ二週間弱投稿しないどころか音沙汰なかったのか……説明しよう。

読者諸クウン！なぜ私なんの前触れもなく投稿ストップしていたのか……その答えはただ一つ……ハァー、読者諸クウン！僕がテスト勉強や体育祭などで忙しかったからダァ！

と、茶番にお付き合い頂きありがとうございます。

えーと、前述にあります通り、期末テストがあり投稿しておりませんでした。なんの予告もなくストップさせてしまい、楽しみにしている方がいらっしやるのでしたら、お詫び申し上げますと同時に、読んでくださっている全ての読者様に感謝申し上げます。ありがとうございます！

番外編 OOO の街へ part 1

CSMオーズドライバー発売記念です。

あ、どうもお久しぶりです。織斑一夏です。今、簪と食事っていうかまあデートに来てるわけなんですけどね、中々面白い店だなーと思ひまして。あ、食事自体も美味しいですよ。ここには社員の口コミで来たんですがね。あ、場所言ってますねでしたね。場所は東京都武蔵野市夢見町にある多国籍料理店『クスクシエ』です。いやー、その日その日でテーマとなる料理を変えて尚且つ内装も変えるというのは中々斬新だと思いました。是非とも、うちのゲームのモチーフになってもらいたいと思つてますので、今度社員を送り込みます！なんて、まあやりますけど……。まあ、色々あって簪と食事し終わりました。え？デート内容見せろ？嫌ですよ、なんでプライベート晒さないといけないんですか。まあ、文句は投稿者にも言っ

てくださいいよ。まあ、僕らはとりあえず会計を済ませ、店内から出た瞬間でした。出てきた扉からヤンキーと青年が飛び出してきました。

「おい、誰がヤンキーだ！」

「まあまあ、落ち着いて。アंक、急がないとヤミーが逃げるか、メダル全部伊達さんが掻っ攫うよ。」

「チッ！映司、急ぐぞ！」

と言った。ヤミー？となつて気になったので、簪の顔をチラッと見る。すんばらしい具合に好奇心に溢れた顔をしてる。可愛い♡

「一夏、私たちも行こ！」

「わかった、それじゃこれに乗って行こうか。」

物陰に移動する。そして、黄色とピンクのガシヤットを取り出す。

『爆走バイク！』

あ、大体デート行く時って2代目からガシヤット借りてたりします。

『マイティアクションX！』

『バンバンシューティング！』

「変身！」

『マイティマイティアクション X!』

『バンバンシューティング!』

『キメワザ!爆走!クリティカルストライク!』

スロットホルダーに爆走バイクガシャットを装填して決め技で目のないレーザーを呼び出す。

2人はバイクに跨り、『アंक』と『映司』が向かった方向にバイクを走らせる。数分走らせると、何やら修羅場の雰囲気を感じる光景が2人の目に映る。よく見ると4体の異形が並んでいる。昆虫?水棲生物?ネコ?……アレは人型恐竜だよな?という面子が揃っていた。

「後藤ちゃん、勢揃いなんて聞いてねえぞ。」

「伊達さん、ゴチャゴチャ言う前に変身しておいた方が良いかと。」

「だな。それじゃあ、稼ぎますか。」

と、3人目……と4人目が現れる。1人はエイジさん達が言っていた『伊達』と言う男。もう1人は『後藤』と言うらしい。

番外編 〇〇〇の街へ part 2

そういえばいい忘れてました。

新章開幕から番外編三連発で申し訳ない。

火野と伊達が変身した直後、一夏はどこからともなくパソコン、空ガシャット二本、その他の機材を取り出し作業を始めた。オーズとバースのガシャットを作るためだ。簪はスナイプになって一夏の護衛。その場には戦闘音とキーボードのカタカタと言う音だけが聞こえる。

オーズはメダジャリバーとメダガブリューの二刀流で、グリード達と戦う。幸いな事にまだ完全復活へと達して居ないため、何とか捌ききれている。バースもオーズの援護に徹している状態だ。後藤も常にバースバスターのポットのセルメダルを入れ替えている。オーズは何かコアメダルを砕こうとメダガブリューで攻撃しようとするもなかなかクリティカルでは攻撃が入らない。

20分経っただろうか？そのくらいの時間でガシャット二本を作り終えた。

「簪、そろそろ僕らも参戦しようか。」

「うん、ミッション開始！」

ガシャットを作るために変身解除していた一夏は、再びエグゼイドへと変身する。

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

お決まりの決めポーズをし、ガシャコンブレイカーを取り出しグリードに飛びかかる。その場に居たのは……今来たばかりの重量系グリード『ガメル』だった。何故最初から居なかったのかは知らないが、一夏のB連打ハンマー攻撃を受けてしまいかかり吹き飛ばされる。

「うう、とつぜんなんだ？」

少々口調が幼い。なんだか罪悪感に見舞われる。けど、敵……なんだよな。

「なんだか面倒な奴が出て来たな。」

すると、昆虫系グリードの『ウヴァ』はセルメダルを砕き大量の屑ヤミーを生み出す。それに続き、恐竜グリード以外全員が屑を生み出した。

「チッ、厄介だな。おい、映司！メダル貸すから絶対取られんなよ！」

アंकは赤いメダルを二枚、オーズに飛ばした。

「わかってる！」

オーズは真ん中と左側のメダルを交換し、スキャナーでスキャンする。

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドルウ〜！』

オーズは真っ赤の鳥系メダルコンボ『タジャドルコンボ』へと変身した。

伊達さんはと言うと、何やら全身に装備を追加したみたいだ。

「スナイプそろそろ。」

「うん、第伝レジェンド説戦術！」

『ミリオンゲッターバース！ガッシャット！ガッチャ〜ン！レベルアップ！撃ち出せ！欲望！手に入れろ一億！ミリオンゲッターバース！』

「こっちも行きますか！」

『ジャングルオーズ！ガッシャット！ガッチャ〜ン！レベルアップ！タカトラ！タカトラ！バッタ！ジャングル！ジャングル！オーズ！』

仮面ライダーエグゼイドオーズゲーマーと仮面ライダースナイプバースゲーマーへと変身した。

そこからの展開は実に早かった。オーズはアंकにメダルを要求。渋々投げ渡したのは、タカ・クワガタ・ライオン・シャチ・サイのコアメダル5枚。それから映司は自分の中にあるプテラを一枚何とか引きずり出した。そして落ちて居たタカセルメダルをタジャスピナーへと入れる。伊達さんも大量のセルをベルトへと入れ、エネルギーをチャージしている。その間一夏達は時間を稼ぐ為に、固有武器のメダジャリバーやバースバスターをバグスターウィルスから構築し、教科書に載せても良いくらいのコンピネーションを發揮し敵を翻弄して居た。

オーズがメダルを入れ終わり、スキヤナーを持つ。そして、タジャスピナーの中が回転し、それをスキヤンしていく。

『タカ！クワガタ！ライオン！シャチ！サイ！プテラ！ギガスキャン！』

タジャスピナーからコアメダルのエネルギーを射出し、グリード諸共屑ヤミーを一掃する。流石に屑ヤミーの壁が厚くグリード達に大ダメージはいかなかった。しかし、そこからのダメ押し。

『セルバースト！』

バース・デイ状態のバースから最大出力のブレストキャノンが放たれ、屑ヤミー

を吹き飛ばす。だが、奴らは更に屑を増やしこの場から立ち去った。最後の仕事は一夏達だ。

『ガッシャット！キメワザ！』

『ジャングル！クリティカルストライク！』

『ミリオンゲッター！クリティカルフィニッシュ！』

バグスターウイルスが作り出す三色の輪を潜り、ライダーキックが炸裂する。また、スナイプはガシャット挿入口が付いたバースバスターを使い、セルバーストもどきを発動させ、敵を塵に返した。

オーズが一夏達に近づいてくる。

「いやー、ありがとう。助かったよ。」

そう言うオーズに一夏は、

「ライダーは助け合い。そうでしょ？」

と、返した。

「それじゃ、俺たちはここで。またいつか、一緒に戦おう！」

「うん。その時はまた。」

一夏達は、オーズ達に別れを告げ IS 学園へとバイクを走らせた。

ここで、オーズ編は終了です。

くうう！早くFINALを観に行きたいです！

その為にも今週乗り切らないと。

第91話 臨海学校は波乱の P r e m o n i t i o n

P r e m o n i t i o n 予感

臨海学校、IS学園での大きな行事の一つと言えるだろう。何事も起こる事なく終われば一夏達にとっても休息を取れる良い機会と言える。Dr・パックマン事件の疲れも癒えぬまま、ゲーム病患者をオペし続けている彼らの疲労はかなり溜まっている。ここらで、息抜きをしてももらえればと千冬や真耶も思っていた。

出発当日。バスの座席で揉めた為に、一夏、簪、そして鈴は別の乗り物にて移動することになった。そう、察しのいい方ならお分かりだろう。

「はあ、なんであたしだけ乗り物になって移動なのよ。変身↓」

『爆走バイク！ガッシャット！ガッチャ〜ン！レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイクウ〜！』

仮面ライダーレーザーバイクゲームレベル2での移動となった。こんなことに使っているのか？いいんです！お陰で本音が寝れるんだから。あれえ？？本音って何？って声が聞こえる気がするぞお。しょーがないですね。説明しましょう！

布のほとけ本ほんね音おんさん。更識家の従者さん。簪の専属みたいですが。実際癒し要素があつて良い子ですよ。因みにニックネームは『のほほんさん』。相手に不思議なニックネームを付ける癖があります。いつも着ぐるみの様な格好してます。以上です！

しばらくバイクを走らせると、太陽の光が当たり輝く大海原が見えてくる。白い砂浜も綺麗だ。バスが停車し始める。バスより少し進んでガシャットを抜いてやれば、2代目に戻る。

「ふう、なんか走ってたら気持ちよかったわ。」

「それは、何より。それでは、皆さんと合流しましょうかね。」

一夏達は旅館「花月荘」へと向かった。

「ようこそ、花月荘へ。」

という女将さんの挨拶から始まり、自由行動までの時間は、さほど長くなかった。「それから、本日の午後には幻夢コーポレーションの方々からお見えになれる話は聞いて……無いみたいですね。」

「あ、忘れてた。皆、説明を忘れていた。明日の装備テストには幻夢コーポレーションの整備班が視察……と言うよりかは見学か。に来るそうだ。くれぐれも粗相のないように。」

「はい！」

ISを少しだけ取り扱う事にしたんですよ、うちの会社。部屋割りを確認しようとしたものの、織斑先生が消えたため出来なくなった一夏は奥の手として……
……幻夢コーポレーション名義で一室借りたのだった。

部屋で着替えを済ませる。ピンクに黒いラインが入ったカラーの海パン。簪が選んでくれたそうです。上にアロハTシャツ羽織ってます。その格好で一夏は……
戦場へと向かうのだった。

はい、本当の意味で新章に突入しました！

protoです。

いやー、csmオーズドライバーが欲しいです。

コンプリートセットの中身充実しまくりですわ。

それではまた次回！

第92話 真夏の臨海学校 volleyball 大会！

ネタとまでは言いません。

ただ、バレーボールをするだけです。

織斑一夏は向かう。右にはバレーボールを、左には拡声器を持って。

《これより！幻夢コーポレーション主催、IS学園ビーチバレー大会を始めます！参加者の皆さんは、各チーム毎に受付を済ませてください！………全チームのエントリーが確認されましたので、ルール説明をさせていただきます。今回は3vs3での勝負となります！砂などで相手の目を眩ませるなどの行為は反則負けとして処理し、チーム自体の負けが決まってしまう。正々堂々と戦ってください！以上です！》

大まかな参加チームを見てみましょう。まずは、チームライダーズ！織斑一夏、更識簪、凰鈴音の三名という超絶息の合ったライダーチームだあ！続いて成人チー

ム！織斑千冬、山田真耶、そしてえ！仮野明日那！ってちょ、明日那さん？こんなところ居ていいの？とりあえず置いていて、1年1組の生徒はほぼ全員参加！残りのクラスも半数以上参加するようです！以上、中継でした。

1 回戦目はなんと、ライダーズ対成人チーム！この組み合わせは絶対仕組んだものなあ！

「全く。生徒の為の大会になんて出て来るんですかね、うちの姉は。（まあ、残り2人は脅されたんでしようけど。）」

「でも、やるからには千冬さん相手でも勝つ！ノリノリでね。」

「ミッション開始！（一夏は渡さない！）」

一方成人チームは……

「絶対に勝つ！（一夏は私のだ！）」

「（……どうしたらいいんだろ。）」

千冬だけが燃えていた。

さあ、始まりました。真夏の臨海学校ビーチバレーボール大会！実況は私 PR O t o でお送りします！先行成人チームからのサーブ、サーバーは織斑千冬選手。

フロウターサーブでの強力な打ち出し！相手コートに吸われていくかのよう落ちていくが、おおっと！ここで一夏選手なんとかサーブを上げたあ！順調にトスを上げる簪選手！ここでスパイクを撃つのはもちろん、凰鈴音選手う！豪快なスパイクですが、狙いもバッチリと言ったところでしょうか。山田選手目掛けて一直線だあ！しかし、ここで明日那選手がしっかりとカバーに入る！アンダーハンドレシーブでしっかりと玉をあげ、ここでやはり千冬選手が飛んだあ！スパイクの体制に入り、右手をポール目掛けて一直線！だあがしかあし！ここでまさかのフェイント！打つのは山田選手だあ！上手く千冬選手に隠れていたあ！山田選手渾身の一撃を放つ！っとお！ここで一夏選手のブロックだあ！ポールはスパイクを打ち、体が宙にある山田選手の足元！これは絶望的だあ！おっとお！ここで滑り込んだのは明日那選手！見事にポールが地面に着くのを防ぎましたあ！

このような具合の一進一退の攻防が続き、決着はつかなかった。

はい、p r o t o です。

それではさよなら。↑何も言っていない

第93話 夜のLoveロマンス

早く戦わせろ？わかってますよそんな事。

バレエボール大会も終わり、晩御飯。彼らの前には豪勢な海鮮和食がズラリと並べられていた。その中でも一際異彩を放って……というよりも、ピンク色の雰囲気放っていた2人というのは言わずと知れたカップルだ。

「簪、はいあーん。」

一夏は海老の天ぷらを簪の口元へと運んでいく。

「あーん。ㄹㅇㄹㅇ、ㄹㅇㄹㅇ。美味しいよ、一夏　　!」

「そうだね……?」

笑顔を向けられ、笑顔を向け返す一夏。だが、いきなり首を傾げる。

「一夏も……あ、あーん!!!」

照れながらのあーんに、照れながらあーんする一夏さん。うらやm……ㄹㅇㄹㅇ

ヤッ
！けしからん。

あのような光景を見ながら、1人考え事にふけていた者が居た。篠ノ之箒だ。
(姉さん、一体どういうつもりなんだ。)

篠ノ之は誰にも話してないが、姉であり幻夢コーポレーションの技術顧問(社長を一夏に変えた為このポジに落ち着いた)篠ノ之束から電話が来ていた。

『もすもすひねもすう。はあくい、みんなのアイドル篠ノ之束だよお。』

「姉さん、切っていいですか？」

『あわわわ、待って！待って箒ちゃん！一言だけ言いたいただけだからあ。』
「早くしてください。」

『少ししたら臨海学校があるでしょ。その時に箒ちゃんの誕生日プレゼント持って行くから。それじゃあねえ。』

「え？あ、ちょっと！切れてる。」

と、このような事があり、現在篠ノ之の精神状態は不安定なのだ。

晩御飯の時間も終わり、星空の下一夏と簪は居た。一夏は胡座をかいた状態で、簪はその上に乗っている。

「ねえ、一夏。一夏は色んな先輩ライダーが居て、どう思った？」

「世界は広い、色んな場所に悪の組織や悪の心を持った者たちが居て、それを食い止める先輩ライダーがいる。多分、僕らに後輩もできると思う。その後輩に何か伝えられるようなライダーでありたい。もちろん、子供ができたら語れるくらいには……ね。」

「一夏……それって……。」

「もちろん、簪。君と結婚したいと思ってる。君さえ良ければけど……ね。」

「私が拒否すると思う？」

そう言って簪は一夏の唇に自分の唇を重ねる。

「……これが、答えだよ。」

「指輪は、給料三ヶ月分でいい？」

「それ、凄い金額になるよ。」

「確かにそうだね。」

穏やかな笑い声が聞こえてくるのだった。

一夏達の話盗み聞きして居た者達が居た。

「私の一夏だぞ。あんな小娘にくれてやるもんか！」

「一夏さんは何がなんでも手に入れますわ。」

「一夏あ、私の所来ないかな。」

「嫁……婿は絶対に手に入れる！」

燃えている女子4人がいた。

はい、最近感想来なくて不安になってるprototです。

(感想くれとは言っていない。) csmオーズドライバーが欲しいし、ポセイドンドライバー付いてくるのも嬉しい！でも高けえ！

割れタカ・コアメダルも欲しい！お年玉突っ込むか！

そんな世間話？ ああ、あとISABもiOSで配信れて楽しんでます。

本音がいいですね。更識姉妹は出てません！
それでまた次回！

第94話 箒の Dedicated

箒のISは白式との連携は考えられてないので、

………ネタ度満載のオリISとなっております。

多分怒られる。

一夏のプロポーズから一夜明け、ISの装備テストやら何やらが行われる日。

専用機持ちと一般生とで別れ、作業していた。一般生の方には幻夢コーポレーションの技術者見習いも明日那の指示で同行している。専用機持ちの方には仮面ライダー達とセシリア、シャルロット、ラウラ、そして篠ノ之箒がいた。

「あの、織斑先生。なぜ、篠ノ之さんがいらっしゃるのでしょうか？」

と、千冬に当然といえば当然の疑問をぶつけたのはセシリア・オルコットだった。「ん？ああ、篠ノ之には本日より専用機が与えられる……というより、こいつの

誕生日プレゼントとして送られる。」

「なるほど、東さんですか。」

「来るぞ、全員下がってる。」

そう言うと、上から人参型ロケットが砂煙を上げ着陸する。扉が開き、見慣れた格好の人が出て来る。

「ふう〜。あー、これなら普通に来れば良かったな。」

それもそのはず。いつものアイアンクローならまだしも、千冬は何故か……オーガスドランザーを持っていた。(オーガスドランザーとは、劇場版仮面ライダー555 パラダイス・ロストに登場する仮面ライダーオーガの武器) 何故そんな物があるのかはともかく、東は先程着地点を決める為衛星から映像を見ていたが千冬がそんな物を持つてるそぶりはなかった。

「何故、こんな物を持つてるのかって顔をしてるな。答えは簡単だ。今作った!」
「あなたがやったみたいと言わないでください。8割簞、残りの2割は自分の作業でしたよ。」

「なるほど、それなら納得だ。流石いっくんにかーちゃん。」

「あの、お母さんみたいに聞こえるのでやめてください。」

「あー、うん。気にしない気にしない。」

そんな事を言いながら上にあるのであろうコンテナを下ろしていた。

「さて、それじゃあ箒ちゃん。「ちょっと待て！自己紹介しろ。混乱しているだろうが。」はあ、私こそが神ダア。(ぐぐぐ) ! ちよ、なにをするのさちーちゃん。

私は自己紹介したよ？」

「誰が神だ。真面目にやれ。」

「はい、それじゃ。幻夢コーポレーション技術顧問でIS作っちゃった系リケジョの篠ノ之束です。」

「最初からやれ。」

「じゃあ、気を取り直して箒ちゃん。これが箒ちゃんの専用機『雷電スネーク』だよ。」

「これが私のIS。私の為だけの。私専用機。」

「さて、フィッティングとパーソナライズを終わらせちゃおっか。深く腰かけるよ。うに座ってね。5分で終わらせるから。」

「姉さん、これ。なんで銃を？」

「えっと、最近MG○にハマっちゃって…。言うなれば私の趣味だ。M○Sはいいよお。まあ、誰にでも当てられるようにオートロックオンは付いてるから、目標をセンターに入れてトリガーを引けば8割方当たるよ。」

と、なぜか○GSにハマっていた東だった。

何故東がMG○にハマったのか？

ふっ、愚問ですな。すべて私のせいだ。

ははは。読者諸君すべて私のせいだ。

(→このネタわかる人いるかな？)

それでは、また次回。

第95話 Emergency な出来事

「社長、緊急事態です。」

と、忍びの如く一夏の背後に現れたのは明日那だった。まあ、実際のところはウイルスになって移動して来たんだけどね。

「アメリカ、イスラエルで共同開発されていた軍用ISが暴走。こちらに向かっているようです。」

と、冷静に情報を伝えていく。すると、一夏は

「わかりました。搭乗者は？」

「無人……となってますが、おそらく搭乗者は居るか。」

「ライダーだけ招集してください。楯無さんにも連絡を。あの人ならどうせ来れますよね？」

「そうですね。どうせブレイブに変身されますから、国家代表であることはわかりませんかからね。」

「それでは、よろしくお願いします。」

そう言って再び明日那は消えた。

しばらくすると、千冬の元にも同じ情報が入った。すぐに生徒達を旅館内に避難させ、専用機持ちを集めようとしたが……一夏に止められた。危険すぎる……と。

さらに時間が経つ。楯無が到着したので、明日那からの詳細情報を元に戦術を練る。最も合理的で完璧な作戦を導き出したのは、簪だった。

「一夏が、ロケットアーム飛ばして足止めをする。その間にお姉ちゃんが氷の道を作ると同時に動きを固定。私と鈴がハンターZでとどめを刺す。これでいいかな？」

「そうですね。それで行きましょう。」

「ちょっと待ったあ！」

「……………束さん？」

「それ、雷電スネークを使えばもっと楽になるよ？」

「どう言う事ですか？」

「よくぞ聞いてくれました。雷電スネークにはパッケージ『Metal gear

REX』搭載されてるんだよ。これを使えば確実に有効打を与えられるよ！」

「ですが、篠ノ之は初心者です。とても実戦には……。」

「そこはプロフェッショナルであるAIが、万全なサポートをするから安心。REXの開発担当である『ハル・エメリッヒ』の人格コピーのAI『オタコン』が搭載済みなのだあ。」

「……わかりました。却下で。」

「……ほえ？どうして、いっくん!?!」

「だって、他社のゲームじゃないですか。」

「うぐっ!……確かに。」

「確かにMG〇は面白いですよ。でも！それとこれとは、話が別なんです。」

「……はあ、わかったよ。束さんの負けだね。」

「それでは、全員出撃！」

「うん!」「ええ!」「いくわよお!」

「大・大・大……」

「術式レベル2。」

「第五戦術！」

「五速！」

「[[[変身！]]]」

『[[[ガッシャット！ガッチャ〜ン！レベルアップ！]]]]』

『マイティマイティアクションX！アガッチャ！ゲキトツロボツツ！』

『タドルクエストォ〜！』

『バンバンシューティング！アガッチャ！』

『爆走バイクウ〜！アガッチャ！』

『[[ド・ド・ドラゴ！ナ・ナ・ナ・ナーイト！ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター

Z！』

作戦通りのライダーが揃った。

THE 出落ちな篠ノ之姉妹でしたあ。

P r o t o です！それではここで失礼！↑本当に何も言ってない

第96話 betrayalのウサギ

昨日は文章がまとまらないと言った

現象と疲れの寝落ちに襲われてしまうた。

すんません。

作戦開始時刻。既に一夏はキメワザ発動態勢に移行していた。もうホルダーにガシャットは入っている。もう一度ボタンを押せば……

『ゲキトツ！クリティカルストライク！』

左手のロケットアームが飛んでいく。目標である『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルは、避ければ通

り過ぎると思ったのか、即座に避けた。だが、それも計算のうちだった。急旋回してゴスペルへと向かうロケットアームに、ゴスペルは反応しきれず、アームが直撃した。そのまま、威力は抑えているが飛行に重要だと思われる部分を重点的に攻撃すると、ゴスペルは真つ逆さまに落ちていく。それをブレイブがガシャコンソード

の氷モードを使い、動きを封じつつ足を拘束した。全員でゴスペルへと近づくが、全く動く気配がない。パイロットを保護しようと、一夏がゴスペルに触れる。

その瞬間、一夏の手にビームが掠る。飛んできた方を見ると、そこには黒いエグゼイドがいた。

「黒い……エグゼイド！なぜお前がここに！」

『シャカリキスポーツ！』

これが黒いエグゼイドの答えだった。

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！マ〜イティ〜アクション X！アガツチャ〜！シャカリキスポーツ！』

黒いエグゼイドはスポーツゲーマーを纏う。ただし、彼らの対応も早くターゲットを即座に切り替え黒いエグゼイドを攻撃する。黒いエグゼイドはそれに対応すべくスポーツゲーマーの前輪を飛ばし、ゴスペルから一夏達を遠ざける。だが、集中攻撃を受けた分ライダーゲージは減って居た。その後、ゴスペルに歩いて近付きバグヴァイザーを向け、オレンジ粒子状のバグスターウイルスを浴びせる。すると、ゴスペルは光だし第二形態^{セカンドシフト}移行した。氷の拘束から抜け、天高く舞う。

だが、その時だった。一筋の光がゴスペルへと向かいそして、軍用機であるゴスペルを墜とした。光が射出された方を確認すると、ISを纏った篠ノ之が居た。

「篠ノ之！何故撃った!?パイロットの安全優先でやっていたものを！」

「え？姉さんは無人だって……。」

篠ノ之はどうやら、知らなかったようだ。墮ちた先には、黒いエグゼイドが居た。

「不味い！Zを！」

『ファング！』

完全に機能停止している黒いエグゼイドを止めるべく、ドラゴナイトハンターZを要求し、即座にゲーマーをチェンジする。

『ガッチャ〜ン！レベルアップ！マイティマイティアクションX！アガッチャ！ドラゴナイトハンターエグゼイド！』

ゴスペルと黒いエグゼイドの間へ割って入り、テール攻撃で……ライダーゲージを全損させてしまった。黒いエグゼイドは吹き飛ばられ、スポーツゲーマーが解除された。

「しまった！ライダーゲージが0に。」

すると、黒いエグゼイドは落ち着いた変換音声で、こう呟いた。

「今こそお……、死のデータ取る時！」

と、バグヴァイザーに白いガシャットを刺し、自らの体へとバグヴァイザーの銃口を押し当てる。呻き声を上げながらも、なんとか立つ黒いエグゼイドだった。

その間に、一夏は中のパイロットの無事を確認。最も近くに居たら篠ノ之を呼び、旅館へと運ばせた。

そして、黒いエグゼイドは高らかに笑う。

「もう、君達に正体を隠す必要はないね。私は仮面ライダー……ゲーム。」

『ガッチョーンガッシューン』

黒いエグゼイドの返信が解除され出てきたのは………篠ノ之束だった。

「やあやあ、いっくん。束さんを超えたね。」

「た、束さん。どうして、最初から……。」

すると、束はニマアと口元を緩ませ、

「私の目的はあ、ただ一つ！究極のゲームを作ること！」

「まさか、本当に、ほんとに！オンドウルルラギッタンティスカー！ダバネザァン！」

「ブアハハハハ！君達は集めた10個のガシヤットで、人類を救うことができるかな？」

そう残し、束さんはバグヴァイザーの光弾を僕らに当たらないように狙い撃ち……姿を消した。

束が裏切りました。

Protoです。前々から言って居た転換点。

束さんが一夏達を裏切る。

まさに、欲望こそ生きる力！カバズィ
ト！

第97話 千冬への Report

臨海学校からIS学園へと戻ってきた一夏。シルバリオ・ゴスペルのパイロットのナターシャ・ファイルスは本人の意向でこちら側にいる。シルバリオ・ゴスペルは幻夢コーポレーションで買い取った。中々に値は張ったが、たかだか1億ウン千万円だ。彼女の気持ちを考えたら安いと考えた一夏の判断だ。現在はIS学園で修復中だ。

一夏は千冬を部屋に呼んだ。一夏はベットの上に座って話をした。

「なに！束がエグゼイドで黒いゲンム!?!」

「違う、黒いエグゼイドが束さんでゲンム!」

全力で間違った千冬に全力でツツコミを入れる一夏。

「でも、なんで？究極のゲームを作るって。」

「それは、一夏のゲームがつまらn……。」

あ、一夏がすっげえ落ち込んだ。千冬の一言が一夏のメンタルを抉り取った。例えるなら、鎧の大男に鎧オタクと言ったときのような。

「そうだよね……、俺のゲームなんて所詮……。ちょっと売れたからって調子乗ってすみませんでした。もう二度とそんな事しませんから、許してください。」

ここまでネガティブになった一夏を見たことがあるか？まあ、一夏のそんな状態を見逃すほど人間関係は薄くない。逆にかなり濃い。

もちのろんで、彼の彼女は動く。

「織斑先生、一時退出を願います。」

「……クッ！何もしてやれない自分が悔しい！」

いや、あんたのせいだからね。とりあえず、一時的に出て言った千冬。

それを確認した簪は、ベツトに体育座りしている一夏を押し倒し、優しく全てを包み込むが如く抱擁した。

「一夏。自分に、自信持って？一夏のゲームは世界中が楽しんでる。多分、千冬さんはプレイしてないから言えるんだよ。私が一番の味方……で、唯一無二のあなたの彼女だから。」

「簪。ねえ、もっと顔をよく見せて///。」

「うん、いいよ。一夏が求めてくれるなら。」

2人の顔はどんどん距離を詰めていく。そして、唇が触れ合い、お互いの柔らかい感触を感じ合う。

「ありがとう、元気でした。でも、あと30秒だけ抱き締めても……いい？」

「いいよ。30秒と言わず、いつまでも。」

そのまま、いい感じの雰囲気になりかけたその時、バンツ！という音を立ててドアが開いた。

「おい！それ以上は不純異性交遊になる！」

千冬が乱入した。

「あー、はいはい。それじゃあ、僕らは銀の福音を見てきます。それじゃあ簪、のほほんさん連れて行こうか。」

「そうだね。本音なら……。」

「え？ちよ、置いてかないでえ」(泣)

悲壮感あふれる悲鳴をあげ、一夏達についていく千冬の姿があった。

Protoです。

終わります。

また次回。

第 98 話 危険な z o m b i e

布仏本音を連れ、IS 整備室へと入る。そこには、9 割方完成してると見える銀の福音があった。

「うーん、まだまだかかりそうだねえ。」

「そんなにですか？ 僕の間からはもう……。」

「いっちは、IS に関しては経験不足なのかなあ？」

「ま、まあ。小中とゲーム作りしましたし、それにそもそも乗れない IS に関する知識なんて得ようとはしませんよ。」

「そうだよねえ。流石いっちは。無駄な事はしない。だから、かんちゃんのことを大切にしてくれてるのもわかるんだよねえ。」

「こちらこそ、布仏さんが簪の事をすごく大切に思ってるのがわかります。」

「でもねえ、お姉ちゃんはそうじゃないんだ。」

「え？ それはどういう……なるほど、わかりました。楯無さん……の事ですね。」

「うん。お姉ちゃん、楯無様が仮面ライダーやってる事、あんまり快く思っていない

んだよねえ。」

今度、謝りに行くかうか。

「なあ束。その黒いガシヤットはなんだ？」

パレードは束に問う。その好奇心は止まるところを知らない。

「これは、君用のガシヤットを作るための実験用だよ。君のやつは出力調整が難しいからね。まあ、人間には使えないからバグスターに挿してやるしかないんだけど。」

「ふうりん。お、バグスターが出たぜ。行くんだろ、ゲンム？」

「うん、ちょっと挨拶に……ね。」

そう言って、束はラボを後にした。

一方IS学園でも、バグスター出現を感知して居た。場所はIS学園第3アリーナ。感染者は……シャルロット・デュノア。

「ねえ一夏。あれって？」

「ああ、ソルティだな。でも、今までのやつと帽子とか違う。それに、ユニオンに

なっていない……そうか、レベルアップか。」

「なるほど。じゃあ、一夏君は難易度も上がってるって予想……する？」

「いや、僕らもレベルアップしてます。数値的にも精神的にも。だから！」

『マイティアクシオンX!』

「俺たちの敵じゃねえ!大……」

「第貳戦術!」

「術式レベル2」

「3速!」

「[[[変身!]]]」

全員が変身し、ソルティに向かっていくその時だった!間に割って入る者がいた。その者は、

「……………束。」

「やあ、いっくん。君達に見せておきたくてね。」

アタッシュケースから一本のガシャットを取り出す。

「その……ガシャットは、わからない。そんなゲーム作った覚えがない!」

彼女はガシヤコンバグヴァイザーを取り出す。

「ふ、見ててよ。私の変身。」

黒いバックルを取り出し、腰に装着。それにバグヴァイザーをはめ、ドライバーにする。そうすると、待機音が流れる。

『デンジャラスゾンビー!』

「変身。」

ガシヤットをバグヴァイザー改め、バグドライバーに装填し、スイッチを押す。『バグルアップ!デンジャーデンジャー(ジェノサイド!)デス・ザ・クライシス!デンジャラスゾンビィ〜(WOOO!)』

「私は仮面ライダーゲンムレベルX^{テン}。」

ゲンムアクションゲーマーをベースに、白いアーマーが装着されているゲンムは、異様な雰囲気を放っていた。

ありがとうございます。protoです。

第99話 恐怖と friend の離脱

Friendは仲間って意味です。

「私は仮面ライダーゲームレベルX^{テン}。」

デンジャラスゾンビという一夏が作った記憶のないゲームで変身した束。現在一夏達が持っているガシャットで変身できる最大のレベルは5。レベル差を埋めることが難しいこの相手に対して一夏達がとった行動は、観察だった。

「……束、ライダーゲージが無い。」

仮面ライダーゲームゾンビゲーマーレベルXには、本来なければならぬライダーゲージが無かった。

「これは、私の死のデータを使って得た力。もはやあ、いっくん達力では太刀打ちできない。」

確かにその通りだ。ライダーゲージが無い正しくゾンビをどう倒せばいいのか、

皆目見当もつかない。しかし、彼らの目的はゲーム病患者の治療。それを遂行すべく即座に行動を起こした。アイコンタクトのみで戦術を伝え、エグゼイド達はゲームに向かって走り出す。当然ゲームも対抗して来ようとするも、ここでゲームはエグゼイド達の予想外の行動に驚いた。突進していたエグゼイドとスナイプがブレイブ、レーザーを台にして後方のソルティバグスターの場所まで飛んだのだ。そこからは神技の領域だった。

『ゲキトツロボツ！』

『ジェットコンバット！』

高速でのガシャット取り出し、挿入からのレバー解放までの一連の動きに無駄がなかった。これは日常生活では使えない、無駄に洗練された無駄のない動きだが、そこからだった。そのまま決め技スロットホルダーに持って行くまでもが、神業だった。そのまま決め技を同時に放ち、ソルティをソッコで片付ける。仕方がない、のんびりというか安全というか、とにかく時間がなかった。後ろに居る状態を見たら一刻も早く戻らねばならないそう思うほどに。

ソルティへ向かって行った2人とは別に、ゲムムの足止めをして居る2人。最初は手加減していたから止められていた。が、ソルティがやられたのを確認し、バグヴァイザーでソルティの残留粒子を回収したすぐ後だ。

「やられたねえ。そろそろ、本気で行こつと。」

そう言うと、バグドライバーのAボタンとBボタンを同時に押し、さらにAボタンを押し。

『クリティカルエンド!』

ゲムムは深淵にあるような闇のような黒いオーラを纏い、宙へ上がる。そして、そこからキックを放つ。レーザーはガシャットをホルダーに、ブレイブはガシャットソードに挿す。

各々の技がぶつかり合っていたが、ゲムムのレベルが上回り、押し負けてしまった。

「ブレイブ……一夏、貴利矢ごめんね。私もう、無理だわ。」

そして、変身が解除され『ギリギリチャンバラ』ガシャットが束の手に落ち、この時感じた恐怖で凰鈴音は、戦線から離脱した。

はい、凰鈴音が離脱しました。

protoです。

えーと、現在0から1を生み出すと言うことに挑戦しています。

結構厳しいですが、頑張ってこっちはやっていこうと思います！

番外編 Merry Christmas

皆さま、メリークリスマス。

うP主はこれから、ベリー苦しみます。

これは12月24日、聖なる夜が訪れる日のことだ。その日、IS学園は休み。幻夢コーポレーションも休み。幻夢コーポレーションは、クリスマス（お正月商戦に余裕を持って作業するため、基本的にお正月・GW・お盆・クリスマスなどは、休みになる。空前絶後の超絶怒涛のホワイト企業であった。それ故に、今年のクリスマスは一夏宅で過ごすことになったのだが、簪が熱を出した。これに対し一夏の状態はこうだ。

- ① 一夏宅に着いて簪が熱を出したので、大慌て。
- ② 正気を取り戻し、自らのベットで簪を寝かせる（へんな意味じゃないよ）。

③ 水枕、冷えピタ、お粥など素早く準備を完了させる。

④ ひと段落つくと、アツと言う間にクリスマスマズ料理を作り、自らの部屋へ。

⑤ 冷静さを取り戻したせいで、逆にパニックになってしまう、

⑥ 放心↑今ココ

と、いった感じだ。ちなみに簪の熱は37・6といったところだろう。

「ね、ねえ。い、いちかぁ。」

「はっ！ 簪が呼んでる！」

ガタツ！ って言う音を立てて立ち上がる一夏。もちろん目の前簪がいる。

「ごめんね。せっかくの、イブなのに。こんな状態で……。」

「謝る事はないよ。体調を崩すのは仕方ない事だよ。いくら医学が発達しても、病気が無くなる可能性はゼロに等しいんだ。」

「一夏は、私の主治医で……大好きなゲームを生み出してくれて、それ以上に大好きな私の旦那さんだよ？ 弱音吐くのは……。」

「わかってる。簪、僕は君のためなら禁忌さえも犯すことができる。」

「ありがとう。」

「さあ、今日はもうおやすみ。また、明日。」

「うん、おやすみ一夏。」

簪は眠りについた……。

その頃、リビングでは……

「簪ちゃん、大丈夫かしら？」

「そうね。でも、一夏がついてるから問題ないよね。」

「それじゃあ。鈴ちゃん、乾杯。」

「楯無さん、乾杯。」

2人でシャンメリーを開け、一夏のクリスマス料理を楽しんでいた。

一方一旦部屋から出た一夏は、赤服に白ひげを付ける（付ける必要はない）。そして、自らの部屋に侵入して簪が寝ている枕元に一つの箱を置いて行く。そして、部屋から出ていこうとする。だが、後ろから物音がし立ち止まり。ゆっくりと振り返ると、温かく柔らかい感触が唇を……否、脳内全域を支配していた。ビククリした一夏は簪を支えつつも、後ろへ倒れた。そして、簪は……

「メリークリスマス、一夏♡」

「……メリークリスマス、簪♡」

こうして、聖なる夜は2人の濃密で濃厚な口付けで幕を閉じるのだった。

後日、一夏も熱を出したのは言うまでもない……かな？

超ホワイト企業な幻夢コーポレーションと、

熱出しちゃった簪ちゃんでした。

クツソ短いのにこれ書くのに二日かかるとは。

それから、これから1週間弱程投稿しません。

というより、出来ませんので。次はお正月にでも。

それでは、良いお年を。

第107話

一同「皆さま、明けましておめでとうございます！」

一夏や簪達は和服姿で座布団に正座して、挨拶をする。

うp主「今年もよろしくおねがい」「待たんかい！」え？」

一夏「うp主？ 確か新年一発目は挙げるって言ってなかったかな？」

うp主「……その件で読者の皆様に伝えたい事があるんだ。ごめんね、一夏。話しやすくしてもらってありがとう。えーと、お久しぶりです皆さま。改めましてうp主のproutoです。今回話というのは、実は現在連載しているこの作品と別のカイザの作品を打ち切ろうかなという話です。これは自分自身、現状一番悩んでいる状態です。今書いてる話は、ただISのキャラクターにエグゼイドのストーリーを演じさせてるだけなんですよね。それじゃあ、2次創作とは言えないんじゃないかって思ってるんです。もちろんこれは自分自身の考えです。他の方の考えを否定してる訳ではないんです。ただ、あまりにもストーリーに沿ってやっているためもう軌道が修正しづらくなってます。それをも変えられるのが本当の2次作家だ

と言えるとも言えますが、エグゼイドを見て居た方には展開が読めてしまいます。読者の方々に続けて欲しいという方が一人でも居た場合は最終回まで書きます。意地でも書き終えたいという思いです。」

一夏「まあ、こいつは書くと言えば書くから。ってメタいこと言うと、このセリフもこいつが考えてるんだけど。それだけ、キャラのセリフは重たいから。絶対に書き終ええると思う。」

簪「皆さんの、この作品をこれからも読みたいかどうか。それを主さんに聞かせて欲しいです。」

こう挨拶しているとき、主の頭に衝撃が走る。

後ろを見ると関u……、織斑千冬が居た。そして、その手にはお察しの通り、出席簿が収められて居た。

うp主「ち、千冬さん。な、何か御用でしょうか？」

千冬「織斑先生だ、って番外でもなんでもない言うなれば……舞台裏だからまあいいだろう。全くうちの主はヘタレだな、ヘタレ。」

うp主「う、面目無い。」

楯無「はあ、全く。うちの組織使ってボコろうかしら。」

東「全くしょうがないなあ。」

鈴「ホントよ。アタシのこと戦線離脱させておいて！」

うP主「わ、分かっています。わかっているんですけど……やっぱり、読んでもらえるか怖くて。」

一同「はあ。」

一夏「皆さま、このヘタレうP主に喝を。どうぞよろしく！」
そして幕は降りた。

山田先生「えっと、私のコメントはないんですかあ？（泣）」

番外編 ラブラブカップル in 北海道！

皆さま、どうもお久しぶりです。織斑一夏です。現在僕と簪は、ここ北海道に来て居ます！イエイ！皆さま、拍手ありがとうございます。えー、北海道まで来た経緯をご説明します。

3日前・・・

「ラーメンが・・・、新鮮なネタで作ったお寿司が、いい感じに脂の乗ったお肉が食べたい。」

簪のこの一言で、一夏はゲーム制作以上に迅速な動きを見せた。パソコンを取り出し、観光名所、名物料理、宿泊先のホテルなどなど、瞬時に検索・把握し、簪の要求を完璧に満たす場所を探した。それが北海道だった。しかしだ、全員で行くともしバグスターが出現した場合対処できない。だが、その時……。

「北海道に行こうとしてるの、一夏くん？」

楯無と虚が突然後ろに現れた。

「ええ、簪が求めるものを総合すると北海道に。楯無さんは？」

んー、残念ながら私は行けないから、二人で行ってきていいわ。」

「え？ どうして？」

「私の方から説明させていただきませす。」

「虚さん。何故です？」

「…………生徒会の業務が終了しておりませんです。」

「ははは……。わかりました。それで楯無さん、お土産は何が良いですか？」

「そうねえ。あ！ 夕張メロンとかお願いできる？」

「了解しました。それでは、金曜の授業が終わり次第行かせていただきます。」

「うん。あ、本題忘れてた。えっとね、鈴ちゃんがゲームドライバーとかの整備が

できるようしたいんだって。戦線離脱とはいえ、なんとか役に立ちたいって。」

「…………。そうですか、2代目がそんな事を。あとで直接話してきます。」

「うん、そのほうがいいわ。じゃあ、伝えたからね。お土産よろしくね♪」

「かしこまりました。」

「それでは、失礼します。」

楯無さんと虚さんは教室から出て行った。

「・・・、というわけで、簪北海道までデートに行こう。」

「う、うん。わかった。二泊三日、でいいんだよね？」

「うん。じゃあ僕は織斑先生の所に外出許可もらいに行ってきます。」

「い、行ってらっしゃい。」

流石の簪も、一夏のスピードについて行けなかった。

・・・職員室

「織斑先生、三日分の外出許可ください。」

「・・・織斑、条件付きでなら許可を出す。」

「一体なんですか？」

「三日分の朝昼晩の食事を作り置きしてくれたら許可する。」

「三日分のカレー作りましょうか？野菜増し増しで。」

「いいのか？許可出さんぞ。」

「クッ！わかりましたよ。何作ればいいんですか？」

「えっと、ハンバーグとオムライスとお、後は・・・。」

「はあ。子供みたいで困った姉ですね。わかりました、今日明日中には持っていく

ます。」

「本当か？なら許可する。」

つくづく甘いなと思う職員一同であった。

約束通り料理を作り置きし（この時、クリアできるまでやめられないスパルタな現実の再現度が高い料理シミュレーションゲーム作ったほうが早い気がして居た一夏であった）、荷造りを済ませ空港へ向かう。無事に北海道行きの飛行機に乗り込み、何事もなく北海道へ着陸する。え？無事が当たり前？そんなふうに思っている方がいると思いたくないが、一応説明しておきましょう。そう、彼らのデートはほぼほぼなんらかのトラブルに見舞われるのだ。ここまで何も怒らないのは不自然というくらいにだ。

空港から外に出ると、顔に冷気が襲いかかる。簪のメガネも曇る。空港から出る前に手袋やマフラー、ニット帽を着用し、カイロも用意したが冬の寒さが身に染みる。

予定通り金曜の夜に札幌に到着し、無事にホテルでチェックインする。部屋に入りシャワーを浴び、明日に備えて寝る。因みに、ベットは大きいのが一つだけだっ

た。

次の日の朝、身支度を済ませ車に乗り込む。向かうは旭川、目当ては醤油ラーメン。何を隠そう、一夏と簪はラーメンの中では醤油こそ至高という醤油党なのだ（因みに主もだ）。旭川にあるというラー〇ン村に足を運ぶ。二人でどの店が良いか決め入店。因みに決める時は二人同時に揃ってました、流石バカっp・・・ベストマッチカップル。入店し、メニューを確認。一番人気にして店長オススメと書いてある醤油ラーメンを硬麺で注文。二人ともネギ抜きだ。このことに関して簪は、「食わずらくなるだけだし、最後にスープ飲み干す時に邪魔だから最初から抜いてもらってる。」

と言っていた。

「右に同じく。」

と、一夏も便乗するのだった。

「醤油ラーメン二丁、おまち！」

簪はかけていたメガネを外し、二人共両手を合わせ言う。

「いただきます」

と。同時にはしを割り、麺がある丼に勢いよく（スープが跳ねないくらいに）突っ込み麺を引っ張り出す。軽く息をかけると、2人は口に麺を入れ豪快に啜る。麺からスープが跳ねるが気にしない。二人の服装はラーメン巾着を食べる為に用意されているようなものだ。気にせずに、麺を啜り続ける。メンマやチャーシューに手を付けつつも、そのスピードは落ちない。丼の中の具材を食べ切ると、一気にスープを飲み干す。

「「ぶはあ〜、ごちそうさまでした。」」

食べ終わると外していたメガネを掛け直し、店を去る。そこには、一滴のスープさえも残っていない丼が2つあったとき。

店を後にし、再び車に乗り込む。次の目的地はオホーツク海の流水だ。目指すは網走市！そうして、車は再び走り出す。

車での長旅を満喫していると、途中で狐が飛び出してきた。大事には至らなかつたが、少々危なかつた。が、無事だったし狐を拝めたし良しとするか。

皆さま、どうもこんにちは。

pr otoです。いや、皆さまの暖かいコメントに心打たれ、書く意欲が湧いてきましたよ！コメントいただいた方には、遅くなってしまいましたがしっかりと返信させてもらいました。

で、ふっかつ？ 早々本編でなく申し訳ありません。

何故かこっちのほうを書きたくなりまして、

はやくupしないと悪い書きやすいデート回になってしまいました。

なるべく早く本編を上げられるよう最善を尽くしますので

これからどうぞ、本作をよろしく願います。

番外編 一夏と簪のデート in 北海道 part 2

網走に着くと、すぐにオホーツク海へと向かう。夕暮れと言うこともあり、幻想的の景観がその場の雰囲気支配していた。

「簪、そこに立って。うん、そうそう。そんな感じで、いきます。3、2、1…。」
シャッター音が鳴る。写った写真を見れば背景が簪を映えさせ…いや、簪が輝きすぎてちょっと霞んでる？まあ、とりあえずOK。

流水を見たその足で、寿司屋へと向かう。

そして、彼らの頼む寿司はこれだ。

一夏：マグロ、サーモン、イカ、炙りサーモン、エビ天、甘エビ、ズワイガニ。

簪：大トロ、中トロ、イクラ、サーモン、マグロなどを、注文。

「いただきますー！」

届く寿司を正油に付け、口の中に一口。新鮮なネタが舌の上でとろける。それを皮切りに次々と簪を走らせ、寿司を口にする。そこにあった寿司はみるみる無くなっていく。最後の一貫を食べ、暖かい茶を飲む。

「ふう〜、ちそうさまでした。」

そのまま店を出て再び車へ。目指すは十勝。目当ては十勝牛……は、翌日になりそう。

十勝へ到着しホテルへGO。部屋に入りシャワーを浴びて、二人とも一緒のベッドにイン。風呂は入れなかったら、体が冷えますよね？それを、お互い抱きつく事で解消する。あったかくなる、二人は幸せな気分を浸れる。一石二鳥ですね！

朝目を覚ました2人は、着替えや荷物を整理しホテルをチェックアウトする。車に乗り込み、事前に予約して早めに開けてもらう事になっていた店へ行き、十勝牛を味わう。芳醇な肉汁が口一杯に広がる……え？もうそろそろ行かないとやばい？飛行機の時間？夕張メロン！と、時間を忘れて楽しむのも乙だが、ここはビジネスマンの一夏。タイムテーブルは完璧な状態である。一片の抜かりもない。しっかりと肉を味わい再び車へ乗り込み。法的速度に引っかかるか、かからないぐらいのスピードで滑る路面を走行する。もちろん、滑らないように十分な準備を整えているので問題なくはない。滑るときは滑るのだ。

とにかく夕張に着いた一夏たちは、なんとか夕張メロンを入手した。急ぎ足で、

しかし滑らないように一夏が簪をエスコートしつつ、即！車に乗り込む。

再び新千歳空港へと到着し、すぐに飛行機に乗る。ああ、因みにビジネスクラスの席。ファーストクラスにしようとしたら簪に止められてました。一夏が幻夢コーポレーション代表取締役として出張する時は、明日那がファーストクラスの席をとります。一夏は口を挟めない。何故なら、知らないところで取ってるからです。

皆さま、今回は全くトラブルのない一夏と簪のデート追跡の旅にご同行頂いきありがとうございます。

実際の地名が出ておりますが、本作品はフィクションです。

第100話 未知と一夏と不死身のゾンビ

何故か今回のサブタイがオーズ風になってしまった。

そして、今話で本編は100話目！でも、特に何もありません。

ギリギリチャンバラを回収したゲンム（篠ノ之束は隠れ家へと戻って居た。だが、
「ふう。やはり私はてえ↑んさい↓だね。いや、もはや神！って、あれ、パラド
?.....居ない。」
パラドが居なかった。

「2代目。どうして、こんな事に。」

織斑一夏は落ち込んでいた。仲間を失ってしまった事に。仲間を守りきれなかった事に。

「クソッ!.....くっ.....そお。」

手にした黄色のガシヤットに、一粒の雫が落ちる。

「居た。……………一夏？」

「簪か。……………雨が降ってきたね。中に戻ろう。」

「？雨なんて……………。そうだね、戻ろっか。」

そう言って、簪と中に戻ろうとした時だった。

「よお、元気無いなあ？」

「貴方は、前に束さんと入れ替わってた人。……………簪、すぐ戻るけど……………10分経って僕から連絡がなかったら楯無さんを連れてきてください。」

「わかった。」

簪を中に戻し、目の前の男に集中する。簪と居ると、簪に集中しそうで。

「何者だ？」

「俺が何者かはどうでもいい。」

と、笑いながら話す。

「それより、力欲しいだろ？仲間を守る力ってやつが。」

突然一夏に近づき、手に黒い物を握らせる。

「それで運命を変えてみせる。GAME OVERにならないようにな。」

そう言い残し、男……パラドは姿を消した。

一夏はすぐに戻り、簪を抱きしめる。

「い、一夏？抱きつくのはいいけど、みんな見てる前だと、ちょっと恥ずかしいよお。」

「ごめん。でも、守るから。何があっても、必ず。」

「私も、守るよ？一夏のこと。」

そんな時だった。1人の生徒……いや、ラウラ・ボーデヴィツヒが倒れる。体にはノイズが走って居る。つまり……

「ゲーム病。簪！明日那に緊急連絡を！」

「わかった。」

そこへ偶々、本当に偶々通りかかった千冬が来た。

「一夏、どうした？む？ラウラ。」

「織斑先生、この辺り一帯の封鎖及び、生徒全員の安全確保を。報道管制を敷いて

ください。特に、黛先輩には警戒を。」

「わかった。皆、急患が出た。原因不明のため、皆は寮に戻るように！そして、この事は他言無用！もし漏らしたらわかってるな？」

「はい！！」

辺りに居た生徒は全員寮へ戻った。

「はあ、全く。まだ鈴とも話せてないのに。とにかく、緊急病室へ。はあ、束さんがあそこ作ってくれて助かった。」

即座にラウラを搬送し、状態を見る。が、一足遅かった。すぐにバグスター……アランブラーのレベルアップ態が姿をあらわす。

『マイティアクションX』

『バンバンシューティング』

『大変身！』

『第二戦術！変身！』

『『ガッシュャット！ガッシュン！レベルアップ！』』

『『マイティマイティアクションX！』』

『バンバンシューティングウ!』

「ノーコンティニューで患者を救う!」

「ミッション開始!」

『ステージセレクト!』

手馴れた動きで森林ステージへ移動。そこに待ち構えて居たのは

「やあ、いっくん。」

不死身のゾンビだった。

はい、最近荒野ベテラン目指して荒野行動を

プレイしてないprotoです。

えーと、まずですね。

特にはないです。

第101話 2人の Ex-Aid

ゲンムの出現に対する対応は迅速かつ丁寧で的確なものだった。

『ファング！』

『ガン！』

「大・大・大・大・大変身！」

「第五戦術！」

『ガッシャット！ガッチャーン！レベルアップ！ド・ド・ドラゴ！ナ・ナ・ナ・ナ・イト！ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター！エグゼイド！（スナイプ！）』

今の最大レベルは5。即座に最上にあげるが向こうはX^{テン}。しかも、ゲンムは……

『ガシャコンスパロー！』

「レーザーの置き土産だあ。」

ガシャコンスパローを持ち出してくる始末。彼らは動揺する。そこを狙うかのよう、

『ガッシャット！キメワザ！ギリギリクリティカルフィニッシュ！』

鎌によるキメワザ攻撃で2人の変身が解除される。

「まずは、スナイプからGAME OVERにしようかな。」

と、簪に近づくゲム。対抗手段が無い一夏に唯一残された希望は、謎パの男ラドに渡された黒いガシヤットののみ。

「そのガシヤットは！まさか……パラドオ。」

試しにガシヤットのボタンを押し、いつもより大きなダブルスロット型ガシヤットをゲーマドリバーに装填する。その瞬間、一夏の体に大量のバグスターウイルスが流れ込む。一夏の意識は薄れ始め、地に膝をつく。視界がブラックアウトしていく。それを木の上から見ている者がいる。パラドだ。

「さあ、一夏。お前の運命はどう変えるんだ？」

すると、一夏の顔に突如幾何学模様のな何かが浮かび上がる。それに合わせて一夏の体から大量のバグスターウイルスが放出されガシヤットを生み出す。ゲーマドリバーから排出されたガシヤットを空中で手に取りボタンを押し。

『マイティブラザーズダブルエックス！』

「変身」

『ダブルガッツシャット！ガッツチャーン！レベルアップ！マイティブラザーズ！2人で1人！マイティブラザーズ！2人でビクトリーX！』

見た目がレベル1のようなエグゼイド……ダブルアクションゲーマーレベルX、ゲンムと同じレベルとなった。その見た目とは裏腹に素早い動きを繰り出せるのは、元のレベル1と同じであった。ゲンムと同等否、天才ゲーマーSとしての技量が上回りゲンムを圧倒する。そして、隙ができたところで、レバーを一度閉めればルアツプ待機音が鳴り、両手を掲げて回しながら

「だぁ〜い変身！」

『ガッツチャーン！ダブルアップ！俺がお前で！お前が俺で！（ウィーアー！）
マイティマイティブラザーズ（Hey！）ダブルエックス！』

そこには左右反転、色違いのエグゼイドが肩のレベルXフェイスを合わせて立っていた……2人でだ。

第102話 レベルXX

2人のエグゼイド……エグゼイドダブルアクションゲーマーはお互い信じられないように、顔を見合わせていた。そりゃそうだ、自分がもう1人いるなんて到底信じられないし、信じたく無い。そんな事を考えていないパラドはボソリとこう呟く。

「レベルXが2人で、レベルXXだな。」

今ここに仮面ライダーエグゼイドダブルアクションゲーマーレベルXXが誕生した。のだが、

「あなたは、一体……」

「俺は一夏。天才ゲーマーSだよ。そっちこそ誰だよ。」

「僕は織斑一夏。周りからは天才ゲームクリエイターって言われています。っていうか、僕も天才ゲーマーSって呼ばれてるんですけど！」

「俺が一夏だ！」

「僕が一夏です！」

こうして2人のエグゼイドが喧嘩するという、側から見ればなんとカオスな光景なんだと思える状態が続いた。

「簪、ならわかるよな（はずです）？」

「一夏が二人、えへへ〱〱〱。」

「あ、ダメだ。完全に妄想にふけてらっしゃる。」

悩んだ末に出た結論は……

「とにかく、まずはバグスターを倒して患者を救わないと。」

「いや、ゲームが先だ！」

「いえ、患者が先です！」

「ゲームを倒さなきゃいけないだろ！」

『ガシャコンキースラッシャー！』

行動がわかりずらいので、好戦的で現在の目標がゲームの方をR、バグスターを優先する方をLとする。まず、Rがガシャコンキースラッシャーを展開し、ゲームへと向かおうとするも、

「バグスターを倒して患者を治療しないと！」

と、Lがガシャコンキー斯拉ッシャーの刃先をアランブラーに強引に向ける。あのやり取りが5分ほど続き、流石にゲナムもアランブラーも帰った。

「あー、もう！おい、出てこい！ゲームはまだ終わってないぞ！」

「はあ。」

Lサイドのエグゼイドがドライバーのレバーを閉じ、ガシャットを抜く。すると、二人が見えない何かに引きつけられるかのようにくっ付きレベルXになってから変身解除される。だが、それで終わらなかつた。それまでなんともなかつたのだが、一夏は急激な頭痛に襲われ、気絶してしまった。

「え？一夏……、一夏あー！」

その後、迅速な対応を取ったのは簪……ではなく、楯無とポッピーポパポだった。

「ねえ、パラド。そろそろ、彼らにいつくんに関するあのこと、言っておこうかな？」

「一夏に関するあのことって言うと、……ああ、例の件のことか？」

「そう、いっくん最大にして最悪の秘密。多分本人が聞けばすぐに〇〇すると思うほどにね。」

「それを仲間のあいっらに言うのか。でも、大丈夫なのか？」

「計画には全く問題ないよ。これくらいの方が面白いゲームになるさ。究極のゲーム、これが私と……。」

「俺の目的だからな。」

二人は不敵な笑みを浮かべていた。

第103話 一夏のSecret情報

アランブラはダブルアクションゲーマーレベルXXに倒された。え？唐突すぎる？仕方ない、アランブラ戦に関しては特段何もなかったからな。いや、うん本当に何もなくて。例えるなら洞窟行ったのに全く美味しい展開のないマ〇〇ラ実況みたいな感じだよ。そんなわけで、ラウラ・ボーデヴィツヒを治した。

それから数日のことだった。3人にメールが来ていた。その3人は、呼ばれた場所に行く。全員目的地は同じ。そこに居たのはメールの送り主である……篠ノ之束であった。

「やあ、待ってたよ。ブレイブにスナイプ、それから元2台目レーザー。」

「いや、アタシは2代目ね！2台目じゃないから！」

同音異義語ってあるよね。

「君たちには、教えてあげようと思ってね。いっくんの秘密を。」

「え、一夏の秘密？何それ、私聞いてないんだけどなあ。一夏が私に隠し事かあ

く。ふうくん。」

あ、簪がヤンデレっぽくなった。

「い、いっくんを守るわけじゃないけど、この事は本人も知らない。フフツ……実はね。いっくんは、適合手術を受けていないんだよ。」

「「え？ 適合手術を受けてない？」」

そう、本来は体に少量のバグスターウイルスを流し、バグスターウイルスに対して抗体を作る事で仮面ライダーへの変身を可能としているのだ。

「束さん。それはどう言う事なの？」

楯無が冷静さを保ち続けているように頑張っているが、動揺を隠しきれてない様子だ。

「簡単簡単、いっくんはゲーム病患者なんだよ。」

「「！！！！」」

「じゃあ、束さんは行くね。バイバイイ。」

束はいきなり姿を消した。

「これであいつらがどう動くのかだな、束。」

「そうだね。とりあえず、君のガシヤットは完成させないと。」

影に隠れていたパラドの後ろから束が現れる。

「おいおい、おどかすなよ。はあ、ゾンビが板について来たんじゃないか？」

「かもね。でも、私は神の才能を持った者だよ？ゾンビになったくらいじゃ、どうって事ないよ。さあ、戻ってデータを解析しよう。意外とデータの集まりが良くてね。多分もうできるよ。」

「そうか。心が躍るな、束。」

そう言って二人は、帰って行った。

その日、簪はゲームスコープを寝ている一夏を検査した。その結果が……

「No Data ねえ。不具合とかでは無いの？」

「それは無い、と思う。患者をスキャンしてるわけじゃないから。」

「でも、一夏って確かバグスターウイルスの生みの親なのよね？だったら未知のウイルスでもおかしく無いんじゃない？」

「なるほどね。まあ、いいわ。何か違和感があったら連絡するなりしましょ。」

「うん。」「ええ。」

「それじゃあ、寝ましょう。」

「おやすみ、お姉ちゃん。」

「それでは、失礼します。」

それぞれの部屋に帰って行った。

秘密暴露、エグゼイドファンの皆様おそらくあと2、3話であのシーンが来ます。EXCITEをかける準備、しておくことを推奨します！

第104話 完璧な Puzzle

束はパソコンに向かって、キーボードを叩き続ける。部屋にはタイプ音のみが響き、パラドが少々つまらなさそうにしている。のだが……

「ふう、完成した。パラド、ガシヤット完成したよ。」

「おお、ようやくか。……一夏に感謝しないとな。あと俺にも。」

「冗談はよして。それより、早く戦いたいだろ？」

「ああ、戦いたくて心が滾ってるぜ。」

「なら、スナイプとブレイブのガシヤットを回収して来てよ。」

「いいぜ。ああ、心が躍るなあ。」

パラドは消えて行った。

「2代目、あなたにガシヤットの作り方教えようと思うのですが……聞きたいですか？」

「……………え？いいの？」

「今後あなたの発想力が、僕らの役に立つかも知れませんから。」

「よし！ やってやるわよ。ノリノリでね！」

「わかりました。では、こちらへ。」

一夏は鈴を連れて、とある部屋にやって来た。

「ガシャットを作る工程を全てこの中に叩き込みました。これをプレイすれば、ゲーマドライバーの修理……は、かなり時間がかかるものですがマスターできます。ただし、作った僕自身クリアまで至りませんでした。なんせ、いつもやってる事を復習してるだけなんで飽きてしまっただけ。でも、未知の世界を見るあなたなら、クリアして全てをマスターできるはずですよ。」

「……………」

鈴は無言でヘッドガジェットを被り、ゲームを始めた。

IS 学園屋上

ここには女子が集まって……まあ、ほぼほぼ女子校だし当たり前か。面子は篠ノ之、オルコット、デュノア、ボーデヴィッツだ。

「どうして、一夏をこっちに引っ張れる！」

「一夏さんの周りをはがっちり抑えられていますわ。」

「そうだね。僕も接近しづらくて。」

「よ、婿の近くに居るあの虫が邪魔だな。」

バタンと、屋上のドアが開く。

「誰が虫だって？」

声をする方を向く一行は、笑顔の裏に隠された怒気を肌で感じていた。

「「「い、いえ！なんでもありません！」」」

その正体は……本人ではなく楯無だったとき。

お前ら幸運だぞ？一夏に聞かれてたら地球から消されてたもの。

「どうしたのお姉ちゃん。」

そこで本人登場。

「「「いえ！なんでもありません！簪さん！私たちはこれで失礼します！」」」

「？」

簪は首をかしげる。例えるなら、仮面ライダーなでしこだろうか。まあ、簪がこうなるのは仕方がない。姉が怒気浴びせてるからね。

そんな合間の事だった。一人の男が乱入して来たのは。

「やあ、初めましてか？突然だけど、俺と遊ぼうぜ？」

男否、パラドは黄色いギアの付いた青く太いガシヤット『ガシヤットギアデュアル』取り出した。

「なにそのガシヤット!？」

「私も、見たことない。」

パラドはギアを青と赤の絵が付いているギアを、青側を下にするように回す。

『Perfect puzzle!』

「変身。」

ここに新たなライダーが生まれる

次回

ライダー大激突（の予定）！

束のあのシーンをお待ちの皆様へ
今しばらくお待ちください。

第105話 New ライダーはレベル 50!?

ごめんなさい。あと3、4話以内には東さんご乱心行きますから。

『Perfect Puzzle』

「変身」

パラドはデュアルのボタンを押す。

『デュアルアップ! Get the glory in the chain! PER
FECT PUZZLE!』

パラドの前にパネルが現れ、パズルピースがずれて行くにつれて一枚の絵が出来上がっていく。そして、そのパネルの後ろから現れた彼こそは……

「俺はパラド。そして仮面ライダーパドクス、レベル^{ファイティ}50。」

青いカラーの新たなライダー『パドクス』のレベルは50。彼女達の最大レベルは5。到底太刀打ちできる相手ではない。それでも、彼女達は諦めるというこ

とはしない。

『バンバンシューティング！ガン！』

『タドルクエスト！ブレード！』

『第五戦術！』

『術式レベル5』

『「変身！」』

『バンバンシューティング！ドラゴナイトハンター！スナイプ！』

『タドルクエスト！ドラゴナイトハンター！ブレイブ！』

そして楯無は、ミステリアス・レイディを纏い、さらにガシャコンソードと専用機の武装である蒼流旋そうりゅうせんで二刀流？のように構える。

「おお。なんだか楽しめそうだな。でも、まずはこっちの手の内を晒すか。じゃないと、フェアじゃないからな。そうだな、例えばよっと。」

そう言ってパドクスが、両手を掲げるとフィールドに展開されていたエナジーアイテムが入っている宝箱やドラム缶がエナジーアイテムに変わっていく。

「バラバラだったお前達のアイテムを統一することも可能だ。」

「……………許せない。」

「え？なんだった？」

「一夏が作ったものに手を加えるなんて邪道！罰当たり！その行為、万死に値する！」

激おこポンポン丸なスナイプは、『ガシャコンマグナム』を取り出し、

「うおおおおお！」

ガシャコンマグナムとドラゴナイトガンでパラドクスを乱れ撃つ。何発撃っても百発百中の腕前の簪は、この乱れ撃ちの中で腕が上がり続けている。

「こりゃいい腕だ。楽しめそうだな。」

そうして、パラドクスは両手を上に掲げエナジーアイテムを空中に集め、パズルのように並び替え始めた。そして、選んだ三枚を自分へ使う。

『反射！』『マッスル化！』『回復！』

反射のエナジーアイテムでスナイプの攻撃を、スナイプとブレイブに跳ね返す。簪の正確無比な射撃を利用した戦法だ。回復のエナジーアイテムで多少減った分のライダーゲージを戻す。最後に地面を叩き、スナイプとブレイブを変身解除に追い

込む。

「ふう。意外と楽しめたぜ。それじゃあ、ガシヤットは頂いてくぜ。」

所持していたタドルクエスト、バンバンシューティング、ジェットコンバット、ドレミアアビート、ドラゴナイトハンターZ。その全てをパラドに奪われたのだった。

第106話 告げられし Truth!

本話を、読む前に三浦大知さんのエキサイトをバックグラウンドで聴けるようにすることを推奨させていただきます。

パラドクスにやられた2人は、一夏の元へ来ていた。一夏の表情は2人には見えてなかった。そして、特に要求されたわけでもないのに2人とも正座だった。「そんな訳で、仮面ライダーパラドクスに負け、ガシャットも取られてしまいました。」

「一夏、ごめんなさい。」

そう言う2人に対して一夏は、2人に近づいていく。この間2人は臉を落とした。全てを拒絶するかのよう。だが2人の予想に反した結果が待っていた。2人は温かいものに包まれるような感触を味わった。そう、2人を優しく抱きしめていた一夏だった。そして、

「……………2人とも……………無事で…よかった。」

2人の頬に一粒の雫が伝わる。釣られ泣きと言うのだろうか。2人は涙腺が崩壊したかのように、泣き叫んだ。一夏の優しさが2人を包み続ける。だが、無慈悲にも緊急通報が鳴り響く。

「それじゃあ、行ってきます。ついでにそのパラドクスとやらが現れたらガシャットを奪い返しますよ。」

と、颯爽と現場へと向かった。

現場に着くと、モータスバグスターが居た。

「さっさとクリアしてやる。」

『マイティブラザーズXX!』

「変身!」

『ダブルガッシュャット!ガッチャーン!レベルアップ!2人でビクトリー!X!』

「だ〜い変身!」

『ガッチャ〜ン！ダブルアップ！マイティマイティブラザーズ！（ハイ！）ダブルエーツクス！』

「よっしゃ！行くぜ、俺！」

「ええ、行きましょう、僕！」

と、そこへ現れたのはパドクスとやらではなく、ゲンムだった。

「そのガシャットは不正なものだよ。データを削除させてもらうよ、いっくん。」

「束（さん）。」

「ほら、モータス。さっさとあいつの相手をしろ。私はこっちの相手をする。」

「おいおい、束。随分と視線が高いな？」

「何を言ってるんだい？バグスターなど私の計画の駒に過ぎない。駒を駒のように扱わずにどうするのさ。」

「おい。俺たちバグスターは、お前ら人間の駒じゃない！」

「いいや、駒さ。人が生み出した、0と1と行動ルーチンで動く駒に過ぎないんだよ！」

「お前は完璧に俺の心を滾らせた！」

と、ここまで置いてきぼりのエグゼイド達は

「さっさと、バグスター倒すか。」

「そうですね。そうしましょう。」

『ガシャコンキースラッシュャー！ダブルガッシュャット！キメワザ！』

R側がキースラッシュャーを出し、マイティブラザーズXXガッシュャットをスロットに装填。すると、エネルギーのキースラッシュャーがL側に現れる。

『マイティブラザーズ！クリティカルフィニッシュ！』

エグゼイドは、2人でクロススラッシュを放つ。すると、余所見してたのかモロ食らったモータスはあっけなく消えた。

「さて。そっちは……って、なんか不味そうだな。」

「そうですね。町に被害がないように、ステージ変えときましょう。」

『ステージセレクト！』

魔鋏の近くのようなステージに移動。それを待つて居たかのように2人は動いた。

『ガシャコンスパロー！ス・パーン！』

スパローを切り離し鎌にしたゲンムは、不思議な走り方でパラドクスに近づくと、片方の鎌を振り下ろし、片方は横から薙ぎ払う。だが、パラドクスは軽く避けパズル操作をする。

『マッスル化!』『伸縮化!』『高速化!』

その攻撃は某海賊王を目指す人のようになって居た。しっかりとゲンムを捉え何発も高速で叩き込んで居た。ゲンムが吹き飛ぶが、効いてない様子だった。

「私は不死身のゾンビだよ? そんな、緩い攻撃で勝てると思ってるのか?」

「だったら。こうするまで!」

再び、エナジーアイテムをいじる。

『マッスル化!』『マッスル化!』『マッスル化!』

そして、右腰のデュアルを取りギアを一回転させる。

『ノックアウトファイター! The strongest fist! ♪ Round 1 ♪ Rock & Fire!』

「大変身。」

「デュアルアップ! Explosion Hit! KNOCK OUT FIGHT

TER！」

ノックアウトファイターは相手を叩きのめすまで戦う格闘ゲーム。そのパワーは現状のライダーの中ではトップと言えよう。更に、マッスル化のエンジーアイテムで×3だ。これだけでも、ゲンムでも食らえばひとたまりもないだろう。しかし、パラドクスは更に攻撃力を上げる。ギアデュアルのギアを一度たん真ん中に戻し、再度ノックアウトファイター側に回転。

『キメワザ！』

それを、右腰のホルダーにセットする。

『ノックアウト！クリティカルスマッシュ！』

その拳には炎が宿る。それをマッスル化×3と言う狂強化で、ゲンムにクリンヒットさせる。流星がゲンムも変身解除に追い込まれる。決着がつき、ステージが戻る。すると、そこには簪や楯無が居た。そして、変身解除したことで頭痛に襲われるも、なんとか耐える一夏。

ポロポロの束は、不敵な笑みを浮かべる。

「以前君は、『織斑一夏は俺が倒す』と言ったな。ゲームマスターGMに逆らった罰だ。その望みを……断つウ。いっくん！きみはねえ、実は適合手術を受けずに、エグゼイドに変身したんだ！」

「え？それってどう言う？」

さて、皆さん。お待ちかね、BGMの準備はいいか？

「そう、いっくん、いや……織斑一夏ア！何故君が適合手術を受けずにエグゼイドに変身できたのか

何故ガシャットを生み出せたのか

何故変身後に頭が痛むのくわア！「それ以上言わないで！」

第107話 一夏は GAMER?

映画中二病でも恋がしたい！ Take on me を観てきました。控えめに言うて神超えてました。

ゲーム病を発症した一夏は、なんとか一命を取り留めた。今は眠っている。その間に簪たちは会議をして居た。

「それにしても、どうにかして私たちのガシャットを取り戻さないかね。」

「ポッピー、私たちのガシャットがどこにあるかわかる？」

「ごめん簪。私じゃ追跡がバレちゃう。」

「そっか。うーん、新しいガシャット作る？」

「いや、それを奪われたらそれこそ問題だわ。そうなる事を予見して、一夏君も一個しか作らなかったのよ、きつと。ま、とにかく。一夏君が起きるのを待ちましよう。」

ちようどその時だった。一夏の目が覚めたのはだあかしかあし！

「よお！何してんの？俺も混ぜろよ。」

何故か、変身してないのにゲーマーSのような話し方だった。

「緊急通報！一夏君、ガシャット借りるわ！」

楯無が一夏の状態異常を察し、出撃しようとする。しかし、一夏はそれを止める。
「これは俺のゲームだ。俺がやる。」

と言って、出てってしまった。すぐに簪が追いかける。その後に続いて楯無、ポッピーが走り出す。

現場に居たバグスターは『ゲキトツロボッツ』のラスボスである『ガットン』バグスター。

「この女の体は乗っ取った。システムオールグリーン。レベル30！」

「レベル30か。レベル差を埋めるのも、ゲーマーのテクニクだ！」

『マイティアクションX！ゲキトツロボッツ！』

「大・大・大変身！」

『ガッチャーン！レベルアップ！マイティマイティアクションX！アガチャ！』

ゲキトツロボツツ!』

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

エグゼイドは、初っ端から空中での叩き込みをお見舞いするも、レベル差が大きいためあまりダメージがない。

「おっ、丁度いいのがあるじゃねえか!」

エグゼイドは、ロケットアームで回転攻撃をし、エナジーアイテムを回収する。

『鋼鉄化!』『反射!』『挑発!』

挑発でガットンを、確実にこちらに寄せ攻撃させる。鋼鉄化と反射で確実にガットンにダメージを与える。

「ダメージレベルレッドゾーン。一時てっ t : : 。」

「そうはさせるか!」

『ガツシャット!キメワサ!ゲキトツクリティカルストライク!』

ロケットアームでマッスル化のエンジーアイテムを回収し、ガットンを抑え込む。そして、エグゼイドが会心の一撃を放とうとして居た時だった。突如ゲーマーが

現れたのは。

「ハハハ。どうだい、いっくん？自分のゲームを改良される気分は？」

「束……ゲナム！」

彼女の手にはデュアルと似た、だが色の違うガシヤットが握られて居た。

第108話 Fantasy は唐突に。

ははは、我が作品を読みし諸君！

我が闇の魔力が籠った本編を読み妄想に耽るがいい！

(→最近、中二病でも恋がしたい！熱が再燃しているうp主でした。)

彼女は、その手に持つ新たなガシャット『ガシャットギアデュアルβ』のギアを

回す。

『タドルファンタジー！』

そうすると、東の後ろから1つのゲーマーが現れる。

「このガシャットのレベルも50。今のいっくんじゃあ勝てないよ？ っでもうやられてるか。」

エグゼイドはファンタジーゲーマーに思いっきり吹き飛ばされ、変身解除に追い込まれて居た。

「そうね、でも一夏君じゃなく私なら勝てる！」

「天才ゲーマーでもない君が？変身もできないくせに？もつと無理だよ。」
束は楯無の発言に対して嘲笑する。

「一夏君に出来るなら、私にも出来る。姉に勝る義弟はいないのよ！」

「いや、お姉ちゃん。まだ結婚してないから。で、でもそのうち〓。」

「……私、妹に負けてるんだった。」

「で、でも！きつとお姉ちゃんにもいい出会いがあるよ！」

「そ、そうよね。諦めなければいつかは…。」

「帰っていつすか？」

束が帰りがっている。

「は！とにかく、あれをなんとかして、一夏君を戻す！」

「一夏起きて！一夏。」

「うう、俺は……。」

ダメだ。まだ戻ってない。

「フン、まあデータを取る為に。行け。」

ファンタジーゲーマーを動かし楯無を襲う束。

それを避けつつ、ISを展開して空間を把握する。そして、1つの作戦を思いついた。

「一か八かね。こっちよ！」

楯無は上空へと移動していく。それを追うようにファンタジーゲーマーも動く。徐々に攻撃が激しくなっていく。だが、狙いはジャスト！楯無はとあるエナジーアイテムを背後に隠し、ISを解除する。それを見るとファンタジーゲーマーは一気にケリをつけようと、楯無に突っ込む。

「お姉ちゃん！」

それを狙っていたのだ。スレスレでファンタジーゲーマーを避け、背後に隠していた『混乱』のエナジーアイテムをファンタジーゲーマーに使わせる。

それを見た一夏は、

「うう、……楯無さん。……無茶ばかり。」

「一夏あ！よかった、戻ったんだね！」

「え？僕は一体……何を？」

元に戻った。

ファンタジーゲーマーは混乱し、ゲムを襲う。それにより、ゲムが落としたデュアルβを回収できた。

「さて。これよりゲム切除手術を開始する。」

「そのガシヤットはレベル50。君にコントロールできるかな？」

「私を誰だと思ってるの？ロシア国家代表にして、IS学園の生徒会長よ？これくらい使いこなして見せるわよ。」

「そんな清い肩書きじゃ、タドルファンタジーは扱えない！このゲームは、魔王が勇者を倒して世界を征服するゲームなんだから！」

「だったら！私は、暗部更識第17代目当主として！私はこのゲームを使いこなして見せる！」

楯無はファンタジー側にギアを回す。

『タドルファンタジー！Let's Going King of Fantasy！Let's Going King of Fantasy！デュアルガシヤット！』

パラドクスと違いゲーマードライバーに挿して使用。

「術式レベル50！変身！」

『デュアルアップ！タドルメグルRPG！タドルファンタジー！』

仮面ライダーブレイブとしての素体に、先程まで戦っていたファンタジーゲーマーが鎧として纏う！仮面ライダーブレイブファンタジーゲーマーレベル50ここに参上。

……プロトガシャットの副作用を味わっていない簪。

彼女は驚くべき方法で、レベル50を使いこなす。

第109話 Gamer 妹最強説！

ブレイブファンの方申し訳ない、2次創作ゲームクリエイター？の方にも申し訳ないです。

先に謝ります。申し訳ありませんでしたあ！

ブレイブはレベル50へと変身を遂げた。それは良かった。だが……………

「うわああああ!!」

ブレイブの目は赤く染まり、魔王としての本質が現れる。大量の雑魚バグスターを呼び出し、一夏達に襲い掛からせようとする。一夏はなんとか体を起こし……………敵に背を向け、簪がだけを守ろうとする。雑魚バグスターの剣が一夏に向けられた。その時だった。

「私は、世界で一番の姉になる！」

と、なんだかよくわからないようなわかるようなセリフを吐きつつも、力をコン

トロールすることに成功した。一夏に攻撃しかけていた雑魚バグスターをゲンム達に向かわせる。そして、必殺の一撃を食らわせるべくドライバーのレバーを閉じる。

『ガッチョーンキメワザ!』

再びレバーを解放!

『ガッチャーン! タドル! クリティカルスラッシュ!』

魔王らしく闇のオーラを纏い、回転しながら空中へ、そしてゲンムへ真っ直ぐキックを放つ!

「あはは、その程度なら撃ち砕く!」

『クリティカルエンド!』

こちら黒いオーラを纏い、回転しながら上方に向かい蹴り返す。両者譲らなかつた為、両方とも吹き飛ぶ。しかし、楯無への負担も大きく変身が解除されてしまった。だが、ゲンムとして無事では無かつた。その能力ゆえ事なきを得たが、実質ライダーゲージがあればGAME OVERとなっていただろう。それを感じさせないよう

「ふっ、やはり所詮はそのてい……ん?」

と、言いかけた。が、一夏に守られていたはずの簪が、そのガシャットを手にする。

「姉の二の舞になりに来たの？」

「お姉ちゃんはあるゲームとかしないから。でも、私は違う。こっちサイドのバンバンシミュレーションズ。これは多分だけど、一夏の作ったバンバンシューティングの派生品。いや、公式が作ったものでない以上、ただの2次創作。しかも、多分あなたはこのゲームに愛がない。そんなゲームを私が扱えないわけない。」

『バンバンシミュレーションズ！I ready for Battle ship！デュアルガッシュャット！』

I ready for Battle ship！デュアルガッシュャット！』

「第五十戦術！変身！」

『ガツチャーン！デュアルアップ！スクランブルだ！出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！』

素体スナイプに戦艦のようなゲーマー『シミュレーションゲーマー』が装着される。見た目は提督や司令官といった感じだ。

「くうっ！うう……。」

だが、全身に電流？が流れる。

「ほらほら、耐えないで諦めなよ！姉でも耐えれなかったんだからさ。」

「はあああああ、はあ！」

耐えた。気力と体力を最大限まで高めて、耐え切り新たな力を自らの物とした。

「チッ！」

ゲムムはガシャコンスパローの柄の底部分で、バグルドライバーのABボタンを押す、もう一度Bボタンを押す。

『クリティカルデッド！』

大量のゾンビがスナイプへと襲いかかる。だが、彼女とてゲーマーだ。ゾンビの弱点くらい熟知している。ドライバーのレバーを閉じる。

『ガッチョ〜ンキメワザ！』

もう一度開く！

『ガッチャ〜ン！バンバン！クリティカルファイア！』

両腕に装備されたオーバードラフトキャノンを正面に合わせる。現れたゾンビの頭部をリーダーでロックオンし、全砲門：Fire。全てのゾンビ、その頭部に全

てクリティカルヒット！

『ミッシェンコンプリート！』

ゾンビを全て排除、ゲナムにもダメージを与え、ゲナムは撤退。かなり負担の多かった楯無は、現場にきた千冬とポッピーが連れて帰った。ボロボロなのに輝いて見えるカップルは、一夏の全力お姫様抱っこで帰りました。

一夏作のゲーム愛の強さから、束が作ったゲームに愛が無い！と説き、レベル50の力を使いこなす。これで良かったのだろうか。こちとら満足したけど。

こんな風なのどう？みたいな感想あったら是非聞かせてください。

あと、多分次回は番外編です。

番外編 happy birthday to ……

とある日、一夏は1人で外に出ていた。いや、彼は周りの目を気にしていた。と、言うよりかは尾行系の事にだ。ここで使うのは最近試験運用している索敵レーダー。周りに人は沢山いるが登録してある特定人物は別種メーカーで出現される。これは監視カメラを使ったシステムになる。故に間違いはない。最近では360。見回せるので、これは素晴らしい発明品だ。

目指したのは、DVD売り場。目当ての商品はすでに予約済み。前金を払い確定させ、後払いの放出を払い確実に入手する。1手順たりともミスは許されない。途中経過を報告する。

「こちらS、目標物D確保。」

「こちらK、了解した。引き続き、目標物PとKMの確保を。」

「了解、ミッションを続行する。」

通信を終了し、次に目指したのはおもちゃ屋。ここに第二の目当てがある。ここでも、索敵レーダーを使い確実にバレないように入手していく。続いて、電気屋へ向

かう。予約済みなので、こちらもすんなり手に入る。

「こちらS、全ての目標物を確保。」

「こちらK、了解。急ぎ撤収。」

「即座に撤退する。ターゲットは？」

「今は、整備室にいる。」

「わかった。」

即座にIS学園へと帰還した。

その日の夜。

一夏の部屋には大量の飾り付けが施されている。部屋のドアが開く。その時だった、

『『『パァン！』』』

大量のクラッカーが鳴る。鳴らしているのは、一夏、楯無、ポッピー、鈴、本音、幻夢社社員が数名。部屋のなかに入って来たのは簪だった。

「『『簪、お誕生日おめでとう！』』』」

本日は簪の誕生日。来ていた幻夢社社員は、デバッグをやっていた時に、簪が仲

良くなった人達だった。そして今日、一夏は簪に悟られないように、プレゼントを買い集めていた。内容物は、簪がほぼほぼ諦めていたヒーローアニメのBlu-ray & DVDの特装版。簪が作りたいと言って買ってなかったプラモデル。最後に最高品質の空中投影ディスプレイ。しかも、サイズ拡大はかなり自由の効くものだ。アニメも見やすい。

「これらは僕らからのプレゼントです。お納めください。」

「なんか、丁寧過ぎて逆に怖いよ、一夏。」

「え？」

「でも、ありがとう。」

なんとなく照れ臭くなる一夏。

「あ、そうそう。最後のプレゼントが残ってたんだ。持ってくるよ。」

一夏が冷蔵庫から純白のケーキを持ってきた。

「どう？今回ちょっと頑張ってみただけど。」

「音ゲーキャラがやる事じゃないね。」

「意外と楽しいわね。スイーツ作り。」

「かんちゃん、召し上がれえ。」

と、言うのは楯無、ポッピ、鈴、本音だった。一夏はその間にテーブルにケーキを置く。

「これをみんなが、本当にありがとう。」

「いやー、でも。一夏君無しじゃ無理ね。」

と、軽く一夏に振る。すると、簪が一夏の元へ駆けていき、そのまま押し倒してキスする。

「ありがとう、一夏あ♡」

幸せな時間を過ごす簪でした。

簪の誕生日って、調べても出てこなかったんですね。

第109話 動きだす Phantom

「それでは、学園祭の出し物の案がある方は……事前に言っておきますが、僕を絡めるのはやめてくださいいね？」

IS学園も学園祭の時期。クラスでは何故か一夏が仕切っている。

(ああ、クラスをまとめあげる一夏カッコいい！)

2人ほど、見惚れている方が居ますがまあ良しとしましょう。

「それでは、アイデアをまとめます。まずは、コスプレ(メイド風)喫茶。それから、織斑一夏のIS学園限定新作ゲーム体験会。」

一夏自身乗り気ではないが、生の反応が観れるのはいい事だと割り切りOKを出した。

「えーと、この2つでどちらか決めます。多数決でいいですね。それでは、喫茶店がいい人。次にゲーム体験会がいい人。」

結果は半々だった。

「うーん、思い切って合併しましょうか。ゲームコスプレ喫茶はどうですか？」

「おお、さすが一夏。」

と、目を輝かせるのは簪。

「それもあたりだな。むしろやってみたい。」

と、メイド喫茶を提案したボーデヴィツヒ。

「納得できん！何故剣術ができんだ！」

と、まあ篠ノ之さんが怒る。

「危ないからですよ。そんなにやりたいたいなら、剣術の師範にでもなってやってください。それでは、ゲームコスプレ喫茶でいい人？」

結果は箒以外の全員だった。

「わかりました。幻夢コーポレーションと連携して作業を始めます。次に製作するゲームのテーマを決めて行きたいと思います。これは、プログラミンク班、キャラ班、モーション班などに分けて行います。もちろん喫茶店の準備などもありますので、3…7に分けて行いたいと思いますが、何か意見は？」

不満そうな篠ノ之以外は手を挙げようとしているが、どうやら殺気を感じたらしくやめた。残りのクラスメイトは手を微動だにしない。

「わかりました。それでは、班分けを開始します。」

こうして着々と学園祭の準備は進んだ。

その頃とある場所では

「我々『亡国機業』に力を貸して頂けませんか？」

「君達ごときが、この神の才能を持つ私に頼みごとか。財団Xあたりにでも頼んだら？」

「ツツツ！あー！もうダメだスコール！俺にやらせろ！」

というか女性に対し、スコールと呼ばれた女性は……

「ダメよオータム。多分貴方じゃ勝てない。」

「よくわかってるじゃないか。変身。」

仕込んで居たバグスターバックルに、さらに仕込んでいたバグヴァイザー（ガシャット挿入済）をセットし、ボタンを押す。

『ガッチャーン！バグルアップ！デンジャラスゾンビィ！』

「これを見ても、勝てる気がする？」

「……無理だな。あーあ、つまんねーの。」

「それでは、篠ノ之博士。私達はこれで。時期に彼女も動く頃ですから。」

「そう、気を付けてね。」

そう言って、亡国機業は姿を消した。

第110話 Police と新作

タイトルの police と新作の絡みは今回ありません。
そして、police と言えば……

IS 学園学園祭 3 日前

一夏はとある人に連絡を入れていた。

「もしもし、泊進ノ介さんで間違い無いでしょうか？」

『ああ。もしかしてエグゼイド…織斑一夏か？』

「はい。ご無沙汰してます。」

『元氣そうで何よりだ。で、どうした？』

「実は……。」

一夏は3日後の学園祭のことを伝えた。

「それで、何か嫌な予感がするんです。泊さんにご協力いただけないかと。」

『なるほどな。わかった。市民の安全を守るのが俺たち警察の仕事だ。』

快く受けてくれそうだった。しかし、

『だが、流石にIS学園へとなると。国が干渉できない以上どうやって中に入るか。そもそも、俺はドライブには変身できないし。』

そう、IS学園は国も干渉不可。まあ、暇そうなお偉い方々がたまに来るが。その問題は、一夏さん解決済みです。

「それなら、招待客としてきましょう。IS学園の学園祭は一般公開されます。と言っても、中の人間からチケットを受け取らねばなりません。」

『そうか！一夏君が送ってくれば。』

「中に入れます。」

『だが、ドライブには…「ご安心を。」え？』

「既に、ベルトさんは説得済みです。」

『一体誰が…。あのベルトさんを説得できる人なんて。』

「暗部が動いてくれました。」

『それ、大丈夫なのか？』

「ええ、問題ありません。そんなわけで、心配するところはありませんよ。ベルトさんは当日会場にて手渡し可能です……。」

『わかった。よろしく頼む。』

「それでは、よろしく願います。」

これで布石は揃えた一夏だった。

IS学園学園祭当日

校門前にドライブレ^ペルト^ルドライバー^トを持^さった一夏が居た。

「やあ、一夏君。」

「泊さん！お待ちしてました。すみません、ご足労いただきて。」

『進ノ介。また会ってしまったね。』

「ベルトさん。本当に来てたんだな。」

『全く、鎧武といい一夏君といい。人使いが荒いぞ。』

「すみません。ただ、不安要素に対する策はさておきたいので。それでは、何事も無いように祈りつつ、僕の新作ゲームも楽しんでってください。」

「そうさせてもらう。さ、ベルトさん。また一走り付き合えよ。」

『ハハッ、そうしよう。』

そう言って泊さん達は中へ入って行った。

一年一組前では

皆がゲームのコスプレ（幻夢コーポレーション提供）をして接客に努める。因みに篠ノ之は、マイティの大きな着ぐるみを着ている。そして一番長い行列ができている理由は一夏の新作ゲーム。その名も『ジュージューパーガー』！

ハンバーガーを作り、敵キャラのバガモンを喜ばせるゲーム。かなり人気なのでIS学園名義で商品化してもいいかもしれないと思った一夏だった。

第111話 Phantomの計画始動!

次回からだけどね。というか、お待たせしてしまいました!

学園祭も大盛り上がりを見せ、とうとう半分が終わろうとしていた。その時だった校内放送があるかかったのは。

『あーあー、マイクテストマイクテスト。感度良好。えー、これより体育館にて全学年合同イベントを行います。内容は参加希望者にのみ教えることとなります。それから、一年一組織班一夏君は大至急体育館まで♪』

一夏と別所に居た簪は、この放送を聞いて嫌々予感しかしてこなかった。

「はあ、仕方ありませんね。大人しくそちらへ行きますよ。楯無さん。」

体育館へと憂鬱そうな顔のまま、歩み始めた一夏だった。

一方で、学園祭に潜入している者たちが居た。

「オータム、織斑一夏は体育館だそうだ。」

「ええ、しっかり働いてもらうわ。M。」

「やっぱりオータムのそれ、慣れないな。」

「もうじき戻るわ。さ、作戦開始。」

二人とも体育館に向かった。

体育館に着いた一夏に唐突にキャリアケースが渡され手首に何か装着させられ、イベントアナウンスが流れる。

『えー、本日のメインイベント！一夏君の同室になれる権利獲得イベントへのご参加ありがとうございます。』

「楯無さん、仕事量倍にしてあげましょうかね。それとも、しばらくバグスターの対応は全て任せますか。」

『それでは、ルールをご説明いたします。……一夏君を殺さなければ、如何なる手段を使ってもよし！奪うは一夏君の持っているキャリアケース！これを奪えれば、一夏君と同室になれちゃいます！それでは、皆さん！頑張ってください！』

「……。」

一夏は思った。

(逃げなきゃ、簪以外の全ての人間から逃げなきゃ。)

一夏はその場から即刻立ち去った。

一夏が向かった場所は、屋上。ここなら、最悪飛び降りられる。まあ、簪が来てくれることを祈るだけだな。

屋上の扉を一夏は開ける。すると、そこに居たのは、先程アナウンスを入れた楯無本人だった。

「ちょっと！楯無さん、一体どういうつもりなんですか？このままだと簪に殺されますよ。」

「え？私ここでずっと音楽聞いてたんだけど？こないだ幻夢コーポレーションに頂いたやつ。」

「ええ？それが本当だとしたら誰が…。」

すると、そこに入って来た人が居た。

「私です。」

「……………虚さん。あなたが……………そうか。あなたは、彼女達を僕から離そうとし

ている。そういうこと……ですわね。」

「そうです。あなたが、最近我が主を戦いに巻き込んだ！その元凶を断つために！」

「……申し訳ありません。全ては僕の責任です。」

「だったら……。」

「でも、彼女達が居なければ……僕はもうこの世に居なかったでしょう。」

「でも！あなたが……『ドゴォオン！』!!」

「敵襲ですか。はあ、『Pr r r Pr r r Pr r r Pr r r』もしもし、泊さん。想定して居たことが起こりました。できればいいので、確保お願いします。それでは、お二人とも早く逃げて。僕は戦わねばなりません。」

一夏は騒ぎが起きた方へ走っていった。

第112話 天才は敵にも Popular

一夏が向かった方に居たのは、ISを纏ったオータムだった。

「おう。お前が織斑一夏だな？」

「だとしたら何です？」

「殺す前に1つ……」

「……サインくれ。」

「は？」

「いやー、お前が作ったゲームは世界最高だ。すっかりハマっちゃった。だから、殺す前にサインだけでもと。」

一夏に向けて、サインペンと色紙が投げられる。

「殺されるとわかってて、そんな事すると思いですか？……まあ、書き終わりました。」

ファン第二（第一は簪）主義の一夏は、反射的にさらっと書いてしまった。

「あ、そこにオータムへってよろしく頼むぜ。」

「はいはい、オータムさんね。……はい、出来ました……よ！」

と、投げてオータムへ渡す。

「へへ、ありがとう。これで心置き、お前を殺せる。」

「こちらはまだ死にたくないの、抵抗させてもらいます。変身！」

『マイティブラザーズXX！ダブルガッツシャット！ガツチャーン！ダブルアップ

！マイティマイティブラザーズ！（ハイ！）ダブルエーツクス！』

「超協力プレイでクリアしてやるぜ！」

「うお！2人になった。でも、そんな事したって、このオータム様のアラクネには勝てないぜ！」

L 『ガシャコンキースラッシュャー！』

R 『ガシャコンブレイカー！』

その場において最適な武器選択をするのも、ゲーマーであれば当然当たり前の様に判断できる。戦闘場所は更衣室、空間は閉鎖空間。ロッカーなどの遮蔽物がある。故に隠れて銃撃が可能である。そして、接近戦が得意なのはRサイドのエグ

ゼイドである。つまり、Lサイドがキースラッシュのガンモードで援護、Rサイドはヘイト管理しつつ前衛でブツパする流れだ。

作戦は成功した。

「チイツ！ちよこまかとお！」

「よっしゃ、そろそろ……。」

「OK！ステージセレクト！」

『ステージ！セレクト！』

場所をIS学園のアリーナへと移動し、戦闘を続行。そして、この場で最も有力な策を講じる。

部屋の狭さ故、展開されていなかったエナジーアイテムを入手する。

R 『マッスル化！』『高速化！』『透明化！』

L 『分身！』『反射！』『高速化！』

透明になったRサイドのエグゼイドは、どこかに消える。そして、Lサイドは分身全員で高速でアラクネの周りを高速で回り、オータムを翻弄する。オータムはとにかく攻撃すべしと、背中の装甲脚を使いエグゼイドに攻撃していく。

が、高速化と分身で本体に当たらなかつた。

そして……

「よっしゃ！ B連打入るから、援護よろしく！」

「OK！ それじゃあ……。」

『伸縮化！』

伸びる腕で困惑させていく。Rサイドは、ブレイカーのBボタンを連打し続けた。

「よし！ スイッチ！」

分身体も全てアラクネから離れていく。

『ガッシャット！ キメワザ！ マイティ！ クリティカルフィニッシュ！』

ハンマーモードチャージ攻撃でアラクネには当てずに衝撃波のみでISを解除させた。

「流石天才ゲームクリエイターにして天才ゲーマーS。出来れば殺したくなかつたが……。」

そう言い残し、再度アラクネを纏う。

「シールドエネルギーが無いのに、何が出来るっていうんだ。」

「機体のコアは抜き取った。あとは本体を自爆させるだけ……。じゃあな、天才。」

オータムは逃げた。一夏達はどうしようかな悩むという事しか出来なかった。

もうすぐ爆発する状況で……奇跡は起きた。爆発するはずの機体を楯無のアクアヴェールで包み、爆発規模を抑えていた。これで、一夏の戦いは、無事に終わり戦闘しているであろうドライブの元へ向かった。

本話より2週間ほど投稿休ませてください。

お願いします。書溜めはしておくますから。

なんか、調子良くないので……。すぐに戻って来ます。

番外編 インフルエンザは Dangerous

インフルエンザ。それは毎年毎年流行するインフルエンザウイルスによる感染症。今年もまたIS学園内でも流行り始めていた。

「えー、これにて朝のHRを終了とする。現在、更識や布仏、それからオルコットやデュノアなどインフルエンザが流行りだしている。各自対策をするように。」
いつもの織斑先生によるHRで告げられたインフルエンザ流行。もちろん彼は動く。

放課後

一夏の部屋の前にはマスク着用を着用し、そびニール袋の中に消毒液やマスクの替え、冷え○タやポ○リなど入っている。もちろん一夏だ。

「ただいま簪、調子はどうですか？」

「一夏あ、寂しかったよお（泣。）」

「よしよし。ごめんね、1人にして。」

頭を撫でていく一夏。

「簪、食欲は？」

「ちよつとだけ…なら。」

「すぐ作って戻るから。」

「早く…してね？」

(いっそのこと、学校休むか。)

などと考えている一夏が居ますが気にせず。

一夏は簪のおでこ、脇下、背中などに冷えピタを貼る。そして、ポカ○を置いて台所へ。

卵を取り出し、割る。ボウルに出した卵を菜箸でめっちゃ早く溶いていく。鍋に湯を沸かし、ご飯を投入。因みに米は新潟産の良い物を使っております。

さすが一夏君、簪の為な、出費なんか一切気にしない男！そこに痺れる、憧れるう〜！

さて、ご飯の準備が整ったところで卵を投入。

かき混ぜていく！

少し経ったところで、一夏は毒味。全く問題のないことを確認して土鍋を簪の方へ持っていく。

「お待たせ、さあ召し上がれ。フタナ）はい、あーん。」

一夏は鍋の中身を軽くレンジに取り、簪の口元へと運ぶ。

「あーん。(ハッ、キョキョ。コッキャン)」

(何これ、可愛すぎて……死ぬ。)

「一夏、これ美味し……い……。一夏あ！」

一夏は倒れた。簪の叫び声に反応して、楯無、千冬、篠ノ之がドアを吹き飛ばして入ってきた。吹き飛ばしたのは篠ノ之と千冬だが。

「一夏君？しっかりして！」

「一夏！一夏！おい、どうした！」

「一夏！まさか、貴様かあ！貴様が一夏を……！」

何処からかソーコムを取り出す。

「……あの、篠ノ之さん。メ○ルギア見過ぎ。」

「だって、姉さんがハマるって相当……ってそうじゃない！ 貴様を今ここでk……。」
篠ノ之がセーフティを解除して簪にその穴を向けた瞬間だった。スパッと先端が落ちる。綺麗に斜めに切られている。

『ガシャコンブレイカー！』

篠ノ之の目の前にはブレイカーソードモードを振り上げている一夏が居た。

「ふう。全く病人に武器を向けるとは。非常識すぎませんかね、篠ノ之さん。」

「クッ。」

「と言うか、日本だった銃刀法違反及び、殺人未遂で現行犯逮捕ですよ。さあさあ、感染しますから楯無さん以外は帰ってください。」

大人しく帰ってくれて助かった。

そして、楯無さんは倒れた。

更識姉妹共にインフルエンザになり、その後2人仲良く復帰することになった。
尚、千冬と篠ノ之も後日インフルエンザになったらしい。

そんなこんなでこんにちは。p r o t o です。

いやー、周りがインフル多発で。まあ、自分は
問題ありませんがね笑笑。

それでは、なるべく早く本編に戻ります。

スランプティックなのが解消されるまですぐに立て直しますので！

第113話 DRIVE の活躍

一夏が戦闘を開始した直後の事だ。場所は第三アリーナ。一夏たちが戦っていたアリーナとは少々遠い。

『進ノ介。恐らくアレが…。』

「ああ、ファントムタスクなる組織の人間だろうな。ベルトさん、一走り付き合えよ。」

『OK！START YOUR ENGINE！』

泊進ノ介は、シフトスピードを手にしドライブへと変身する。

『DRIVE！TYPE SPEED！』

ドライブへと変身し、スピードタイヤが超絶遠距離にあるはずのトライドロムから発射され、ドライブに装着される。

「おい、そこのおまえ！一走り付き合えよ！」

ISを纏っているファントムタスクの人間は、こちらへ向き直る。

「私の名前は、M。そして、この機体の名前は『サイレント・ゼフィルス』。」

「サイレント・ゼフィルス。確かイギリスで奪われたって。お前たちが犯人って訳か。」

「フツ。まあ、いい。倒すだけだ。」

『進ノ介、ここはアレを使おう。この場に置いて高速で移動する以外、BTを避ける方法はないぞ!』

「わかった。来い! シフトフォーミュラ!」

ドライブは、シフトブレスに装填されているスピードレバーをフォーミュラに装填しなおし、フォーミュラレバーを押し倒す。

『DRIVE! TYPE FORMULA!』

F1カーモーターのドライブタイプフォーミュラへとフォームチェンジする。

「トップギアで倒す。」

フォーミュラレバーを三回倒す。

『FOR FORMULA!』

シフトアップし、高速での連撃を叩き込む。熟練した戦士だけあり、その動きには迷いが無い。右フック、ストレート、膝蹴り、多彩な打撃を繰り出していく。そ

れをビットで対処できているあたり、敵もなかなかの手練れと見受けられる。

『仕方ない！フルスロットルだ！』

「ああ！いくぞベルトさん！」

ベルトのイグニッションキーとブレスのボタンを押し、フォーミュラレバーを倒す。

『ヒツサーツ！フルスロットル！フォーミュラ！』

「はあああ、ハア！」

サイレント・ゼフィルスはビットで凌ぐ。しかし、彼の仮面ライダーとしての覚悟は、思いはそれを上回る！防御していたビットに亀裂が入り始めた。ここだと言わんばかりにシフトアップする。

『FOR FOR FOR FORMULA！』

ドライブの蹴りの勢いは増し、ビットを全て粉々に砕いていく。

そのまま本体に直撃し、SEエンプティでISが解除される。

『念のため拘束しておこうか。』

『TYPE SPEED！タイヤコーカン！ジャスティスハンター！ヒツサーツ

！フルスロットル！ハンター！』

ジャステイスハンターの檻でMを閉じ込める。
そのタイミングで一夏は合流するのだった。

第114話 M から N へ

ニコポジ誕生！

捉えることに成功したMの目の前にいる一夏。しかし、その顔を見ると驚愕の表情を浮かべる。

「ち、千冬……姉？ いや、髪の色が違う！ 水色……は！ 目の色も赤がかった。つまり……。」

「ああ、これは間違いなく……。」

『君と、君の彼女の遺伝子から作られた者だろう。』

「一夏君は、不純異性交遊なんてしてないだろ？」

「もちろん。卒業するまでではありませんよ。」

既に超一流の大企業の社長なんですよねー、彼。

「DNA鑑定すれば、2人の遺伝子情報と一致するはずだ。そう思うだろ、ベル

トさん。」

『そうだねえ。どうだい？する気はあるかい？』

「そうですね。でも、多分ですけど。彼女のなかのナノマシンをどうにかしないと。」

「何故、ナノマシンがあると？」

「勘ですね。なんというか、その……。」

『まあ、見てみよう。進ノ介、マッドドクターを。』

「わかった。」

マッドドクターをMの上に置くと、ドクターがナノマシンを無効化してくれている。

「本当にあったんだな、ナノマシン。」

『何故わかったんだい？』

「擦り傷や切り傷が、すぐに治ってるのを見て。なんかこう言うと変な風に聞こえないかな……なんて。」

Mが目を覚ましたのは、その2時間後だった。

「うう、ここは？」

「よかった。私の名前は更識簪。ここは、IS学園の特別医療室？」

「何故疑問形なのだ……。」

「ここの正式名称って無いから。」

「で、私は拘束されていると……ってアレ？されてない？服装が……制服……だな。」

「その方が、武器とか仕込みずらそうかなって。で、名前教えて貰えるかな？」

「私の名前は……Mだ。」

「うーん、じゃあ織斑ニコで。」

「……は？」

「だって、見た目完全に織斑先生だし。それに、いつもニコニコして欲しいから。」

「織斑ニコ……か。悪くないな。」

「それじゃあ、ゲームしよう！」

「私は、……強いぞ。」

と、2人はまるで本物の姉妹のようにゲームを始めた。

その陰では……

「やはり、ゲームは共通言語ですね。」

「そうだな。で、あの子どうする？」

『警察の力が必要なら、進ノ介が力になれるだろう。』

「そうですね。いずれ、お力をお借りするやもしれません。でも、今は……まだ。」

「わかった。それじゃあ、気をつけて。」

『SEE YOU。体につけたまえよ。』

「はい。お二人ともありがとうございました。」

そう言って2人は帰って行った。

「ニコちゃん強いね。」

「これでも、裏のゲーム界では名が通っていてな。」

「へえ。そうなんだ。」

簪はかなり関心を寄せているようだ。

「だが、一度だけ敗戦してな。あの『パラド』とか言う奴、かなりやり手だったな。」
パラドと言う単語に、反応したのは簪だけでは無かった。

が、それは次回。

はい。protioです。

最近、執筆スピードが落ちてますが、
オリ作考えてると落ちるんですよね。

番外編 Valentines day の幸せ。

2月12日。この日はとあるイベントの2日前。簪はスーパーに来ていた。

「生クリームに、チョコは……ホワイト、ブラック。どっちがいいかなあ？」

去年までは居なかった恋人がいる為、今年はチョコをあげる事にした。そう、後2日でバレンタインデー。日本人は異性や友人、お世話になってる方にチョコをあげたりする（義理だったりする事もある）日。この日を待ちわびている男性諸君も多い事だろう。因みに一夏は、幻夢コーポレーションの女性社員から貰うそうです。

「ビター？それとも甘いのか？どっちがいいかなあ。」

そう、更識簪は悩んでいた。一体、彼氏である織斑一夏はどのようなチョコが好きなのかを。しかし、彼は簪にゾッコンである。彼女のくれる物なら、例えば吐瀉物（お食事中の方、申し訳ありません）や、……排〇物でも喜んでしまうだろう。

「簪のなら、ご褒美です。」

とか、本当に言いそうなので怖いのである。愛の力恐るべし。

とは言え、悩み過ぎた末に生まれた結論がこれだ。

「色んな種類を作って、渡そう！」

そう。金を持つ者の特権！色んなの試してもいいよね？だ！しかし、彼女の財布には常時5万ほど入っているという噂がある。何せ、衝動買いがあるのだ。懐は常に暖かくしておきたいのだろう。と言うわけで、原材料のチョコを大量購入しキッチンへ。現在一夏は、重要な会議で幻夢コーポレーションに居るため作るにはうってつけの状況だ。

まずは、チョコを割る！この割る作業が意外と辛いのだ。何せこの後カキマゼーのだから、細かい方がいい。チョコを割って細かくして、ボウルに入れる。その間に、生クリームに火を通し温めておく。ある程度の温度になったら、ボウルに入れヘラで混ぜる。この時にクリームの温度が低いと溶けづらい。なので、湯煎をしながらチョコを溶かしていく。しかし、チョコの抵抗も大きく、中々ヘラが動かなくなったりするのだ。チョコがなめらかな状態になったら、シートを敷いたバットに流し込み、表面を平らにして冷蔵庫で冷やす。

冷やしてるあいだに別のを試作する。ブラックチョコのをハート型に流し込む。

そこにある程度のレベルに溶かしたホワイトチョコでメッセージを書く。内容はこうだ。

「イチカへ

大好きだよ♡」

器用さが見える逸品だった。

そして、2〜14がやってきた。

一夏は、教室に来ると早々机を見る。すると、椅子を引いた時点でチョコが溢れ出した。

「はあ、明日那。これ全部冷蔵庫にしまっておいてください。」

「わかりました。」

明日那がどこからともなく現れ、袋一杯にチョコを詰め込み消えて行った。

「ね、ねえ。一夏。こ、これ！」

「……………あ、ありがとう。簪、開けてもいい？」

「う、うん！もちろん！」

梱包された袋を開けると、そこには……ハート型が入っていました。

「食べたくない！永久に保存しておきたい！」

「ダメ〜！頑張って作ったから食べてね。」

「では、いただきマイティアクションX！」

お菓子のヒーローが主人公のゲーム名を言い、ゲームを宣伝。そして、その手にもつ甘く黒い物を口にした瞬間、一夏の目からは大粒の、しかも何粒もの滴が流れたのだった。

本編ではなく、しかもギリギリ投稿になってしまいました。申し訳ありません。現在本作品はスランプ？に陥っており、新作であります『IS』悪しきウルトラの力を使いし者』を連載中です。本作も完結させる予定ではありますが、今しばらくお待ちください！

第115話娘の Sick を治療せよ。

「い、いま。パラドって。」

「? ああ、パラドは強かった。だが、次は絶対に勝つ！」

一夏は驚愕した。なんせ、パラドはバグスターである。いくら裏の舞台とは言え……。

「とにかく、考えても仕方ありませんので寝ましょう。……ニコは、僕らの部屋に来ますか?」

「……そうしても、いいのか?」

「まあ、ここにいるよりは安全……でしょうしね。」

「じゃあ、えっと。よろしくお願いします、お父さん、お母さん。」

ボンツ! と2人の顔が赤くなる。

「い、いや。待て待て、お父さんって。」

「えへへ、お母さんだってえ〓。」

「……帰ろうか。僕らの部屋に。」

「うん！」

こうして、家族が1人増えました。そして、僕と簪は一緒のベッドで寝ました。
誰得？僕得！

その頃束は……。

「バグスターのデータはあ、ソルテイ、アランプラ、モータス、ガットン、バーニア、カイデンの6つかあ。早くデータを集めなければあ。」

束はバグヴァイザーを見て、不気味な笑みを浮かべた。

「そろそろ、動くでしょう。」

束は動き出す。IS学園へと。

翌々日の事だった。

「うう……。」

ニコがバグスターウイルスに感染した。

「リボルのウイルスだ。一体誰が……。」

「先程、トイレで篠ノ之博士に会いました。」

「まさか！クッ！この学園、警備がザルすぎますよ！まあ、彼女相手なら仕方がないですか。」

「うう、うわあ!!…お父さん、助け…て。」

発症してしてしまった。ユニオンを、飛ばしてリボルへと。即座にドライバ装着、マイティブラザーズXXを起動させる。

「速攻で倒すから、待ってる！お前は、俺たちの大事な…娘だからな！だ…い変身！」

『ガッチャ〜ン！ダブルアップ！マイティマイティブラザーズ（ハイ！）ダブルエーックス！』

「超強力プレイで、クリアしてやるぜ！」

「第五戦術！変身！」

『ドラゴナイトハンターZ！』

レベル50の負荷に耐えきった簪は、フルドラゴンを完璧に使いこなすことに成功する。

「待ってたよ、エグゼイドにスナイプ。」

「お前は、ゲムム！」

「ギアデュアルβは回収させてもらおう。」

「残念、今持つてるのは私じゃなくて、お姉ちゃんだよ！」

「何！何故、使いこなせない者に…。」

「使いこなせないからこそだよ！人は試練を乗り越え強くなる！」

「まあ、いい！」

「と、とにかく！はやくニコを助けないと。」

「そうだな！」『ガシャコンキースラッシュャー！』

「させるかあ！」

「それは私のセリフ！一夏、ケリをつけて！」

「ああ、蹴りで終わらせる！」

ダジャレか！

『ガッチョーンキメワザ！マイティダブル！クリティカルストライク！』

中に取り込まれているニコを傷つけぬよう慎重に攻撃する。

『『会心の一発！』』

Rサイドがトドメを、Lサイドがニコを抱えている。

その間、ゲムムはリボルバグスターが倒れた方へバグヴァイザーの銃口を向け、ウイルスを回収する。そして、消えていった。

「残るバグスターのデータは3つか。」

「うん、究極のゲームを完成させる日は近い。」

大変長らくお待たせしてしまった事を深くお詫びします。

そこですすね、ツイッターをやっておりますので、

是非フォロー等してくだされば、少しでも作品状況を

お話しようかと考えております。

© p r o t o w r i t e r 0 1

となっております。興味のある方は

フォローしてみてください。低浮上ではありますがね。

第116話 天災も S I c k になる

篠ノ之束の研究室。そこには、大量の黒服が現れた。

「篠ノ之束、裁判所から令状が出ている。自宅搜索させてもらうぞ。」

「え？まさか…衛生省!?まて、触るな!………うっ………あああ!」

突如奇声をあげる束の体にはノイズが入っている。」

束の体はチャリーバグスターに乗っ取られた。状況を即座に把握し、衛生省の職員は撤退し織斑一夏に緊急通報を入れる。

IS 学園で授業を受けていた一夏のポケットの中にあつた、ゲームスコープが鳴る。

「すみません。ちょっと失礼します。」

山田先生に一言断りを入れ、廊下に出る。

「はい、一夏です。」

『篠ノ之束がゲーム病に感染、バグスターが現れました。至急応援を願います。』

「わかりました。場所は……はい、至急向かいます。」

教室のドアを開け、山田先生にアイコンタクトを取る。その意を汲み取った簪も教室から退室する。そして、楯無と合流し篠ノ之束が居るといふ場所へ向かう。

現場である公園に着くと、チャーリーバグスターが自分専用の自転車である『チャーリーズサイクル』を乗り回し、黒服の衛生省の方々を翻弄し、遊んで……暴れていた。

マイティブラザーズXXを取り出し、レベルXXへと変身する。

「だ〜い変身！」

『ガツチャ〜ン！ダブルアップ！マイティマイティブラザーズ（ハイ！）ダブルエックス！』

そして、Lサイドのエグゼイドが一本のガシヤットを取り出す。

『シャカリキスポーツ！ガツシャット！キメワザ！シャカリキ！クリティカルストライク！』

ゲムムから回収したシャカリキスポーツを起動する。すると、スポーツゲーマーが現れる。

「ヒヤッハア〜！お？ユーもいいバイセコー持ってんねえ〜。どう？ミーとバ

トルしない？」

「もちろん！」

バイクではなく自転車に乗るエグゼイドL。だが、スポーツタイプの自転車なのでかなり様になる。

「俺のスーパーアメイジングなテクニクに驚くんじゃねえぞ！ヒャットホーウ！」
と、ノリノリで自転車を漕ぐチャリーを追いかけて自転車を漕ぎ始めるエグゼイドL。ちょうどどう言う公園なのか、自転車によるパフォーマンスが決まる。チャリーは上に飛ぶと横回転をしたり、エグゼイドLは空中で前転したりと、コ스플레이ヤー2人のバイクパフォーマンスにも見えなくない。何も知らない人が見たらシュールだろう。

そんなショーも束の間。Lが引き付けている間にエグゼイドRが目当てのエンジーアイテムを入手する。

『マッスル化！ス・パ・パ・パーン！』

パワー強化のエンジーアイテムを使い、キースラッシュシャーアックスモードを構築する。

キースラッシュャーのキー横にあるアックス部分を使い、チャリで突っ込んでくるチャリーリーの胴体部分にアックスの重たい一撃を食らわせる。すると、チャリーバグスターは束の体内へと戻って行った。

「篠ノ之博士、私達と一緒に来てもらいます。」

「ちょっと待ってください！」

衛生省が束さんを連行しようとしたのを止める。

「彼女はバグスターウイルスに感染しています。そんな状況じゃ、いつ暴れ出すかわかりません。それに、そもそも抗体があるはずの適合者がなぜ感染したのかが解けません。それらがわかるまで、待ってもらえませんか？お願いします！」

「私達、暗部更識からもお願いします。」

「お、お願い、します！」

「わかりました。ですが、時間はありません。なるべく急いでくださいね。」

「ありがとうございます。」

こうして、束の身柄はIS学園へと移送された。

約1ヶ月ぶりの更新となってしまったことをお詫び申し上げます。

現在、別作品を執筆しており、そちらに精が出ておりまして、

こちらの執筆が疎かになってしまいました。

と、いうかこっちの作品がスランプ状態で……

お見苦しい言い訳をしたところで、また少しずつ頑張っていきますので、
本作品をよろしく願います。

最後に一言

c s m オーズドライバーを二次で予約しました。

第117話 未知数の Awakening

IS学園にあるCRに束を連れてくる。

「はあ…はあ…、ありがとういいくん。」

「勘違いしないでください。あなたには、聞かなきゃいけないことがあるだけです。」

束をベッドに乗せ、患者用の衣服に楯無さんと簪が着替えさせる。

「なんで、僕らを裏切ったんですか？」

「……………私は、究極のゲームを作りたかった。それだけ。」

「…わかりました。これ以上は無駄ですね。あの2人を入れましょうか、どうぞ。」
入って来たのは篠ノ之箒と織斑千冬。束との関わりがある学園関係者はこの2人のみだろう。

「姉さん。」束……………落ちたものだな。」

「そう？自分の子たちを戦闘兵器同然の扱いをされて、まともな思考を保てる訳

がない。この束さんの思いは、物を作らない君達にはわからないよ。」

「姉さん、どうして今更私の前に……。」

歯を食いしばる篠ノ之に束は、

「束さんは、別に呼んだ覚えはないよ？」

「も、もういいです。失礼します。」

篠ノ之が退出するのを狙っていたのか、束はバグルドライバーを装着する。

『バグルアップ！デンジャラスゾーンビィ！』

束はゲナムへと変身する。

「自分の病気くらい自分で治す！うう……。」

が、再びチャーリーバグスターが現れる。

「自由な自転車乗り！チャアーリーイー！イエーイー！」

どこかの作る・形成する者のベルトのようなテンションで出てくるチャーリーに
対してとった行動はこうだ。

『ステージセレクト！』

全員が変身済みであり、即座にスロットにガシャットを装填する。

『キメワザ！マイティ／＼タドル／＼バンバン！クリティカルストライク！』

トライアングルポジションで、一斉にチャーリーにTRKを放つ。

出落ちなんて、あ、アメイジング
『うわああああ！』

チャーリー爆発の跡地に残っていたのは、ゲンム……束だった。

「ふう、これでえ、完璧に手に入れたぞお。レベルXの力ああ！ブウウウン！」

『ガッチョーンデンジャラスゾンビィ！』

「へえ〜んしい〜ん！」

『ガツシャット！バグルアップ！デンジャーデンジャー（ジェノサイド！）デス・

ザ・クライシス！デンジャラアースゾーンビィー！（WOOOOO！）』

「ありがとういっくん。お陰で、レベルXに到達できたよ。」

「レベル……X。Xは、テン……ハッ！まさか、未知数！」

「流石いっくん。だ〜い正解！」

ゲンムはABボタンを同時押しし、さらにBボタンを押す。

『クリティカルデッド！』

普段のゲンムなら黒いゾンビの幻影が現れるが、レベルXとなったゲンムのこ

の技は、ゲムムが増殖して、エグゼイド達に襲いかかる。そして、咄嗟にスナイプとブレイブを後方へ突き飛ばす。

「エグゼイド！」「一夏あ！」

結果として、エグゼイドはゲムムゾンビに囲まれ、ゲームドライバーが腐敗した。

第118話 貴利矢からのHope

今回のサブタイは、貴利矢と書いて過去と呼んでください。

楯無と簪は一夏を連れ、学園へと戻った。

あの戦いでゲーマドライバーが腐敗し、一夏は気を失っていた。

「一夏、大丈夫かな？」

「大丈夫よ。多分ね。」

一夏を寝かせ後、すぐに2人は退室し、必要なものを揃え始めた。

一夏が目を覚めたのは、2人が退室したすぐ後のことだった。部屋で目を覚ましたあと、すぐにポッピーを呼び、必要なものを急がせた。

楯無と簪コンビが、戻ってくるより速くポッピーが戻って来た。そこから机に向かおうとした時、ガチャッとドアの方から音がする。

「……2代目。」

「や、聞いたわよ。手酷くやられたんだって？」

「ええ。おかげさまで。ドライバーを腐敗させられましたよ。」

「……ほら（*）！」

2代目が投げ渡したものの、それはゲームドライバーだった。

「これは、貴利矢さんの…。」

「そ、新しいの作って誰かに取られるよりマシでしょ。」

「2代目……恩に着ます。」

「いいのよ。戦えないアタシより、有効活用できる人が使わないと。」

「ええ。……でも、これがあってもあのゲームには対抗できない。新しい力が必要
です。」

「そうねえ。確かにそれはそうだけど。」

「あのゲームにはライダーゲージがありませんからね。勝てないでしょう。……ん
？勝てない？」

一夏は自身の言った「勝てない」という言葉に妙な引っかかりを覚える。

「!? そうだ！ 貴利矢さんのパソコンと、貴利矢さんのUSBメモリ！」

「ああ、確か貴利矢の遺品って。」

「はい！グラフィイト戦のあと、机を見たら入ってたんです。そうだ、アレを確認すれば！」

一夏は自身の持っているUSBメモリとどこかに保管してある貴利矢のパソコンを探し始めた。

その頃幻夢コーポレーションでは……

「わ、我が社の株の3分の2が買い占められた。」

「一体誰に!?!……嘘だろ?大株主……篠ノ之束!」

「と、とにかく織斑社長に報告を!」

「……ダメです!繋がりません!」

「くっ、どうすればいいんだ!」

『ピンポンパンピンポン 幻夢コーポレーション社員の皆様にお知らせいたします。この会社は束さんのものだから。』

と、いう放送の後のことだった。無数のゾンビバグスターが社内に見え始めた。

なんとか、避難をしたが、完全に会社を乗っ取られてしまった。

「見つけた！」

貴利矢のパソコンにUSBメモリを差し込む。するとそこには、『リプログラミング』のデータがあった。

「確か…この辺に…あった！試作型の空ガシャット！こいつにインストールするしかない！」

「一夏、電話鳴ってる。幻夢コーポレーションから！」

「すみません、手が離せないので出てください。」

「わかった。はい、もしもし…え？会社が篠ノ之東に乗っ取られた!？」

「すぐにブレイブとスナイプを幻夢コーポレーションに向かわせてください。」

「わかった！」

こうして、緊急出動することになったブレイブとスナイプだった。

第119話 Hope に縋る一夏。

一夏の看病のために外に出ていた2人は、その一夏からの連絡で幻夢コーポレーションへの道のりを急いだ。

「はあ、はあ。お、お姉ちゃん。ちよ、はやいよお。」

「急がないと！何するかわかったもんじゃない！」

「ああ、もう！変身！」

『バンバンシミュレーションズ！発進！』

スナイプレベル50に変身後、即座にスピードを上げる。

「お姉ちゃん、お先！」

「あ！ズルい！こっちだって！術式レベル5！変身！」

『タドルクエストォー！アガッチャー！ドラゴナイトハンターZ！』

フルドラゴンブレイブも、急いでスナイプを追うのだった。

IS学園では、未だパソコンとにらめっこ状態の一夏が居た。

「……インストール開始。」

「出来たの？」

「いえ。ですが、こいつを作った時はゲームデータなんて入れてませんでしたから。後は、ぶっつけ本番でなんとかします。」

「そっか。流星の天才クリエイターさんも、今からゲーム設定から書き起こしてたら、時間がかかるしゲームシステムに不備が出ると。」

「まあ、インストールに余分な時間を取られたくありませんし。後は、希望的観測に縋りたいと思う自分もいますしね。」

「さあ、すぐに支度しないとね。ほら、爆走バイク。」

「すみません。」

「いいの。腐敗したドライバーは、一応解析してみるね。」

「よろしく願います。」

「ほら、インスト完了。気をつけて。」

「はい。朗報を持ってきますよ。」

『爆走！クリティカルストライク！』

外に出るとすぐに、バイクゲーマーを呼び出し幻夢コーポレーションへ駆けた。

幻夢コーポレーションへと到着した2人。

「これ、見事なまでにブラック企業だね。」

「ブラック企業っていうか、暗黒企業っていうか。こうなったら、亡国機業よりタチ悪いわ。」

暗黒的オーラーを放つ、見慣れた建物には、入る事を拒ませるだけの圧があった。

「さあ、乗り込む……事はしなくて良さそうね。」

そんな建物から無数のゾンビを従えた女が1人。篠ノ之束だ。

「わざわざ持って来てくれてありがとう。そのギアデュアルβは回収する。」

「渡さない！ミッション開始！」

「これより、ゾンビ切除手術を開始する！」

「はあ、全く。この束さんに刃向かうなんて。」

『デンジャラスゾンビィ！』

「へえんしいくん！」

『ガツシヤット！バグルアップ！デンジャーデンジャー！（ジェノサイド！）デ
ス・ザ・クライシス！デンジャラアスゾン（ビィ）（WOOO）』
レベル未知数が、2人のライダーへと襲いかかろうとしていた。

第120話 無数の zombie を攻略せよ。

「このゾンビたち、全然減らないわね！」

「そうだね！確実にヘッドショット決めてるのに！」

レベル5フルドラゴンブレイブとレベル50シミュレーションゲーマースナイプは、無数のゾンビを相手に、少々押されていた。

確実に撃破しているのにもかかわらず、辺りを覆うように湧き出てくる。

「やっぱり！元凶を叩かないと！」

「でも！ライダーゲージもない相手にどうやって！」

スナイプはゲーマーとしての状況分析をするが、ブレイブの的を射た意見に反論できなかった。

「でも！どのみちこのままじゃジリ貧だよ！」

「一回、決め技で一掃しましょう！」

「そうだね！」

『ガツチョンキメワザ！』

『ガッシャット！ キメワザ！』

2人とも決め技発動準備をし、ゾンビが最大限近づいてくるのを待つ。ギリギリまで引きつけたところで、2人の必殺の一撃が炸裂する。

『ガッチャーン！バンバン！クリティカルファイア！』

『ドラゴナイト！クリティカルストライク！』

キメワザでゾンビを一掃することには成功した。が、肝心のゲムムを倒す術を彼女たちは持っていなかった。

「お待たせしました！」

ゲムムへの攻撃方法を捻り出そうとしていた時だった。レーザーバイクに乗った一夏が現れたのは。だが、時見計らったかの如く、ゾンビが再び増え始めた。

「ぶっつけ本番ですので、援護お願いします！」

「わかった！」「了解！ミッション開始！」

「頼む、上手くいってくれ！」

『ガッシャット！ガッチャーン！』

リプログラミングの情報をインストールしたガシャットを、ゲームドライバーに

セツトしレバーを開くもなんの反応もない。

『ガツチャ〜ン！ガツチョ〜ンガツチャ〜ン！ガツチョ〜ン』

何度も何度も繰り返し返しレバーを開閉するも、やはり反応なし。

「やっぱり、ぶつつけ本番は無理があったか！……でも！貴利矢さんが残してくれたデータとドライバード。それに、運命を変えなきゃ！」

『ガツチャ〜ン！』

上部からだったガシャットに中身が生まれる。一夏の体からウイルスが放出され、それがガシャットへ集まっていく。

その間、彼女たちは必死にゾンビを対処していた。ブレイブは確実に頭部を切り裂き、スナイプは精密な射撃で頭部を撃つ。なんとか一夏に近寄せまいと、常に攻撃の手を緩めない。

「これで終わり！」

『バンバンクリティカルファイア！』

『バンバンクリティカルストライク！』

ライダーキック中に多砲門からの強襲攻撃を繰り返して、足止めに成功したのだった。

第121話 新たな力 Re programming

無数のゾンビを相手にして居たブレイブとスナイプ。その間にガシヤットを何とか完成させようとレバーを開閉し続けた一夏の努力が実ろうとして居た。

ガシヤットへバグスタールウイルスが集まり終わる。すると、内部にできたパーツが上に解放、ガシヤットがドライバーより射出される。それをしっかりと掴み取り、ガシヤットを起動させる。

『マキシマムマイティX!』

「変身」

ガシヤットを再度装填する。

『マキシマムガシヤット!』

何も起こらないことを不思議に思い、レバーを解放する。

『ガッチャーン! レェェベルマァーックス! 最大級のパワフルボディ! ダリラガン! ダゴスバーン! 最大級のパワフルボディ! ダリラガン! ダゴスバーン!』

キャラ選択スロットが周り、自身の姿であるエグゼイドを選択すると、レベル2の姿へと変わる。更に、上にエグゼイドの顔を模した巨大な鎧が現れている。そして、ガシヤットから飛び出た部分を押し込む！

『マキシマムパワーエェ〜ックス！』

鎧に身を包み、

「仮面ライダーエグゼイド…レベル99」

へと、変身する。

『ガシヤコンキースラッシュャー！ガッシュャット！ズ・キュ・キュ・キューン！』

「リプログラミング！」

銃モードのキースラッシュャーから、光線？が放たれた。すると、東京ドームを埋め尽くせるくらい居たゾンビの群れは、消えた。

「ゲナム！ゾンビのデータはリプログラミングさせてもらった！」

「その不正なガシヤットは、削除する！」

「そうはいくか！もう一変リプログラミング！」

ゲナムは、リプログラミングの光を避けようと横回転するが、僅かにかすってし

まう。

「よっしゃ！リプログラミング成功！」

ゲムムのライダーゲージは、ゼロからマックスに変わり、不死身のゾンビが不死身ではなくなった。

「これで終わりよ！」

『キメワザ！ドラゴナイトクリティカルストライク！』

リプログラミングの影響で動揺して居た束にブレイブの重たい一撃がもろに入る。

ゲムムは、ライダーゲージを数ドットだけ残し、ほぼ瀕死の状態。

「ここはあ、一旦引くかあ！」

と、いう捨てゼリフを残し、ゲムムは姿を消した。

「一夏、それが新しいガシャット？」

「はい。前に試作して居た空のガシャットに、僕の中にあるバグスターウイルスを使って作れたみたいで…。」

「一夏は天才なんだよ。結局、そう言うしかない。」

「ま、これでゲンムも下手に動かないはずです。今度、またどこかデートにでも行
こ？」

「うん！その為にも早く騒動を終わらせないとね！」

「ええ、僕らの戦いはこれからです。」

こうして一夏は、ゲンムへ…そしてバグスターウイルスへの対抗手段を手にした
のだった。

番外編 イチャラブカップルの Camp

「一夏、キャンプに行きたい。」

「まさかと思うけど……ゆるキ○○△ですか？」

「うん。○○キャン△の影響だね。」

「わかりました、準備します。」

一夏は織斑家へと戻った。

「確か……ウチでキャンプなんて……した事ないはず。だから物置にも……やっぱり無い……ん？これってもしかして？」

物置の隅に置いてあった大きなものを引っ張り出した。

「キャンプ道具……でも、流石にボロボロですね、残念。これは、次の週末に買いに行くしか無いですね。」

こうして、結局レゾナンスへ行くことになった。

キャンプ実施一週間前の土曜日。

「ふう〜、これでキャンプのシミュレーションは完璧！」

一夏は3日でキャンパーのことを徹底的に調べ、キャンプシミュレーションゲームを開発した。

「後はテントとか買い揃えればOKかな。」

「一夏あゝ、準備できたよお。」

「はあーい、今行きます。」

レゾナンスへ行くと、アウトドアショップへまっしぐらに駆ける。

「このテントなんて可愛くない？」

「……オレンジねえ。うん、いいと思う。」

「よし、じゃあこれと〜シュラフは、これかな？」

選んだのはピンク色かわいいやつ。

(簪さん、まじ可愛っす。)

と、若干一夏がキャラ崩壊して居た。

「なら僕は……これにしようかな。」

一夏が選んだのは、これまたピンクだが、ところどころ黄緑と白線が入っている。所謂エグゼイドカラーだ。

「うん、一夏らしい。後は……あ！ブランドシート用意しなきゃ！」

「そうですね。他にはスキレットやテーブル、焚き火台やランタン。買い揃えればならない物が多いですね。」

「さ、買って予習しないと！」

「はい！」

こうして、約10万程の買い物は終えた。

「キャンプ地はどうします？」

「うーん、やっぱり富士山が見えるところかな？」

「わかりました。では、探しておきます。」

「お願いね、一夏。」

こうして、一夏のキャンプ場探しが始まった。

それから4日。富士山が見え、星空が綺麗……さらに人が少ない！場所を見つけ当てた。レーザーバイクに荷物を載せて、簪が一夏に抱きつく。理性を保ちつつ、バイクを目的の場所へと走らせる。

キャンプ常に着くと、受付を済ませテント張りをする。その間簪は、巻きや松

ぼっくりを集める。

焚き火台にそれらを乗せて火をつける。乾燥した松ぼっくりが良い着火剤となり、暖かな火の熱が彼らを包み込む。

その間、一夏はテント設営などを終え、お湯を沸かして居た。晩御飯はカレー麺。これは、簪の希望だった。

そして夜。晩御飯の為にお湯を沸かし、カップに注ぎ、3分待つ。

「いただきます。」

まあ、美味しかった。テント設営やらの労働後、好きな人と静かな場所で2人食べるカレー麺は格別な気がした。

「あ！簪……見えました。…月が綺麗ですね。」

一夏はこの言葉に二つの意味を重ねた。

一つはごく普通の感想、富士山が月に照らされ幻想的な雰囲気を漂わせている。もう一つは、愛の告白。もちろん、何度も何度も言っているし、その感情が色褪せることは決して無いが……だからこそその言葉だった。

「一夏あ、ありがとう！」

満面の笑みを浮かべて振り返る簪は、幻想的な背景をも凌駕する幻想さ溢れる笑顔を見せてくれた。

ご飯を食べて、寒空が一夏たちに襲い掛かる直前まで2人で星を眺め、そのロマンチックな光景をバックに、長く甘い口づけを交わしていた。

次の日の朝食後、片付けをして2人はIS学園へと帰って行った。

遅くなった挙句番外編でごめんなさい。

早く本編進めろ馬鹿作者と思う方もいるかもしれませんが。

が、すみません。すごく煮詰まっています。

もう少ししたら、頑張って本編やりますので、今しばらくお待ちください。

第122話 不滅のEnd

本編全話から一ヶ月が経ってしまってます。申し訳ない。

一夏がマキシマムマイティXを手に入れた後日のこと。

「ドラゴナイトハンターZとドレミファビートのバグスターはどこだあ！」

束は焦っていた。リプログラミングという自らの不死身の能力を封じるものが現れたせいで、計画に支障をきたしているからだ。

ドラゴナイトハンターZのバグスターであるグラフィアイトは仮面ライダー達によって倒され、ドレミファビートのバグスターも見つからない。だが、早々に計画を完了させなくてはならない。しかし、目当てのバグスターは街を放浪していても見つからない。

「究極のゲームのためだあ！」

なんとかして、バグスターを探そうとする束はもうポロポロだった。

……目撃情報はすぐに集まった。ポロポロの女性が歩いていれば、今時SNSで拡散される。あの鳥の王も使った手だ。

「見つけましたよ、束さん。」

「い、いっくん。何故ここにい！まあ、いい。はあ、ガシヤットを削除しておくか。」

『デンジャラスゾンビィ！』

「へえ〜んしい〜ん！」

『ガシヤット！バグルアップ！デンジャラスゾンビィ！』

「そっちがその気なら、やるしかありませんね。」

『マキシマムマイティX！』

「決着をつけるわ！術式レベル5！」

『タドルクエスト！ドラゴナイトハンターZ！』

「止める。第五十戦術！」

『バンバンシミュレーションズ！』

「マックス大…。」

「「変身！」」

『ガツシャット！ガツチャーン！レベルマアツクス！（レベルアップ！）（デュアルアップ！）』

『マキシマムパワー！エエツクス！』

『タドルクエストオ〜！アガツチャ！ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター！Z！』

『バンバンシミュレーションズ！発進！』

『ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！』

「これより、ゲナム切除手じゅちゅ…：…ん、ん！切除手術を開始します！」

「ミッション：開始。」

「ねえ、今噛んだよね？噛んだよね？」

ゲナムが鋭く突っ込むが、全員がスルーする。

「ま、まあいい。それよりも、不正なガシャットは削除するう！」

こうして1VS3のバトルが始まった。

それを高みの見物と言わんばかりに眺めるパラドの姿。

「ここで、潮時か。」

そう、意味深なセリフをつぶやいて姿を消した。

戦いは終始、ゲンムが押されっぱなしだった。いくらレベルXとは言え、レベル99が相手では部が悪い。それに、前回の戦いでライダーゲージが復活してしまったのも原因だ。

「こうなればあ！」

『クリティカルエンド！』

空中で回転する。そして、狙うのはレベルが一番低いブレイブだった。

「予想通りね！」

『鋼鉄化！』『反射！』

ゲンムのクリティカルエンドは2つのエナジーアイテムによって阻まれる。そして、そのまま上空に跳ね返される。

「今だ！これで決める！」

『ガッチョ〜ンキメワザ！』

『ガッシュット！キメワザ！』

2人はレバーを閉じる。ブレイブはドラゴナイトハンターZガシャットをキメワザスロットホルダーに装填し、ボタンを押す。2人はレバーを開く！

『ガッチャーン！』

『マキシマムマイティ！クリティカルブレイク！』

『バンバン！クリティカルファイア！』

『ドラゴナイト！クリティカルストライク！』

ブレイブ、スナイプ、エグゼイドの順に攻撃が炸裂する。

ブレイブの蹴りで更に上空へ飛び、スナイプのミサイル弾頭で深手を負い、エグゼイドの蹴りで変身解除される。

「はあ、はあ、はあ。まだだあ、まだ終わらない！」

『デン……ゾ……ビ』

ガシャットが起動しなくなった。何度も何度も起動スイッチを押すが、反応がない。

「無駄だ！お前の抗体は、リプログラミングした。」

「なんだとお！この束さんが負けた？ありえない。」

「……東さん、罪を数えて…償って。僕らの元に戻って来てください。」

「はあ……はあ。」

息遣いが荒い。東が迷っているのかと考えた。

「残念だが、それは無理だ。」

「お前は…パラド！」

「敗者には、敗者に相応しいエンディングってのがあるんだ。」

『ガッシャット！』

バグヴァイザーに、デンジャラスゾンビを装填する。

「じゃあな、ゲーム。」

「やめろ、死にたくない！死にたくないよお！……私の、宇宙への夢は……」

不滅だあ！

『Game Over』

無慈悲なシステム通告が宣言され、束は消えた。その時にはもうパラドも居なくなってしまうて居た。

久々の投稿です。ごめんなさい、ベリアルの
決着がつけば、戻ってきます。

第123話 史上最悪の Game スタート

前回から1ヶ月空いてしまいました。

ごめんなさい。

東さんがパラドの手によって消された。この事実、僕らの胸に重く突き刺さっていた。

そんな中、1つ動いた出来事がある。

東さんが占めた、2、3の株が誰かに買収されてしまった。社員達は表面上取り繕っているが、僕の帰りを待っていてくれるらしい。そんな時だった。3人のゲーム患者が運ばれて来たのは。

「患者は、ブラスバンド部の生徒3人。えーと、ゲームコーポレーションの新作ゲームの主題歌のオーディションを受けに行ったみたい。」

「新作ゲーム？そんなProjectあったかな？」

「新社長が企画立案したらしいわ。」

「そうですが。ありがとう、明日那。」

こうして運んだはいいものの、すぐにゲーム病が発症。外に出ていく一夏達。明日那からポッピーに戻った。その時、1人の男が現れた。

「えーと、どちら様？」

「私、幻夢コーポレーションの新社長に就任しました。『天ヶ崎恋』です。座右の銘は、『世界中にI LOVE YOUを』。今回は、うちのオーディションに来た子たちが選ばれたと聞いたので。」

「へえ、幻夢コーポレーションの。私の故郷なんだ〜。」

「なるほど。ああ、こうして出会えたのも何かの縁。《一曲歌ってもらえないかい？》」

唐突に声が変わる。まるで諏訪〇順一のような声で、ポッピーピポパポは魅了されてしまった。

『People Game』

歌・ポッピーピポパポ

(→良かったら聴いてみてね。)

「んんん、素晴らしい！さあ、私と共に。」

「うん！」

こうして、IS 学園 CR から

ポッピーピポパポが消えた。

学園に戻って来た一夏達は、ポッピーピポパポがいらないことに気がついた。

「あれ？筐体にもいない。」

「一夏、ポッピーが居ない。」

「一夏くん、ポッピーちゃん知らない？」

「一夏、ポッピーが居ないんだけど。」

「すみません。こっちが知りたいです。」

3人同時に話しかけられたが、同じ内容なので対応できた。思い当たるところは探したが見つから無かった。

「果報は寝て待てね。」

楯無さんのその一言で一先ず解散になったが、根本的な解決策は見出せなかった。幻夢コーポレーション地下施設。

ここでは、バグヴァイザーを使ってパラドが何かして居た。

「やあ、グラフィアイト。」

「お前は、パラド。俺はライダー達にやられたはず。」

「ゲムムは知らなかったんだ。完全体のお前なら、いつでも復活させられることを。そして、もう1人。」

ドアが開く。そこから出て来たのは…

「おかえり、ポッピーピポパポ」

「うん、ただいま！」

こうして、マイティアクションX・タドルクエスト・バンバンシューティング・爆走バイク・ゲキトツロボッツ・ドレミファビート・ジェットコンバット・ギリギ

リチャンバラ・シャカリキスポーツ・ドラゴナイトハンターZ……全てのバグスタターが集まった。

「さあ、仮面ライダークロニクル。ゲームスタートだ。」

今ここに最悪のゲームの開始が……宣言された。

今後の投稿スタンスについて

活動報告欄にて、記載しております。

第124話 仮面ライダー Chronicle 始動

ポッピーピポパポ失踪の次の日のことだった。朝普段はあまり付けないTVを付けた。それにより、今日の授業を欠席することが決まった。内容はこうだ。

『幻夢コーポレーションが新作ゲームを発表しました。なんの告知もなかったのに関わらず、コーポレーション前には沢山の人が集まって居ます。』

一夏は知らなかった。開発責任者であるにも関わらずだ。一夏は千冬に欠席の旨を伝える。

「一夏、新作を発表するのはいいが、せめて平日はやめてくれ。」

どうやら、他の生徒たちも急遽平日にもかかわらず休んだようだ。そう考え、急ぎ幻夢コーポレーションへと駆けだした。

幻夢コーポレーションへの道を急いでいると、突如ソルティバグスターが現れた。「こんな時に！」

『マイティアクションX!』

「へんし……?早く逃げろ!」

エグゼイドになろうとしていると、一般人がソルティバグスターに向かって立ち
はだかった。

「ゲームスタート!」

その手には、緑と黒のガシヤットが握られて居た。そして、彼らはガシヤットの
起動ボタンを押した。

『『仮面ライダークロニクル!』』

「変身!」

『『Enter The GAME! Riding The END!』』

小太りの男と痩せ型の女がガシヤットで姿を変える。そして、そこに現れた人物
は、一夏たちが探していたその人だった。

「はい♪ポップピーポポがゲームをナビゲートするよ♪」

いつもの明るいトーンがその場に響く。

「このゲーム『仮面ライダークロニクル』は、みんながライドプレイヤーに変身し

て、バグスターに立ち向かうの♪でも、みんなのレベルじゃ勝てない！ちまちま雑魚バグスターを狩るのも効率が悪い。なので！レアキャラの仮面ライダーたちから、ゲーマードライバーやガシャットを取れば♪いっしょにレベルアップするから♪」

その言葉を聞くや否や、後ろを振り返り一夏が持っているゲーマードライバーとガシャットに目をつける。

「不味い！変身！」

『ガッシャット！ガッチャーン！レベルアップ！マイティマイティアクションX
！』

「アイテムよこせ！」

「レアキャラ！絶対取るわ！」

ソルティからエグゼイドに目標を変えるライドプレイヤー達。それを避けて、ガシャコンブレイカーでソルティを狙う。が、ゲーマーの執念は恐ろしく、ライドプレイヤーがすぐに戻ってエグゼイドのアイテムを奪おうとする。その間にソルティには逃げられてしまった。

「クッソ！こうなったら！」

『爆走バイク！ガッシャット！キメワザ！爆走クリティカルストライク！』

目のないレーザーに乗り、ライドプレイヤーの頭上を通り過ぎ、学園へと戻り……日向審議官と、会議を開くのだった。

第125話 Chronicle 対策会議

IS学園CRに揃っているのは、一夏達ライダーズ、織斑千冬と山田真耶。そして、本学園の学園長である轡木十蔵氏である。

「現状での調べですと、学園の生徒の6〜7割の生徒がライダークロニクルをプレイしている状況です。私が今までして来た事が、ここに来て裏目に出るとは、申し訳ない。」

「お、織斑君のせいじゃありません！」

「そうだよ！一夏は悪くない！」

「うむ。偶々そうなってしまっただけだ。気にすることはないよ。」

「山田先生、簪、日向先生。ありがとうございます。」

「しかし。問題は、どうにかうちの学園だけでも使用禁止にできないかですか。」

轡木氏の発言は、生徒を心配するものだ。

「予め説明した通り、推測にはなりますが、ゲーム中に死んだらGame Over

rで、……。」

「学園では、校則を新たに作るようにしましょう。ライダークロニクルガシャットの違反所持は、発覚した時点で没収・1週間の停学。」

「そうしましょう。」

「一般にも、危険なものだとしてしっかりと公表しましょう。」

「日向審議官、私たちライダーの方でもできる限り回収します。」

「うむ。頼むよ、一夏君。それから、彼のことを頼んだよ、更識君……特に、簪君の方は。」

「は、はい！お任せください！」

「すみません。本来ならこちらで運営を止めるべきものを。東さんに運営権を奪われた後、そのまま別の誰かに買い取られてしまい、一切会社を動かさない状況です。ですが、内部から情報が回って来たら報告します。」

「君の社員達からの信頼は厚いな。」

「いえ、それほどでもない。」

「それでは、ライダークロニクル対策会議を終了しよう。」

こうして、今回の全体会議は終了した。

部屋が変わり一夏の部屋。集まった面子は、ライダーズだ。

「今回、仮面ライダークロニクルのプレイヤー達は、僕らのことレアキャラと思って攻撃してきます。」

「一夏、嘘でしょ？」

「一夏君、おねーさんたちを脅かそうとしてる？だとしたら怒るよ？」

「僕が嘘つくように見えますか？」

「見えない。」「見えないわね。」

「それに、ポッピーが言ってたんです。そのことを。」

「ポッピーが裏切った？」

「まさか、あのポッピーが？」

「僕も信じたくないです。何らかの理由があるのかもしれませんが。」

「ところで一夏、私達って適合手術を受けてライダーになるよね？」

「ええ、普通ならそうです。」

「なら、なんで一般人が変身できるの？」

「!？」

一夏もその発想はなかった。そう、本来なら微量のバグスターウイルスを投与して、抗体を作り、ガシヤットの持つバグスターウイルスに耐えられるようにする。だから、一般人が変身できるわけないのだ。

「そうか！盲点だった！……なら、それを使えば……。」

一夏はとある装置を作り始めるのだった。

何か思いついたようですね。

ヌルフフ。次回もお楽しみに。

第126話動き出したBugster

ちゃちゃっと、とある物を作り始める。

「ふう〜、こんなもんでいっか。」

「一夏、それなに？」

「大きいゲームスコープ。でも、しっかり個人個人の症状を把握できるし、何のバグスターウイルスに感染しているか、統計が取れる。……って、アレ？ニコは？」

「え？……あ！居ない！」

ニコがいなくなった。一夏達は探しに出た。

ニコを探して、街に出る。しかし、モータスバグスターが立ちはだかった。

「簪は、ニコをお願いします。」

『マキシマムマイティX！』

「マックス大変身！」

『ガッチャ〜ン！レベルマア〜ックス！ギョッ』

！マキシマムパワー〜エ

「ックス！」

マキシマムゲーマーに変身。そして、ガシャコンキー斯拉ッシャーのスロットにマキシマムマイティXガシャットを装填する。

『マキシマムガッシャット！キメワザ！』

「リプログラミング！」

『マキシマムマイティ！クリティカルフィニッシュ！』

キー斯拉ッシャーから光が射出され、モータスバグスターに当たる。モータスバグスター自体に、変わった点はない。一夏がリプログラミングしたのは、バイクの方だ。よって、今現在モータスバグスターはハンドルだけ握って、足元にタイヤが転がっている状態だ。

「Noooooooo！俺様のバイクが……。」

ガシャットをドライブバーに戻し、レバーを動かす。

『ガッチョーンキメワザ！』

「これで、終わりだ！」

『ガッチャーン！マキシマム！クリティカルブレイク！』

地面を殴り、その衝撃でモータスを浮かせ、そのままライダーキックを放つ。

「Oh！覚えてろお！うわぁ！」

捨て台詞を吐きながら爆散するモータスを横目に、一夏はガシヤットを取り出す。

『キメワザ！爆走！クリティカルストライク！』

マイティアアクションXにドライバのガシヤットを切り替え、レーザーバイクに乗り込み、簪の後を追う。

その頃、簪は……

「ポッピー……どうして？」

「ライダーの医療行為は、違反行為だよ♪」

立ちはだかるポッピーピポポ。そして、その奥には、

「パパとママの役に立ちたい！」

クロニクルガシヤットを握り、アランブラに向かおうとするニコが居た。

「……変身！」

『Enter The GAME！ Riding The END！』

ポッピーという壁を超えられず、娘の変身を許してしまった簪は、自らに怒りを覚えていた。

「第五十戦術！~~……~~！」

『バンバンシミュレーションズ！デュアルガッツシャット！ガツチャーン！デュアルアップ！スクランブルだ！出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！』
自らの怒りをエンジンに駆け抜け、自らに装飾を施してニコとアランブラの間に立つ。

「ニコ、どうしてそれを使ったの？」

「……ごめんなさい。ガシャットロフィーを手に入れて、被害が拡大する前に、このゲームを終わらせようとして……。」

「はいい♪ポッピーピポポがゲームをナビゲートするよ♪この仮面ライダークロニクルをクリアするには、13個のクリアの証『ガシャットロフィー』を手に入れて、ラスボスに挑む必要があるんだよ！」

この発言に、対して簪がとった行動は……。

第127話 娘と協力 Play

激情駆られていた簪がとった行動は、いつもの彼女ならやらなかった行動。

『ガシヤコンマグナム!』

バンバンシューティングのウェポンを出すと、ニコに渡す。

「最後の決め技だけ頼んだよ。」

「うん、ママ!」

なんか、娘の笑顔には弱い簪さんでした。

と、思い出したかのようにゲームスコープでゲーム病を見る。

「よかった、アランブラのだ。」

それを確認し、アランブラに接近戦を仕掛ける。アランブラ得意の魔法を放つ暇さえも与えず、ラッシュ攻撃で、蹴り続ける。そして、ゼロ距離から主砲で杖を持つ手を撃ち、魔法発動に必要な杖を遠くへ飛ばす。

それを取りに行こうとするアランブラ。が、運が悪いことに杖はニコの足元に転がっていた。その杖を踏みつけているのは、ニコ。その手にはクロニクルガシヤッ

トが挿さっているガシヤコンマグナム。

『ライダー！クリティカルフィニッシュ！』

至近距離からの決め技シュートを決められたアランブラは、避けることが出来ず、敗北。ニコはタドルクエストのガシヤットロフィーを手に入れた。

それと同時に一夏が到着する。

「よかった。無事だったみたいだ。」

「ごめん一夏。私、ニコの変身を止められなかった。」

「……ニコ。詳細についてはわかってる。一応、ライダーは無線通信できるから。それを踏まえてニコ。少しの間だけ、クロニクルガシヤットを預けてくれないか？」

「え？」

「それを解析する。結果が出れば、一般の人にも危険性がわかるはずだ。その間に、政府公式のクロニクル攻略協力プレイヤーとしてももらえるように交渉する。」

「わかった。パパ、これも。」

手渡されたのはクロニクルガシャット数個。

「変身する前の人間から取ったの。消滅させるよりはマシだと思って。」

「これだけあれば、解析も進むよ。本来スリなんてダメだけどね。」

「わかってる。今回、クロニクルガシャットの回収だけ。」

「それじゃ、帰ろっか。」

こうして、学園へと戻った。

学園に戻り、クロニクルガシャットを2代目に渡す。

「これらの解析をお願いします。」

「OKで、これからどうするの？」

「今日中に千冬姉に言っつて、明日朝には大規模なガシャット狩りを行います。休暇届出した人意外にも持つてる可能性がありますがますから。」

「そうね。誰かに買って来てもらったパターンは多いと思うわ。」

「それじゃあお願いします。くれぐれも使おうなんて思わないでくださいよ。」

「もちろんよ。」

一夏が部屋から出て行く。

鈴はクロニクルガシヤットを手に持つ。複数のガシヤットがあり、スロットに入られるだけ入れる。が、やはり数個余ってしまう。

(ちよつとだけなら……。)

と、ボタンに指をかける。が、

(貴利矢に怒られるわね。やめよ。)

と、踏みとどまった。

今日18:00にオリジナルの作品も

アップするから、ぜってえ読んでくれよな！ (野沢雅○風

第128話 新たな敵 その名は P o p p y

幻夢コーポレーション地下施設。

「仮面ライダークロニクル、かなり順調に進んでるなあ。心が躍るぜ。」

パラドが楽しそうに、声を弾ませる。

そして、ラヴリカがポッピーに何かを渡していた。

「これで、違反行為を行った者を退場にするといい。」

「うん♪」

ポッピーの手にはピンク色のガシヤットとバグヴァイザーのようなものが握られていた。

全教室に仕掛けられた大規模ゲームスコープの結果、数にして380ほどのクロニクルガシヤットを押収できた。まさか、生徒だけでなく教師までやっているとは。

「バグスター発生！」

2代目からの報告を受け、一夏と簪が現場に向かう。

レベルが高すぎると万が一にもライドプレイヤーと遭遇してしまった時、ゲームオーバーにさせかけない。故に、

『マイティアクションX!』

『バンバンシューティング!』

レベル2で対応するしかなかった。

出て来たのはリボルバグスター。それに加えてライドプレイヤー。

「このゲームをプレイするのは、違法です! すぐに変身解除! 及び、クロニクルガシャットの回収にご協力ください! 繰り返します! このゲームは危険です!」

一夏が必死に呼びかけるが、逆に襲いかかって来る。

「一夏がこんなに呼びかけてるのに! 変身!」

『ジェットコンバット!』

束さんを倒した時に戻って来たジェットコンバットガシャットを起動する。

『ガッシュット! ガツチャーン! レベルアップ! バンバンシューティングウ!』

アガツチャ! ジェットコンバット! ガシャコンマグナム! ズ・キューン!』

コンバットゲーマーで飛行しながら、ガシャコンマグナムのライフルモードで、リボルバグスターを狙い撃つ。

その間エグゼイドはライドプレイヤーの相手を一人でしていた。

が、突如2人にビーム攻撃が襲いかかる。攻撃された方向を見ると、バグヴァイザー？を持ったポッピーが居た。

「仮面ライダーはレアキャラなんだから戦わなきゃダメでしょ？それに、ライダーがこのゲームを攻略することは、違反行為だよ！」

「ポッピー！どうして!?!」

取り出したピンク色のガシャットを起動させる。

『ときめきクライシス!』

「ポパピペナルティ、退場。」

低めのトーンで、淡々とそのセリフを言い放つポッピーに少し恐怖を覚えた。

『ガッシュャット！バグルアップ！ドリーミングガール♪恋のシミュレーション♪
乙女はいつも♪ときめきクライシス♪』

目の赤い、仮面ライダー？が出てきた。

「私は、仮面ライダー……ポッピー。」

新たな障害が、しかもかなり大きめのが立ちはだかるのだった。

第129話 クロニクルのTrue

ポッピーが仮面ライダーポッピーへと変身した。ベルトのバグヴァイザー？を外し、ビームモードで攻撃を開始する。

「おい！やめろ、ポッピー！」

「ねえ！どうしたの？ポッピー！」

「無駄だ。」

声のする方へ視線を移すと、そこにはパラドが座っていた。

「どういうことだ！」

「お前たちが始めてポッピーと会ったとき。既に束は、手を加えてたのさ。そっちの情報を持ってくるスパイにしてな。」

「そんなの嘘だ……うわぁ！」

後ろからチェンソーで斬りつけられる。

「そんなに攻撃されてるのにまだ信じるのか。セーブデータが消して、元に戻っただけなのにな。」

「ポッピーは、そんな奴じゃない！ポッピーの運命は、俺たちで変える！」

そうこうしてる間、スナイプはリボルの相手をしていた。上空から一方的に殴ってるように見えるが、これが違った。

スナイプに攻撃するように見えていたものは、全てライドプレイヤーに当たっていたのだ。

「しまった！やられた！」

その攻撃によってライドプレイヤーの変身が解除される。そして、

「コンティニューは出来ません！たった一つのライフを大事にしてね！」

『GAME OVER!』

「そんな、嘘だろ！」

「嫌だ！死にたくない！」

「いやああああ!!」

ライドプレイヤーたちは、消滅していった。

その光景に目を奪われ、守れなかったという無力感が2人に襲いかかっていた。その後ろから、

『クリティカルクルセイド』

仮面ライダーポッピーが可愛らしいエフェクトを発生させながら、見た目に反した性能の必殺技を繰り出してくる。

無防備な背中を攻撃され、変身解除まで追い詰められる。

変身解除と同時に、ゲーマードライバーやガシャットが放り出される。

それらを陰で見っていた別のライドプレイヤーらが奪いにくる。が、それとは他に「グへへ、この嬢ちゃん中々いい顔してるじゃねえか。アイテムついでもらった……ん？」

「その汚い手で！」

簪に伸ばされていた手を、手首ごと折る勢いで、力を入れる2人がいた。

「俺の彼女に！」「私の妹に！」

「触れるな！」

そのまま、ライドプレイヤーを吹き飛ばす。簪のことになると、我を忘れてしま
すのがこの2人である。

「さて、俺もそろそろ楽しませてもらおうかな。」

『Perfect Puzzle! デュアルアップ! Perfect Puzzle!
e!』

「俺は、仮面ライダーパラドクス。さあ、遊ぼうぜ!」

高らかと名乗り上げる。それにつられてクロニクルプレイヤーが集まってきてし
まうのだった。

番外編 訪れた library cafe

イチャイチャ要素は少ないです。

本日の目的地は、ライブラリーカフェ『ミルクデイツパー』。学園からそう遠く無いそこは、バイクゲーマーを軽く走らせると着くようだ。

バイクゲーマーを消し、店内へと入っていく。

「いらっしやいませ。」

店主の野上愛理が優しく出迎える。いい雰囲気のお店だ。

「い、いらっしやいませ。」

彼こそ、時の運行を守ったライダー……仮面ライダー電王、野上良太郎だ。今は、元の姿に戻っているようだ。

「えっと、この店初めてですよね？」

「はい。社員たちに聞いて、ここの雰囲気とコーヒーが良いと。」

「そうなんですね。あ、ご注文お決まりですか？」

「オリジナルブレンド、2つ……で良い？」

「うん。同じので良いよ。」

「オリジナル2つですね。少々お待ちください。姉さん、オリジナルブレンド2つね。」

「はーい。」

姉に注文を告げると、奥に消えていく。

運ばれてきたコーヒーを飲む。

「お、美味しい。ウチの会社に欲しくらいだ。」

「でも、そんなことしたらみんな仕事にならないよ。」

「そうだねえ。」

コーヒーを飲みながら、和んでいると後ろから唐突に衝撃が来る。

「一夏？……じゃない！」

「俺、参上！……ってアレ？良太郎じゃない？」

『ちよっと先輩。何やってるのさ。』『モモの字、早よ戻らんかい！』

『モモタロスのバーカ。』

「あ、いやー。バーコード共に体強制的に変化させられたり、体に右手突っ込まれたり、俺の体だいぶヤバイかも。って、はなたれ小僧！最後のバカは余計だ！」

「アレ？も、モモタロス？何してるの、お客さんに憑いたらマズイって。」

「そんなことより良太郎、イマジンだ。」

「え？行かなきゃ。」

エプロンを脱ぎ捨て、黒く四角いモノを握り、店から駆け出す。

「さて、お前ら仮面ライダーだろ？」

「え？あ、はい。」

「ま、だからどうしたってアレか。……んじゃ、俺は行くわ。」

こうして、モモタロスは一夏から離れた。

「誰かに体を勝手に動かされるってのは、なかなかキツイね。」

と、コーヒーを飲み終えながら言う。

「さて、僕らも行きますか。マスター勘定ここに。お釣りはいらさないよ。」
と、財布から一万円出してミルクディッパを立ち去った。

バイクゲーマーを走らせ、電王を追う。

まだ、変身してないようだ。

「いくよ、モモタロス。変身。」

ベルトを巻き付け、赤いスイッチを押し、パスをかざす。

『Sword Form!』

姿が変わり、周りに鎧がぐるぐると回り、装着。頭頂部から仮面が降りてきて、赤いオーラが放たれる。

「俺、参上！へへ、久しぶりの戦いだ……ド派手に行くぜえ！」

腰にあるバラバラの武器を組み立て、剣を作る。

斬るではなく、叩きつけに近い剣の使い方だが着実にダメージは与えている。

戦闘を見ながら、ガシヤットを作る一夏。ものの10分で作り終える。おまけ付きでだ。

「簪、コレを！」

「？何これ？」

「わかりませんが、害はないです。」

「なら良いや。」

『時空特急電王！』

『時空機関ゼロノス！』

「変身！」

『『ガツチャ〜ン！レベルアップ！』』

『デンデン電王！電車で参上！時空特急！行くぜクライマックスジャンプ！』

『カード使い！時間守る！俺は強いぜえ！（タドルクエスト風）』

エグゼイド 電王ゲーマーとスナイプゼロノスゲーマーがここに誕生。ちようど

電王が決めそうなので、

『『ガツシヤット！キメワザ！』』

『時空特急!』『時空機関!』

『クリティカル ストライク!』

『フルチャージ!』

「俺の必殺技…パート5!」

便乗して、キメワザを放ち倒しやすくする。そして、イマジンの爆発を利用し、学園へと帰るのだった。

第130話 Level 150の対決

パラドクスパズルゲームレベル50が、現れる。それに釣られてゾロゾロとライドプレイヤーたちが集まってくる。なんとかゲーマドライバークラスやガッシュは回収できたが、今現状2人とも戦える状態では無かった。そんな中、1人戦える人物が居た。

「私になんとかする。2人は退がって。」

『タドルファンタジー!』

「家族を守るために!術式レベル50!変身!」

『デュアルガッシュ!ガッシュ!デュアルアップ!タドルメグルRPG!タドォ〜ルファンタジー!』

瀕死の簪から受け取ったデュアルβで変身したブレイブは、以前のように負担で苦しむような様子はなかった。

「これより、パラドクス切除手術を開始するわ!」『ガシャコンソード!』

雑魚バグスターを発生させ、一夏と簪を守らせながら、ライドプレイヤー相手に

殺さない程度の対応をさせつつ、自分はパラドクスに斬りかかる。

「なんで邪魔するかな。」

「うるさい！こんなゲームを始めたのが悪い！」

攻撃を避けながら、パズル操作でエナジーアイテムを操る。

『反射！』

ブレイブの剣撃がそのままブレイブへと降りかかる。その反動を利用して、

『ノックアウトファイター！』

「大変身！」

『デュアルアップ！Explosion Hit！KNOCKOUT FIGHT
ER！』

ファイターゲーマーへと姿を変えた。

「全く、白けることするなよ！」

『キメワザ！』

ギアを戻して、もう一度回す。

『キメワザ！』

ブレイブも、ゲーマドライバーのレバーを、一度閉じた。

パラドクスは、右腰のスロットにガシヤットを装填する。

『ノックアウトクリティカルスマッシュ！』

ブレイブはレバーを再度開く！

『タドルクリティカルスラッシュ！』

パラドクスの拳と、ブレイブの蹴りが衝突する。2つのエネルギーがぶつかり合う余波で2人は、吹き飛ぶ。

双方の変身解除。パラドが撤退し、ライドプレイヤーたちはその場から離れた。

学園に戻ってきた、次の日のこと。

「一番厄介なのは、ポッピーだ。僕らでは手が出せない。」

「そうよねえ。」

「ねえ！どうしてポッピーは、私たちに協力してたの？」

「それは、束さんがスパイとして……？いや、それはおかしい。だって、常に情報なんて手に入って居たはずだ。」

「……洗脳。ゲームならあるある。」

「そうか！それもバグスターウイルスによる影響なら！アレが使える！」

「「アレ？」」

「ああ、間違いなく。洗脳なら解くことができる。」

こうして、対ポッピー戦の作戦が決まった。

第131話 洗脳を Re programming

解決策を思いついた2日後。再び、現れたバグスターを発見し、戦闘を開始しようとした。その時だった。

「ライダーのバグスターとの戦闘行為は、違反行為！ポパピペペナルティ……退場！」

『ときめきクライシス！』

「ポッピーの運命は…僕らで変えます！」

『マキシマムマイティX！』

『バンバンシューティング！ドラゴナイトハンターZ！』

「マックス大…。」

「第伍戦術！」

「変身！」

『ガッシュャット！』『マキシマムガッシュャット！』

『バグルアップ！乙女はいつも♪ときめきクライシス！』

『ガッチャーン!』』

『レベルマアックス!』

『レベルアップ!』

『最大級のパワフルボディ! マキシマムパワー! X!』

『バンバンシューティングウ! アガッチャ! ド・ド・ドラゴ! ナ・ナ・ナ・ナ
イト! ドラドラ! ドラゴナイトハンターZ!』

『ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!』

『ミッション開始!』

ハンターゲームのスナイプがポッピーを攪乱する。その間に、エグゼイドは、お目当てのエナジーアイテムを探していた。

「よっしゃ! アイテム見つけ! よっと!」

1つは自分に、もう1つはポッピーへと投げつけた。

『分身!』のエナジーアイテムを自分に、『混乱!』のエナジーアイテムをポッピーに使用。

混乱しているポッピーをマキシマムゲームで取り押さえ、ガシャット横にある

EX シュートスイッチで、アーマーから離脱。

そのまま、ガシヤコンキー斯拉ッシャーにマキシマムマイティXを装填する。

『ズ・キュ・キュ・キュン！マキシマムガッシャット！キメワザ！マキシマムマイティ！クリティカルフィニッシュ！』

「リプログラムリング！」

光線が当たる直前に、マキシマムゲーマーは逃した。ポッピーにのみ光線が当たる。

「アレ？私何を……？」

「よかった。元に戻った！」

「うんうん。さあ帰ろ？」

「おいおい、ポッピーは俺たち……バグスターの仲間だ。」

「パラド……違う！ポッピーは僕らの仲間だ！」

「さあ、帰るぞ！」

こうして、パラドに強引にポッピーを連れてかれてしまった。

一方その頃……

「早くクリアして、こんなゲーム終わらせるためよ。仕方ないわ。」

楯無の手には、ガシャットロフィーが握られていた。

……それは、つい先日のことだった。

プレイヤーが消滅した事についての、抗議が殺到したのか、幻夢コーポレーションが声明を発表した。

「プレイヤーたちは一時的に消滅したように見えているだけです。ゲームがクリアされれば、元に戻ります。もし、以前にゲーム病で消えた人間もです。」

これで、楯無の心は揺らいだ。もしかすると、パパを生き返らせることができるかもしれないと。

こうして、彼女は一夏たちに隠れて、ガシャットロフィーを集めるのだった。

本日CSMの新作発表！何が来るのかワクワクしております！

第132話 hijackされた一夏

パラドにより強引にバグスター側に戻って居たポッピーピポパポは、1人外に出で居た。

「はあ、もうピブペポパニック……だよ。」

噴水広場のような場所で1人たたずむ。手にしたバグヴァイザーツヴァイを眺めながら。

すると、後ろから声をかけられる。

「ポッピー、こんな所に居たんですか。」

「え？」

振り返ると、一夏が柔らかい笑みを浮かべて立って居た。

「さあ、僕らの所に戻りましょう？」

「ダメだよ。」

「どうして？」

「だって！私はバグスターなんだよ！人間の敵！バグスターは人間に恨まれる存

「在なんだよ！」

「そうですか。なら！」

一夏は、ポップーの手に握られて居たツヴァイの銃口を自分に突きつけさせる。

「撃ちなさい。人間はバグスターの敵なんでしょ？」

首を横に振る。

「無理だよ！」

「やれ！」

「……………無理…だよ。」

「ふふ、でしょうね。」

「え？」

「だって、僕が貴方という存在を作ったんですよ？ 優しいキャラクターになるように。あなたは、人を傷つけるバグスターではない。共にドレミファビートで楽しむ、そんな存在として考えてました。ポップー、あなたは何がしたいですか？」

「私は、……………みんなで仲良く、ドレミファビートがしたいよ！」

「それでいいじゃないですか。みんな、もう大丈夫。」

後ろに隠れて居た簪や楯無、ニコに鈴が出てくる。

「みんな、ごめんなさい！」

「気にしないで、ポッピー。」

「そうよ。ポッピーは悪くない。」

「お帰り、ポッピー。」

「ほら、帰ったらアタシとドレミファビートで勝負よ！」

「うん♪」

ポッピーは無事に戻ってきた。

帰路、一夏たちに1人の男が立ちはだかる。

「はぁ、面白くない。」

「「「「「!?」」」」」

突如現れたパレードは、一夏に突撃する勢いで、駆け出す。すると、一夏にぶつかる寸前で、オレンジの粒へと変化した。

「一夏、大丈夫？」

一夏は一切反応せず、数歩前に進み振り返る。そして、ガシヤットを取り出した。

「ねえ！なんで一夏くんがパラドのガシヤット持つてるの！」

『ノックアウトファイター！』

「変身。」

『デュアルアップ！KNOCK OUT FIGHTER！』

『術式レベル50！』

『第五戦術！』

「変身！」

『タドールファンタジー！』

『パンバンシューティング！アガツチャ！ドラゴナイトハンターZ！』

2人がパラドに襲いかかろうとする。が、

「いいのか？俺を攻撃すれば、一夏にダメージが行くぜ？」

その言葉を聞き、攻撃を躊躇する。その間に、ギアデュアルのギアを再び回す。

『キメワザ！ノックアウトクリティカルスマッシュ！』

地面に拳を叩きつけ、衝撃波で砂煙が舞う。地面はゲームエリアに変わっている

ので、破壊されない。

「……………一夏。」

パラドに乗っ取られた一夏は、何処かに消えてしまった。

投稿時間の関係上言えませんでした。が、

次のCSMはVバックルみたいです。ね。

まあ、自分はCSMオーズドライバーと

ホルダー待機勢なので。(念のため。)

第133話 パラドの Evolution

パラドは一夏の体を奪ったまま、幻夢コーポレーションの地下基地に戻った。

「む！エグゼイド！何しにきた！」

「おいおい、俺だよ。グラフィイト。」

と、一夏から分離する。

「なんだ、パラドか。」

「どうしてこんな所に連れてきた。」

「ノーコンティニューで、命を救う。でもな、一夏。お前はすでにコンティニュー済みなんだよ。」

「何!? どういうことだ！」

「あの時、ゲムがお前のゲーム病を発症させた時。あの時お前は消えるはずだった。が、俺がお前の中に入ってストレスを緩和し、ゲーム病を止めた。」

「……………お前の狙いはなんだ？」

「俺は、お前とガチで戦いたいだけだ。だから…！」

再び一夏の中に入る。

ステージセレクトで広い場所へと移動してきた。

『マイティブラザーズXX!』

「変身。」

『ガッチャ〜ン! ダブルアップ! 俺がお前で、お前が俺で(ウィーアー!) マイティマイティブラザーズ(ヘイ!) ダブルエーツクス!』

普段なら、LがゲーマーS、Rがいつもの一夏だが、今回はLがパラド、Rが一夏になってる。

「なんで。」

「つまり、天才ゲーマーSは、俺の力ってことだ。それ!」

『ガシヤコンキースラッシュャー!』

Lパラドが、キースラッシュャーとマキシマムマイティXガシヤットをR一夏に投げる。

「ハンデだ。」

『マキシマムガッシャット！キメワザ！マキシマムクリティカルフィニッシュ！』

お言葉に甘え、さっさと倒そうとする。レベル99のマキシマムだ。遠距離でも、叩けると思った。だが、それが間違이었다。

パラドの変身は解除された。が、パラドの表情は明るかった。

「ありがとう一夏。お前のおかげで……」

パラドはどっから出したのかゲーマドライバーを装着する。

「なんで！それは人間にしか使えないはず！」

「そう！リプログラムリングの効果で人間の遺伝子を手に入れた俺は、お前たち人間にしか使えないコレで、さらにレベルアップできる。」

『デュアルガッシャット！The strongest fist！What's the next stage？』

「マックス大変身！」

『ガッチャーン！マザルアップ！赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差

！パーフェクトノックアウト！』

「一夏あゝ！第五十戦術、変身！」

『バンバンシミュレーションズ！発進！』

「ちよつと！術式レベル2、変身！」

『タドルクエストォ〜！』

この2人か来れた経緯を説明すると、束がかつて使用していた衛星を使用し、一夏の場所を特定したのだ。

「俺は、仮面ライダーパラドクス！レベル99だ！」

今ここにlevel99vslevel50&5の戦いが始まろうとしていた。

[https://syosetu.org/?mode=kappa_vviev&ki
d=1855879&uid=1656660](https://syosetu.org/?mode=kappa_vviev&ki
d=1855879&uid=1656660)

IS 〈インフィニット・ストラトス〉～
織斑一夏は天才ゲームクリエイター～

著者 proto

発行日 2019年5月7日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/120715/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。